

奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1965・5

5
月
号



奇譚クラス

5
月
号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tezukaaya

Osaka Japan



5月号

¥300

四馬孝画

倒錯美絵画集

大判判画紙極鮮明焼付秘蔵版画集
今まで発表しなかった四馬孝画の分譲版画集の好評に刺激されて、ここに三度、口絵として掲載できない各傾向マニヤ特選の秘蔵版を追記発表いたします。

「花と蛇」画集

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えに)

京子に芸を仕込む鬼源

椅子の上に立縛りにされた京子は、坐りもならず歩きもならず中腰のまま鬼源に美しい鼻を摘ままれ、可愛い口を開けた。

女体吊責め特集

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えほ)

弓吊りローソク責め

両手と両足をそれぞれ左右に振り分けて弓なりに反るよう吊られた女体の背中には、数本の火のついた蠟燭が立てられていた。

豊かに脂がついた輝く裸身を床の上にはにかに投げだした静子の顔に、驚きの使用人であった川田の汚れた足がべったりと触れた。高い鼻を足の指で弄ぶのだった。

女斗美立業

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えい)

恐怖の浣腸台

身動きもできぬように四肢を固定することのできる浣腸台に据えられた美女は恐怖の眼を大きく見ひらいて、目の前に釣ってあるイリガートルをにらんだ。

静子令夫人の汚辱

両手を揃えて吊られた美津子は、腋の下を男の目の前にさらけ出し、ハゲでそろりそろりと操られ、全身燃え上るような操られた。

女斗美寝業

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えは)

鼻をなぶる

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本本業しながら、ゆっくりに鼻毛を抜いてゆく。これで五本だ、あと何本抜けるか。

片足挙げ縛りにされる桂子

鉄平石を敷いた冷ややかな土間に身動きもできぬ厳しい後手の高縛り、片足を挙げさせられた桂子は、さっさとからたまたまに激しい尿意と必死に戦っていた。

女斗美固め業

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めか)

押さえ込み合い

これはルールも何もない女と女の憎悪をむきだしにした闘争である。髪を掴み合い、罵り合い、痛めつけようという争い。

粗相を強要される京子

恥しいオシメカパーをはかせられた京子は、その中へ粗相をせよといたぶられる。限界まできた排泄を耐えている京子の苦悶。

女斗美場面

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めは)

泥絵具の顔

お前の美しい顔は、俺のキャンパスだ。白いすべすべした女の命である顔面に、男の手にしたチューブから赤い泥絵具がべったりとつけられる。鼻から口へかけて。

鼻孔吊り

太いシニロ縄で後手首縄股間縛り、吊られた美女の鼻孔に通した縄を吊って、女の顔を上へ向かせ、素晴らしいシーン。

女斗美寝業

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めは)

鼻をなぶる

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本本業しながら、ゆっくりに鼻毛を抜いてゆく。これで五本だ、あと何本抜けるか。

炭火がカンカンにおこった石油缶の上に両手を吊られた美女の舌の先を挟んでじりじりとした舌の先を、上と下が同時に責められ、尚美しさを失わぬ女性。

女斗美寝業

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めは)

鼻をなぶる

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本本業しながら、ゆっくりに鼻毛を抜いてゆく。これで五本だ、あと何本抜けるか。

山原清子 对抗 女相撲

大塚啓子 对抗 女相撲

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女相撲連続写真

豊満な肉体を誇る山原清子と大塚啓子の絶妙のコンビによる取組みをここに発表しました。マニヤの方々の御一見をお待ちします。活潑で意欲的な二人を自由に戦かかせたもので、ライトによる陰翳とスピードシャッターによる動感とを狙いました。動きのある二女の相撲、女斗美、女斗場面の各シーン、このシリーズで十分にお楽しみ下さい。

女相撲連続写真

互いがぶりと四つに組み合った二女は、上手下手の両方合わせを充分にとり合って、上手投げ、下手投げ、内掛け、外掛けと隙を見て術をかけるところを、刻々の変化を狙って、シャッターを切ったもの。躍動する女体の筋肉がよくキヤッチされている逸品。

女相撲連続写真

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美立業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美寝業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美固め業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美寝業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美固め業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

山原清子 对抗 女相撲

大塚啓子 对抗 女相撲

大判五枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女相撲連続写真

互いがぶりと四つに組み合った二女は、上手下手の両方合わせを充分にとり合って、上手投げ、下手投げ、内掛け、外掛けと隙を見て術をかけるところを、刻々の変化を狙って、シャッターを切ったもの。躍動する女体の筋肉がよくキヤッチされている逸品。

女相撲連続写真

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美立業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美寝業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美固め業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美寝業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美固め業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

女斗美寝業

黒フン白フン着用
大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
略号(めめ)

限定版……………写真集

美しき縛しめ

第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

△華々しき女体緊縛の組写真集△

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに、加えるに、ベテラン大塚啓子の最新撮影のフォトなど、ここ数ヶ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存した写真を、極めて鮮明なるグラフィック印刷の特質を、紙によって、皆様にごらんいただけます。写真は、いづれも未発表のとおき

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴を、それだけに十二分に發揮した文獻的価値豊かなフォト揃いです。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に見て頂けると、どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、御注文下さいました皆様へいち早く発送いたしましたところ、予想通り、素早い出来ばえと讃辞を頂いており、早速の掲載が自粛せざるを得ない情勢です。写真集の充実が叫ばれる所以であります。

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によつて、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収容しております。今、御期待にそいたいと考えております。今後、次発売してゆきます写真集を全部揃え下されいますと、本誌女体緊縛の主要なものが網羅されることとなり、文獻蒐集としても極めて有意義なものとなることでしょう。

◇写真集(アルバム)内容◇

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)
ブロック石抱き責め (木村洋子)
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
革拘束具による組写真 (大塚啓子)
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)
野外に於ける晒責写真 (玉田、木村)
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
両足吊りの表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉△

以上の通り、本誌のグラフィックにして、何れ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アール紙に對する鮮明なるグラフィック印刷によつて、写真集を完成いたしました。必ずや皆さまの御満足を得ることと信じます。限定版につき、一般書店には姿を現しません。数にお限りがあり、故、売切れにならない中、早くお申込み下さい。

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

大好評注文殺到

キャビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

日本女性拷問刑罰集

美貌で清潔な感じの溢れる新人美木乃々子嬢の体当りの演技と読者の責役出演により、ここに日本女性拷問刑罰集スチールの第一回作品をここに発表することになりました。素晴らしいスチールを是非ご一見下さい。

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木の馬のとがった背に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪の毛端に至るまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に対する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といっているであろう。交叉した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつけられ、美しい両足の指はくの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶えに悶えぬくのである。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ縄目の痛々しさ。

笞打ち折檻

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい粗砂の上に引きすえられた高手小手縛りの女囚は、首縄を引きしぼられて白状を強いられるが、返答をしないために竹をささらに割った笞で、後手に縛られているため盛り上がるようにつき出た肩先をしたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にしり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、臍を中心とした胴の部分さをさげだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるといのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであろう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高々と括り上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きすえられた女囚には更に竹の棒を縄目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股羞恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持っているものである。身動きもできない高手小手縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた胫と素足の可愛い美木モデル嬢が、白洲の上で厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただきたいでしょう。



先日、数人の誌友が集って撮影会を催した。大体中型乗用車二台に分乗できるといふ範囲内で有志が近郊の閑静な観光旅館へ清遊するといふ主旨なので、モデルを二名程度連れてゆくと、いつも五人から六人という人数になる。

この日は、今東光の騒動で一躍全国的に有名になった水間寺の近くの観光旅館を会場に使用した。主旨からいって、どこか名所旧蹟一カ所を見学し、撮影会とか懇談会とか、座談会、鑑賞会とかいったものを催している。まあ、誌上に発表したり利用したりしないといふことが好評で、ここ三年ばかりとにかく続いている。

撮影が終わって、二人のモデルが入浴している間、夕食までのひととき、池の見える亭での雑談から誰いとなしに生れ年の話になり

お互いに告げあってみると、大正五年から十四年まで、いずれも皆大正生ればかりの者とわかって、それから急に話がはずんだ。というのは、戦時中の話になると、いずれも軍隊の経験者で、私はどこそこに行った。僕はどこに、俺はどこだというふうな、不思議に話のウマがあう。これがモデル嬢あたりの年令になるとさしあたりコロンビヤ・ローズの失踪なんかの方に興味があるのだろうか。さて、五人のサムライの戦時中の回顧はなしから、話題ははしなくも、本誌三月号の西条操氏の書かれた『想うこと』に移った。そ

れというのは、文中にある——かの悪名高き大東亜戦争……硝煙けぶる空高く、琴線ふるわせるに足る真のサディズムがマゾヒズムが、壮麗に舞っているのではないだろうか。——というところ。その悪名高き大東亜戦争で、中国大陸に、南方の最前線に、海軍士官として海洋に、転戦した戦争体験者として一入SMに関心を持つ者達の意見はどうだろうか。

たしかに、戦争という異常時に身をもって直面したという体験は平時の何十倍かの密度をもって生命力の燃焼を果したということを実に感じることが出来る。

机上の空論ではなしに、実際に青春の貴重な一時期を、激しい戦争の真只中に置いてきた経験者のしかも、戦後の荒波を乗り切ってきた不惑の人生経験者の意見であるだけに、大層面白く拝聴することができた。こういった話題は、奇巧の誌友同士でないと、話しあえないというので、平常から溜っていたものを、お互いに一気に吐

露しだした感じだった。

別に討論会ではないので、結論を出す必要もないし、只雑談的に話しあったわけだが、久しぶりに二十年前の二十才代の青春時代に返ったようで、口角泡を飛ばす各人の頬も紅潮していたようだ。

兵站旅館の一室に中国人の給仕の娘をとり込め、拳銃で威して素裸にし、写真を撮ろうとしていた赴任したばかりの軍属が、窓のスキ間からボーイに見つけられた。

ボーイはその娘の恋人だったものだから、早速憲兵隊へ訴えた。折角南方のある都市まで赴任したその軍属は、軍法会議にまわされるため即刻内地送還になった。軍律きびしき頃の一挿話である。

戦場に於けるそういった話題を拾いあげれば数限りなくあると思うが、この会合で語られた範囲では、私達のような大正生れの戦中派だから知らないが、大変面白く聞くことができた。どんなことを喋ったって、誰憚ることのないプライベートな会合は、まことに無責任であり、無統制であり、生きていくということが楽しくって仕方がない、といった人達の目的のない集まりである。無意味無価値といえどもそれまでだが。

硝煙けぶる空高く

編集子

投稿フォト

二葉の写真に寄せて

小川 暁

毎月、発表されるSMプレー御愛好者の御便り楽しく拝見させていただいております。私達もプレーを始めて、二年余の歳月がたちました。最初、あれほど嫌がっておりました妻も、いまでは、貴誌のグラビヤ写真を私に見せながら「こんな縛り方はどうかしら...」というほどになり、プレーの面でも、かなり強度の責にも耐える様になりました。

健康状態も前より良くなり、カゼ一つひかず、健康保険の自己負担引上げの時世にはありがたい事



(B) 昭和40年1月、マミヤレフ F11、1/4 ネオパンSS
ライト二灯使用



(A) 昭和39年10月、アサヒペンタックスS3 タクマー105mm
F5.6、1/8 ネオパンSS 自然光

だと変な所で感謝しております。(SMプレーの刺激が各種のストレスの解消に役立っているのかもしれないが)私の妻の様にごくありふれた、ノーマルな性格の女でも、すこし時間をかけて、リードすれば、これほどまでに変化するものかなと、私のほうが女性の順能性に感心することがあります。

御覧いただきます写真二枚のうち(A)は昨年十月に行ったプレーの

時の一スナップです。サルグツワをかまされて、訴える様な目にポイントをおいて撮りました。(B)は自作した乳カセを着用させたものです。私はかねてより、革製の拘束具に興味を持ち、自作したいと考えておりましたが、皮を加工する技術も、道具もなく、長田氏が自作されているとのこと、全くうらやましい限りだと思っております。最近、不要になった皮製品の一部を利用して作ったもので

目に入った最近の浣腸記事

浜 浣 好

す。この乳カセを着用させ、乳首に各種の責を行いたいと思っております。試作的なシロモノで幼稚なものです。今後諸兄の御意見をもとにして、自作したいと思っております。写真は皮の持ち味を出す様にしたつもりです。この二

枚の写真について、御批評をおきかせ下さればと思っております。四月号、山口広氏の『革の盛装』楽しく読ませていただきました。このうちの一つでも実現したならと思います。他の愛好者の方との接触もなく、一人ぼっちでマ

ンネリズムに陥る恐れがありますので、先輩として、長田実様、益原駿夫様に色々とお教授願いたいと考えますので、もしおよろしければ、通信欄に連絡場所（局止ならば御都合の良い日）をお知らせ下さればと思います。また、岐阜

市にお住いの弘様、近県の同好者として、機会がありましたならば日曜日でも御目にかかりたいと思います。今後、ますます同好者の文がこの欄にのることを願っております。

エネマ・マニアの諸氏は、もう御存知と思うが、最近私の目に入った事を御紹介します。河出書房より出版されている『世界の美術』の第十四回配本『ワトローとロココ美術』の中のワトローの『医者に対する諷刺』という絵に大きな浣腸器が四つも描かれている。これはモリエールの有名な喜劇『氣で病む男』の一場面であらうと、説明されているが、数年前の『奇ク』誌上の矢崎竜一氏の『灰色のノート』をみると、どうやらモリエールのもう一つの浣腸を主題にした『ムッシュ・ド・プウルソニヤック』の方だと思う。手に手に

大浣腸器を持った薬剤師たちが、プウルソニヤック氏を包囲している画である。次に十一月下旬の週刊朝日の『読者のイス』に投稿された記事の中に『よく食べるうちの怪童』というのがある。四才になった幼児の怪童ぶりが微笑ましく書かれているが、その中に『薬については、この家には流行の薬は皆無である。グリセリンの大ビンと六神丸などである。一日便通がないと、浣腸』ということ、すべてが解決する。大人たちもそれにしろ。』とある。怪童よ早く青年になれ、それ迄には浣腸の魅力にとり憑かれて立派なマニヤ

になるであろう。さて、次に加藤芳朗氏のマンガに浣腸が続けて出て来ている。週刊現代の『オレはオバケだぞ』（二五五）のど根性ボンベの漫画。四ツ這いになり、尻を上げ肛門より大きなボンベを突込まれて、ど根性を注入、いや浣腸されている。又、サンデー毎日の『千匹の忍者』（三六）では忍者ムー斎が長屋の住人に演説をしている。『寛容と調和』これを略していえば『寛調』つまりカンチョウである。カンチョウは、すなわち浣腸であって、つまり排

せって促すのである」と。加藤氏も少しはマニアかしらと一寸楽しかった。さて、上野動物園の獣医さんが書かれた『動物園親代り日記』（サンケイ出版社）。チンパ―ジのスージーちゃんを始めいろいろの動物の浣腸が書かれているが、中でも象の浣腸状況がくわしく書かれている。羽村京子氏も顔まけ、いや腹まけの浣腸。三メートル余の水道用のゴムホースで一八〇リットルの浣腸である。以上、又、目についたらお報告します。

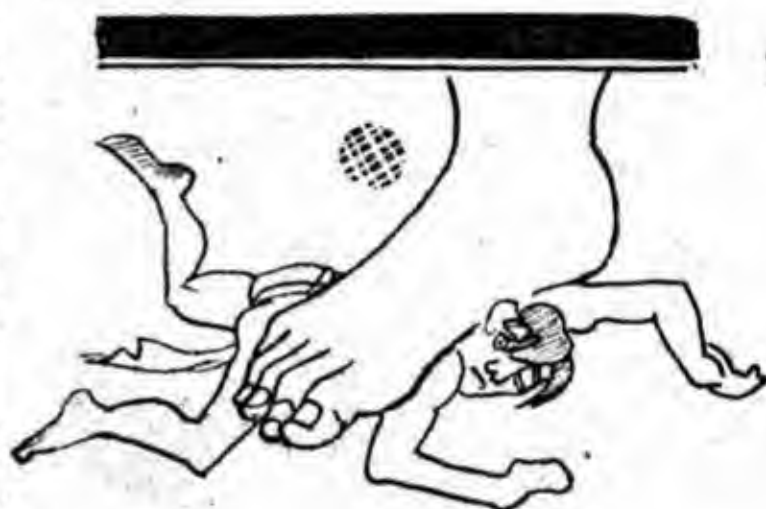
短 歌 鞭 打 抄 後藤 図子

飽くことも疲れも知らぬわが妻の
奴隷となりて満ち足りる夜
燃え上るもの足りなきと妻の肌縄

でしばりて鞭打ちていぬ
皮バンド外して妻の背を打てば歓
喜の叫び声あげて泣く
黒髪をふり乱しいる我が妻の齒に
ひとすじの毛の残りおり
鞭打ちのあと満ち足りた疲労感心
地よくあり四肢の先まで

最近新聞で見かけた M的ニュース

高岡久人



「レジャーニュース二月十六日号」に、ミナト横浜に男のサービスで女が楽しむボーイズトルコという記事が載っていた。トルコ風呂のミストルコを男に置き換えた様なものらしいが、計画者坪井氏の談話の一部を抜粋すると、

「なによしたゲイボーイ、たくましい空手部員など女性のお好みのボーイを揃え、香水風呂から上ったばかりの匂う様な女体の美容に献身するわけ。最後の一線だけは越えない様にしながら、頭でっぺんから足の爪先まで、どんな事でも女性の言う通りにサービス

するのが、当会のモットーです。だから僕は当会のボーイは、女性のドレイであると云っています。それも好みのドレイを、わずかなお金で自由に出来る、いわば女性天国ですよ」

実に結構な商売である。M族ならば一度は志願してみたい職業ではなからうか。特にS女性が現れて(男性に奉仕させ様という位の女性ならば、多少の差はあれSと云え様)犬や馬を命ぜられるかも知れない。又、ストレスの解消に鞭打ちや生体便器は……考えただけでも楽しくなってくるではありませんか。その中誰方が探訪記でも書いて頂けませんか。

一寸古い話で恐れますが、小説現代三十九年九月号に、吉行淳之介氏の「変った種族研究」十七回目、アンジェラ浅丘の巻で日劇ミュージックホール出演のアンジェラ浅丘さんとの対話の一節。吉行氏「以前も踊りが上手なので感心していたが、今度は健康優良児のように見えるが」浅丘「踊りの性質のためでしょう。あたしも類魔的な踊りが好きなの、OS時代に赤い砂と云う踊りでヒットしたのだけれど、男の頭を股に挟んで殺すのよ。死ぬ寸前に男の握った手から赤い砂がこぼれるの」

「それは深刻な踊りですか、コミックな踊りですか」

「深刻な踊り」

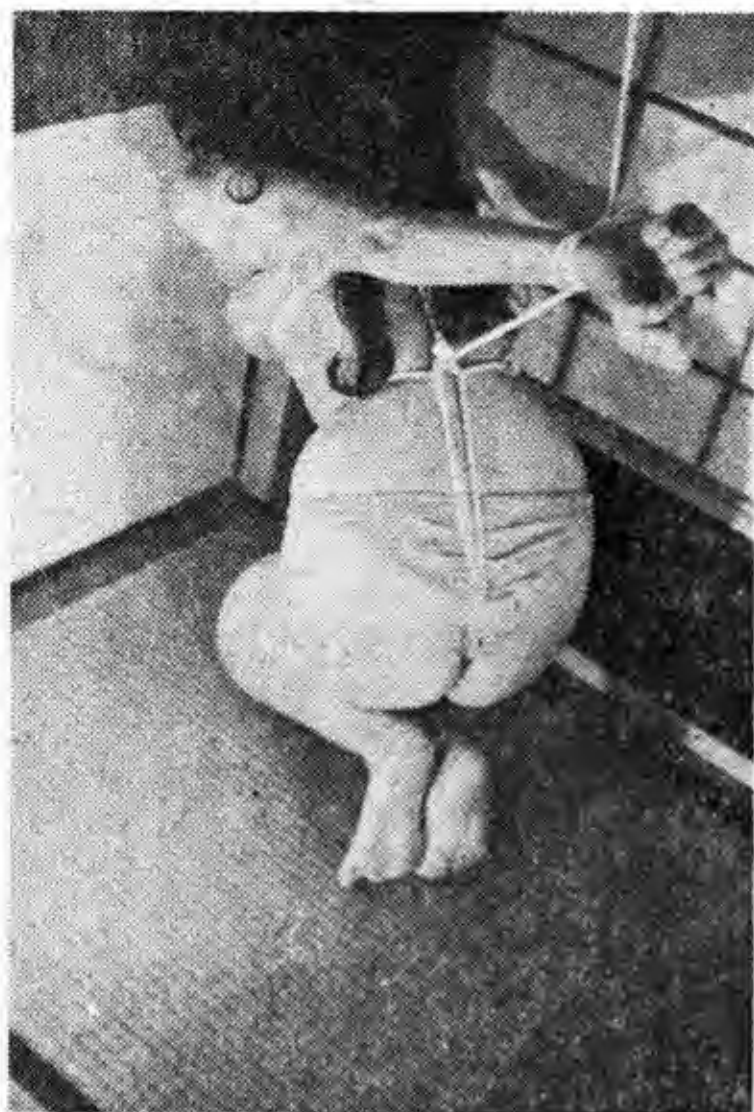
「深刻な踊りにとれるのは、あなたの踊りの上手な証拠だ」とあります。誰かかアンジェラさんの赤い砂という踊りを見られた方はごさいませんか。

彼女の均整のとれた女豹のような姿体を見ていると、先の言葉が実感として生きてきます。彼女の病気はよくなったであろうか。一日も早く日劇MSに、復帰されるのを、フアンの一人として祈っている。

先頃、女優の路可奈子さんが、某日刊スポーツ紙上で谷崎先生の作品に魅力を感じている。特に痴人の愛のナオミ等は是非やってみたい役だと言っていたが、今迄の中途半端な痴人の愛でなく、彼女を起用して武智鉄二氏あたりの手で本格的な痴人の愛を作ってもらいたいものです。そしてかつての京マチ子叶順子の様に、その一作でぐんと伸びて貰いたいのです。

この間、NHKテレビの「歌のグラウンド・ショー」で倍償千恵子さんのウエスタン風の歌と踊りの中で、男性舞踊手が裾をからげた踊子の股を何回もくぐる場面があり、勿論倍償千恵子さんも唄いながら一人の男性舞踊手に何回も股をくぐらせていました。幸運な男性舞踊手が羨ましい。その翌週かに、金井克子さんが男性舞踊手の肩に騎乗する場面があり、今後この番組は逃さない心算でいます。

一般の雑誌新聞等にもたまにはマニヤ向の記事も出ている事もあります。其の確率は非常に低い方です。数十冊に一カ所もあれば良い方でしょう。而も梶山季之氏の「四」などは異例の事であって、とてもマニヤを満足させる様なもので



二度目の投稿

新田 英雄
悠子

奇クを読んで夫婦のSMプレイ
に關心をお持ちの方がたくさんい

らっしゃるのに、私達はとても勇
気づけられた次第です。小生はフ

はありません。暇からいっても費
用の面から見ても、とうてい無理
な話です。

その点KK誌は我々にとって、
まさに旱天の慈雨の様なものでM
的記事が少いと言われながらも、
芳野眉美氏の幻想的な、とやまか

ずひこ氏の軽妙、かつての沼先生
の論理的、そして重厚な筆致が我
々を夢の世界へ誘い込んでくれま
す。三月号では東雪枝さんの虹の
あじさいが大変面白かった。今後
もドレイ飼育の経験を御発表願ひ
ます。あなたはフィクションはき

らいだとおっしゃいますが、それ
だからこそ、私共には迫力を感じ
させ、そして見果てぬ夢を追ひ、
女王様への思慕の情が一層高まる
のです。私は傾向からいえば芳野
氏いや芳野先生の線と同一方向で
す。ネクターの経験はあります

が、今度はコートを直接戴くとい
う大望を持っています。今度上京
したら芳野先生にお会いしたい。
お会いして御指導を受けたいと只
管念願しております。御迷惑でし
ようか。最後に編集部の諸先生と
読者諸兄姉の御健斗を祈ってやみ
ません。



オトはまだ本当に日が浅いので良
いカメラも持たず技術もまづいで
す。来月は待望のアサヒペンタッ
クスと望遠レンズを買うつもりで
おりますので、妻と共に下手なが

らも、少しでも良いものを作ろう
とはりきっております。今回は六
枚のフオトを同封しました。よろ
しく御指導の程お願い申し上げま
す。



辻村 隆

長年の伝統？ ある、奇クのグ
ラビヤも遂々姿を消さざるを得な
くなった。一抹の淋しさは禁じ得

ないが、奇クの存続の為にも已む
を得ない処置であらうか。残るは
奇クサロン欄の投稿フォトと、私
の「カメラハント」のはんのその
うちの許される範囲の数枚が、辛
ろうじて、奇クのフォトといえる
ものに過ぎなくなってしまった。
誌面フォトはどうしても鮮明度を
欠くし、判っきりしない。折角ケ
ツ作をものして来て、これを編集
部に送っても、誌面に掲載された
フォトを見て、いつもガッカリし
ている。四月号の、刑部典子嬢な
ど、比較的よい方である。カメラ
ハントのみでもグラビヤにしても
えれば、私のハントも尚一層精
が出るのであるが……。

× × ×
芳野眉美氏によって、私が、数
年前まで、「緑猛比古」のペンネ
ームで、時代物を書いていた事が
暴露してしまった。私が奇クへ始
めて執筆した時は、緑猛比古のペ
ンネームで、主として時代物許り
手掛けて来た。大型版から小型誌
に移行した、昭和二十七年頃には
平賀源内を主人公にした、「観々
堂捕物帳」シリーズ、その後「お
天狗松」シリーズ等色々書いてい
たが、箕田氏と親しくなるにつれ
て、モデル等の生態や、ルポ、又

現代物で今の辻村隆を使い出し、
遂に、今ではそれが本命になって
しまった。寡筆になるにつれ緑猛
比古は、すっかり影を潜めてしま
い、辻村隆のみで辛うじて細々息
をつないでいる状態である。奇ク
とは、悪く云えば臭れ縁、よく云
えば、私の復員後の第二の人生は
奇クと共に始まったといっても過
言ではない。

× × ×
「日本女性拷問刑罰集」の手始め
に、別項の様に、美木乃々子さん
でフォトを撮ったが、一日の行程
はほんの僅かししか進行しない。続
いて第二回に更に強烈なものをモ
ノニシ、中五日おいて第三回目の
撮影に行った日、私は急に悪寒に
襲われ、数十分後には熱発して、
みすみす宝の山を目前に、片隅で
斃れてしまった。スタミナに自信
？のある私にしては、こんな不
覚は始めてのこととて、その日は、
一行の箕田氏、塚本氏始め皆さん
に非常に迷惑をかけてしまった。
この日は、「魔女裁判」式の西歐
もので、四馬孝氏好みのものでは
あったが、私のカメラは殆んど何に
も撮らず、空しく泣いていた。
口渇、頻尿、倦怠。医師の診断
では糖尿病であった。当分安静と

「Mの皆様」へ

魔子

先月号で、私の拙い文章を奇
クサロンへのせていただき、又
辻村隆さまの「サロシ我記」
でも言及して下さいましたお蔭
で、すぐ素晴らしいドレイ男性を
獲得することができました。

彼は私にとっては、全く理想
的なドレイで、これからどのよ
うに、訓練し飼育してゆくか、
とっても楽しみです。彼も一生
末永く飼育してほしいと希望
していますので、これから、私
なりに仕込んでゆこうと思って
おります。お礼のしるしに、私
も彼の飼育ぶりを報告させてい
ただきたいと思いますが、それ
よりも、ドレイの手記を彼に書
かせましょう。

お手紙が沢山来た辻村さま
からお聞きしましたが、今のと
ころ私のドレイは一人で充分で
すので、他の方は折角ですが、
お断りいたします。御縁があり
ましたら、又どうぞ、その節は
よろしく。

魔子より

連作Mフオト

箱詰にされたドレイ青年

<美 枷 輪 生>



手枷、足枷、それに鼻環まで装着されたドレイ青年は、着ているもの全部をはがれて、動物

輸送用の檻に入れられ、遠く異国へ売られるために運び去られるのである。この哀れなドレイ

青年の運命や如何に？ 鉄格子の箱詰めにされたドレイの恰好を、よく見てやって下さい。

食餌療法をいい渡され、私は已むなく「カメラ・ハント」を断念せざるを得なくなったことは、かえすがえすも残念で仕方がない。この病氣、近眼と同じで、脾臓の働

きが止ってインスリンのホルモンを向後つくらなくなったから、再び元の健康体には戻れないそうである。唯これ以上悪化しない様要心するだけである。糖尿病にい

い療法御存知のお方は、是非是非お教え下さい。一日も早く「カメラ・ハント」を復活したい欲望にのたうつ私のために。

「モデル通信」

○志村善子さん、本当にかわいいですね。印画紙に焼付けた写真を見ると、猿ぐつわをしたのなんか、眼が魅力的で、失礼ですが実物よりも美しい。やはり猿ぐつわ美人ですかね。

○刑部典子さん、四月号のカメラ・ハントで紹介されて、人気がありますね。グラビヤにしたらよかったのに、と。しかし、ご本人はやっぱり……ネ。

○山原清子さん、刺青の人氣は凄いもんですよ。ほんとうはSかMかどっちか、って、皆さん心配しています。でも、ご本人はどちらも同じくらいに好きだって、いうんですから、面白い愉快な娘さんです。近々告白を書くそうですから、あてにしないで、待ってネ。

○美木乃々子さん、からだの至極うつくしい人。汚れ役じゃなしに、豪華な部屋で緊縛ヌードを撮ってみたいという意欲を起させる人。でも、深窓のお嬢さんだから、所詮高嶺の花ですかね。誌上に一度出してみたい。

サロゲート

// 縛られた女優 // 強盗に襲わる //

東山 映史

東映女優の中でも、縛られ女優の一人である桜町弘子が強盗にサルグツワをはめられ、後手に縛られた。さすがの桜町弘子も、本当にこわかった、といっている。

二月十四日午前二時十五分ごろ京都市右京区太秦朱雀町東映女優桜町弘子さん（二七）＝本名沖山真琴＝方の階下居間の雨戸をはずして、白手ぶくろの若い男が押し入った。階下で寝ていたお手伝い和田栄子さん（一六）の手足を持ってきたほうたいで縛りあげ二階に寝ていた桜町さんと祖母のしげさん（七一）に果物ナイフをつきつけ「桜町はいるか、金を出せ」とおどした。

しげさんが「金は階下にある」というと桜町さんをほうたいで後ろ手に縛りあげサルグツワをかま

せたうえ、しげさんと和田さんのほうたいをはずして案内させ、タンスなどを物色したが、桜町さんが後手のほうたいを柱ではずしながら、スキをみて台所の防犯ベルを押して、西隣の会社員河原貞二さん（三六）方に知らせるとともにしげさんが裏口から飛び出し大声でさげんだので、男は果物ナイフを投げ捨て、そのまま何もとらずに逃げた。和田さんはほうたいをはずされるとき、ナイフで手首に一週間のケガをした。

太秦署と府警捜査一課は強盗傷害事件として捜査しているが、男は二十四、五才、身長一・六メートル位、関西弁をつかい、みどりがかかった背広上下に白手袋をつけていたという。同署では、侵入手口などから事情を知った撮影所関

係の者の犯行ではないかとみている。

桜町さんはいま東映京都作品、鶴田浩二の「遠山の金さんいれずみ判官」に出演中。男が押し入った瞬間の恐怖を、次のように話していた。

「悪い者におどかさされ、後手にしぼられるなんて、映画の上ではよくありますが、こんなこわかった本番はありません。でも、押し入った男も言葉は勇ましかったようでしたが、こわくてあわてていたようで、私がサルグツワをされるとき、一生けんめい鼻の上をしばっていました。昨年十一月に寝室のドアをあけたら、若い男が立っていたことがあり、戸締りには十分注意しているつもりでしたが……。こんなに簡単に入られるなんて……」

前にも青山京子さんなども強盗に入られ縛られたことがあるが、女優の家は何といってもねえられやすい。大いに用心が肝要。

強盗に縛られた

妊娠九カ月の若妻

（二・二七―サンケイ新聞）

二十六日午後五時十分ごろ、西宮市上甲子園町三の五、嘉宮荘アパート二階、会社員、神田雅夫さん方で妻の峻子（としこ）さん（二七）が引越し荷物を整理していたところ、若い男が「ご主人の友だちだが帰るまで待たしてもらう」と訪れた。へやに通そうと玄関に出ると、男はいきなり峻子さんをはい締めにし、持っていたくだものナイフを突きつけ「金を出せ」と脅し表四畳半の間に置いていた買いものかごから現金二万円を奪い、そばにあった引越



△告白▽

鼻の噴水

森下 茂

し用のロープで峻子さんの両手を
しぼり、タオルでさるぐつをして
逃げた。この間約五分。
峻子さんは必死になってロープ
をほどき、隣家に助けを求めた。
かごには三万五千円はいつていた
が、あわてていたらしく一万五千
円はかごのそばに落ちていた。
峻子さんは九カ月の身重で、二

十八日近くのアパートに引越す
ことになっており、この日も午後
から引越しの準備をしていた。
甲子園署で捜査しているが、男
は二十六、七才、一・六メートル
黒いオーバーを着ており、関西な
まりがあったという。
○新聞の記事によると、峻子さん
は妊娠九カ月の身重だということ

だから、さしあたり妊婦の緊縛と
いうことになるのだが、それにし
ても九カ月といえは、相当お腹も
大きくなっていたことだろう。
○峻子さんの話によると、主人の
友だちだというので安心してなか
にいた……ロープでしばられ
たときは殺されるのではないかと
思いました。どうしてロープをほ

どいたか夢中だったので覚えてい
ません。はがし締められたとき
大声を出したのですが、かべが厚
くて隣には聞えなかったよう
です。といっています。私達には
そのときのことを想像して、いろ
いろと興味にかられるが、本人に
とっては、さぞ怖いことだった
ろうと思う。
(村木明)

私は二十三才になる独身の青年
です。数年前から女性の鼻に強い
関心を持つようになり、女性の形
の良い鼻の穴の美しさの虜となっ
ています。私の女性の顔の好みは
鼻にあり、如何に眼許口許が美し
くても、鼻の美しくない女性には
全く興味は持てません。そして女
性の形のよい鼻の穴を、思いきり
いじめてみたいのが、私の切なる
願望なのです。

私には生憎とパートナーがおりま
せんのので、やむなく自分で自分
の鼻の穴をいじめております。もっ
とも鼻中隔に孔を開けるようなこ
とはまだ出来ず、また鼻鏡なども
ないので専ら種々な物を鼻腔内に
入れては、いじめています。
今までも、蠅、蟻などの昆虫
類や、豆類、鉛筆、コヨリ、蠅涙
などを自分の鼻孔に入れてみまし
た。ただし蠅涙の場合は、鼻腔内
部に多くの軟骨が突出して複雑な
迷路になっており、冷えて固った

蠅涙が取れなくなるので、あらか
じめ鼻腔の奥深くへ綿をつめてお
き、奥まで蠅が流れ込まないよう
にします。
花房さんは鼻腔の奥まで、みみ
ずを入れるそうですが、私はみみ
ずでは気味が悪いので、どうし
やうに用います。中位(鉛筆の太さ)
の大きさのどじょうを二匹、左右
の鼻の穴に当てると、どじょうは
するすると穴の中に入ります。そ
のままですと咽喉へ出てしまいま
すので、鼻の奥をしっかりと閉じ
また二匹の鼻の穴を指で押さえると
どじょうは鼻腔内をあちこち動き
回り、とても気持がよいのです。
最後に鼻の噴水について述べま
す。これは周囲に水が飛散するの
で、風呂場で行います。先ず浴槽
から上半身を出し、浴槽の縁に背

を当てて上半身を思いきり後へ反
らします。更に首を後方へ曲げる
と顔が完全に平になります。
この姿勢で水道の蛇口から連結
したビニール管を片方の鼻の穴に
当て、鼻の奥を強く閉じて水道の
栓をひねりますと、水は片方の鼻
の穴から勢よく噴出します。
顔の角度を種々調節して、水が
真上に上るようにし、更に栓をゆ
るめると水は細い一本の水柱とな
って垂直に三〇糎も上り、見事な
鼻の噴水が出来上ります。夏期で
すと水道の水も温まっていますか
ら、鼻腔の痛みなど全くありません。
なお、あらかじめ顔の前方に
大きな鏡をおいておくと、一部始
終がよく観察出来るので一層刺激
的です。



「真言宗立川流」について

久我庄一

「試論と呼びかけ」の奇クサロンでの、平野広さんの文章中に「真言宗立川流」について知りたいという願いが述べられていた。この方の文体から見ても、至極マジメな風俗文献を研究したいという気持ちがこめられているのを知り、実は別の投稿「精神分析学より見たSMの世界」の中で、私の知る限り書いてみようと考えたが、特殊な事柄なので、頭をひねり、とうとう触れなかった。「読者通信」(平野さん宛)にも「まっけて下さい」と、書いておいた。二つの投稿をポストに入れた後、これでは親切気がないと気付いた。それでせめて文献学的に、そのアウト・ラインだけでも記そうと—そんなわけで一筆。醍醐の三寶院(稚児草子という男色のある寺)そのの任寛という僧侶が伊豆へ流され、武蔵国立川の陰陽師に真言秘密の

法を受けた(これが立川流の発生)この立川流は、その教理の性的なる(乱交)ために、弾圧を受けたが、藤原時代の末から南北朝までつづく。これ以後、その亜流的な宗派も出たようだが? 正統的な立川流は、前記、南北朝までのようである。(立川流教祖とは、あのロシヤの妖僧、ラスプチンの如き者か?) 密教というものは、とかく加持祈祷の要素が濃厚で、弘法大師がこれを日本に輸入する時にはよほど加減したといわれている。立川流は密教の教儀に種々の尾鰭がつき肉欲を肯定した即身成仏という秘教。ラマ教とバラモン教も同一源泉から来ると見られる。その性質上、文献的資料は殆んどない現状である。(大原の雑魚寝などは、その単純なもの)男女交会の時の和合の水で曼陀羅を描くなど、あまりにもSM

的な世界だ。真宗異安国一派が倉の中へ男女の信者のみが入って、一生懸命にナムアミダブツとなえ、その内に終には一種のエクスタシーに陥る。そのあとは? 男女相擁しての即身成仏。結局、現代的に考えて見ると性の解放などまるで夢の如き、封建的な世相の中に(人妻の姦通は死罪)せめても、宗教というかくれみのの下に、その性のハケ口を求めた善男善女? のはかない抵抗精神が、まことにアリガタイ「男女同権? 肉なるものによって救われる」という世界に飛込ませたものと推察されるのだ。まあ、立川流とは、しゃれのめせば、いろは四十八手の手習い? を、男女共学で、なんとか、深遠なる哲学的な衣をかぶせて、先生みずから手本をみせて行かう世界のようなものじゃないでしょうか。(お判りで

〔編集部たより〕

○グラビヤ写真に関する論争も一段落を告げ、本誌の三月号、四月号、五月号と、とにかくにもグラビヤ口絵なしの号が三号も続いたということは、特筆大書していいだろう。

○来月号あたりからは、新機軸の豊富なグラビヤ写真を期待したいところ。それにしても、本文も、ここ二、三カ月は長文ものも入って充実しかかってきたところだし、「奇クサロン」も増頁したいし、痛し痒しといったところだ。

○四月号の二三頁三段目に二文字が顛倒しているのを、久我庄一氏から指摘され校正の不徹底を責められた。しかし、これは校正の方は完全にやっているのだが、只本誌は紙型から鉛板に流していないジカ刷なので、印刷を始める段階で高低をとるため違えたものと思う。しかしこれも当方のミスでみつともないから、今後充分注意したい。誤りにお気づきの点はどうか何事にかかわらず御教示をお願いする。

(杉原記)



しょうか) もの足りない点は公刊されている「奇ク」を、念頭に入れたものと、御了承下さい。むづかしい宗教語を衣にきせた肉体教

を憧憬するには、現代はあまりにも、××博士の××の実際などを取り入れている書物が手軽に書店で買求められる時代—何をかいわ

んやである。
(附記「人間探究」誌昭和28年五月号の内容を記憶参考にしたことを、礼儀上、記して置く。)

武士道残酷物語

「仇討と切腹」

森田敬三

終に目指す主人尾上の仇、岩藤を仆して本望を遂げたお初は、いずれ死罪にあう身と知って、その場を去らず、仕度する間ももどかしく血に染んだ白刃を自分の下腹へ深く突き刺しました。眼もくらむような激痛に堪えザッザッザリザリと手応えを感じながら、一文字に切り回します。

お初に斬られた岩藤はじめ、その侍女たちはいずれも、あられもなく赤い腰巻を乱しての恥しい最期です。武士道なればこそ、命にかけても主人の仇を討たねばならず、岩藤の侍女たちも忠義という封建道徳に縛られておればこそ敵わぬと知りつつ、お初に刃向って斬られます。

武士道の華といわれた「仇討と切腹」は、こんな惨酷なものでした。

「代理部たより」

○本誌旧号の在庫も大変のこり少なくなり、三十八年九月号以降を除いては、殆ど皆無となつてしまいました。何卒、最近号の在庫一覧表をごらんの上、お申込み願います。

○代理部分譲品の写真につきましても、以前の号に広告してありましても、最近号に広告してない分は在庫いたしておりません故、御諒承願います。

○一度分譲打ち切りになりました分の再分譲は、必ず最近号に再広告いたします。

○代理部分譲品総目録は只今作成いたしておりますから、誌上に掲載しました広告により、お申込み下さい。

○御注文品のおて先は、必ずくずさないでお書き願います。尚御注文はすべて「略号」でお書き下さい。こういった内容とかこういった傾向といった漠然とした御注文の仕方は困ります。

○新しい写真は続々撮影しておりますから、毎月新分譲品をどしどしと発表いたします。どうか、お楽しみにしてお申込み下さるようお願いいたします。

▲投稿▼

『僕のイメージ画集』

より

室井亜砂路

かじかむ手に息ふきかけながら
今夜もスケッチブックにペンを走
らせませす。僕はSM世界のロマン
チズムを求めているのです。今
村昌平氏のクソリアリズムが全盛
し、『裏窓』が廃刊し、本誌の発
行が圧力をかけられております。
今は悪い時代です。夢をみる事も
出来ない時代です。この誌によっ
てどれほど全国の孤独な読者達が
力づけられている事でしょう。編
集室の方々の御苦労には本当に頭
が下ります。三月号三隅氏の「ま
にあのメモ」にもあるように、目
だたない白表紙にもどすとか、フ
ォトをとじるとか、あるいは思い
きって本誌全部をとじてみたら
いかでしょう。光文社の「鉄腕ア
トム」は例のアトムシールでとじ
て店頭では開けられないようにな
っています。

三月号に僕の
愚作を編集部の
御好意で載せて
いただき、本当
に光栄に思いま
す。始めて印刷
された自分の絵
を見、線のかた
さ、ムードの無
さ、デッサンの
ぎこちなさなど
赤面のいたりで
す。人に見せる
あてもなく描き
ためた絵が大分あります。素人の
悲しさ、恥いっただけなのに発
表されたうれしさでオッチョコチ
ョイの本性暴露。再び五枚同封し
ました。

「A図」―時代不詳。刃と女体と
いう硬と柔、冷と温の観念の対立

の美しくしさは日本人の美意識にい
つも流れているものでしょう。
「B図」―始めて描いた時代物で
す。僕は日本刀のイメージをこよ
なく愛します。

いたオムツと浣腸の図。僕の趣味
は女性に対する浣腸、オムツ、畜
化の羞恥責めなのですが浣腸はな
かなか絵にはなりません。日本画
のイメージなのでしょう。浣腸な
どに興味のあるM女性の方に文通
を呼びかけます。僕は東京に住む

(D) 若い母の子守り



(E) 兄妹のプレイ



二十一才の私立大学生です。月末に板橋区茂呂町郵便局留でお待ちしています。

「D図」―若い母の子守りです。新妻の美しくさは女性の美しくさの中で最高のものだと思います。

母親の口にくわえているのは竹の笛です。

「E図」―兄妹のプレイという連作の中の一枚。ふきそうじをしている所です。液体の正体はみなさん御存知。尻尾に御注意下さい。

△M男垂涎の乱暴娘二人▽

少女二人組の自動車強盗

―石で運転手をなぐる―

熊野勝一

タクシ―の運転手の頭を石でなぐって金を奪おうとした、まことに勇ましい、M男の憧れの的になるような二人の娘があらわれた。

二月二十八日午後十一時ごろ、天理タクシ―の松下勇運転手(48)が順慶町御堂筋から「住吉方面へ行って」というマニキュアをつけたはでな化粧をした若い二人の女をのせ、今川町附近まできたところ「ちよっと止めて」というなり一人がかくし持っていた三角形に近い御影石の破片を両手に持ち松下運転手の後頭部をなぐりつけ、「金を出せ」とすごんだ。

松下運転手はこれにひるまず、ふりかえって「コラー」とどなり、再びひたいをなぐりつけてき

たので車外に出て二人をつかまえようとしたが、二人は反対側のドアをあけ、ハイヒールをぬぎ捨てて逃げた。

結局、路地へ追いこまれて、すくんでいるところを強盗傷人現行犯でつかまえられるのだが、この二人の娘はA子(16)とB子(17)で三カ月前、ミナミの喫茶店でいっしょに働いていて知り合い、ミナミの盛り場を遊び歩いていたというのだが、さしあたり、M男性にとつては、もってこいの女性といつてよいだろう。自動車強盗なんかしない、中年のM男の頭を殴ったり、顔の上に馬乗りになっていたら、ミナミで遊ぶぐらいの金には不自由しなかっただろう。

＜切腹画＞

女志士の斬死

六角 京之介



古寺の庫裡の中、敵に包囲された女志士は、勇戦奮闘して、その結果いまや満身創痍、遂に柱に寄りかかって自刃せんとする刹那、物かげより繰り出された短槍一閃。真白く輝く美しい

豊胸、腹部、そして太股までも紅に染めた。それでも彼女は槍の手段巻をしっかと掴んで太刀をふりかぶり、そして、最後の氣力をふるいたたせながら、崩折れていった。



まにまのメモ

パンティ・マニヤの方々に

市川 高 夫

従って黒は余り用いません。洗濯は毎夜欠かさず私がやる事にしてあります。今私は幸福の絶頂にありますが、それだけに独身時代の苦

しさを顧ると正に感憾無量であります。若し奇クフアンの中で過去の私と同じ悩みをお持ちになり、未だ解決に至らず悩んでおられる方がありましたら、そして又仮令それが私の妻の物であつても一向に構わないと仰言る方が居られるとしたら、そのお方に私は、妻の洗濯前のパンティを心からプレゼント致し度いと存じます。汚れた、たつぷりと体臭を吸込んだ、失礼乍ら幾許かのお役には立つ筈だと存じます。妻も奇クを最

私は以前、読者通信欄に投稿した事もある、女性の汚れたパンティに異常な執着を持つフェチマニヤであります。女性のそうしたパンティさえあれば、他に何も要らないとさえ思っている程です。とは云うものの、独身時代では如何に苦労した所で、女性の汚れたパンティなど到底入手出来る筈のものではなく、たった一枚だけやつの事で手に入れたメリヤスのパンティも、散々に愛撫した挙句、とうとう駄目にしてしまった話の前に致しました。だから私が結婚して最初に素晴らしいと思った事は、仮令それが自分の妻の物だとはいえ、憧れのパンティを思うが儘に何枚でも自由に出来ると云う事でありました。

自慢する様で大変恐縮ですが、此の四月で満二十四才になる妻は幸いにも十人並以上の器量を持っています。これは決して私の最負目ばかりではなく、事実町内のNO.1だと好意的に噂して下さる人々も多くいるのです。またデビイ・ドレイクの美容体操に熱中するだけあつて、スタイルの方も先ずはまあまあだと満足しております。それだけに私が教育する迄もなく、下着には相当凝る方で、七色のパンティなどは、それこそ幾組もあつて、その中でも刺繍もあり、フリルもついた少し小さ目の真紅のナイロン・パンティなどは、妻の最も好んで着用する所です。ですが同じナイロンでも透明の物は流石に嫌がつて殆んど穿きません。肌にぴったりと吸着く様な感じは、一つには私の好みでもありますが、妻が赤色を好むのは、以前メンスの時に大恥を掻いた事があるとかで、多分そんな事に起因するのだと思います。



女身変貌の妖夢

(神奈川) 野中芳久



近愛読する様になってからというもの、益々理解を深めて来ていますから、どうぞ御安心下さい。奇クファンらしく、気分が乗ると妙にS的に振舞う事があって、現にこれを書いている今も、

「どんな奴か一度顔を見てやりたい様ね。」とか、
「思い切り汚して差上げるわ。」
などと笑い乍ら云ったりしています。此の様にサジスチックな言葉を口にしても、まだ未教育なせ

いか実際はそれ程S的でもないのですが、兎に角興味を持っています事は確かなのです。私達はこんな気持ちでいるのですが、残念な事に編集部では郵便物の転送はしないとの事ですので、(転送してくれ

れば問題ないのですが、局留では私達の秘密が保てません) 何か良い方法があったらお知らせ下さい。日時が多少遅れたにしても、間違いなくお送りする事をお約束致します。では皆様お元気で。

週刊文春(三月一日号)所載、梶山季之「畏のある季節」の中で広告代理店を経営する華族出の美女二人が数人のやくざに山中に連れ込まれ徹底的に凌辱される刺激的な描写が展開されています。後手錠をされて衣服を次々と破られると、下着の汚れた部分を鼻にこすりつけられた上口に押し込まれたり、男の汚れた靴下を押しつけられたりした後、いよいよ常務の

方から犯かされます。女社長はその強烈なシーンをまざまざと見せつけられた後、「刀傷の男がニタニタしながらスカートの中に手をさし入れて来たとき、恐怖のために失禁した。生暖いものが素肌を伝い、ナイロンストッキングが濡れるのを知りながら彼女は氣を喪った。それから後のことは思いだしても屈辱の一語につきる。男達はいろんなことをした。」というこ

とになります。二人の体を男達は満喫すると「二人の辱かしめを受けた部分を丁寧にぬぐってくれ」惨劇は終幕を告げるのです。これを読みながら私が味った興奮は普通の方と異質であることを告白しなければなりません。辱かしめられ犯かされる美女二人を羨しく思っている自分を彼女達に置き換えて妖しい幻想に耽ります。今すぐにも美しい楚々とした女に生れ変わりたい。しかも白く美しいその体をすみずみまで囁かれ汚がされ犯かされてみたい。そうした倒錯感情の擒になっているのです。悩ましのサディズムの中のアリサが美歌夫人に弄ばれるように、花と蛇の遠山夫人美津子京子達が日夜言語に絶する羞恥にさらされるように。

事業面では果敢と実行力をうたわれ外見上は男らしい私ですが、心の中には絶えず女体変貌と被虐への強烈な願望が煮えたぎっています。理想的に言えば女体に変身した私は或る貴婦人に寝室の奴隷として飼育され彼女の快楽に奉仕し、チェンパポットとなり、羞恥のお仕置を受け続けることを熱望します。女王様の徒然を慰めるために彼女の目の前で牡の巨犬のお相手を命じられて汚辱にまみれることもあれば多数の男女の客の悦楽に奉仕することを強いられるりもする……

然し所詮はかない望であってみれば、体は男の俤であるにしてもせめて美歌夫人や津田亜紀子様のような方に奉仕する境遇になれたらと夢みるのです。そして、それからを想像するとき、齡すでに四十を過ぎた私の体に熱い血が音をたててたぎるのを覚えます。既にそういう地位を確保しておられる同性諸氏に嫉妬にも似た羨望を感じながら私も又その幸福を享受したいと念じています。

木村ふみえ



告白

レインコートの魅力

つい先日、偶然私は雨具屋さんの店さきにゴム引きのレインコート、婦人用の羽二重ゴム引きで黄とピンクの二着が展示されているのにめぐりあいました。その時は何か、なつかしい昔の恋人に逢ったようなショックを受け、早速二

着とも購入してきました。私たち夫婦はともにもゴムブレイが好きなのですが、二、三年前にゴム引きのレインコートが古くなってしまったので捨ててしまい、それっきり、しっくりとしたゴムの感じに触れることが出来ないで

淋しかったところですので、久しぶりのゴムブレイは大変なショックでした。

ゴムのレインコートでなくてもレインコート姿の女性を見るのが好きな男性は多いと思います。この頃、またビニールのレインコートが流行していますが私はビニールのレインコートを着た女性を見るのが大好きです。

婦人物売場の女店員さんの話ですと、ビニールのレインコートはものすごく売れたそうです。ですが、そのわりには雨の日に着用している人が少いそうです。雨の日に着用しないのに、お買い求めになるのは、きっと何か特別の利用法があるのでしょうか……。と顔を少し赤らめながら話してくれました。

ビニールのレインコートを愛用しているアベックは相当多いようです。特に、若いアベックの中には、とても流行しています。レインコートに包んだ女の体は、どんなすばらしい肌着を着た時以上です。その冷めたいしんなりとした肌ざわりは最高です。

そもそも、私たち夫婦がゴムブレイを覚えた動機は、結婚して一カ月位の時、旅行しましたが、そ

の旅さきの旅館で、私の生理が終ったばかりなので、ふとんを汚すといけないからと云って、敷くものがなくてビニールのレインコートを敷いたのがきっかけです。赤いビニールのレインコートの上に横たわった時のひんやりしたタッチは最高でした。それから次の日は、風呂上りにさっとビニールのレインコートを着てみました。すけてみえる私の姿は、とても魅力的でした。

ゴム引きのレインコートは、ビニールのレインコートよりも肌へびったりとして、ゴムの匂いはシゲキ的です。又、ブレイの時ゴムの肌ざわりもさることながら、レインコートの布ずれの音はたまらない魅力です。ことに耳の敏感な女性は、このゴム引きのレインコートを着用したあとは、もうやめられなくなるそうです。

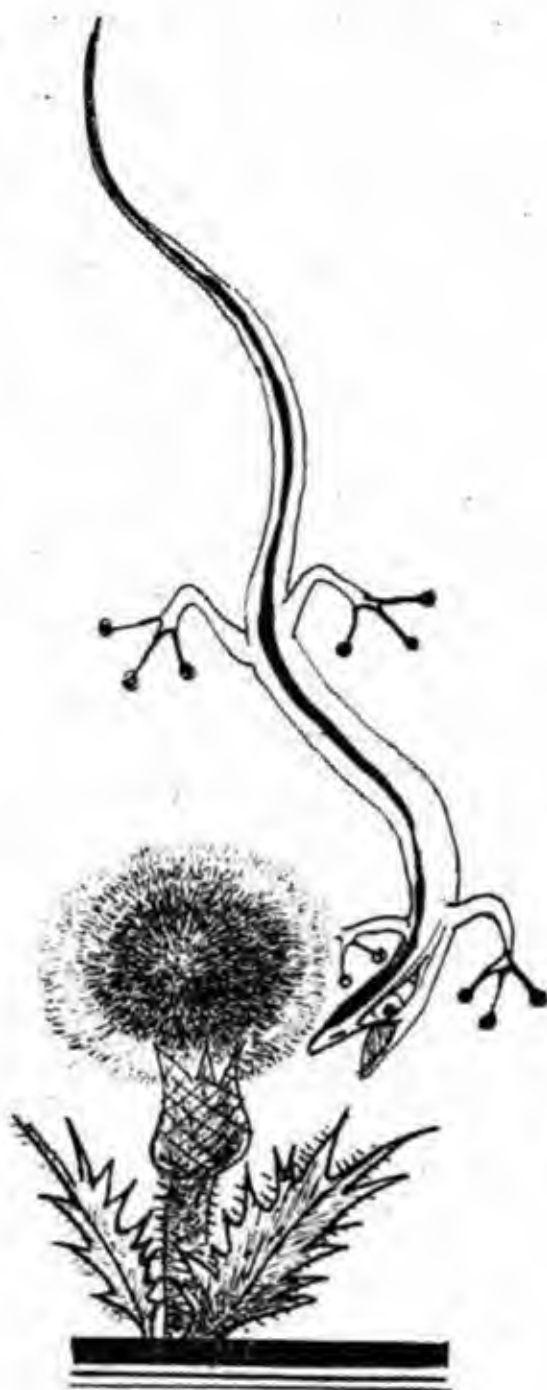
ゴム引きのレインコート、ビニールのレインコート、それに黒いダスターコートなど。レインコート特集をやって下さい。グラビヤ十六頁ぐらい、ぶっ続けてレインコート・ヌード特集は素晴らしいと思います。普通のヌードや、レイスの下着のヌードなど、くらべものにならない魅力です。

高級なる遊戯精神について

プレー

——「想うこと」の西条操さんの文にふれて——

久 我 庄 一



ろしく、ぶった。

——さて、私は柄にもなく、とんだ文学談義とやらで、この文の口火を切ったが、おあそびの精神かならずしも、軽ちよう愚劣なる行為にあらず、むしろ西条さんが、せっかく掲げた吉川英治氏のお言葉を返すようで、すまないが「百尺下の水の相を、魚の心」があることを、先ず言ってみたかったのです。

私は奇ク二月号は見えていませんが、ケンケン、ガクガクの「想うこと」続でも、充分にアタマがイタイほどに、西条さんの原バクの毒気？にあてられていますから、少しはシヤベレルのではないかと思う。それにペンを大上段にあなたが振りかざしても、マネゴト程度でも、下段にかまえるお相手がなくてはいくら馬の耳に念仏、馬耳東風といっても、カラ振りではつまらんでしよう。そうかといって、何をはざく、といった気持で、ペンを手に取るわけではありません。これ耽美派流八方破れ「静」のかまえ。えりに花など一本さし込んで。すぐこんなことを言い出すとバツサリとこられるかも知れませんが、私が奇クを購入し、奇クにホレ込んだのは、天下泰平なのだから仕方ないし、当人達のささやかな小市民的幸福が、あったかくにじみ出

特異な作風で日本文学史上に、一つの金字

塔を立てたかの太宰治が、その処女作集の巻頭をかざる言葉は、たしか「葉」という題であったが「生れてすみません」ではじまったと思う。ところが、この作家はまことに貴族的なプライドをもっていた。それは、彼の「斜陽」という作品をもちだすまでもなく、少しでも文学に興味を持っている方は、御存じと

考える。

純文学作家とレッテルをはられた芥川竜之介は、その後年にあたって、戯作者気質をもつて数々の諷刺的な作品を発表した。強固な文学精神をもって、その生命まで、おのれの作品に賭けた織田作は、ある文学の集いで場内を暗くさせ、フットライトを浴びて、オトクイの「二流文学論」を、スター気取りよ

ているムードに、魅力を感じたからでもありません。

あなたも戦中派の方と（文体から見ても）お見受けしますが、私もそうだ。いいですか、現在になったからこそ、いたぶったり痛められたり、そしてそれをお互いに嬉しがるのがSMだと思い込んでいる」というような世界もある（私はそれもSMであると思うが、後にその点については述べる）。『寝室に連れ込まれた女性が肌も露わにいたぶられ遂に犯されるに至るシーン』が——作品化されたのをよめるんですな。西条さんの言われる言葉をうのみにするとして、こんなのはSMじやない。エロ（私はエロチシズムという言葉の方が好きなんだが）だ。ウルトラ四十八手を描いた猥談だとしましよう。それならば、かの悪名高き大東亜戦争、その悲愴にして惨たる時代においても、よろずお手軽で手取り早い現在のさまより見れば、そこには雄大な詩とロマンがあった。ふりかえりまされれば、硝煙けふる空高く、琴線ふるわせるに足る真のサディズムが、マゾヒズムが、壮麗に舞っているのではないだろうか」と、西条さんの言われる時代を、私流に見てどうだったろうか。

エロはおろか、着物さえ、もんべなしでは街を歩けなかった。暗い重たい世界だ。殺したり殺されたり（大東亜戦争とサディズム、マゾヒズムを壮麗な形容する、その勇ましさは正直いってオドロイタ。腰がヌケタ。助ケテクレ！）私など、硝煙けふる世界では、ただ夢中、情なや、われに返れば「ハラがへった！」と米の夢ばかり見てました。

さて、本筋にもどろう。愚劣なる私は、愚劣なる者としての一言をもっている。「しよせん人間は愚劣なる存在である。その愚劣さ故に愚劣なるものと、愚劣なるものとの連帯性を感じられ、そこから開放されるのだ」そう「SEXの考え方に就て」の芳野眉美さんが、よいことを言っている。「自分の性傾向に対して必要以上に悩み苦しんでいるようだ。何故か。答えは簡単だ。アブノーマルという言葉に罪悪感を持っていたからだ。くだらねえと思った。ノーマルもアブノーマルもあったものじゃない。女性の神酒を愛するのでもSEXじやねえか。」判るんだネ、この言葉。ツーと言え、カーンとうなずけるお方は、奇クの読者なら、何も私がこの寒い日に手をしもやけにして『高級なる遊戯精神について』など書く必要なく、私の文章など

クソクラエだ！

夫婦者が、愛人同志が、または一夜の情人達が長襦袢やベッドや乱れる黒髪を背景に、性行為の一部もしくは大部分として、いたぶったり痛められたり、そしてそれをお互いに嬉しがるのが、SでもあれMであれ、どうでもいいじゃないの！ その人達がまことにむじやきに、そこに美を、スリルを生きたるよろこびを感じているんだから。（私はまさしくSMだと思うが、もう少し後でふれる）。『遊戯（プレーと称するらしい）の相手を求め囁いて、アブノーマル・パチルス恐るべしとの印象を播きちらすのを避けよう」という言葉も、どだい、おかしいんだ。これこそSMマニヤのマニヤたる世界だ。むしろアブノーマルな人間同志が社会の片隅で、そっとお互いの空虚さを、それによって埋めようとする行為はナニガワルインダ。または、高級なる遊戯精神をもって、一丁軽くやろうか、というおあそびが、その高遠なるユーモアを判ツチャイナイ。

奇クはSMマニヤ誌である。SMマニヤとは、異常なる（私は、ゆがんだ一般社会よりは、むしろSMの世界の方に人間的な真実の良さを見ているものですが）社会に美を感じ

世間サマから見たら、異常とおもわれる考え方を、お互いに理解し合いゲキレイして罪悪感や劣等感を虚無を、高級なる遊戯精神をもって、明るい楽しい、または『夢』の『スリル』の世界にもってゆこうという限られた集団と思う。失礼だが、西条さんは（この方の御説に共鳴したと思われる方も）奇クの読者通信や全誌面からにじみでている、多くのマニヤの声なき声をどう受取っているんでしょうか。「百尺下の水の相を、魚の心」をと天上下唯我独尊を気取っているでしょうか。

「つまるところは、当誌を思う一念からだ」という言葉はトバさずよんでいます。それにしてもピントはずれはいただけない。大上段はいいのだが、カンジンのところになると、書いてる本人、よく判っているのかネ？——と思わずよむ方で、首をかしげる個処にブツカル。また観念的の一人がてん？ のところがあって、よむのに七転八倒、私はアタマがイタクになった。（理解しようとして努力したが、そんなわけで感違え間違ってたらゴメンナサイ）

「万事が安直で近道反応歌の当世、今日此の頃の社会に欠くるものは、詩とロマンである。私はその詩とロマンと、そして壮重な叙事詩をさえ、当誌奇譚クラブに見出したいと

念願するものである。今もいったように、このように、具体性なく観念的になると私は弱いんだ。

ズバリ言って、どんな詩とロマンなのか、どんな壮重な叙事詩なのか——（おそらく、このようなものが奇クに見いだせば、社会的な制約もいくらか緩和され、より正統誌としての奇クが前進するという、西条さんの心情と思うが）それがハッキリしないので、カラ振り、よむものにピタッと入ってこない。大事なことなので少し考えてみよう。詩であれ小説であれ、文学の本質はロマン（生き方または物語の世界）と美への形成が、その基調をなしていると思う。ただし手段は多種多様だ。小説では白樺派（自然主義）などから近頃では、実在主義文学というジャンルも、けっこうハンジョウしているが、詩の世界もそう。

作者の、詩人の姿勢によって（ロマンは、否定されることがないのは論ずるまでもないが）対象物の見方は、ロマンに至る過程によって違ってくる。「そこに哀れな薄汚れた娼婦がいた」と、自然主義作家は、そのまま投げ出すように言う。「悪の華」の詩人、ポウドレイルなどなら、さしずめ娼婦のうる

んだ瞳に宝石の光りをよみとるかも知れないのだ。（本当は、こんな七面倒くさいことは書きたくないのだが、ものには順序というものがありませんので）前者は「哀れな」という表現に同情の気持をこめているが、後者は娼婦の前にひざまづきたいという願望が秘められている。さて奇クに詩とロマンを！とは、どんな意味の願いが込められるでしょうか。

このへんで、真のSM、サディズムとマゾヒズムの真随とは、何か——その本質とは——について、私なりに一言。（西条さんの、この点についての文章を引用しながら、シャベルのが正攻法なのだが、正直いって、私は、あまりにも高尚？ すぎて、ついてゆけない）問題の広がることをおそれるので、身近かな奇クの世界を例にとってみよう。

奇クに描くSM風景とは一体なんであろうか、という考え方で。（これは取りもなおさず、真のSM、サディズムとマゾヒズムとは？ の答になると思う）人間だれでも、多かれ少なかれもっている（それを言葉に出さないか、どうかで判断出来ない）。異性を責めてみたい、責められてみたい。またそんな風景にスリルと妖しき美を感じる（そう思わない人は、奇クを手にとらないでしょうし、取

っても恐い顔をするだけです。問題の外にしておきましょう。どだい、世界が違う。もし、だれにでも、かりに理解される奇クになったとしたら、その後は、新しい風俗文献誌としてのジャンルと、一般大衆雑誌とのケジメがなくなり、奇クの消えるときでしょう？。まあ、ある程度は理解されたい、奇クの特徴は温存したい——というカネ合いは、一般クフアンの願望かも知れませんが、理想は良いが、実際はチト無理でしょう。悲観的ではなく、むしろ高級なプライドをもって、いってゐるんです。

自分自身を責めてみたい（一人でイジメて楽しむ浣腸マニヤもそうだ。ゴムカバーマニヤも。男でありながら女装したいという被虐的な女装マニヤも。重苦しいけれど楽しいという複雑な心理をもつメンズバンドマニヤもATC、広義な意味でここに入る）。一般的な常識からいって、バカラシイ、苦シイ、ツマラナイ、汚イ、ムゴタラシイ、不道徳ダ、コツケイダ、罪悪感、エロ、残虐ダ、愚劣ダ、異常ダ、狂人ダ——。と思われる世界を、高級なる遊戯的精神をもって、奇クを世界としてお互いの理解ある「美」の共同世界を打ち立てる。遊戯のときは責めるも楽し、

責められるも楽し。羞恥はこの場合は、よりそれを増すことにプラスする。

だが、マニヤはマニヤなりのヒューマニティは必要だ。性欲をもっていない人間（なければ、さしずめカスミをくう仙人か？）はないのだから、SMにことさら、この問題を持ち出すまでもないだろう。すでにSMといった場合、それが入っている。ただ、それがそのものズバリか、渋いものか、目的でなくあくまで、手段か——の程度だろう（プレーの場合は小道具だね）。「SMの混同と作品への希望」の岩井鬼輔さんの文をここで拝借してみよう。「妄想、狂信、獣性からくる狂気沙汰には、サド侯、マゾッホ氏の名はかむせられない。従って古今未曾有の大虐殺、アウシュヴィッツにおけるドイツ軍人の行為はヒットラーの人民操法の一端だとしても、やはり狂気沙汰にとどまるであろう。」ここからみて、それが死につらなる、残酷悲惨な事実を肯定したり、自分自ら実際に（大小を問わない）やる。やりたい。ということとは許されないだろう。ただし、このへんが奇クのSMマニヤのギリギリの限界だろう。（ムツカシイ、トコロ）そのような世界を書く、見るスリルを感じる。これは本人の自由じゃないか

ネ。

ここで、西条さんの文章にもどろう。「女性性が肌も露わにいたぶられ、遂に犯されるに至るシーン」を作品や口絵で見る、書く、美を感じる、スリルだとかうふんする。これはよい。美女を責めたい！ これもよい。ただし（犯したい、実際に犯すということは、いけない）以上の点を、奇クマニヤの常識とするならば——。プレーしようが、かりにSMの仮面をかぶった猥談本、はては毒々しい絵草紙などの亜流的な作品が、奇クにかざられたとしても（そのような作風が、その時代に好まれたという、あくまで文献的な視点から見ても）チットモ、奇クの高級さに汚名をつけることにならないと思う。

アレモ、コレモ、ナンデモ、ケイサイされるところに、文献誌としての評価基準があるので（ただし批判することは自由だ）。西条さんの言われる俗悪きわまる作品がケイサイされたトナリに、「俗悪エロ小説反対！」のエッセイがかざられることを、私は空想してニヤリとする。（ここまで書いてイヤになった。私の書いたことなど、大方のSMマニヤの方は、センコク御存じで、ただ苦笑されてるんじゃないか？）

でも書く。編集子の言葉じゃないが、物言わざるは腹ふくるるだ。つまり、読者諸賢においてエロ描写に紙一重のSM場面、暴力を押し立てて血なまぐさくも残酷な情景や叙述——そう云ったものを誌面に要求すること——を差し控えられたい。この西条さんの御忠告に対して、私はこうお返ししたい。それらの世界を、如何に直接であれ間接であれ美的に表現するか、如何は美的に受取るか、——が大切で、要求する、しないは問題じゃない。これは書く技術の問題であり、SMマニヤとして消化できるか、どうかの問題だ。「一目見るなり、一読するなり、忽ちにして血沸き肉躍ると云った、直接的な刺戟を誌上に追求するのをやめようではないか」というけれども、どれらの作品を指しているのだろう。そんな作品があったら、こんな言葉も出るのだろうが、私は是非よみたいね。

西条さんが小説を書いていられる方か、どうか知りませんが、読者を「一目見るなり、一読するなり」なんて、こうふんさせる作品を発表できる方は、直接的な表現を使ったとしても、よほどの文章の達人でないと出来ない芸当だと思う。私はまだ、ここ数年来、興味深くよんだ程度はあるが、そんな「血沸き

肉躍る」なんてケイケンはしてないので、作品名を教えていただきたいものだ。

SM小説の要素は、妖しき美のスリルにあるので、刺戟のないSM小説は、キノヌケタビールのようなものです。(ただし、前にも述べたマニヤなりのヒューマニテイな立場と文献的な評価の以内で。)また社会に害毒とかいうSMマニヤらしくない問題は、この時点で論じられることでもない。ヘンリー・ミラーの「ネクサス」。セリーヌの「夜の果ての旅」は、直接的な表現を随処にズバリ使っているが、二十世紀の最高作品と云われている。悪書でもあるが(性をモチーフとして人間の解放、自由が)悪書なるが故に、受取るものにとって、「ロマン」という意味で良書にもなっている。あくまでも、受取り方の問題だ。

奇クの場合だと、その作品が文献的に、価値があるか、どうか——という世界だろう。そしてSMマニヤ以外に、奇クが悪用されるのを如何にして防ぐか(この意味で市販に反対! 直接購読制を願う)下手にカミツカレるのは、ヘイキだが(どうせ判りっこない)そのため編集が制約されるのが、こわい。終りに「大衆べったりの編集をして、おそ

るおそる、ひそやかに世に流し、よって来る世の指弾と販売部数との悪循環に悩むのをどこかで快刀乱麻を断つ」というが、編集子をそんな腰抜けと見ているのでしょうか。奇ク三月号の「奇クサロン」の「桐一葉の淋しさ」をよくよんで見て下さい。よくぞ、つけた。(通刊二百号突破は、その裏付でもある)努力と冒険を、奇ク発行のためにと、がんばる編集子に期待する。

あなたも、私も、みんな奇クのために、発展を祈ろう。では、西条さん、失礼御免。このへんでアクシユをしましょう。あなたがシヤベルのも、私がシヤベルのも、みな奇クのためですもの——。(終)

〔参考〕

本誌三月号——「想うこと」(続) 〆西条操V……一九〇頁……

本誌三月号——「SMの混同と作品への希望」 〆岩井鬼輔V……二八頁……

本誌三月号——SEXの考え方に就いて 〆芳野眉美V……二五頁……

本誌二月号——「想うこと」 〆西条操V……一〇八頁……

娘相撲について

.....

△続 兄と妹の手紙△

海野 美津 男

兄さん！ 春休みは本当に楽しかった。楽しいと言うより、今まで一度も経験したことのない、張りつめた日々を送ることができました。本当にありがとう！

兄さんが忙がしかった上、サッチャンが国にも帰らなければならなかったので、兄さんに相撲を教えてもらい、サッチャンと精いっぱい取組んだのは僅か一週間でしたが、春の陽がいっぱいに降り注ぐ家の庭先での相撲は全くすばらしかった！

何もかも忘れて……ただひたすら勝つということだけを考えてぶつかり合い、もみ合い、渾身の力で押し合い寄り合うことが、あんな

にすばらしいこととは思いませんでした。

お風呂の中で、女だてらに力コブを競い合い、それが腕相撲に発展し、そして真っ裸のレスリングになってしまった時、私たちは、それに何とも言えない魅力を感じながらも、反面ではずいぶん悩みました。だから、恥かしいと思ったけれど思い切って兄さんに打明けたのでしたが……。

兄さんは、女も人間だ、あばれたいという気持、負けるもんかと闘う気持は、男と同じように持っている、女性が「弱者」になったのは、長い歴史に比べれば割に最近のことだ、ギリシヤやローマや、そして日本でも戦

国時代までは、女性は男性と対等にやっていった。女が男に挑戦して、相撲まで取っていたのだ。だから、やってみようと思うなら、相撲でも何でも取ってみたら良いとすすめてくれました。

私たち二人は、その手紙を見て女の歴史を始めて知り、こうして取っ組み合うことは、決して異常なことではないと知って、思い切って取っ組み合うようになったのでした。

そして、兄さんの、どうせとつくむなら日本人にピッタリくる相撲が良いだろうというすすめで、マワシを仕立て、本を買って毎晩のように取組みました。その中で、私たちは

これまで味わったことのないよろこびを味わいました。

また私たちは、お部屋の中でなく、さんさんと降り注ぐ太陽の光を、初肌いっぱい受けて、野外で堂々とお相撲の取れる日を待ち望むようになりました。

と同時に、もっと本格的に相撲を覚えたいと思うようになりました。まだまだ私たちの相撲はダンスの域を出ていないと思えたからです。

兄さんに「春休みにサッチちゃんを連れて帰るから、みっちりお相撲を教えてもらえないかしら」と手紙したのは、その二つの気持がとても強くなったからでした。

海をのぞむ丘の上のあの家だったら、誰にも見られることはないし、太陽の下で思い切ることができると思ったのです。また、兄さんは私たち女性を、いわゆるヘンな目で見たり、何かの対象としてだけ見るような男性ではないと確信していたからです。

もちろん、サッチちゃんには兄さんに手紙したことは黙っていました。若し、兄さんに断わられたら、と思ったのと、承知してくれたとしてもサッチちゃんがイヤと言ったら困ると思って……。サッチちゃんから見れば、兄さん

は完全な異性ですもんね。サッチちゃんには、ただ「春休みに遊びに来ない？」とだけ言っていました。

返事がおくれた時は、私はずいぶん悩みました。女性が、男性に対して「お相撲教えてちょうだい」と申出るなんて、幾らなんでも非常識だったかな……と。

だから、承知するという返事が来た時、私は本当にホッとしました。そして、何だか胸が高鳴って仕方なかった。

家に帰る前の晩、例のように二人で取っ組んであばれたあとお風呂に入っていると、サッチちゃんは兄さんのことをかねてなくいろいろと聞きました。そして何となく浮き浮きしているようでした。

私たちは蒲団に入ってから、初めて経験することが出来る野外での相撲のことをいろいろ話し合いました。

土俵をどうするかが一番の問題になりました。土の上ではケガをしそうだし、かと言って家の庭には芝生はないし、本格的な土俵を作るのは大変だし……と、結局結論は出ないまま、話は稽古の時間とやり方に移っていききました。

サッチちゃんは、兄さんが教えるとしても、夜帰ってから話をして聞かせるか、せいぜい型をしてみせるだけだろうと思っていましたから、稽古の時間は、兄さんが勤めに出たあと、朝の九時から十一時頃までと、午後の一時から三時頃までがいいのではないかと提案しました。

私はいろいろ考えたけれど、兄さんが手ほどきしてくれることを全然黙っているのはいけない、一度もウソをついたことのない親友に申しわけないと思って、うまく話を持ってゆき、兄さんの暇な時、水着姿に帯を締めて二人で相撲を取ってみせ、指導してもらうことを承知させたのでした。

玄関の鍵をあけて家に入り、いつ帰ってもなつかしい自分の部屋にドシンと荷物を投げ出して窓のカーテンをあけた時、私は本当にびっくりしました。

庭に、ちゃんと土俵が作ってあるじゃありませんか。

アラノ、という私の声に、サッチちゃんが立って来て、彼女も思わず声を上げてしまいました。

兄さんに何度も言いましたが、あの時の私

たちの驚きと喜びは、とても大きかった。鍵をもらいに会社に行った時、兄さんは何とも言わなかったから、なおその気持は大きかったのです。

二人は思わず「良かったね!」と手を握り合い、五時間の旅の疲れも忘れて、洋服を脱ぎ捨て、マワシを締めこんで庭に飛び出してしまいました。そのあとは、もう夢中! 気がついたら、美しい夕日が東支那海に沈みかけているではありませんか!

その時のサッチャンのアワテようたら無かった。今だから打明けますけど、「もう兄さんが帰る時間だ、どうしよう!」と言ったと思ったら、土俵の上でマワシを解こうとしたんです。

二人は大急ぎで洋服を着け、何食わぬ顔で坐っていましたが、兄さんはさすがに目が鋭い。庭の土俵に目をやると、「おお、もう取ったのか!」と言いましたね。サッチャンだけじゃない、私まで真ッ赤になってしまった。

でも、兄さんの、あの自然な態度が良かったと思います。何故って、サッチャンも私も兄さんの前では何ひとつかくすことなく無いんだな、とその途端思ったから……。

だから、兄さんがすぐ続けて「裸で取組んだのか?」と聞いた時、二人そろって「ハイ!」と言うことができたのです。

しかし次の日、兄さんの前で取り組む時はさすがに恥かしかった。私でさえそうだからサッチャンは「飛んで逃げたいくらい恥かしかった」そうです。水着を着て、しかもマワシじゃなく普通の帯を締めているんだから、何も恥かしいことなんかありはしないと、けんめいに自分に言い聞かせたそうです。

でも彼女は、それまで優しく見えていた兄さんが急にきびしい顔をして、「そんな屁っぴり腰で相撲が取れるか!」と怒鳴った途端すべてを忘れたそうです。私に猛烈におつかってきて、すごい勢いで突き倒したのは、そのせいだったと言っていました。

「怒鳴られてから、私は兄さんを異性だと意識しなくなった。だから、三日目の晩だったか、あんたに押し出された時、兄さんがガンバリが足らん、サッチャンダラシないぞ!」と言ったでしょう。あの時、思わず兄さんにぶつかって行ったのよ!」とも言っていました。

兄さんも、サッチャンのあの勢いには驚いていたようですね。

六日目の午後からの稽古で……そうそう兄さんが休みを取ってくれた日だった……私たちは兄さんの前で思い切って裸になりましたね。あの時はもう恥かしさはどこかへ消してんでいました。兄さんが「乳だけは保護した方がいいんじゃないか!」と言って、はじめてそうだったなと気づくくらいでした。

二人は、一点の雲もない青空の下でのあの日の相撲を、今でも語り草にしています。

三日目までに、兄さんに言われた通り、押し、寄り、突っ張り、そして思い切った張り手の応酬を覚え、四日目と五日目に、主な投げ技と足技をくり返して稽古した私たちは、あの日の午前の稽古で、兄さんに総ざらえをしてもらいましたっけ。

兄さんは午後の稽古の時、私たちに初めて試合を許してくれた。裸になったのは、試合を許してくれた嬉しさもあったのです。

もちろん、水着姿での相撲は、汗ぐっしょりになって気持ちが悪かったり、つい水着を引っ張ったりして、何だかじゃまで仕方がなかったということもありました。けれども、技の稽古ばかりさせられていた私たちには、試合を許されたのが本当に嬉しかった。私たちは「基本ができるまでは試合をするな、俺が

許すまではダメだぞ」という兄さんの言い付けを兄さんが勤めに出ていた間も守っていたのです。

試合は、三番づつ続けて取っては一〇分が一五分休み、合せて九番取るといふ、兄さんの考えた方法でしたが、とにかく私たちにあって、持っている力と技をすべて出しつくしたあの斗いは、何とも

表現のしようのないものでした。どう表わしたらよいか？ そうです、誇らしいという言葉葉が一番ピッタリくるかも知れません。全女性の中で、私たちだけが味わったよろこびのような気がするからです。

一番一番のあの緊張感！

勝った時の何とも言えない爽快な気持もですが、負けた時の「ヨシ！ 今度こそ！」という張りつめた悲壮な

気持さえ、すばらしい魅力でした。

春にしては異常に気温の高い日だった上、太陽が容赦なく照りつけていましたから、緊張も手伝って、私たちは向き合っただけで汗びっしょりになりましたが、汗まみれ砂まみれのからだをぶつけ、もみ合ったこともすばらしい思い出です。

手紙がすごく長くなってしまいました。その上大変な乱筆になってしまいました。それだけ感激しているんだと思って許して下さい。

とにかくあの一週間は、生まれて始めて味わった張りつめたすばらしいものでした。

M.U

こちらへ来てから、もう一週間が過ぎてしまいましたが、あの日々に比べ、此頃の毎日は物足りなくてたまりません。サッチャンは私以上にそのことを言います。一日一回では物足りなく、朝早く、夜の二回取組んでいます。庭先でのあの相撲に比べて、お部屋の中の相撲はどうもいけません。

でも、二人はとても強くなったようです。もともと小麦色だったサッチャンの肌は、あの一週間ですます黒くなっています。私もお風呂に入ると、素肌にマワシのあとが今でも残っています。とにかくありがとう！ 心か



らお礼を言います。サッチャンはお礼の手紙を書きかけては破いています。うまく書けないそうです。許してやって下さい。

元気な兄さんのことだから心配ないと思うけれど、勤めで疲れているのに、毎晩のように引つ張り出して大丈夫だったかなと思ってます。

どうかお元気で。お休みなさい。

和江より

兄さんへ

× × ×

元気らしく、安心した。兄さんはいつもとかわらず、至極元気だ。

あの一週間の経験が、それほど嬉しかったのかと、改めて感心している。

実は兄さんも、女性もあんなに強くたくましいものかと、ちよっと驚きだった。驚くと同時に完全に見直した。女も男と変らんのだと信じてはいたが、素裸になってはげしく取っ組む姿を目のあたり見て、心から信じるようになった。

あの九番の試合のこと、兄さんも今でもはつきり思い出す。

特に三番目の取組みと、最後の取組みは男の相撲以上の立派なものだったと思う。

二回連続負けたサッチャンの頬が、ボーツと赤く染まったと見ると、立ち上りさま、君の頬を右から思い切り張ったね。すると、君も負けじと張り返した。それから、猛烈な張り手の応酬。あの時よほど止めに入ろうと思ったが、じっと見ていた。二人の表情は大変きびしかったが、ケンカにはならんと思ったからだ。

案の定、サッチャンは大きく君の頬を張って君がたじろぐところをサツと右を入れた。

それからあとは、二人とも一步も引かぬ寄り合いだったね。必死にこらえる君をじりじりと寄って出て、遂にサッチャンが寄り倒した時、思わずタメ息が出てしまった。

最後の勝負で感心したのは、投げ技の、巧みな、そして力のこもった応酬だった。あれだけの投げ技の応酬は、中々できないものだ。僅か一週間で、良くあそこまで技が上達したものだ、兄さんは完全にウナツてしまったよ。

とにかく、よくあそこまでやった。二人のたくましい精神と肉体に敬意さえ感じた。

女性が一体どこまでやれるか、現代の女性が、昔の女性に負けなだけのたくましさを持つことができるかどうか、やれるところまで

でやってみようじゃないか。夏休みもあることだ、若しまた来れるなら、兄さんもできるだけ力を貸す。

最後につけ加えよう。

精いっぱいぶつかり合う女性の姿は、本当に美しいもんだなと、つくづく思った。昔のギリシャの娘のように、明るくたくましく、美しい娘の姿をそこに見ることができて嬉しかった。

じゃあまた。あまり相撲を取り過ぎて疲れないように、学校の体育に影響しないようにしてほしい。

元気で！

隆一より

妹へ

× × ×

長いこと御無沙汰してしまいました。

二年の一学期もあと二〇日で終わります。兄さんの言われる通り、学校の勉強はおろそかにしてはならないと二人してがんばっています。そのためか、体育教師になるために必要な学課をはじめ、幸い今のところ全課目にわたって良い成績を上げていますから御安心下さい。

ところで、私たち二人がメキメキとたくま

しくなったことに友達も驚いています。どうしてか？ とみんな聞きたがりますが、誰にでも打明ける訳にいかず、うまく言い逃がれています……。

私たちは、思い切って木藤民子という同級生に打明けてみました。学校では大変無口な大人しい人ですが、何となく仲間に入れそうな気がしたからです。

民ちゃんは、最初とても驚いたようで、顔を赤らめたと思うとじっと黙って下を向いてしまいました。私たちはどうしたらよいか分らず、顔を見合わせてしまいました。幾ら無口な民ちゃんのことでも、若しかして誰かに話してしまったらどうしようかと、打明けたことを悔む気持でいっぱいでした。

何と言っても「女は女らしく」という考え方が圧倒的に強い世の中ですから……。しかし民ちゃんは私たちの心配を吹きとばしてしまいました。

その日から、私たちの仲間は三人になったのです。今から一〇日ほど前のことでした。

民ちゃんは、M県の漁師町から来ていますから、サッチャーと同じ海岸育ちです。そのせいでサッチャーに勝るとも劣らない肌の色を持っています。それに、サッチャーよりも

背が高く、どちらかというと筋肉質で、特に腕の力が強いので、二人に比べればもちろん技は劣りますが、私もサッチャーも三回に一回は負けるほどです。そして、大人しい外見に似合わず、負けん気は強く、歯を食いしばって向かって来ます。

私たちは本当に良い仲間を迎えることができました。

もうすぐ夏休みなので、この前の兄さんの手紙に甘えて、三人でそちらへ行こうと思います。春休みのことを話していたので、木藤さんも「ぜひ」と言います。

二人とも、休みのはじめの方なら二週間ほどいいそうです。ぜひお願いします。

それから、三人で話し合っているのですが今の私たちのグループを、せめて七・八人にしたいと思っています。本当は、学校に相撲部を作りたいのですが、私たちが卒業するまでにはとてもできないことですので、仲間をふやすことだけでもやりたい。

そうして女子相撲の基礎を作っておき、何年か先には、女子相撲部が各学校に、できるよう、何としても努力しようと思合っています。私たちはそれぞれ中学校や高校の体育

教師になるわけですから、中学校や高校にもぜひ作りたい。

民ちゃんは、一昨年のいつの頃か、NHKの子供ニュースで、或る小学校で全校あげて相撲大会をやり、女の子も運動着姿で元気いっぱいお相撲を取ったと言っていたのを聞いたそうです。

各学校に女子相撲部ができて、それが対抗試合をやるようになったら、どんなに素晴らしいことでしょう。

私たちは、そのためにもがんばりたいね、と誓い合いました。

女性自身が思い切って踏み切ると同時に、男性の女性観も改めてもらいたいと思つづいています。兄さんも努力して、まわりの、せめて親しい友だちの人だけでも分ってもらうようにして下さい。

それではまた。夏休みを楽しみに待っています。

兄さんへ

和江より



「見世物放浪記」 たかもの

——または 郷愁としての惨虐——

夜 乃 探 郎

△いまは遠く懐かしい因果物の見世物小屋から流れるすりきれたレコードのメロディー

と、木戸口より客をよぶおなじみ香具師の囁れ声。空にさえづる鳥の声……のジントの音は、あれは美少女揃えの娘曲馬団から響えてくるのさ。あたかも綺麗なこと中将湯の商標にある美女の如きお姐ちゃん、振袖、ももわれも重たく、ボロンボロンとこわれかけた三味線を引きつつ、によりによりと白い首が天井までのびる、御存じろくろ首だよ。

の惨虐であり、SM的な「美」なる世界でもあるのだ△
(自称耽美主義者、夜乃探郎はふと幻の世界にめり込むこと、並にそこで人買いに責められる美少女に魂をうばわれること。)

無であり、幻の妖しき世界こそ「現実」なのだ。だから、諸君よ。私の職業がどうか、どんな暮しをしているか？など、質問しないで下さい。その代り、私にとっての「現実」ならば二夜はおろか、幾夜でも、夜の更けるまで語り明かそうじやありませんか。さて、その晩も私は夜の巷をあてもなく、いや、幻の世界を求めて放浪した。いつしか、私は街はずれまできてしまったようだ。おや、こんな所に穴地があったかな。それはアパートとは名ばかりの、いまにもつぶれそうな建物の前に雑草しげる広い草っ原が出現したのだ。いつものように、私は遠い空の彼方をみつめ

ギロチン台で斬られた王女の生首から、真赤な血が流れた——そのような連想をさせる夏の夕陽が西の空に沈むと、あとは海底をおもわせる青い世界が都会を支配するのだ。私、自称、耽美主義者の夜乃探郎はそのような時間になると、いつも元気になる。そう、私にとっては、現実の世界はいつも

——眼をつぶればやぶけ天幕からたれさがる裸電球の下に展開される華やかにして、妖しきデカタンスの数々……、それは郷愁として

た。これは幻の世界が私をよんでいる気配に答えるための準備運動のようなものだ。ほうら、きこえてきた。あの懐かしいジントの音が、折からの夜風に乗って、たしかに私の耳をうつのだ。

アセチレンガスが眼に痛いように光り、綿アメを売っている人の好さそうな老人の前にはハナたれ小僧たちがむらがつっていた。折から開幕を知らせるベルが鳴り、娘曲馬団の木戸口には、赤や黒の厚いピロードがたれさがり上を見あげると、極彩色の泥絵看板には、足にぴっちりつくくつくようになつた肉色の股引をした、薄桃色のシャツ姿の美少女たちが噴水のある西洋館の庭を背景に、玉乗りやら、空中ぶらんこやら、馬の背にさか立ちをしているなどが描かれていた。



私は小水がしなくなったので小屋の裏手に廻ってみた。表の華やかさにくらべて、そこは豆電球がポツンと一つ、申しわけ程度に、にぶい光りをはなつていた。ふと、低いうめき声が天幕の内からきこえてくるのだ。私は処々にあるやぶけ穴から、おそろおそろのぞいてみた。あの、私にとっては子供の頃よく

いたずらすると、黒いマントをした口ひげを生やした肥った怖い人買いのおじさんが、大きな袋に入れて、曲馬団に売ってしまうのだ——と、親に口ぐせのようにいわれていたが、そのイメージそっくりの中年男が、黒光りする長い鞭をもって立っていたのだ。

「おい、いくらじたばたしたって、もう駄目だ。かねんして、曲芸をおぼえるんだな」

耳までもさけそうな大きな口がひらく度に、赤い舌がめらめらと燃えるようにのぞいて、好色そうな人買いが振る鞭は容しやなくびしり、びしりと鳴る。すでにセーラ服はむしりとられ、垢じみた、やぶかれたシャツからはまだ盛上ったばかりの小さな乳房があえいでいた。両手は後に廻され、足首も縛られ少女の長いまつげは涙でぐっしよりぬれている。

「よおうし、これでもうんといわなくちや、

手段はいくらでもあるんだ。見てろ、お客さんが帰った後、素ッ裸にして、馬にしばらくつけ、団員のみている前で、思う存分馬場をかけまわさせてやるぞ。」

私は、その責められている眼のパッチリとした美少女の姿に激しい思慕を感じたのだ。

（色っぽい美女の生首と口づけをかわすこと並に女相撲に飛入りし大きな乳房につぶされること）

鉦や太鼓のどんがらかと騒々しく打ち鳴らされ、よび込みの香具師が、ここを先途と盛んにがなり立てていた。

「さあーい、末っ子の代までの語り草だ。看板にいつわりない。斬られた娘の首が物をいう、そーら斬った斬った。今が首を斬るところだよ。代は見てのお帰りだ。」

私は群衆にまざって口上を面白くきいていた。ときたま香具師が、言葉の切れ目に綱を引き、揚幕を五、六寸引き上げる。成程、向う鉢巻の若い兄ちゃんが白刃を大上段にふりかざしているところがチラリと見えた。私は、そろそろと中に入る見物人に、おされて入った。反射鏡応用の硝子張りの中へ女の児が首だけ出して入っている——というカラクリは、ある風俗文献を見て私は知っていた。

ただ、この世ならぬグロテスクな、おどろおどろした風景が好きなのだ。看板にうそのない筈の首を斬ると称して少しもそんなことがないのが、この見世物の特徴で、土間に置いてある高さ二、三尺、脚の間、三方を硝子張りにした台の上に、白粉焼けした色っぽい美女の生首が哀れっぽい表情をしていた。

「花ちゃんやい！」と香具師が声をかけると「はあーい」と、その彼女が、いとも可愛い気な黄色い声を張り上げる。ところが、私はいつまでも立って見ている内に、ちよっとの間だが、生首の表情にほおっと赤らむ羞恥が走るのを捕えた。見物人は、ただ、げらげらと笑って、面白おかしい香具師の口上に気をとられていた。つけまつげがびくんと動き、真赤な口紅をしたくちびるが、少しあき加減になる。そうだ、長時間箱の中にとじ込められていれば……。

その生理の始末にもだえるのだ。垂れ流しつつ、美女の生首を演ずる女性の哀しさ……。その妖しき世界の一こまに、私は奇妙なこうふんにかられた。私はいつのまにか、その生首をかかえこみ、頬づりし、彼女のくちびるに口付けしている自分に気付いたのだ。柔かい肉と肉が相ふれる度に、びんのほつ

れが赤らんだ顔にかかる。虹のような吐息が胸にせり上る。ほうら、ありりや、緊襴一番！ 私はいつのまにか女相撲のむしろが敷き詰められたさじきにいた。（イツモ私ノ現実ノ世界デハ、若イ彼女タチハ襴一本ノ素ッ裸ナノダ）やがて、呼物の「飛入り」がちよつとイキな顔付をした中年女の呼出しがまかり出て告げはじめた。大乳房山とかいう、それが看板の小豆粒のような乳首にぶるうんとゆれる巨きな白い胸を突出し、物好きなお客の相手に登場した。あの少したれ気味の巨大な乳房を思い切り張手で打ち、わしづかみにし、責めることができた——というサド的な慾望と、赤ん坊の頭程もある乳房にはさまれ、ちっそくするほど押え込まれたらというマゾ的な願いが、奇妙に交差して私の脳髓を刺激した。しよせん、人間なんて、この二つの性格が入り交って苦悩する哀れな生物にすぎないのか。

私は、たまたらなくなつて、土俵上に飛出した。勝負は、あっけなかった。くされた牛乳をおもわせるような妙に動物的なむうんとした彼女の体臭にむせり、またたくまに、その巨大な乳房に、おしつぶされることで終ったのだ。

（美女のダイニングショーにみとれること、並に花火が鳴って見世物放浪は終ること）

「ねい、まったくダイビング・ショーって素敵な見世物なんだ。あたしは、もうこのショーがはじまると、じっとして、家になんか居られない。いつも真先にやってくるんですよ。そう、たしか、さくら音頭が流行っていたころだから、もう随分昔になりますが……」

男性モデル募集

○左記要項にて「男性モデル」を募集いたします。○年令、職業、身長、体重、好む傾向、連絡場所（局留は不可）など記載の上お申込み下さい。○当方の求めているものは、渾美、男性ヌード、同性対象Mモデル、異性対象Mモデル、女装扮装などです。○口絵には掲載しません。○分譲写真として可能の方。○日曜祭日を除く昼間（10時から20時）出演可能の方。○時間の都合上、京阪神奈良和歌山在住の方を望みます。○お申込次第、撮影の日時場所など、お知らせします。

（編集部）

のアメリカ娘がこれをやった。それがすがりつきたい程の豊満な美女でね。ところであなたは、はじめてで、そうでしょうな。このところしばらくこのショーは姿を見せなかったから。ほら、あの高い飛込台からまとった紙製のケープに火をつけ、半裸の娘が炎となつて水槽に飛込む。それだけでも、下手をするとか大やけどだ。ところがそれ中間に底をくりぬいた大きなたるが機械仕掛けで、ゆるやかに廻っているでしょう。あのどちらかの口が上をむいた一瞬をとらえて、くぐりぬけつやるんだから、まさに決死的のショーだ。実はいまもお話した、金髪娘が失敗しましてね、私の眼前で惨死したんだ。たるのふちに頭を打ちつけ、まりのようにながら落下した。水槽からはみだしてぐしやりと身体を地面に叩きつけられた。白い裸身は、もう血でべっとりだ。それが若い美女だけに、鮮烈な美しさが感じられ、わたしは、ただわけもなくうなりましたな。」

古風な作りのえりの広いダブルの背広をした紳士が、息せききって話かけるのに、私はあいづちをうっていた。赤・青・黄の五彩の豆電球にかざられた飛込台は、まるで童話の世界にある塔を思わせた。夏の夜は、宝石を

散りばめたように星が輝き青い河の流れにも似た空は、私の胸に淡いノスタルジアとなつて、はてもなく広がっていくのだ。やがてジャズ・バンドは軽快な曲を奏しはじめた。「あなた、あれはチャルストンの踊りにあつた曲ですぞ。うむ、まったく懐かしい」

かたわらの紳士は、そううなづくなり一人で調子を取って、左右のかがとをびよんびよんと上げ下げし、バンドに合せて踊りはじめた。万雷の拍手につれて、司会者のゆび差すところ、五色のライトに照らされて、これぞ今晚の花形役者、ミス・メリー嬢の登場だ。金糸、銀糸がきらめき、白いガウンを軽くはおり、真赤なパンティにブラジャーだけの彼女は、まことは肉感的な異国の美女だ。満面にたたえられる微笑は、妖しくも美しい神秘的な沼のように遠くとらえがたい謎を物語っていた。もし、彼女が失敗したら、という怖れと期待が、私の気持を興奮のつばにめり込ませたのだ。

バアン、バアン、花火が上る。

夜の世界にいろどられる夢のパラダイスノ——それはあたかも美への惨虐を讃歌しているように。

（終）

懸賞募集原稿入選作品

「革の盛装」

〈第二部〉

赤と青の競演

山口 広

一、御主人

ふー、と意識がもどって来る。何も見えな
い。後手が革をさぐる。革の肌ざわりだ。

あの革袋の中だわ、夫人は？ 光彦は？

何処へ連れて来られたのだろうか。すっかり
マミになり切った美代子は革袋の中へ押し込
まれ、横になったまま考えた。注射される前
に夫人から宣告された新しい主人というのは
どんな人だろうか。もう渡されてしまったの
か、出来れば長い間、夫人の手でやさしく責
められたいのに。でもこうして輸送用の革袋

に入れられているのだから、きっと別の所へ
運ばれてしまったのだわ。マミは革の臭いを
かきながら過ぎて来た『牝』になってからの
日をなつかしんだ。色々の拘束衣や責め具で
責められた日々が長かったのか短かったのか
全く意識できなかった。僅か二十日ばかり
であったのだが、その間に眠っていた彼女の
マゾが、こうまで見事に引出せたのは素質と
云いながら、夫人の調教の巧妙さであること
に気づかなかった。

音から想像すると、可成り立派な厚いドア
の鍵が開かれ、電灯がつけられた。鼻のあた

りの小孔から光がさし込んで、そのまぶしさ
と、緊張で、袋の中で固くしているマミの体
は近づいて来る大またの足音にかすかに震え
た。袋のまま横坐りの形に抱き上げられ頭を
覆う小さい方の革袋を取られた。

まぶしさに閉じた眼に向ってやさしいそし
て、厚みのある声で話しかけられた。

「マミ、と云うのはお前か。お前は今日から
この家で暮すことになったよ。道川さんの話
によると、良い牝になったらしいが、僕には
僕のやり方があるから早く慣れてもらおう。
今はお前一人だけれど、そのうちに仲間も増

えることになっているから、楽しくなるだろう。大切に作るから素直に暮せるかい。」

開かれた眼に映ったのは、四十を越えたと思われる端正な顔立ちの男性であった。眼鏡もそんなに度は強くない。紺の大きなチエックのきちんと合った背広に身を包んだその男は、一米七〇位の均勢のとれた体をソファに落しながら話しかけた。

「貴方はだれですか、女王様は？」

「女王様？ ああ道川夫人は今帰られたよ。」

マミ、もうお前の主人はこの僕だから、僕の云う事にさえ従えばいいんだ。そのうちに道川さんにも会わしてやるよ」

マミはもう以前の様に自由なBGの美代子ではないんだ。飼育される牝なんだと気がき伏目がちに部屋を見まわした。

八畳位の洋間である。

ダブルベッド、応接セット、鏡台、洋服ダンスだけが置かれている。半ば開かれたドアの向うには、タイル張りのバスルームがのぞく。高級温泉マークの一室の様である。しかし、マミにはその経験がなかったので、立派なホテルとしか感じなかった。

「マミ、この部屋はお前の部屋だから、好きな様に使いなさい。化粧品もこれなら満足だ

ろう。見てごらん」

首の横の尾錠を外され、後手の両脇に手を入れられてずるずると革袋から引出されたマミは、膝を合わせ腰を折ってしゃがみ込んだが、形の良い乳房はかくせなかった。顔を横に向けてうずくまったが、後を見せる気にはなれなかった。あの大きな尻を、この人の目にかける事は、それ以上の羞恥である。

「マミ、立つんだ。この僕の命令に、これから従うんだ」

語調は相変らず平静である。マミは膝を固く合わせ、やや腰を引いて新しい御主人に正対した。マミは威厳に満ちた紳士のまなざしに眼を伏せた。その紳士は西岡正司と云い、少壮実業家として関西財界に名を連ねる人であることは勿論マミにはわからない。妻と先年死別してから、多くの再婚の話にも耳をかさない秘密が、ここにある事は世間の人の誰にも知られていない。

「もっとちゃんとするんだ。肩を落せ。胸を張れ。腹を引け。腰を、膝を伸ばせ」

声と共にマミの姿勢は良くなった。

西岡は道川夫人が残したマミの記録を見ながら

「お前は道川さんの云われる様に掘り出し物

らしいね。これだけ均勢のとれた体は、そうざらにはないよ」

マミは体中をピンクに染めて、再びしゃがみ込んだ。声が追いかける。

「二十一才で処女か。近頃の娘にしては珍らしい。診察結果も健康そのもの、半年も待たされただけに立派だ。マミ、立つんだ。そこを開けてごらん」

洋服だんすの把手は後手では持てない高さである。口で引き開けると、マミの見慣れた赤い革の拘束衣や、その他見なれない、用途も見当のつかない革の服がかかっている。マミは背を西岡に向けながら時間をかけて口であの普段着を外した。襟もとをくわえて西岡の足もとに運んで跪いた。

「御主人様、お願いですから、マミにこの服を着せて下さい。お願いします」

「やはりお前はこれが好きか。向うを向け。さすがに素直だな」

真赤な革の裸なしのオーバーを着せられ、ファスナーを引上げられると自分の家に帰った様にほっとなって、思わず西岡の足もとにひれ伏して、礼を云うマミであった。

「有難うございました、御主人様」

必要以上に肌を露出させなかった夫人の狙

いどおり、マミは裸にされるのを、この上もなく恥しく感じた。跪くマミに向って、

「マミ、お前は道川さん、そうお前の女王様からゆずられて、今日から僕の飼育する牝になったんだ。僕も道川さんと同じに、体を傷つける事は大嫌いだが、お前がここから逃げようとしたら、助けを外に求めたりすると、こんなにしてしまうから、よく覚えておくんだ。この牝、チロと云ったが今は香港に居る筈だよ。ごらん」

キャピネ判の写真には、両手両足をつけ根から切断された白い虫の様な女性が横たわっていた。背筋を冷い悪感が走る。いつか夫人に云われた事は本当であった。怖いもの見たさに目をそむける事も出来なかった。チロと呼ばれる女性の眼尻から流れた涙まで写っていた。

「はい、御主人様、御命令には何でも従いますから、どうか可愛がって下さいませ」

すっかりおどかされ、そうでなくても今は牝になり切ったマミは当然の様に哀願した。

「それでは食事にするか」

西岡は呼鈴であろうか、ベッドの頭のボタンを押した。

「ばあや、すぐ夕食にしてくれ。ここでいい

から。マミ、これからこのばあやが、お前の世話をしてくれるからね」

黙って西岡の口を見つめる老女に向って「おばさん、マミでございます。どうぞ宜しくお願いします」

六十才前後と思われる老女は無表情に一礼して部屋を出てゆく。

運ばれた食事は豪華であった。夫人の家とちがい、ここでは御主人と同じ皿に並べられた食事は、マミに遠く離れてしまった人間社会を思い出させた。ただナイフやフォークはつけられていなかった。

口だけで肉を噛み切るのは、時間がかかった。しかし今まで口にした事もない様な厚いビフステーキはマミを喜ばせた。

「御主人様、おトイレに行かせて下さい」

「あ、行っておいで、そこだよ」

バスルームの隣の便所は夫人の家と同じ構造であった。普段着の前のファスナーを引降されて小走りにマミは急いだ。

もの柔かな西岡の態度や取扱いがマミを安心させた。これが決してすべてではないのだが。

二、初夜

ばあやによって入浴させられ、うすく化粧され、ひとり部屋に残されたマミは、ベッドにかけられた羽根ぶとんの上に腰を下して、これからどうなるだろうか。御主人様とは何者だろうか……。とりとめもなく考え始めた。しかし夫人によって引き出されたマゾの喜びは、逃げようとする気持よりも強かった。

ガウンをまとった西岡が、ばあやをつれて入って来た。あわててベッドの傍に跪まずマミに向って、おだやかな口調で、

「マミ、今夜はお前の初夜だよ」

その意味を知って思わず。

「いや！ いやです！ お願いですから、それだけは許して」

御主人様という言葉も忘れて立上ろうとするマミを捉え、西岡はばあやから短い革ベルトを受取った。ベッドに押し倒され、鼻をつつまれ思わず開いたマミの口に革の嵌入口具が押し込まれ口を覆う革ベルトは後頭部で尾錠がかけられた。

「うううう」

うめくマミの体から、あの革の袖なしオーバー——普段着がとられ、うつ向けになった後手の尾錠が外された。腕の逆をとられたま

ま体を起こされ、両足を投げ出した形に坐らされたマミの右手が右足につながれる。左手は背中逆をとられていたので、ばあやの力でもふりほどけない。左手も同じ様に左足につながれる。両手両足を揃えて横倒しになる。「ばあや、もうやすんで良いよ。明日は八時に起こしてくれ。マミ、少し素直じゃなかったね。まあ、これだけはいやと云うのも無理もないが、ふふふ」

ぱっとガウンをとった西岡の体はマミにはまぶしかった。厚い胸、血色の良い肌、それが端正な顔によくマッチしている。

「マミ、もう素直になれるかい」

うなずくマミの眼から涙が溢れた。

嵌口具が外され、手足を解かれた。光彦に捕らえれてから始めて自由が与えられた。

「マミ、可愛い子だ。素直にしていればいつまでも飼ってやるよ」

後手のまま西岡の腕の中で、マミは眠りに落ちた。

美代子は——マミではなく——純白のウェンディングドレスを着けている。顔だけが誰の顔か、はっきりしないが、モーニング姿の新郎と結婚式をあげている。あちらに智子さんが、こちらに弘子さんが、向うに山本さん

が、皆私を祝福してくれているんだわ。

場面が変わる。旅館の一室、ばやけた顔の新郎が美代子を抱き寄せる。唇が重なる。両手で抱きつこうとしても手が動かない。

はっと、目が覚める。後手は固くつながれ背中の下にある。目の前に御主人様の顔が。夢だったのか、現実には小山美代子ではなく、マミの運命しかないのか。

「ああ、止めて許して」

窓からさし込む朝の光の中で悶えた。

「さすがに道川さんの見込通り、感度良しだね。マミ」

西岡に対する感情の変化と、夢の中で見た花嫁である自分の姿で象徴される自由の身に對するあこがれ、責められる事に対する不安と喜び、複雑な気持の交錯に、不自由な体にくねらせてふとんの中へ顔をうずめた。

三、再 会

西岡家に来てからマミは、夫人の家と殆んど同じ日課が決められた。午前中は別室で美容の運動である。しかし、ばあや一人だけであるので余り手のこんだ責めはなく、主としてメトロノームによる尻ふりが多い。見られているのが、ばあや一人であるので羞恥心は

あまり湧かない。午後は広い庭の掃除が課される。その為膝から上、首までを完全に覆っていた普段着の背中の、後手を入れるふくらみに穴があげられ、後手で足を足すことが出来る様に改造された。首輪の環に鎖をつけられ、ばあやに追いたてられて広い家の掃除に使われる。生来器用なのか、マミは後手でも掃除機の使用にはすぐ慣れた。

家は約百五十坪もあろうか、マミ——小山美代子——の住んでいた家が三十坪であったからその四、五倍の広さはある。こった作りで、調度もしっかりしている。マミの居室を訓練室が特に新しい建物であった。

マミに対する命令は一切無言で行われる。ここへ連れて来られて四、五日してマミは生理日を迎えた。その処置もばあやにまかせねばならなかったのだ。ばあやに親密感を持ちはじめ、おばさんと呼びかけたが返答はなかった。表情も動かない。

夜は、西岡の帰宅は不規則である。早い日で六時、遅ければ十二時をまわる。午前中の運動の時も午後の掃除も、後手こそ解かれないうが、両手首の輪がつながれて尻の上にだりりと下っているのが全く緊縛感がない。しかし御主人の帰宅が早いと、必ずきびしい責め

が行われる。西岡の帰宅の早い日はそう多くないので完全にマゾ化したマミには早い帰宅が待たれる様になった。恐れと期待を以て。

夫人と光彦があつた拘束衣はすべて運ばれている。相変らず赤い革に包まれ、緊縛されるマミの体は汗と脂にまみれた。あのNO14の拘束衣——幅広の腰ベルトを中心として上に連がる乳枷、肩ベルト、下に連がるベルト。——これだけが夫人の家からここへ運ばれて変った所であつた。

西岡は革の他に、麻縄やナイロンコードも時々用いた。しかし肌を痛めない緊縛を好むので、夫人と同じく革が用いられる事が多かった。それもNO9、13、など体を包む形式が多い。西岡の強い力と不自然な姿勢での緊縛の為マミは失神する事もあった。しかし意識を失う寸前まで

「うーん、もっと強く。もっと締めて」

と脂汗をたらしながら願う様になった。

意識を失う瞬間の快感は、苦痛を恐れなくなった。

ある晩、西岡が帰宅して、食後の一服のうちにマミの苦行が始められた。厚い靴底の両側につけられたサンダルで足の裏を合わされ足首の二本の革ベルトが両肩をまわって後手

につながれ、引きしめられる。乳房が腿につぶされるほど身体を曲げられると、マミの眼は恍惚となって、体中から汗がふき出す。

「うーんあー」

その時、ばあやに案内されてお客が入って来た。背後にその気配を感じながらマミは呻いた。

「やあいらっしやい。流石に貴女のお見立だけあって、マミは素晴らしい牝です」

「しばらくぶりですわ。私もマミをお譲りしなくなかった位ですもの」

マミは幾分沈んだ声ではあったが女王様だと気づき、なつかしさをおぼえた。

「あら、もうこの辺で弛めないと落ちてしまいますわよ」

夫人の声を聞きながら失神した。

「近頃マミは気を失うのが好きになりましたよ。いよいよ完全な牝になった様です」

四、転落

眼の前がぼんやりと明るくなる。話し声が遠くから聞える。次第にはっきりしてくる。

マミは汗と脂にまみれた体をきれいに洗われてベッドに長々と横たわっている。両手だけ後でつながれている。九つの革ベルトだけ

である。話し声が、ようやく意識に入ってくる。

「道川さん、少し沈んでいらっしやるが、どうかされましたか」

「は、あの、光彦が亡くなりました」

光彦が死んだ。あのマミの運命を変えた光彦が。驚きの他の感情は湧かない。目を見開く。ガウンをまとった西岡に対してソファに腰を降した黒っぽい和服の道川夫人がうなだれている。涙ぐんだ様な声である。

「マミをこちらに連れて来た翌日でした。あの寒波で車がスリップして反対側から来たダンプカーに正面衝突しまして、即死でした」
「それはお気の毒な。あれだけ可愛がっておられただけに、おなぐさめする言葉もありませんわ」

「私の車でしたら命だけは助かったのではなにかと思われます。光彦の車は右ハンドルでしたから、ダンプの車輪にまともにぶつかったとか……」

「光彦君は良い青年でしたからね。貴女も助手がいなくなつて、これからやりにくいでしょう。それで新しい牝はどうされましたか？」
「道川の血統も、これで完全に絶えてしまいましたわ。葬式にも来てくれる親戚さえ居な

いんですから。私もこれから生き方を変えようかとも思いますの。もう道川の家に束縛されませんもの。エルもある人に急いでお譲りしましたし。」

「その時には及ばずながら、この西岡が助力になりましょう。」

「そうか、御主人は西岡と云うのか。西岡……そうだ、或はK工業の西岡正司社長か。」

「でも、私と西岡さんのおつきあいは誰も知って居る人はございませんし、私一人ではあの身代は多すぎますから……、そのうち、ヨーロッパへでも遊びに行きたいと思っておりますの。そう、私たちのおつきあいを知っているのは、光彦が亡くなりましたから、ばあやさんだけですわ。」

「そうですね。ばあやは口がきけないし、子飼いの女中ですから、誰も知らない事になりますね。好都合ですよ。」

あのばあやは唾であったのか。道理で話しかけても返事もなく、物音にも無表情だったのか。夫人には好都合とは何かが解らない。「その他にはこれだけですわね」始めてマミの方に向けられた夫人の視線を受止めて、マミはなつかしさに頬を染めながら微笑を返した。

「マミは本当に掘り出し物ですね。三百万円も惜しくはないですよ。尤も人知れず三百万円を作るのは僕にも苦勞でしたよ、は、ははっ。」

三百万円！ 私は売られたのか。

「でも、芸者を身請される事を思いますと、牝を手に入れられるのに、三百万なら高い買物ではございませんでしよ。それに拘束衣一式付きですから、お安くいらいですわ。」

西岡と道川夫人の会談は続く。次第に夫人の悲しみはうすれてゆく様であった。声も華やかさが増してくる。

「時に最近こんなものを手に入れました。おもちやですが、仲々丈夫に作っております。鍵がなくてはずす外れませんよ。」

「本物にそっくりですわね。こんなのを作っても何も云われないのでしょうか。精巧そうですね。」

テーブルの上に持ち出されたのは刑事の持つ本物の手錠に全くよく似せた金属の手錠である。それを自分の左手にかけたり外したりしながら西岡は、

「この方が革手錠よりもかけるのは迅速ですし、鍵がなくて開きませんから、やすりもかからない本物は刑事が使う筈ですね。」

「でも金属の冷たさは私いやですわ。しつとりとした革の方が、ずっと好きですわ。」

「こちらにいらっしゃい。一度使ってみましょう。」

西岡は手錠をとると、夫人をうながしてマミの横たわるベッドの傍に立った。マミは鉄の冷たさを期待して眼を閉じ体を固くした。

西岡はす早く横に立つ道川夫人の右手を握ると手首に手錠を叩き込んだ。腕の逆をとって背中からねじ上げ、左手もつかんだ。両腕を背で合せられ手首に冷い感触を感じながら腰を落して、

「何をなさるんですか。外して……むむう。」

云い終らないうちに、西岡のガウンのポケットからつかみ出された革の玉が形の良い唇の間に押し込まれる。猿ぐつわがしっかり後頭部へ。

「道川さん、こんな時に使うのに便利なんです。貴女が来られた事が誰にも知られていないなんて好都合ですね。貴女のお望み通りに生き方を変えてあげましょう。」

黒い和服の帯を後手でかかえる様にしてベッドの傍にうずくまる夫人を押し倒した西岡は、裾を割っておどる白足袋の上に今一つの手錠を叩き込んだ。スリッパがはね飛んだ。

「ううう」

夫人のうめき声を聞きながら、進展の意外さに眼を見はるマミの体にふとんをかけて、「マミ、暖房がきいているから風邪は引かないだろうが、待っておいで」

西岡はテーブルの上の道川夫人のハンドバッグを持って部屋を出て行った。

五、誕生

約一時間も経ったであろうか、スポーティなセーター姿の西岡が現われた。

「道川さん、生れ变りの儀式をしましょう」

高く低く何事かを叫ぶ夫人のうめきを楽しみながら、西岡は夫人の体を横だきにした。

「マミ、お前も見においで。訓練室だよ」

後手でドアを閉めて、廊下のつき当りの訓練室へ西岡に従った。その中ではあやが、夫人の濃紺の革の正装、スーツと白衣、デザインナーの服、編上げの拍車のついた長靴、ブーツ、などを整理している。色々の革の拘束衣も床に積まれ、更に、なめした原皮や革ベルトも見える。

うつ向けに床に横たえられた夫人に向って「道川さん、貴女の車で一走り取りに行ったんですよ」

足錠のかかったまま、夫人の両足首に別々にナイロンの紐が結ばれる。両手首も同じである。足首の紐は両方の壁の滑車へ連ながれている。夫人は床の中央へ立たされる。スイッチのそばに立ったばあやは、西岡の手の動きに注目している。

足錠が外されると、モーターがうなり始める。裾が割れて、黒い和服の間からピンクの腰まきがのぞく。大きく人の字に足が開いてモーターが止る。後手の手錠が外される。両手を前に、顔に届かせる間もなくこれも左右上方に、袖がたくれて肘まで出てしまう。

大の字に固定された夫人の前にまわった西岡はマミを引き寄せると

「しっかりと見ておくんだ」

マミの上脛にセロテープを張りつけて額へ引き上げ、首輪の環を天井の鎖に連結した。「さあ道川さん、貴方は、これから生れ変わるんだ。年増の牝にね。牝の誕生の儀式を、何時か見せて貰ったチロの時と同じ様にして見よう」

首を振りながら何事か大きく叫ぶうめきを聞きながら西岡の手は帯止めにかかる。袋帯が取られる。柔いちり紙が落ちる。腰紐が一本、二本、三本、着物がだらりと垂れる。華

やかな長襦袢の紐が、伊達巻が。襟をはだけられて、すき透る様な真白い肌があらわになる。少し張りを失ってはいるが形の良い乳房が、お腕を伏せた様に胸で息づく。乳首は黒ずんでいない。上を向いている。

「道川さん、お年に似ず若々しいですな。子供がないと、こんなものですか」

乳首を指で弾かれて、体がびくんと動く。ロープが激しく揺れる。

ピンクの腰巻きに手が掛る。腰を振る事も出来ない。

「おや、これは年甲斐もないですね。和服の下にナイロンパンティとは、育ちがわかりますよ。どうせ貴女には要らないものだから全部取りましょう」

肩の上で大きな裁ち鉄が入れられ、黒い着物が長襦袢と共に足もとに落ちる。ばあやが手早く取り除ける。

「はれ見てごらんさい。一寸奇妙ですよ。しかし綺麗だ。白足袋、ブルーのパンティ、赤い猿ぐつわ」

夫人の髪をつかみ、顔を横の大きな鏡に向ける。純白の夫人の肌が赤く染ってゆく。

「ああ、僕ともあろう者が始めての儀式となると順序を間違えてどうも失礼。たしか、脱

がせる前に宣告でした。それじゃ」

夫人の正装のそばに置かれた短い答を持つと、夫人の前に正対して西岡は始めた。

「道川幸子、貴女は三十七才の未亡人で職業は医師。しかし、そんなものは過去の事。幸子、今日からは私の飼育する牝になるんだ。素直に牝に生れ変わるかい」

うめきが一段と大きく長く続く。激しく首を横に振る夫人に向って宣告は更に続く。

「そうかい、それでは云う事を聞ける様にしなう。道川夫人」

ことさらに道川夫人と云いながら、西岡は夫人の両乳首に別々に電気のコードをねじ着けた。

「ほれ固くなったよ。今は三十ボルトしかないから、どうもないだろうが、このつまみを廻すと、一秒に二回づつショックが行くからね。何ボルトまで堪えられるかな、道川夫人」

半秒毎に夫人の体は硬直し、うめきも同時に起った。暖房がきいている上に、電撃がおそうので夫人の体はきらきらと汗に輝いて来た。電源のつまみを低圧に戻しながら

「マミ、お前も、こうして生れ変わったんだろ。道川夫人よ、まだ牝に生れ変わる決心がつ

きませんか。今度は百五十まで上げますよ」

夫人は力なくうなずいて、うつむいた。

「そうか、良い牝だ。そう、早速命名式に移るか。……何か良い名前は……道川、幸子、そうそう旧姓は確か白山だったな。シロ、これもありふれている。シロ、白い物、メリケン粉、そうだ、メリが良い」

「メリ、これがお前の名前だ。どうだ良い名前だろう。メリとマミ、これならばあやにもはっきり区別できるね」

うなずくばあやに、

「サイズをはかるとするか」

ブルーのパンティが、マミの時と同じ様に鉄で断たれる。メジャーがあてられる。

「今度は宣誓式だよ。その前に文章を作るからね。マミの記録にあったのと同じでいい」

四肢をつなぐ紐を解かれ、今迄自分の体を覆う着物をしめていた腰紐を何本もつながら、典型的な首縄高手小手にいましめられ、胴縄から下へ、上に後手につながれた夫人の白い体がマミの目の前にうずくまる。白足袋だけ残される。

今まで女王様とあがめさせられた道川夫人が目の前でメリと云う牝に落とされ、御主人の責め——マミにとっては寵愛とも感じられ

る——を受ける身分になった事に喜びと同時に云い知れぬ嫉妬を感じて、天井からの鎖で直立させられながらマミは、

「御主人様、マミにも誓わせて下さい。もう女王様なんかでなくなっただけですもの。私だって負けるものですか」

「そうかい。それじゃ、お前にも誓わせておやり」

西岡はマミに湧いて来た対抗意識に喜びながら鎖を外した。

六、誓い

久しぶりで後手を解かれたマミは対抗意識にもえながらペンを走らせた。

再び訓練室に帰ると後手にされて、西岡の左後方に立った。

メリの宣誓文はマミのそれと全く同じであった。ただ女王様を御主人様、マミをメリと書き換えたに過ぎなかった。

「メリ、宣誓をするんだ。猿ぐつわを外してやろう。お前がいつか教えてくれた様に、舌を嚙んでも出血が止まらなくても死ぬ事はなく、手当をすれば直ることや、舌を嚙んで死ぬのは痛みで丸まった舌が咽喉をふさいで窒息するからだというのもよく覚えているから

ね。噛んでごらん。お前がチロにした様に手当のついでに全部切ってしまうてやる。見よう見真似だが、ちゃんと道具もあるからね」あごで示された片隅に、みかん箱があるのを見て、夫人の眼にあきらめが走った。

西岡の手で濃く口紅をつけ直され、跪ずいて宣誓書を読むメリの眼は涙で何度も曇った。声をはり上げる様に何度も強制される。紙に強く押しあてて、形の崩れた口紅のまま、メリはマミの前へにじり出た。涙にくぐもる声でもとの女王様である牝のメリがマミへの宣誓書を読み始める。

「私こと、一匹の牝メリは只今御主人様に忠誠を誓いました。このメリは先輩であるマミ様にも従順な牝になります。どうか宜しく御指導下さいませ。以下の誓いにそむきません。」

一、何事にも先輩であるマミ様を立てる様に行動致します。

一、貴女の事は「マミ様」と申し上げ、自分のことはメリと云います。「私」とは決して云いません。

一、メリは……

……何卒今迄の横暴をお許し下さいます様お願い申し上げます。新参の牝メリ。……

……わあっ！

泣き崩れるメリの頭をあげて宣誓書に押しつけるマミであった。足首の赤い革の輪が印象的である。

マミの体には、衝動的に憎しみが湧いて来た。ほっと坐り込むメリの肩を蹴倒すと後頭部を打って足をはね上げるメリの体の上ののしかかった。肩の上にまたがると、股でじりじりと、メリの整った顔をはさんだ。後手をうんと伸ばして乳首をさぐる。

「くく苦しい。わああ……」

叫ぶ口の上に、鼻の上にマミの体が押しつけられる。

「むむ……」

メリの白い脚が空中におどる。白足袋だけが印象的である。

「さあ、もういいだろう。マミ」

後手をつかんでマミを立たせ、次いで大きく波うつメリの体も抱き起した西岡は、

「マミもメリも、同じ牝なんだから、二匹とも仲よく僕に尽すんだ。さあ、もう仲直りをするんだ」

背中合わせに立たされたマミの後手をぐつと引き上げて、メリの後手に握手をさせた。長い握手のため、又親しさが湧いて来て、

「ご免ね。メリちゃん、これから仲よくしてね」

強く握り返しながら、小さい声で

「私の方こそ」

さきほどの誓いを思い出して、

「メリの方こそ悪かったと思います。これから仲良くして下さいね。マミ様」

涙を溢れさせるメリの体を引き離して、

「今度は向き合って仲直りをするんだ。そう口があるだろ」

後手の体をすり寄せ、二人の体が密着する。眼を閉じたまま唇が重ねられる。鼻をすり合わせながらメリの頬を涙が伝わる。

「二匹とも仲直りをしたんだから、一緒に暮らせてやるよ。その前にメリもマミと同じ様に着物を作ってやろう。ふふっふ」

メリの体を高手小手にした上、縦に緊縛していた腰紐が解かれた。後手に革手錠がはめられる。床に横倒しになるメリに向って、

「メリ、お前も感度良しだね」

紐の一部を見せつけられながら、最後に残った白足袋をゆっくりと脱がせられた。

「メリ、お前も革の服が好きだったな。差当り、これを着せてやろう」

革の白衣が横たわるメリの体の上に投げか

けられた。

「しばらく二匹は相住いだ。けんかをするとな面倒だが。さあ居室に行こう。メリ、ちゃんと立つんだ」

革の白衣をはおり、ばあやの手でボタンがかけられると、メリはばあやに感謝の気持ちを眼で表した。

「事故防止と、会話を禁じておこう」

「御主人様、おしいつけに従いますから」

と口々に哀願するマミとメリに、緊く嵌口具がかまされた。

「明日からは二匹の競演だ。さぞ面白いだろうな。さあこれで休ませてやるよ」

跪く二匹の牝の会釈を背に、ばあやを縦えて西岡は出て行った。

七、赤と青

メリと云う名の牝に落された道川夫人には全くマミと同じ装具がつけられ、拘束衣があつた。メリの革の服はマミの赤に対して濃紺で統一された。

即ち、手首、肘の上、膝の上、足首に尾錠つきの革ベルトが縫いつけられ、首にも革の首輪が、そして、首輪に通された環は銀白色

である。マミをモデルにして拘束衣を研究した時のデザイナーの服は、上衣とスカートが継ぎ合わされて普断着になってしまった。勿論袖は取り除かれて、袖つけはとも皮でふさがれた。

目を追って、拘束衣も整えられる。NO 14の拘束衣の縦ベルトには始めから革の玉がつけられた。しかしこれはマミにもメリにも余り使われなかった。西岡はこの二人の体が傷つきのを恐れた。

さすがに年令は争えぬもの、メリのウエストはややたるんでいるので、体を折るのも苦しい位に厚い革のホルセットがウエストをしめ上げる。ホルセットに締められたウエストは脂肪ののったバストとヒップを一層引き立て、その紺色が白い肌を目立たせる。同性の体でありながら、マミですら見とれる程に美しかった。このホルセットが外される時は少なかった。マミは自分より少し小柄ではあるが、その年頃の女性としてはきわ立って均勢の取れた女らしさを表したメリの体を憎んだ。その憎しみは一緒に責められ、連縛されて、肌と肌が密着し、共にうめき声をあげる仲間になった親しさより非常に強かった。メリにもその憎しみがあつた。若さと云う

どうすることも出来ない利点を持つマミに、口でこそ謝ったが、女王として君臨して来た牝のマミに顔を股で押しつぶされた決して忘れる事の出来ない屈辱が強い憎しみと対抗意識に変わった。

この二人の対抗意識は西岡という御主人、そして男性を中心として、冷い火花を散らした。西岡はこの傾向を見て、自分に向けられるべき憎悪が互いに別の仲間に向けられ、二人とも早くマゾ化しようとするのに喜んだ。二匹とも俺の術中に陥ったか、と。

西岡はこの憎しみを見て、マミとメリの嵌口具は洗面と食事以外には外さなかった。しかし口の中にかませる形式ではなく、頤の先を額の上と、後頭部で締めあげる猿ぐつわを使った。マミとメリの二人とも形の良い唇を幾分突き出した形でにらみ合った。

メリが増えたので、マミの日課は少し変わった。午前中の美容体操は、二人が並べられて全く同じ運動を強いられる。以前と同じ様に電撃による強制運動である。ばあやは後の椅子に腰を下し、スイッチを入れると、時間が来るまで、汗を流し、電撃で体を硬直させ、高く低くうめき続ける二人の方を見もしないで、マミとメリの新しい拘束衣の仕立や、西

岡や自分の身のまわり品の整理に余念がなかった。

マミは、電気に強制されて、動きながらもメリに負けまいとうめき声をおさえた。メリが電撃にあつて、高くうめくと、この上もない優越感を感じ、苦しみを忘れた。

メリはマミの若さに対する劣等感があり体力的にも劣るので、マミのあげるうめきがこの上もないはげみになり、一生懸命尻を振り汗を流した。

午後の掃除は、来客も殆どなく、汚れる事の少ないこの家は、マミ一人でも充分であったから、メリが増えた為に仕事は半減した。それどころか、お互いの対抗意識が一層用事を早く終らせた。後手で掃除器を操作し競争した。

掃除の他は週二度の洗濯がある。洗濯機であるから、注水や排水、スイッチなどは後手で充分用が足せる。只、最後の脱水機に入れる時に口を使わねばならない。例の猿ぐつわをかけられているので、歯の動きが止められ唇だけしか動かせないので、何度もつまみ上げ損ねる。普断着を着せられてはいるが、槽の縁に乳房を押しつけ、槽に首を入れて何度も唇だけでくわえるのは楽ではなかった。洗

濯は交互に一人だけが使われるのだが、相手の方が早いのではと云う焦りがマミとメリを駆り立てる。勿論、洗濯するものは西岡とばあやの肌着である。牝には肌着はない。

午後の休息が与えられる。赤と青の革の普断着と同色の猿ぐつわをまとったマミとメリは、居室で休んだ。しかし、二人は決して同じ所では休まなかった。いつしか自分の場所を決めてしまった。マミは一人では広すぎるダブルベッドの上、メリはソファの上で互いに背を向けて横になるか、さもなくば坐って上目でにらみ合った。

窓の外は、広い庭が冬の荒れた景色を見せる。深い木立が続く。隣の家など見えない。この窓も、道川家と同じく、防音二重ガラスのはめ込みである。恐らく強化ガラスだろう。雪がちらつく窓の外に較べて、熱気暖房の部屋の中は、初夏の気温である。

メリが捕えられてから、西岡の帰宅は遅くなる事が少くなかった。六時過ぎ帰宅、入浴後食事、この時始めて猿ぐつわを外される。

ばあやの調理も上手である。口だけでの食事にも、次第にメリは慣れて来た。

虫歯の一本もないマミは、メリの左の奥歯の金冠が大きく口をあけた時に、きらりと輝

くのを見てさえ理由のない嫉妬を感じた。夕刊に目を通し、パイプをくゆらす西岡の次の動きを不安と期待で待つマミとメリは一休みの後に、ゲームをさせられる。

二人とも同じ様に海老責めにされ、どちらが早く参るかという時もあった。これは只自分が耐えるだけであるので、マミは早くあの快感と共に失神したいと思いつつも、若さから来る体の柔かさで、何時も勝った。

失神して、紐を解かれ汗と脂にまみれた体を床に長々と横たえるメリの体を見ながらも耐えられた。

しかしマミがもっと対抗意識をむき出しにするのが、色々の形で力較べである。

綱引き、これは二米ばかりの細い紐を乳房に結ばれ、もう一つの乳首には電気のコードがねじつけられる。相手の体を中央に張られた裸線まで引き寄せるゲームである。この綱引きは乳首の痛さが体力をカバーするので、マミは少し分が悪い。猿ぐつわがないから、

「やあー」

「うーん」

「い、痛い」

「いい、ギャウ」

電撃に電線の上に倒れかかる事もあり、線

を何度も張りかえる。大抵はじめに痛いと声を出した方が負ける。

こうして殆んど毎晩行われるゲームが、二人の憎しみを益々強くし、マゾ化するのを早くした。マミは飼育されたのが早いだけに牝の生活は慣れていたが、メリはやはり苦痛と羞恥の方が強かった。

坐り相撲もゲームの一つである。尻の後で後手で支えることが出来ない様に、後手を首輪の環に引き上げられ、肩胛骨の間まで上げられて、床の上に尻をつけ、自由になる足で相手の足を蹴上げて後に倒すゲームである。倒れた相手には何をしても良かった。立って行うレスリングと同じく倒れた相手に止めをさすのは、顔つぶしである。

室内ゴルフもその一つである。訓練室の中央に二つのホールが作られる。穴は床から十糎ばかり高く、四方にゆるやかな斜面が広がる。自分のホールに口でくわえた三十糎の棒でボールを入れるのである。首輪が膝輪に連がれているので尻をつき出して、よちよち歩きしか出来ない。両乳首にねじつけられたコードを引きずりながらボールを追いかける。ホールに入ると玉の重みでスイッチが入り、相手の体を電撃がおそう。誤って相手のホー

ルにボールを入れて、自分で電撃に倒れる事もあった。コースに置かれた椅子が障碍になる。時には尻がぶつつかる。不自然な姿勢でも頑張る。

若さと体力で勝るマミはこうしたゲームには有利であった。マミを牝に落したのは、メリであるという潜在意識と、御主人、西岡に對する慕情が、西岡に對する従順とメリに對する憎しみが斗志になって現れる。一方メリは今迄對等につき合ってきた西岡に、突然捕えられ、いやおうなしに牝にされてしまった事と、何事かを裏に秘めた西岡の扱いに、マミほどに従順になれなかった。夜のゲームに疲れた体に、もう一つの行事が待っている。六つの面を白赤青の三色に塗りわけられたさいころが、入浴をすませたマミとメリの目の前で振られる。西岡は赤が出た時にはマミと、青が出ればメリと夜を共にする。そしてさいころの目が白であったら、西岡は一人で居間へ帰ってゆく。

女の喜びを知ったマミと、時々浮気をしながらも、十五年の孤獨を守ってきた女ざかりのメリには「白」の目は物足りなかった。毎日、手をかえて仕込まれると、あれほど憎みながらもメリの心にもマゾが引き出され

始めた。サジスチンであったメリも裏をかえされると、マゾの心も多く持った牝になって行った。

八、昇格

マミに二度目の生理がめぐって来たあと、或る晩、西岡は訓練室に牝たちを引出して、「マミ、メリ、今日のゲームで勝った方に自由を回復させてやろう。今日は相手に参ったと云わせるか、全く抵抗できなくなるまで闘うんだ。但し、体に傷をつけてはならんぞ」猿ぐつわを外され、いつもの弛い後手のまま部屋の両隅にへだてられた。

「さあ、始め、力一杯闘うんだ。勝てば自由だぞ」

後手ながら、体をまるくかがめ、足を半身に開いて、メリとマミはにらみ合って、隙をうかがいながら右へ右へとにじり歩いた。体力に自信を持つマミは、どうせ自分の勝たせや油断があった。体当たりと同時に足をかけた。所が足が簡単に外され、二、三步よろめいて向き直ったマミの左胸にメリの肩がぶち当たった。女の急所である乳房に体当たりをくらって、短いうめきと共に息が一瞬止る。腰が落ちて、片膝をつく、肩口を蹴られて床に倒

れる。頭を打って、マミの体は床の上に伸びてしまった。ボクシングのダウンと同じだ。メリの眼は喜びに輝いた。メリは西岡の側へかけ寄り、

「御主人様、メリが勝ちました」

「まだマミは動けるよ。試してごらん」

首を左右に振って、起き上ろうとするマミの胸の上にメリは、尻をついた。マミは辛うじてそれをこらえる。メリの股が喉に、頤ににじり寄る。メリの体が口と鼻を覆う。

「くくっ」

苦しみと屈辱をはねのける様に、後手に力を入れると足を大きく蹴上げる。勝ちほこって胸を張るメリの後頭部が蹴られる。メリはマミの頭の上の床に顔から突っ込んだ。

「ぐわっ」

遂に体制は逆になった。ふらふらしながら立上ったマミは、メリに近づく、起き上ろうとするメリの体をもう一度蹴倒す。二度目に仰向けにメリを倒したマミは、いきなりメリの顔を尻でつぶした。後から蹴返されない様に気をつけながら、体重をかけた。

口と鼻を股で押しつぶす優越感を味わいながらマミは、勝ったと思った。空中に舞うメリの足の動きが鈍くなる。

「マミ、よし、もう許してやれ」

まだ床に伸びているメリを見ながら、後手の尾錠を外され、思わず西岡の足もとに坐って手を合わせて涙ぐみながら、マミは礼を云った。手が前で使えるのは、こんなに良い事か。自由とは、こんなに良いものか。顔を両手で覆う。

「立ちなさい。マミ、これからは牝ではなく人間として扱ってやるからね。女中かな、いや、二号というところか」

「は、はい、有難うございます」

「お前の方がメリよりもおとなしいから、勝ってほしかったよ。メリはあれでもまだ憎しみは消えないらしいからね」

「ばあやにメリの始末を命じて、西岡はマミ——いや美代子を伴って、自分の部屋へ急いだ。」

剃刀で首輪の革を断ち切られる。金色の環が落ちる。手首、肘、膝、足首の革の輪は自分で切り落す。長い間自分の皮膚の様であったこれらの革がいとおしくさえ思えた。

美代子はしかし完全には自由でなかった。

西岡が家を出る時は外から鍵がかけられ、ばあやも、ひそかに監視している。しかし袖のある服を着て、自分で化粧し、箸やフォーク

を手にして食事が出来る嬉しさに、つい忘れていた歌が口をつき、微笑みがこみ上げる。

午前と午後とは牝であるメリを責める。そして夜は、すすんで西岡に責められる様になった。それも美代子にとっては、プレイであって苦行ではなくなった。

女王様であり、道川夫人であったメリに対する責めは西岡の居ない時は凄みを増した。美代子は徹底的にメリの羞恥をかき立てる様に、辱しめだけを狙った。

マミであった頃、一度も施されなかった浣腸が使われ始めた。

「メリ、今日から、この私が、お前のすべてを管理するわよ。おトイレにも黙って行っは駄目よ」

メリの体にはNO14の拘束衣が常時着けられた。

「メリ、このNO14は素敵だね。この尾錠を外さなければ、出る物も出せないからね。御主人様は傷がつくの嫌われるから、この革の玉だけは外してあげたわ。これがあればもっと楽しめるのね。ほほほ」

毎朝、この拘束衣が外される。浴室のタイルの床に、首輪と膝輪を紐でつながれて、足を上方に大きく広げたメリの体が横たわる。

「メリ、今日は石鹼水五〇〇だから二十分は辛抱しなくちゃ。早く洩らしたら、罰がひどいわよ」

冷い感じが体を貫く。二十分が死ぬほど長い時間である。

「むむむむ」

猿ぐつわに殺されたうめきが続く。

全身の力が抜け、タイルの床が汚れる。

「メリ、まだ五分も早いよ。さあ罰だわ。猿ぐつわを変えて、と」

じょうごを作りつけた様な猿ぐつわがはめられる。じょうごの先が齒の間にねじ込まれる。赤い革の室内着、これは袖のついたワンピース風な仕立であるが、その裾をほだけ、これまた赤い革のブーツをはいた美代子の脚がメリの顔をまたぐ。

サジスチンとなった美代子は、メリを責めた。西岡も美代子の責めの凄惨さに驚く事もあった。驚きながらもこれではいけないと気付いた。西岡は、三日に一度位の割で、メリの特別訓練をはじめた。この時は美代子は遠慮させられる。その為、美代子の自分でも説明できない嫉妬心が、メリに対する憎しみに変った。

ある晩、美代子は珍らしく西岡に、晩酌の

相手をさせられた。メリは空腹のまま、仲良く盃を傾ける二人の足もとに跪かされていた。ほんの三、四杯で目もとを赤くした美代子は、陽気になって西岡にしなだれる。

「ねえ、御主人様、メリにも飲ませて見ましょうよ」

「そうだね。それじゃ、これを」

盃を出す西岡の手をもどして、

「そうじゃないのよ。きつと面白いわよ」

うめきながら首を振るメリに、早速NO14の拘束衣が着けられる。両足を天井に紐で釣り上げる。硝子の浣腸器に酒が吸い込まれる。

「御主人様、一合ほど入れたら、どうなるでしょうね。お帰りになる前に千CCも入れてきれいに洗ってやったから、いくらでも入りますけど」

メリのうめき声が長く続く。三度、四度。

「これだけにして、ベルトをちゃんと締めてこれで様子を見ましょうよ」

美代子は一人で働いた。

床に下されて、横たえられたメリの体は次第に紅がさしてくる。直腸からアルコールが吸収され始めたのだ。紺の革ベルトが赤らんだメリの体に濃いコントラストをつける。メ

リは酒のいける口であるが、それでも、直腸から一合の酒を吸収しては、たまらない。ふわふわと酔ってくる。

「お酒の浣腸だって酔えるのね。御主人様、大発見だわ。もう一本入れましょうよ。そして千鳥足で歩かせて見たいわ」

又しても追加される。しゃがみ込む体を立たされ、首輪に鎖をつけられて、部屋中を歩かされるメリの足どりは、次第にあやしくなる。目がとろんと睡りはじめる。やがてよるめいて横倒しになり、いびきをかいて眠りはじめた。

「御主人様、牝のトラなんて嫌ですわね。でも気持よさそうにねていますわよ。私にもう一杯下さいません。勿論私にはこれで」

「美代子、お前にも飲ませたくなかったな。やって見るか」

「御主人様がお喜びになるなら、何でも致しますわ。さあ、どうぞ」

赤い革の室内着のボタンを外す美代子だったが、西岡は実行はしなかった。

九、逆 転

メリに対する美代子の責めは、日を追って凄みを増した。

美代子にメリを責める事をまかせてしまった西岡の企ては成功した。自分に向けられていたメリの憎しみは美代子に集中し、美代子の責めからむしろ助けてくれる西岡に、メリの感謝と思慕が生れてきたのを喜んだ。

メリは西岡の帰宅する夜を待った。特に一日中家に居る日曜は嬉しかった。尤も日曜にもゴルフや集会で出かける事の多い西岡であったが。

美代子にはもう完全にこの家の様子がわかった。唾であるばあやの為に各部屋や廊下の所々にネオンランプが取付けられている。呼び鈴のボタンを押すと赤い火が点滅する。西岡からの電話もベルが鳴ると電話の傍におかれた小さい箱のネオンがベルの鳴っている間だけ点く。西岡は、外から電話をかける。呼び出しのベルが鳴るのを受話器で聞きながら回数で信号を送る。三度ベルが鳴る。ばあやにとってはネオンが三度点くのであるが、それで終れば「今日は遅くなる。十時過ぎる」五度ならば「食事はいらぬ」七度以上なら「今日は帰らない」これで充分である。電話代もかからない。間を置いて二度もかければばあやの見落しもめったにない。電話器も親子式で西岡の居間と、ばあやの女中部屋にあ

る。美代子はばあやの女中部屋には入った事がない。

美代子は今の生活、二号と云われてはいるが、本妻のない西岡に愛され、身のまわりはばあやに見られ、そしてメリと云う物を玩具に持つこの生活に満足であった。高級化粧品、アクセサリ、但しこれは美代子の好きな赤い革の服にマッチする物だけであるが、それらも自由にねだる事が出来た。しかし、家の外に、庭にすら出る事を禁じられ、電話にも触れてはいけなかった。決して西岡は美代子を全面的に信用してはいなかった。外部への連絡を恐れた。その為、新聞やテレビ、ラジオは女中部屋に移された。

美代子は、ある日この生活に満足しながらも、メリに対する女王の地位を誰かに誇り度いという衝動に駆られた。そうだ電話してやろう。高校時代に一番仲の良かった弘子がMデパートにいる。電話したってわかりっこないわ。ばあやは唾だから聞えないし。と西岡の居間に向った。電話のそばのネオンの箱の用途を知らなかった。おしゃべりを楽しみにしながら、

「三九の三八四六」

受話器を外すと「ツー」という発信音が出

る。長い間聞かなかった音だ。ダイヤルをまわすと、ネオンの赤い光が点滅する。

「ブーブーブー」話し中である。何度繰返しても同じである。ああ、ここは神戸市内ではないのか。電話帳は？ ない。道川夫人の家が六甲のあたりで、車で二、三十分、そうきつと芦屋だわ、西宮かしら。一〇四で聞こうか。

うまく行きそうだった時、受話器の発信音が消えた。ばあやが子電話を操作した事に気がつかない。故障かしら、おかしいわ。一時間も試みたが、どうしても通話できなかった。ばあやにはわかりっこないし、メリは訓練室でNO9の全身を包む拘束衣に汗を流されて呻いているし。美代子は後めたくなかった。また明日でもやり直して見よう。

西岡の早い帰宅、いつもなら、これから入浴、夕食だ。酒の味がわかり始めた美代子は夕食を楽しみにしている。御入浴の間にメリを、と居室で、おびえて後にさがるメリの首輪に鎖をつける美代子の後で西岡の声が、やや高ぶって聞えた。

「マミ！」

牝であった頃の名を呼ばれ、はっとふり返る美代子に、ゴルフ用の半オーバーも取らな

いままの西岡が、

「マミ、あれほど禁じておいたのに、外へ電話をかけたな。誰にかけた？」

わかる筈がないのに、美代子にはそのからくりがわからない。動揺をかくしながら、

「いいえ、誰にもかけていませんわ」

「マミ、本当の事を云うのだ、眼を見ればわかるぞ」

あわてて眼を伏せる美代子に、声が追いかける。オーバー、上衣を脱いでソファにかけながら、

「それほど嘘をつく気なら、体で云わせてやろう。——メリ、メリじゃなかった、道川さん、今から立ち場を逆にしてあげよう。おいやですか」

予想もしなかった事態に、まだ西岡の言葉が信じきれない様に大きく眼を見開いたまま呻きながらうなずくメリ、いや道川夫人の体からあの汗と脂を吸ったMO14の拘束衣を脱し、後手を解き、嵌口具も外された。

本能的に逃げようとする美代子は、ドアに走った。把手をまわしても開かない。鍵がかかっている。浴室の窓だ、ところが高い。登ろう。何か踏み台は。背伸びしてやっと引き開けた湯気抜きの窓に向って、

「助けて、誰か、助け、ううう」

右手を背中にね上じげられ、口を押えられた西岡の手をふり払おうとする左手が道川夫人につかまれる。

美代子に責められた屈辱と羞恥が、美代子に対する憎悪となり、命ぜられなくても、夫人は美代子に飛びついた。

「猿ぐつわは、面倒ですわ」

慣れた手つきで顎が外された美代子、いやまた牝に落されたマミの体から、革の室内着がはぎ取られる。

「ああああ」

よだれを流しながら、たった今、夫人の体から外されたばかりの紺のNO14が順序よく装着される。サイズが少し小さいので、緊縛がきつい。股間にベルトだけが締められている。

「道川さん、何か着て用意なさい。一緒に一風呂あびましょう」

「幸子って呼んで下さいません」

夫人はやっと人間にかえれた実感が湧いて来た。呼鈴ではあやに連絡する西岡の眼は、新しい喜びに輝いた。ばあやによって開かれたドアに消える西岡と夫人をながめながら床の上で、美代子——マミ——呻き続けた。涎

で床が濡れる。

十、一 猿

食事も別室で終わったのであろう。西岡と夫人が腕を組んでマミの前に現れた。西岡はガウンをまとっている。夫人の姿はマミを慄然とさせた。そう、あのマミにとっておぞましい想出を持つ革の白衣である。

「あなた、道具があった方が良いでしょう。取って来たいんですけど」

「そうだね、幸子、貴女のボグゾールはガレージの奥にあるよ。僕のファルコンを動かさなきゃ。キーは居間の違い棚ですよ。寒いか少しアイドリングした方が良いでしょう。家はそのまま閉じてあるだけだから。免許証を忘れないでね」

西岡は夫人とは調教師と馬主の関係にあり長い交際であっただけに、もうすっかり信用している。夫人も同類意識があった。

美代子は、今迄の西岡に対する思慕を忘れた。夫人が外へ出て赦けを連れてくる事を期待した。夫人の西岡への憎しみが消えないことを。

ソファでパイプをくゆらす西岡の手に、乱入する警察隊が手錠を叩き込むことを乞い願

った。と同時に、何故電話が、通じなかったか、電話がばれたのかは、どうしてもわからなかった。

美代子の期待も空しく、ドアから入って来たのは白衣の夫人だけであった。手にした治療用の鞆を見て、体を固くした。

「あなた、マミは、とっても怖がっていますわよ」

「きつと直ぐに白状するよ」

「ほほ。白状しても許せませんもの」

顎がはめられると齒がガチガチとなる。両足を天井に吊られる。逆人の字である。尻が浮く程度に吊られる。

「マミ、私わね、汚い物を見たくなかったから浣腸なんかしなかったけど、お前が私にした通りの事をしてやるよ」

美代子の体に冷い戦慄が走った。

「ああ、止めて、許して、云います。云います」

「マミ、お前はどこに、誰に電話したんだ」「していません。あああ、止めて。電話が掛らなかつたんです。ああ、いい」

「それ、掛けたんじゃないか。誰にだ？」

「うーん、本当に掛らなかつた、掛らなかつたんです。うーん」

千CCも注入されてしまった。

「あなた、良く入りますわね。この姿勢ならもっと行けるんですけど。逆流すると困りますからね」

腸がぐるぐる鳴る。外からは腰ベルトの圧迫、中からは石鹼水が、而もベルトで出す事を止められている。苦痛に身をよじる美代子に、

「電話をかけようとしたのは誰だ」

「いいい、うー、降して、オオ、おトイレに行かせて、あー、お友達のおお、みみみ三沢、ひ、弘子さん、うー」

自分の云う事も、呻きも耳に入らない美代子に、尚もくわしく訊問は続く。

「ばあやも、多分外につながらなかったと云うから、本当だろう。ばあやの見た所では、

『三九の三八四六』らしいが、それと『一〇

四』だね。早く見つけてくれて良かったよ」

「一一〇をまわさなくて良かったんですね。でも一応マミの云う三沢弘子を当って見た方が良くないかしら。万一つて云うこともありえますもの」

「Mデパートだったね。掛けるのは、僕より幸子の方が良いね。明日は月曜、休みだな。一寸まずいな」

「それじゃ、あさってにしますわ」

呻く美代子にも、とぎれとぎれに会話が聞える。

「は、早く、う、降して、おお、お願い」

足首を弛められ、肩ベルトをつかんで立たされ、タイルの浴室でベルトをゆるめられると同時に失神した美代子は、ベッドの上に仰向けに横たえられた。気がつくまでに、夫人は楽しそうに色々の器具を用意した。

「もうチロの時の様に、血を見せないでほしいね。もっと長く飼っておくんだからね」

「あなた、大丈夫よ。マミに教えられた事をそのままするんだから」

「それはそうと、幸子、あなたは、どちらに住む。もう光彦君が居ないんだから、こちらに来たらどうだ」

「そうね。もう道川の家にも未練はありませんわ。全部処分しましょう。あなたにおまかせするわよ。でもあなた、驚いたわ。飼育される辛さって、経験しなくちゃ、わからないわね。ただの二週間がとても長かったわ。それにしてもマミって、こわい牝だわ」

「幸子、前に二度もプロポーズして断わられたから、非常手段にうったえたんだよ。許しておくれ」

「ううん、もう何とも思っていないわ。でも、あの特別訓練は嬉しかったわ」

西岡は、美代子を昇格させてからメリであった夫人の責めはまかせたが、時々特別訓練と称して、美代子に見せなかった訓練を行った。その頃からメリの眼に希望が湧いたのだが、美代子は、女性特有の感で嫉妬めいたものを感じ、一層強く夫人を責めたのだった。意識をとり戻した美代子の傍に坐りながら「マミ、三猿ということばを知ってる？」

「サンエン？」

小さくつぶやく美代子に、

「これだから戦後の子は駄目なのね。それに教養が物を云うわね。そう、『見ざる、聞かざる、云わざる』よ」

別府、高崎山で目、耳、口をおさえた三匹の猿の置物を想い出す。

「マミ、お前を『云わざる』にしてやるよ。

あとで元に戻せる様に考えたから安心おし」

「女王様、許して、そんなの私いやです」

「それが最後の言葉よ。マミ」

「いや、いや、許して、ユルユルウ」

夫人の顎を外す技術は非常に巧みである。

美代子の奥歯の穴に、あの酸っぱい唾を出させる金の舌袋を装置しながら、

「あなた、すみませんが、それを液でこねて下さいません。少し柔か目にして下さいね」

舌の自由をうばわれた美代子の顎が再びはめられる。三度目だ。奥歯から前歯まで、上下の歯が噛み合う所に全部セメントが塗られる。セメントをがっちり噛みつけた顎が革ベルトで顎と後頭部に締め上げられる。

「マミ、明日になったら、それが固まるからね。そうしたら、もうお前は猿ぐつわなんて用がなくなるのよ。あなた、これで三年は大丈夫ですわ。取ろうと思えば、ドリルで削れば良いんですから。尤も少しは歯も削れてしまいますが。ほら、見かけはちっとも変わりませんわ」

唇がめくり上げられる。鼻から出る呻きだけが悲しみを訴える。涙も眼尻から、鼻から溢れ出る。

「マミ、もうお前は話せないのよ。食べることも出来ないのよ。どう、その気持。栄養はここから入れるの。私にいつかした様にね。ここからでも酔っぱらえるって、良い経験だったわよ。ありがとう」

「さあ幸子、居間に行こう。改めて、初夜をやり直そうよ。マミも連れてゆくか」

「あなた、いやですわよ。云わざるだって見

られたくないわよ」

夫人の頬に血が上った。

翌日までマミは放置された。昨夜の大量の浣腸で、すっかり空になった筈であるが尿意に苦しめられた。NO14が赤い革のに変えられてはっとするマミに栄養とは云いながら冷たい液はマミを苦しめる。

「お前は二食だよ。これは完全栄養だから、益々太るよ。マミ、そうして汗をしぼると、もっと良い体になれるわよ」

直腸に栄養を入れられても、空腹感はなくならない。もう固形物の入らないマミの口である。鼻から管を挿入されてジュースが注がれる。やっと空腹感が去る。しかし長持ちはしない。夜も空腹で寝つけない。しかし疲労が眠りに誘ってくれることだろう。

「そう、そう。もう一つお前が私にしてくれたことがあったね。マミ、私もお返しをするわよ。倍にしてね」

マミの髪はばあやと夫人の手で全部剃られてしまった。軽くパーマをかけた頭髮に缺が入れられる。短くなった頭に剃刀があてられる。青々とした地肌が現われる。尼の様なったマミの眉が剃刀のひとなでで落ちる。以前に剃り残された部分も同じである。

「マミ、もうお前の体には毛は一本もないのよ。涼しいでしょ。怪我ないって、しゃれにもならないわよ。ほほほ、あら、ここに太いのが残っているわ」

まつ毛と鼻毛を、毛抜で引き抜かれる痛さに耐えられず、涙を流しながら、くやしきと共に呻きが続いた。マミの顔形は変わった。

「ばあやさん、今日はマミを頼みますよ」

白いボグゾールを運転する濃紺の革のスーツの夫人の姿はかつての西岡夫人の落着きを見せている。表情にも一昨日までのメリは残っていない。

Mデパートの駐車場からハイヒールを響かせながら、案内所へ急ぐ夫人をふり返る眼が

多かった。

「三沢弘子さんって、何処の売場に居られるんでしょうか。番号は何番？」

「いらっしゃいませ。三沢は、——四階の貴金属売場でございます。八二五番をつけております」

四階にダイヤの指輪を見ながら、弘子を探す夫人の姿があった。

「あの娘ね。良さそうな娘だわね。さてどこで聞き出せば良いだろう」

「いらっしゃいませ」

胸の番号を確かめながら、

「あちらのプラチナ台の指輪を見せて」

「はい、少々お待ち下さいませ」

「あなたは、三沢さんだわね」

午前中の人影もまばらなデパートの貴金属売場に、「弘ちゃん」「ミッコ」と呼びあった親友の運命を、或は変えるかも知れない夫人のたくらみが進められているのも知らず、マミは絶望しながら、そして空腹感にさいなまれながら、真赤な全身拘束衣、NO9に締めつけられ、乳首をおそう電撃に汗と脂をにじませて呻いている。床が訪主頭を振る度に飛び散る汗と涎で濡れている。剃りあとに汗がしみる。

窓際では柔い冬の日ざしに、椅子にかけたばあやが、紺の拘束衣の縫い目をほどいている。足もとに置かれた赤い嵌口具や、顔枷もこの次にほどこれるのだろう。〔第二部終り〕

〔妊娠マニヤ通信〕

待望する妊婦フォト

瀬 沼 四 郎

グラビア、口絵なしの三月号を見て、何となく淋しい思いがしたのは、小生だけではな

かろう。近ごろの雑誌では、固い総合雑誌でさえ相当の写真をのせているのだから、一挙

に十数年も昔にかえたような気がする。しかし、さしあたり今月号だけの試みということなので、今後もずっとというのではないようだ。実際、小生などのように特異な傾向の読者にとっては、写真の数が多くても珍しいものは少なく、これからは少数精鋭主義で、一、二枚でもよいから、他の真似を許さないアツと意表をつくようなすのがのぞましい。さしあたり妊婦写真など、我田引水で申しわないが、いかなるものであろうか。そういう

ものであれば、大正の終りごろの伊藤晴雨氏の妊婦の逆さ吊り写真のように、長く語り、伝えられることになると思うが、どうか。

芥川一夫氏の「『妻の逆吊り』によせて」を読むと、いよいよ妙子夫人の妊娠九カ月の逆吊りを実現せられた由、奇ク発表用に二枚送られたということである。「上半身裸体で腹帯とパンティ」着用の姿ということなので、裸出した腹部（肝心の）が見られるかどうか気になるが、どうして誌面にのらなかったのかと残念に思う。やはり夫婦だけで撮られる写真には限界があるので、写真部の専門家の協力を得て、たとえば山原清子さんの刺青写真のように、最良のコンディションでジャカスカ撮ってほしいものである。最近では本誌グラビアのものは無難なものが多く、山原さんの刺青はたしかに卓抜なアイディア。（というよりも恵まれたチャンス？）だったが、特異なものは分譲写真で、ということになっている。妊婦写真はグラビアに出たことはなく、もっぱら分譲にたよっている。

とにかく、妊婦モデルの獲得難、妊婦写真の少なさ、ということが最大の原因なのだろう。たとえば刺青の山原さん一人を獲得しただけで、グラビアと分譲のあれだけの多量をとらずに十分の材料を提供しうるのだから。編集部は協力される妊婦モデルが一人か二人でもあれば、事情は一変するのではなからう

かと思う。ただ思うままにならないことが非常に残念である。もっとも妊娠という状態は一時的のものであるから、大塚さんや山原さんのように、これでもか、これでもか、というふうに行かないだろう。それならそれで、飽きられることがない程度に、ちやうどまゝ行くのではないか。また必ずしも本格的なものではなくて、一月号の小川、高松、長谷各氏について「夫婦のSMフォト」欄に益谷、新田両氏が三月号で登場しておられるが「妻の妊娠フォト」を投稿される方はないものか。

益原氏夫妻はすでに二子をもたれるそうだが、新田夫人は二十四歳で、まだ妊娠したことがないというのだから、大いに期待がもてるのではなからうか。大柄で肥りじしのグラマー（写真で見てもその通り）な女性だから、四キロも五キロもの巨大児を腹に孕まれて、堂々たる肉体美を見せていただきたいのだと思う。これからも夫婦フォトの寄稿者は、ぞくぞくとあらわれて来るだろうから、いつかは小生の希望もかなえられるであろう。夫が妻をとった写真がこうして誌上に紹介されるなどというのは、たしか新宮氏ぐらいが始められたことかと思うが、実によい企画である。夫婦生活にとっても大変プラスになることだ。惜しむらくは小生、もう少し若かったらと思う。それにつけても、芥川夫人

の写真がのらなかったのは返す返すも残念であった。繰り言をのべてもいたし方ないことではあるが。

有形無形の圧迫が加えられている困難な情勢の中で、勇気をふるって奇クの発行を続けられる編集部に感謝しながら、十数年の伝統を守って斬新な誌面を維持して行かれるようおねがいすると同時に、読者の側からも大胆で節度ある協力がなされるよう切望するのである。何のために不恰好な妊婦を、と疑問を持たれる方もあるかも知れないが、お互いに他人の嗜好のよしあしをあげつらうことは、本誌の上では暗黙に承認された当然のタブーになっているのだから、浣腸、切腹（解剖、料理？）女相撲（フンドシ）刺青、オムツ、ゴム、ネクタール、女装など、まじめに偽わらない姿を赤裸々に示しあえる共通の場を大切にしなければならぬ。卑下することなく、ありのままに正直に話し合えることは大きな慰安であり救いである。

思わぬいささか固い話になってしまったが最近の風潮が本誌などにきびしくなってきたように思われるにつけても、ささやかな私たちの世界、なるべく他人に迷惑をかけないように、節度を守りながら生きて行きたいとねがう私たちの世界にたいして、偏見と誤解とをもって見ていただかないように、とくに局外の方々に訴えたいと思うのである。

絞首刑にされる女

△死刑と女の考察△

黒田

寿



「ガン！」

踏板のはずれる音と共に、十三人の女死刑囚はいっせいに悲鳴をあげたが、それはたちまち「グクッ！」という窒息音とかわり、以後はいかに叫ぼうとしても声はでなかった。悲鳴どころかもはや呼吸さえもできず、ただ聞えるのは自からの、そして仲間たちのあえぐ音だけである。

クロー、ナタリーらはいまや生れたままの姿にもどされ、首にロープをくくりつけられともがいている。二十六本の白い、スラリとした美しい脚が空しく宙にふらついている。

十一分五十秒。まずジャクリーヌが絶命を宣せられ、合図の旗がさつとあがった。次いでオードリイが、さらにデビーが、そのあとを追った。

こうして十五分後には、十一人までが苦しみを終えている。絶命後も五分間は、そのまま吊しておくのだ。残るのはあと二人、ロープがよくしまらず僅かに息がつけるのか、まだ死にきれずもがいている。鼻から唇から、タラタラと流れる血汐がいたいたい。

十九分。すでに八人が床に引きおろされているころ、ようやくナタリーが息をひきとった。しかしクローは、その後もジタバタとも

がきつづけ、絶命まで実に三十六分を要したのであった。

死刑マニヤの私は、毎日以上のようなことを想像し楽しんでおります。同志佐出と共にKKを愛し、素人は素人なりの作品を投稿してきました。さぞかし皆様はウンザリされておられると思いますが、タネももう少しでつきるところですから我慢してください。

絞首刑についてはA・ケネストラの「絞首刑」H・ブリークレーの「英国絞刑史」がいずれも実話に取材しただけあって迫力があり、さらに私にかかる普通の小説からも続続と女死刑囚ができあがるわけです。そのうちでも絶世の美女たちについて記してみましよう。

一七八一年、わずか五シリング十ペンス即ち現在の邦価で三百円の布を万引したため死刑を宣告されたマリー・ジョーンズ。

彼女は若さと美貌だけで、十分執行猶予になれる筈でした。ぬけるような白い肌と、フササしたブロンドの髪をもつ、文字通りの絶世の美女だったのです。

しかも初犯で窮乏のどんぞにおち、ふた

りの子供に食物を買ってやることもできず、絶望の末の犯罪というのに……

群衆心理とはおかしなものです。犯行の疑が充分残っていても、頭から「無罪だ、釈放だ」とさわぎたて、被告を英雄視する場合もあるのは、金もなく政治色もない人間に対しては売名弁護士同様、見むきもしないのでしようか。

とにかく絞首台上で愛児に最後の乳を含ませ、首を吊られたまま晒しものとなったこの美女に、たいした同情は加えられなかったのです。

これに対し一八一五年七月二十六日、オールド・ベイリーで絞首刑になった二十一才の美女エリザ・フエンニングに対しては英国国民の半数以上が無実を信じていました。

罪名は殺人未遂ですが、動機も証拠も調べずは、始めから犯人と決めてしまったもので今日なら起訴することさえできなかったでしょう。

不運なことに、死刑反対運動の先頭にたった人々が極左派だったことと、同時にナポレオンとのワートルローの戦が始まったため、国民は同情はしていても政府攻撃とまではいかなかったのです。

この美女は大観衆のまったただなか、恐ろしい絞首台にひきあげられ、首にロープをまかれました。

「わたしは無実よ」

これが彼女の最後の言葉でした。

幸い、彼女は少しももがかず、死んでいったと伝えられます。

英国絞刑史のなかでもベスト3に入るカルクラフトが、自分の四十年の仕事を回想録に書いていますが、そのうち最も辛い、最悪のものというのが十七才の処女、サラ・トーマスの処刑です。

女主人に虐待されどおし、空腹にせめられて遂に主人を殺してしまったもので、これには検事側も同情はしたのですが、如何ともしがたく、遂に減刑は認められませんでした。

一八四九年四月二十日。狂気のように泣き叫ぶ美少女を十三階段に引きあげたとき、あまりあばれたため、着ていた服がズタズタに破れ、ほとんど正視することができぬ有様でした。

女性が絞首刑になる場合、首にロープをかけた姿で台上にたたせ、群衆がお祈りをあげるのが当時の規則でした。しかしカルクラフトは

「すぐにだぞ。この子を晒しものにするな」と助手たちに命令。首にロープをかけると同時に落し戸のしめ釘をひきぬいて、少女の姿を群衆の前から消しました。この行為は、情けあるやり方」とたたえられています。

しかし彼はこの夜から病気になる、三カ月も寝こんだといえますから、よほど深刻な傷手をうけたことでしょう。

死刑廃止運動は英国に始まったもので、その正式なものは、一九二三年ロンドンで絞首刑に処せられたエディス・トンブソンが最初といわれます。

彼女は愛人があって、それに対し夫殺しの方法を空想しながら書いた恋文を六十五本も送っているうち、無我夢中になった恋人が本当に夫を殺してしまい、この恋文が証拠となつて、全く手をくだしていけないのに主犯とされ絞首刑を宣告されました。

とたんに彼女は失神して倒れ、同じく死刑を宣告された恋人も「彼女は何もしない」と必死に抗弁し、大衆も同情を惜しまなかったのですが、すべては空しくなりました。

絞首台には刑吏の肩にかつがれてのぼり、むりやり首にロープをまかれたとき、泣き叫

びながら両手ではずそうとしたため、爪で白い肌を傷つけて血が流れる悲惨な姿となり、うらみに燃えた目を大きくみひらきながら吊りさがって、三十才の生涯をとしてしまいました。

死体をあらためてみると、恐怖と苦悶のため子宮がはみでており、その執行に立合った女看守のうち、自殺一、発狂一、ほか病気になるもの数人というさわぎになりました。

さらに三十年後の一九五五年、同じロンドンでルス・エリスが絞首刑になったとき、この運動は世界的になったのです。

ルス・エリスは、その時二十六才。燃えるようなブロンドの髪と大理石のような白い肌をもつ、前述のエディスをしのぐすばらしい美女でした。

ホステス、モデルをしているうち知りあった愛人を殺した罪ですが、本人自身が一分でも一秒でも早く死刑にしてくれと望み、助命運動には数万人の署名が集ったのですが、当局は面倒のおこらぬうちとみたのか、サッサと処刑してしまいました。

犯行から裁判、処刑まで僅か五カ月。これは英国処刑史上でも空前のスピードです。

覚悟はしていますが、やはり女性です、さめ

ざめと泣きながら絞首台にのぼり、その途中で失神してしまいました。

本来死刑に処する場合、その本人に「いま死刑になるんだ」と、はっきり意識させる規則です。しかし同情ぶかい刑吏は、静かに彼女を抱いて頂上にはこび、その白く柔かい首すじにロープをまいて台下につきおとしたのです。この刑吏も彼女の処刑後まもなく退職しております。

「夜に屈伏して」という映画にもなった小説の主人公。メリー・ヒルトンは、おそらくこのルス・エリスをモデルにしたのではないでしょう。

しかし人さままで、彼女が処刑された翌日、彼女の等身大の人形をショー・ウィンドウにかざった店がありました。さすがの当局も、この店に撤去を命じたそうです。

私はこのように女死刑囚に対して興味をもち、いろいろ調べています。想像するのは勝手でしょう。しかし実際に処刑された気の毒な女性のことを楽しむのは、人間とは思われぬ、とんでもない奴だと自分でも思うのですが、どうにもならないのです。ではまた空想の方へ……

群衆はわたしを捕えると、すべての衣類をはぎとって一頭の裸馬の上へおしあげた。

わたしは愛する故郷のためスパイとして働いた。それが発覚した以上死刑は当然と覚悟している。だが群衆はわたしを正式の裁判にかけず、リンチに処そうというのだ。

前後左右をかこまれて進むうち、ふと前方をみたわたしは、顔からすうと血の気がひくのを感じた。

一本の大木があり、その横枝が長く道の上にまでのびている。誰がみても絞首刑に絶好の樹だ。わたしはその枝から吊されてしまうのか。

案のじよう、その真下で馬がとまる。一人がさっとロープをなげると輪になった先端が枝の上を通って、わたしの目の前にダランとさがる。もう一人が、その輪をわたしの頸にまいた。直径三センチもある太いロープだ。女性用の細いのはないのだろう。これこそ死のネックレス……。

だが、これは夢ではないのか？ わたしは本当に首を吊られて、二十二才の若さでこの世から去らねばならぬのか。夢ならば早くさめてくれればよい。

“ピシリ！”

馬にむちうつ音。ぐらっと竿立ちになる。

わたしは両の太股に力をこめ、馬の背をおさえつけて、すべりおちるのを防いだ。が、そのまま前方にかけぬけてしまったのは万事休す。わたしの身体はフワリと宙にうき、足はむなしく空をけた。

次の瞬間、わたしの頸は太いロープでぐつと強く絞められ、目の前にぱつと火花が散った。ひきづられて前方にうごいていた身体は反対にぐうんと後方へ引きもどされる。

あたりの様子が前に前に、そして後へ後へとうごいている。わたしの身体がプラン、プランと、ちょうど時計の振子のように動いているのだ。

わたしはもう呼吸ができない。十分か十五分ののちには確実に死なねばならぬ。それなのに何故だろう。すこしも苦しくないし、何の恐怖も感じない。それどころかウツトリとしたい程のいい気持なのだ。まるで恋人にでも抱かれたような……。

わたしの乳房がころがりだして、ブルブルとふるえているのがわかった。なにか大声で叫びたい気がする。勿論声はです口をパクパクさせただけだったが……。

わたしは両脚をバタバタとふた。まるでバレエでもおどりたい気持になったのだ。群衆はわたしをリンチにして、“苦しんでいるな、ざまあみろ”と思っているに違いない。わたしは舌をペロリとだしてやった。ちよつとはしたなと思ったが……。

ああ絞首刑が、こんなに楽しく、いい気持だとはすこしも知らなかった。何故もっと早く死刑にならなかつたのだろう。一回しかできぬのが残念だ。

わたしの興奮は絶頂に達した。目はせいっぱいにひらかれ、鼻孔はピクピクとふるえだし、舌はダラリと長くたれさがる。全身が弓のようにそりかえり、肉が裂け骨がミシミシ音をたて、そしてはげしくブルブルとふるえるのだ。これこそ死の痊れん、もっともつと長く続いてくれればよい。

群衆はわたしのことを“さっさと地獄に行ってしまう”とののしったが、この楽しさのうちに死ねば天国に行くことは、もう間違いない。

いや、ここが天国だ。

(おわり)

〔懸賞原稿応募作品〕

宵待草

幌 泉 里 子

1

ひろげた新聞の上に涙がポタポタとおちて
 しました。昼近い夏の太陽は、窓外のヒマ
 ワリを真上からカッと照しています。涙でう
 るんだ私の目に、そのヒマリの輪かくがぼつ
 と青空ににじんでうつりました。

私の涙を吸った新聞は、八月八日付のA新
 聞関西版でした。

「青年、救出直前に死ぬ

谷川岳逆づり20時間」

という大きな見出しで、六段抜きの記事に

一葉の写真と山の見取図がのっていたのを御
 記憶の方もあるかと思います。山村で近所づ
 きあいもありしないで暮っていた私は、A
 紙しか見ることができませんでした。もち
 ろん他紙も一せいにあつかった事件と思いま
 す。

関西の一山村とだけ申しておきましょう。

主人は二十日間ばかり大阪へ出張することに
 なり、一週間前の八月一日の夜汽車で、私と
 一しよに東京を立ちました。

「今年の東京は、おそらく砂漠みたいになる
 よ。そんなところで夏を送ることはない。君

は、僕の大阪の仕事がすむまで、僕の郷里で
 避暑をしてい給え。二十日過ぎに、仕事がす
 んだら呼びに行く。そして、一しよに四、五
 日過してから東京へ帰ろう。」

私の身体を飽くことのない情熱で責め続け
 ながらも、そのほかのことでは実にやさしい
 主人なのです。

しかし安息所だったはずのこの山村も、そ
 の特有の風物を責道具にかえて、私を責める
 のでした。その上、主人のいない留守の間に
 も、こういう新聞記事に接しようとは……。

昨年の秋、主人は私を連れて阿蘇五岳を見

渡す大観峯という展望台に登り、そこで私を二晩はりつけに致しました。はじめの夜は普通のはりつけでしたが、一日おいた翌々日の夜は恐ろしいさかさはりつけだったのです。

この普通のはりつけまでは、私も手記を書き記し『火の国』という題で、三十八年の十二月号にものせていただきました。普通のはりつけと鞭打ちがおわり、朝霧につつまれた阿蘇の草原に、動く気力も体力も尽きて、投げ出されたところで筆を置きました。私にはその後は書けなかったのです。

普通のはりつけまでは、まだ苦しいながらも、その激痛の中から快感を取り出すだけのゆとりがありました。そして日数が経過すると、その快感だけが妙に甘い香りを放ちながら私の心の中に醸酵し、手記をしるさうという気持をうながしたものと思われまゝ。

しかし、その翌々日の夜行なわれたさかさはりつけは、微塵も快感を取り出すことのできない、苦痛そのものだったのです。私はその夜、自分の生涯が終ることを覚悟で、主人に連れられて月夜の大観峯に登りました。私が落命したら主人はもちろん私の死体を誰れにもわからぬ様にして、自分も姿を消すか、私の後を追ってきたことでしょう。そうした

重苦しい行進の中にも、私を見つめる主人の目に深い好奇心、さかさにはりつけられた女の命が何時間もつかという、モルモットに対する好奇心が、宿っているのを感じるのです。愛する女体の限界を知らうという、のびきならないその好奇心に支えられて、私は処刑台に登ったのでした。

その苦しさ、私はその後どうしても描写する気になれなかったのです。東京へ帰る途中の列車の中で、主人と向かい合わせに坐り、主人の視線が、ちよつとこちらを向いただけで、男の子にいじめられた女の子のようにシクシクと泣いたものでした。それ程、打ちのめされていたのでした。

それが今日の新聞記事で、記憶を取り戻した記憶そう失症患者のように、あの大観峯の夜を思い出しました。その記憶は、まずシクシクと泣くということから、あの前後をたどりはじめました。この新聞記事の上に涙をそそいだ人間は、おそらくこの遭難した青年の家族の人びとを除けば、私だけだったかも知れません。

私は大観峯の夜を生き抜いて、人間の体力というものに驚きました。小説に描かれているものより強じんなものだと思つたわけ

です。しかし私がはりつけられた時間は約八時間でしたが、これが限界に近いものと想像致しました。ところが実際には、それよりもさらに二倍半も長いものは、今日の新聞を見るまで考えて見ませんでした。

この谷川岳で遭難したTさん(二三)という青年は20時間逆づりになったあげく、救出寸前、疲労がでて死んだと記事にあります。

もう少しくわしく読んで見ますと、谷川岳一ノ倉沢のツイタテ岩(高さ三百余メートル)に登ったTさんともう一人Oさん(二三)の二人が、六日の夕方四時半ごろ、まだ岩をおりきらないうちに夕立にあい、Tさんが第一オーバー・ハング(岩ひさし)を四十メートル、ザイルで降りたところ、ザイルがたりなくなつて同岩壁の基部から三十メートルの上で宙づりになり、Oさんはその上の岩場で動けなくなったとのこと。

三十七人の大がかりな救助隊が、七日の朝八時から活動をはじめたとありますから、それだけでもTさんは、夜の九時から朝の五時まではりつけられた私よりも、二倍もの長い時間、逆さづりのまま、救助隊を待っていたわけです。

救出用のザイルをTさんのからだにつける

ことに成功したが、Tさんは力つきて、お昼の十一時五十四分に死んだと、記事は報じています。

記事の横には大きな写真がのせられ、左足を空中でひざからガクンと折り、両手を真下にダラリとたれた青年の逆づりの姿が画面の右上にうつり、左下からは救助隊員が這い上がっている有様がうつっております。望遠レンズでとったものと思われませんが、Tさんの体と救助隊員との距離は、わずかに二メートルくらいのようです。撮影時刻は十時ごろとありますから、若しそのときTさんが救出されていたらとしても、谷川岳を下山する途中息を引取ったかどうかはわかりませんが、ともかくその写真にうつっているTさんは生きているTさんさんなのです。二メートルに迫ってから、Tさんの絶命までの二時間が無駄に流れたというのにもちよっと驚ろきます。

写真の横にはさらに大きな活字で

「もう一息のがんばりだったのに……」とあります。

新聞から目をはなした私の心の中で、大観峯と谷川岳が突如として八百五十キロの距離をこえて一つに溶け合わり、孤独感から救われたという感じ、私のモルモットとしての

解答の役目をTさんがかわってやってくれたという感謝の気持、そんなおかしな感情が一瞬頭の中をよぎった後で、私はとめどもないあこがれが胸の中から湧いてくるのを感じるのでした。あの阿蘇の一夜こそ、女として生き甲斐のあった夜、あの夜こそ女体の悲しみ、そして悲しみ故に訪れてくる無限の幸福感を、いつまでも心の中に埋蔵してくれた夜という認識が地上に溢れた泉の冷水のようにはっきりと形を取って湧き出てくるのでした。

そのとき若し主人が大阪でなくて、私の横に坐って新聞をのぞき込み

「もう一度さかきにはりつける」

と命じたならば、私は幼児のようによろこんで処刑台に歩んだことでしょう。

大観峯のあまりの極刑に、描写の筆が中絶したのでなく、より大きいことがらの描写の前の渋滞だったと知るのです。

私のあこがれは今や野に山に、とめどもなくひろがって行きます。この山村で暮らしはじめて六日間、私はいろいろの家畜、山の動物たちに接しました。そうして

「私ほどしいたげられ、苦しめられながら生きていく。おんな、はいないわ」

という痛ましいよろこびの「おんな」の三つの文字が「生きもの」の四字に訂正されたのを知ります。

その訂正は、自動車のひびき、スモッグに煙る夕陽から、野鳥の鳴きかわし、夕映えの森の上にわき上がる積乱雲への、生活環境の激変よりも、魂をゆり動かす根深い変化であつたに違いありません。

古人は前世の因果で「人間」に生まれるか「畜生」に生まれるかの差異が発生すると説きました。その古人が現代に生きていれば、現世の因果で、来世には「人間」に生まれるか「畜生」に生まれるか、あるいは「被虐用の妻」に生まれるかの、三段階の差別があらわれると説いたことでしょう。

しかし、その「畜生」たちの馳けめぐる空の色がどんなに青かろうと、放牧の野辺に食む青草の朝露がいかに甘かろうと、私は躊躇なく、来世も「畜生」のさらに下の段階の「被虐用の妻」に生まれることを撰びます。そして永遠の苦悶のつぼの中に、処刑者の夫の手によって灼熱の封印で閉じこめられることを望みます。

そのために現世で罪業を積むことが必要ならば、そしてそれが愛の神の定め給うた男女

の営みのおきてをふみにじることとで達成されるのであれば、私は処刑者、夫の協力で、いかなる「生きもの」よりも苦しみの多い生涯を送ることを、二重のよろこびをもって甘受致します。

阿蘇から帰って一年近く、二人で着々と準備を進めてきた総決算、それがこの山村の青深い風物の応援を得て、あの阿蘇のさかさはりつけを上まわるかも知れない極刑が行なわれる日が、あと十数日、主人が大阪の仕事を完了したときに迫っている——それに対する私の恐怖が大きければ大きい程、それに対して女としての生き甲斐を感じるのは、こうして野山にほとばしり出たあこがれの気持のなせるわざに違いありません。

その極刑の見とり図は、もうくわしく、主人から示されております。見とり図だけでなく女体をひき裂くその怪獣は、もう牙をちらつかせ、近づく足音をひびかせております。いや、夜毎に私の枕辺さえうかがっております。その怪獣に引き裂かれた後、私の描写の筆は、ふたたび一時中絶することを私は知っております。

極刑まで、あと十数日に追いつめられた女が、こうして五十枚にもおよぶ手記を書き記

すのは、さきに述べた地上に湧いた泉の水が窪地をみつけてたまって行くようなものという、自然法則もさることながら、筆が中絶しない今の中に、この怪獣の牙と足音について書いておきたいという衝動からとも、いえましよう。

そしてこの手記を、お読みになった方の九十パーセントが

「ふん、いくらいじめられても、所詮は空閑に耐えられない宵待草のたわごとさ」

とせせら笑われても、残りの十パーセントの方がたが、今私を追いつめている極刑が、「いじめる」などという生やさしいものでないことをくみ取って下さるならば、私も本望に思いながら、その極刑にかかります。

ただこの手記が活字になった場合、そのとき私はすでに処刑された後という、うらはらさを是正するために、活字になって十数日後にふたたび同じ刑にかかる義務が私にあるように思います。できれば十数人の読者の方をその処刑場面に御招待し、その極刑に並行して、自由に私を痛めつけさせてさし上げられたらと空想して見ました。もともとその極刑が私の耐久力をこえた恐ろしいものですからそれ以外に余分に痛みを加えられても、私に

とってはほとんどかわりはないように思います。ただ断末魔の無意識の中に反応する私の余分の呻吟の声や、からだのうねりが加害者の方に楽しみをお与えするだけと思われるのです。従って、ここまで実施するのに私の方は何のさしかえもないわけですが、社会が許しますまい。

私にできることは、八月二十日過ぎの極刑を、それがどんなに言語に絶するものであっても、活字になってから数えて十数日後に再現するように、主人に頼んで見ることを約束することだけなのです。主人はこの願いを必ずかなえてくれると信じます。

2

私たちは一日の夜汽車で東京を出て、二日の朝、当地に着きました。門前では白い大輪の百合が、香ぐわしい匂いを放っておりまして。耳の遠いばあやは働らき者で、広い邸宅に雑草一本生やさないことに情熱を感じているようでした。

二日は夕方までの半日を、私は汽車の疲れで、うつらうつらと、寝たり覚めたりしながら送りました。夕風が起居しているはなれの軒ばたの桐の葉をゆるがすころ、早めの夕食

をすませた後で夫が切り出しました。

「暗くなったら、お墓参りに行くから、お化粧をしておきなさい」

いぶかしい命令と思いましたが、私はその通りに致しました。ばあやは、お客をむかえて半日てんでこ舞いをして疲れたのか、もう寝静まっています。

お化粧をすませ、和服に着かえ、私たちは庭におり立ちました。くらやみの中でスイッチョが鳴いております。気流の関係か、山の星が山村にも珍らしい程、ギラギラと輝やいています。

そのとき、私の両手をとった夫の手から、両手首に手錠がガチャリとはめられました。ますますいぶかりながらも、被虐には馴れた私は、無言でそれに服従しました。でもはじめての山村でかけられる手錠は、私のからだの奥深くから、かすかな昂奮をよびおこすようでした。

夫に肩を支えられるようにしながら、私は懐中電灯に丸く照らされた石ころの多い坂道をたどって行きました。猛宗竹のしげみが風でざわざわと鳴っております。このあたり、家は一軒ありません。

夫はふと、こんな話をしてくれました。

「来年の夏は、君がいつも行きたいと言っていた北海道を案内して上げようね。今はもうニシンの群れも昔話しになったけれど、函館のあるあの大きな半島、渡島（おしま）半島というんだが、その西側の海岸に江差という港町がある。昔ニシンで栄えた町だ。この江差へニシンの群れがやってくると、武士も町人もない。坊さんまでが墨染めの衣の袖をまくり上げ、ニシンの群れをめがけていどみかかったものだ。それで「ニシンは松前の米や。釈迦も食（け）、地藏（じんぞ）も食（け）」といって仏飯のかわりにニシンをほとけに供えた傑僧がいたそうだよ」

おちついた語調の中に、私は今自分が歩んでいるのは、詣でるためでなく、夫のお墓参りの供えものにされるためだと漠然と感じました。胸に熱い血がたぎって息苦しくなりながら、夫の胸に顔を埋め、手錠のままでそのえりを握りしめて聞かないではいられませんでした。

「でも、あまり蚊がいないのね」

一番に心に浮かぶことでした。はげますように、私の肩を軽く叩いて、夫はうなずきました。

「海拔は四百メートルくらいあるんだ」

細いみぞを一つこえて石段にかかります。恐怖と、両手首の手錠のために、足もとがややもすればもつれます。夫は私をかかえるようにして

「しっかりするんだ」

と根気よく私の足並みをそろえて石段を登ってくれました。夜目にも黒く、大きな黒松の枝々が頭上をおおっています。

やっと石段を登りつめ、平坦な墓地につきました。懐中電灯のあかりの中に、何とおびただしい墓石の群れが浮び上ったことでしよう。夫の先祖たちです。

はじめてステージに上ったストリップ・ガールの心境、それがそのときの私の気持に近いと想像します。墓石に視線があることを、私はそのときまで知りませんでした。

並んだ墓石の大きさ、形は実に様々で不ぞろいなものでした。私は墓地の中央からやや奥に寄ったところにある。一きわ大きいものの前へ連れて行かれました。かなりの苔がむしたものでした。そこで手錠をはずされ

「さあ、脱ぐんだ」

ズシリとした夫の語調にけおされながら、私はいわれる通りに致しました。ふたたび両手首に手錠がはめられました。

「これは僕の曾祖父のお墓なのだ。僕の一家の中興の功績者なんだ。いいというまで土下座するんだ」

私は殿様のおかごを前にした百姓のように土下座をして、ひたいを地面にすりつけました。それを懐中電灯で照らしながら、夫の陰々とした声が冷く流れます。

「僕のお祖父さんの、そのまたお父さん。これが僕の女奴隷になった里子です。今晚一晩お供えしますから存分に御賞味下さい」

夜風に吹かれて潮騒のように騒ぐ松の梢の読経が、夫の声に和します。その合奏に私はうっとり聞き入りました。

二十分近い時間が流れました。私はやっと許されて手錠を外されました。夫のなすがままに、私はその墓石に上がりました。正方形の三段の石畳を重ね、さらにその上に大人の首くらいの高さの大きな石柱が立っています。私は一番上の段の小正方形の上に尻をのせ、二段目の中正方形の上に両ひざをつき、背中に石柱を背負った恰好で、夫のポケットから取り出された細引きで石柱に縛りつけられました。

「まあ、あなた、何てことをなさるの」結婚以来はじめて発する私の抗議の声をよ

そに、黙々と両足首を石柱の後ろで縛り、それをきつく連結し終った夫は、ふたたび私の前面にまわり、ウェストを石柱にひしひしと縛りつけながら、ゆっくりした調子で、こんなことを申しました。

「留守中に扇風機を買っておくように云っておいたが、ここでは不要なようだ。かわりにトランジスタ・テレビを注文しておいてくれ。Ｔ電機のがいいだろう」

驚天動地の行為とはうってかわって、食卓をはさんでいるような話題でした。

「……………」

私がうなずいたのは、夫が平凡な話題にさせることによって言外に

「先祖の墓に若い女縛りつけることを、ほとけの冒瀆などと考えるのは古い。女の裸身は花束や線香やまんじゅうのように、そなえ物の一種なのだ」

と語っていたからでした。縛り終って懐中電灯のあかりで私をつくづく眺めている夫の視線を感じながら、いつもならば

「乳房がつきくてウェストがくびれている女は実に縛り易い」

そんな熱っぽい話題に、やり切れなく思いながら身悶え致しました。それを見抜いた夫

の声が続きます。

「今夜は凌辱が目的だったから、責め道具はなんにも用意してこなかった。でもこうして痛ましい君の姿を見ると責めないではいられない。素手で好ければ責めてやろうか」

私はふたたびうなずきました。幼いころから恐怖のまどだった夜の墓地の、しかも墓石に縛りつけられて夜通し放置されるのだと思うと、恐怖どめの麻酔剤として、どうしても私にとって、ある昂奮が必要と感じられたからでした。

まず夫の両手が鉄の万力のように乳房をしめ上げます。

「アアッ、アアッ」

苦鳴の叫び声は、空しく松の梢の潮騒のひびきに溶けこみ、虚空に消えて行きます。そのまま絶息するかと思われるすさまじい乳房責めのさなかに、もうろうとした意識の底で私はふと後の石柱が生きもののように動いて私をはがし締めにするのを感じました。

乳房を思い切り責めた両手は、今度は一変して鉄の板となって私の両頬に交互にさく裂します。いつはてるともわからぬ往復ビンタです。先刻、結婚以来はじめて夫に抗議めいた声をあげたことに対する叱責の意味をこめ

てか、激烈をきわめ火の出るようなビンタです。顔をそらせて避けようとしても、後はゴツゴツした重い大きな石柱です。両頬を涙が伝います。

何時間にも感じられた長い折檻が終り、私はガクリと、首をたれて荒い呼吸を続けました。鼻血をふいてくれるのが、新しい真綿だと分かり、私は夫がはじめから折檻する計画だったことを知りました。一度帰りかけた夫が、私の方をふりかえり、墓地の出口とは違う方向のしげみの中へ、懐中電灯のあかりと共にわけ入り、しばらくガサガサと何か探していたようでしたが、私のところへ引き返してきたときには、何か丸いものを手に持っておりまして。

「何だろう？」

私はわけもわからず戦慄致しました。小さな栗のいがです。去年の秋におちたもので、かわき切って鋭い針をとがらせています。

「何に使うのかしら」

私の視線は、夫の手先の動きを凝視しました。そのいがは真綿でくるまれました。

「さあ、口を大きく開いて」

外科医のように冷い目に見すえられて、私はいわれた通りに口をあけました。

「ムムムム」

栗のいがが押し込まれたのでした。もう声をあげようとしても無駄でした。数十本、数百本の針が、舌、歯ぐき、上あごを刺し貫ぬきます。夫は私の脱ぎ捨てた衣類の中から帯を取り出して、その上から口をぎりぎり縛り上げました。恐ろしい猿ぐつわです。私は全身を縛りつけた細引きを、ひきちぎらんばかりにのたうちまわりましたが、何にもなりません。口の中の痛みを増すばかりです。

精神的にも肉体的にも、打ちのめされた私のようなじの上に夫の声が流れます。

「いい猿ぐつわがあったものだ。実は大阪から帰ったら木馬の極刑にかけ、足腰たたなくなつた君を、ここへ一日二晩、首だけ残して生き埋めにする積りだった。生き埋めだけではもの足りないところだったが丁度いい。その生き埋めの間中、おいしい猿ぐつわをくわえさせてやれるな。首から下はみんな土の中に埋められて、先祖の亡霊たちの愛撫を受けるがいい。口は絶対にきけないのだから撰択はすべて先祖たちに任せられるわけだ」

夫の極刑の見とり図の第二図がなされたのでした。私は縛られた帯の下で、できる限り口を大きく開いて、口中を刺す栗のいがの痛みを和らげようと、そのみに努力していました。

「ごらん、この大きな松の木を。僕の家は代々真言宗で土葬なんだよ。この松の木は肉食に馴れている。人喰いの松なんだ。首から下を生き埋めにされた君のからだに、松の根はおそらく数時間で蛇の頭のように喰い入って行くに違いない」

私はたまらなくなつて、ただじつと夫の顔をふりあおいだ両眼から限りなく涙をこぼすというだけの手段で、許しを乞いました。夫はくるりと後を向くと、スタスタと歩み去りました。石段を下りて行く足音が次第に遠くかすかになつて行きます。

暗黒と絶望の中に投げ出され、口中の痛みと必死に闘っている私を、縄目の上から静かに抱いてくれたのは、時という慈母でした。それは魔法のようなその触手で、まず私の口の中の痛みを、しびれるような快感と麻痺にかえてくれました。次に、時は私の目をくわやみに馴れさせてくれました。私を縛った墓石の前には、私の衣類がたたまれ、その上手錠、そして一番上には、先刻の栗のいがを

探すときに見つけたのでしよう、一輪の宵待草がおいてありました。私をあわれんで手向けたものならば、私のからだにさしてある筈です。その花は縛りつけられた女のからだと同じくお墓にそなえたものでした。次に、時は私にもの考える力を取り戻してくれました。私の顔のお化粧は、ピンタと涙と鼻血でもうメチャメチャにくずれているでしょう。お墓参りの前にお化粧を命じられたのは、顔を美しくするためではなく、こうしてグチャグチャにくずして、顔をみにくく汚すのが目的だったのです。

それにしても墓場であるという恐怖が頭をもたげないのが不思議でした。先刻の折檻のおかげでしょうか。たとい拷問という形であれ、夫の愛情が全身を貫いていることが、幼時からの墓地に対する恐怖心を消し去ってくれていたのです。私は恍惚として夜の時間と空間の抱擁に身を任せていました。

夫は真言宗は土葬であるといいました。恐らく私が縛られている墓石の下の中では、もう人骨だけが残っているか、それすらも溶け去っているかも知れません。しかし私は髪をふり乱した幽鬼のような御先祖が、後から私をガッチリと抱きしめているという空想に

夢中になりました。夫は東京で私を責めるとき、縛り上げておいて、よくビニールの精巧な蛇のオモチャを私のからだに縄目の間にさしこみました。はじめてのときは私は本物の蛇と間違えて危うく失神するところでした。味をしめた夫は、その、一匹二百何十円かの蛇を、上野の「不忍（しのばず）の池」の露天市で数匹ずつ買って参りました。緑の蛇や茶色の蛇が三十何匹に増え、私のからだに群がり、それがまた大きな姿見にうつされ、私は夢中になって逃げまわったものです。

今、空想の亡霊たちが、一つ一つの墓石の中から次々とやみの中に立ち上がり、私めがけて殺到してくる有様は、その空想の蛇たちの乱舞を連想させました。

夜が更けて、東の空にのぼったレモンのような月が、その私のからだを青く照らし出しました。万一近所の人が、この墓地にあらわれたら、どう思うでしょう。

墓地に葬られた歴代の女の中、一人重い罪を犯したものがいて、その罪が余りにも重くこうして今も夜な夜な罪をつぐなうために、地中から呼び出され、亡霊たちから拷問を受けるために、うつし身を与えられて苦しんでいると思うかも知れません。

もし少し新しい感覚の人だったら、歴代の女の中に、一人、被虐用の妻がいて、夫の死と同時に、生きながら墓地に埋められ、恐怖の棺の中で息を引取り、星霜の移る中に、この女はこの墓地にねむる先祖たち共有の被虐用の女として指名され、月のきれいな夜にはこうしてうつし身を与えられ、この墓地のまん中で仕置を受けることになっているのだと想像したかも知れません。

もう私自身、月明かりに照らし出された自分のからだだが、現世のものでないような気持になっているのでした。

夜風がおちて、蛙の合唱が夜の野山に充ちています。ここからずっと、しもの方にある池のあたりの一枚の田の中の一匹が

「ケロケロケロ」

と音頭をとります。するととなりの田の二匹が

「ケロロッ、ケロロッ」

とこたえます。それが口火となり、さらになりの田の数十匹が

「ガヤガヤガヤ」

と鳴きさわぎます。さらにとなりの数十匹が。さらにその上の田の蛙たちが……このように蛙の合唱はよく聞いていますと、一、二

枚の田が単位となり、一枚の田から次の田への移動はかなり速やかに行なわれます。こうして「声の集団」は次第に遠い田に波紋として移って行き、それは遠くに行くにつれ、蟬のような

「シャワ、シャワ、シャワ」

というひびきになり、峠をこえて山の向こうに消えて行きます。するとこの村全体の蛙が静まり返ります。又池の上の音頭とりのが「ケロケロケロッ」

とはじめます。蛙の合唱といのは、村中の蛙が無統制に鳴きさわぐものではないということを知りました。

その蛙の合唱も次第に静まって、あたりは太古のように静まり返り、夜が次第に明けて行きます。緑の洪水の中に薄い霧が流れています。私の乱れた髪の毛にも小さい水滴が幾滴か光っています。一番どりの声が遠くで聞こえます。

そのとき、朝の中に、もうろうと立つ人影が現われました。ハッと緊張します。夫です。手に鞭を持って立っています。一夜、そなえ物として先祖たちに捧げられた私を、ふたたび自分の奴隷としてとり返すための鞭に違いありません。私のところへ静かに歩み寄

って、口を縛った帯を解きます。栗のいがが口の中から取り出されます。くるんだ真綿が真赤に染まっています。私は口中にたまった唾を吐き出しました。赤い唾液でした。

夫の腕が上がりました。

「ヒューツ」

と風を切る鞭音がして、一撃目が腰にさく裂します……。

3

私があと十数日後に追いつめられている極刑の第二図は、このように木馬の極刑で足腰をたたなくしておいてから墓地の土中へ首だけ残して一日二晩生き埋めにする、そしてその口へは猿ぐつわとして栗のいがを噛ませることと示されました。

そして第一図にあたる木馬の極刑は、昨年の暮れから計画が進められていたのです。

十一月のおわりごろのある日、夫が切り出しました。

「女を責める醍醐味は何といっても木馬責めにあるんだ。音も立てず肌も傷つけず、東京ではもってこいのしろ物なんだ。それで独身時代に木馬を一台造っておこうと思ったんだが、それでは面白味がうすい。里子、これを

見てごらん」

夫がひろげた紙に、マジック・インキで書かれた設計図を見て私は息をのみました。急傾斜の屋根のような道具の図が、くわしい寸法と共に書いてあります。実際に木馬を造られた方ならば、その屋根の寸法を数字で説明しただけで、どんなに急傾斜なものかお分かりになっただけだと思います。二等辺三角形の底辺が三十二センチに対して、高さが三十八センチでした。馬の首から尻にいたる背中に相当する奥行きは四十センチです。

二等辺三角形がペシャンコにつぶれないように底辺に平行な鉄のかすがいが何本も打ちこまれてあります。板の厚さは指定によれば三センチ以上。汚れないように、全体にニスを塗る。以上が設計図の内容でした。

「この屋根型の道具を椅子にのせて、四すみをひもで固定すれば立派な木馬になる。それでこの道具を木工具店へ注文してくれ。これは命令だ」

私は目をつぶってもだえました。今までに自分の乗る木馬を店に注文した女なんているでしょうか？ 第二に木工具店で「責め道具に使うのですから、丈夫に造って下さい」

などといえるでしょうか？ その私の立場を見抜いて夫は楽しそうに笑いました。翌日からその設計図をふところに私の木工具店めぐりがはじまりました。私はよいことを思いつきました。

「坐わり机の横に外国の大百科辞典を並べたのです。それで三角の台を造って、その台と机の上に厚板を渡し、その上に人間より重い辞典を並べるのです。厚板の下には別な辞典を並べます。つまりこの三角の台と一枚の厚板で二段の本棚のようにするのです。必要な三角台の寸法はこの通りです。値段は少しぐらい高くなってもかまいません。家具ですから、外観を美しくするためにニスを塗って下さい」

これで木工具店に頼めるわけです。神田あたりの木工具店をしらみつぶしにまわりました。そして、その変った本箱の依頼に顔を赤らめながらボソボソと頼んで見ました。

「人手不足で、おまけに今は年末でたてこんでいますから」

いい合わせたように、拒絶のあいさつでした。それでも最後に行った店で、おじいさんが親切に聞きとけてくれました。私はホッとして帰宅しました。約束の十二月五日ごろに

行つて見ますと、若い男が出てきて、

「おやじがそんな約束をしましたか？ おやじは今温泉へ行つて当分帰つてきません」

との返答で、私は二重に打ちのめされて、

その店を出ました。トボトボと家へ帰りながら、西空の赤い夕陽の色が一しお目に泌みました。東京の夕焼けはこのごろなぜか、ひどく美しいよう気がします。私ははじめてその木馬が欲しいと感じたのでした。

それから新宿、池袋の木工具店を求めて私は歩きまわりました。池袋から護国寺の方角へ、電車の停留所の数にして、四つ五つばかり歩いたこともありましたが。そのとき、新築中の竹田木工具店というのを見つけて、若しやと胸をときめかしながら、中へはいって来意を告げました。親切そうな小父さんが

「ここから三百メートルばかり南へ行つてごらん下さい。タバコ屋の前の森山家具店という店があります。そこなら若しかしたら造つてくれるかも知れません」

というのへ、お礼のことばもそこそこに、

私は暮れかかる町を、一縷の望みを抱いて、森山家具店という店をさがしました。やっと見つけました。かなり大きな店で、タンスなどがズラリと並べてあります。又ことわられ

るかなと思ひながら、来意を告げました。おせじにも恰幅がいいとはいえない、髪のうちいい小がらな小父さんが、ていねいに私の説明を聞いてくれました。返事は

「十五日ごろ出来ると思います。このはがきにあて名を書いておいて下さい」

でした。私はすっかり嬉しくなり、

「小父さんは和歌山のなまりですね。私も三年ばかり和歌山に住んでいましたわ」

と愛想をふりまいて帰途につきました。

はがきは十六日にやって来ました。

「御注文の品ができています。千二百円持参の上、御足労下さい」。

短かい文面でしたが、私の胸の動悸は早鐘のようにうちました。とうとう手にはいったのだ。すぐタクシーで森山家具店に乗りつけますと、小父さんは、その木馬をていねいに紙でつつんで、手に下げられるようにしてくれました。私が千円札を二枚握らせようとしても、頑として八百円のお釣りを返し、こう保証しました。

「丈夫に造つてありますから、二十貫や三十貫のものを乗せても大丈夫ですよ」

私は森山家具店を表通りから、二、三枚カメラにおさめて帰宅致しました。家について

紙をひらいて出して見ますと、見事なできばえです。夫が不在なので、私はそれを椅子にのせ、そっと乗って見ました。

「痛いッ」

私は思わず顔をしかめました。この調子で夫から数時間の乗馬を強制されたらどうなるか、そんな不安がたちまち頭をもたげましたが、夫がどういう風に私を責めるかということ、夫に命じられた品物を首尾よく手に入れたということとを、私は分けて考えていました。私はやはり、親切な小父さんのおかげで、新しいオモチャを手に入れた子供のようにはしゃいだ気持ちに圧倒されていました。

私は机の引き出しから大学ノートを取り出して、パラパラとめくって見ました。この一月間、木馬を求めて歩きまわりながら、私は木馬に関する文献を、図書館で筆写したり、雑誌から切り抜いてスクラップして、心の用意としていたのです。週刊G誌の十一月二十一日号から、村上元三氏の「天の火柱」という、九州のクリスチャンの受難の時代もののはじまりましたが、その第一回にこんな一節がありました。

「木馬責めも、これまでのとは違って、背中が三角に尖った木馬の背に、裸に剥いだ罪人

を俯伏せに縛りつけ、手足に重しをつけてぶらさげる、という方法で、これは、ことに女には激しい苦痛を与える」

この一節を切り抜いたとき、私は戦慄致しました。クリスチャン弾圧の代官と、夫と、どちらが残酷かというよりも、どちらが女体に対して執拗な愛情を持っているかといった方が正確でしょう。その疑問の答えとして、どうも私には夫の方が執拗な気がしたからでした。

「クリスチャンの女よりも、むごい目にあわされるかも知れない」

その恐れも

「夫になら殺されてもかまわないわ。それに私が造った木馬だし、痛み止めの麻酔剤として夫の抱擁がありキスがある」

と考える消すことができました。木馬で苦しんでいる私の姿態を、夫は抱擁し接吻しないではいられないだろうと気がついたわけです。私は、目の前の木馬の背に、そっと唇をあてました。そして、そっと撫でてみました。

「お前は、私を何の苦痛もなく、足腰立たなくさせてしまうのかしら。いやいや、どうも甘すぎるようだ。やはりお前は、今までのど

んな責め道具よりも私を苦しめ、私に涙を流させるような気がする」

木馬責めの本当の特徴は、責め手が全然手を下さないで、女を木馬に責めさせる、従って女が苦しんでいる間中、夫はそのからだを抱いてやることさえできる点で、この点、責めながら接吻したり愛撫できる海老責めに似ているかも知れませんが、海老責めはその姿勢からいって抱擁は不可能です。あるいは吊り責めが、吊る高さを工夫すれば、同じ特徴をそなえるかも知れませんが、脱臼を好まない私たちは吊り責め（後ろ手だけで吊る、本ものの江戸時代式のものという意味です）は避ける方針をとっていました。

こうしたわけで、責められながら、接吻され抱擁されるという経験は、この木馬ができてはじめて経験するといっているでしょう。あるいは責めの間中、瀕死の妻を介抱するというようなムードさえ漂うかも知れません。夫が「女を責める醍醐味」といった意味も、のみ込めるような気がしてくるのです。

先刻ちよっと試乗しただけで感じた痛さを思い出し、私は自分の考えが甘すぎるということに自覚しながらも、この発見に恍惚としひたすら夫の帰宅が待たれてなりませんし

た。

正直に書かなければ、この手記を私自身嫌悪するに到るでしょう。私は木馬責めを恐怖し、その恐怖ゆえに、逆にこのような楽天的な空想を思い描いて、黒雲を払いのけようとしたのです。恐怖ゆえに夫の帰りが待たれたと正直に書くべきだと思います。

夫は六時過ぎに帰宅致しました。机の上の木馬に目をやって

「よくやった」

一こといって私をガッシリと抱きしめました。この一カ月、木馬を求めて神田、新宿、池袋を、そして図書館、雑誌の並んだ書店の店頭を、枯葉を踏み、赤い落日を見送りながらさまよった私の、女の喜怒哀楽を、口に出さないで両手で受けとめてくれたのです。

「もう今晚乗りたいだろうね」

と、私の目を凝視しての質問に、私はうなずきました。

夕食後、高手小手に縛られて、私は一時間だけ、腹中の食物のこなれを待ちました。一枚の紙片れが示されました。それに書き記された内容は五カ条からなっていました。

1 プレイ

2 微刑

3 普通刑

4 重刑

5 極刑

木馬は鞍がわりに、二重に折った毛布をのせ、着衣のまま乗馬する……これが1のプレイに書き加えられた説明書きでした。説明が聞かされました。

「1が一番軽い段階だ。2345と次第に刑を重くして、5の極刑に到って君は長崎のクリスチャンの女と同じ、あるいはそれ以上の刑にかかるのだ。苦しんでいる間中、僕が君を抱いたりキスしたりすると思ったらあてはずれだよ」

私はホッと溜息をつきました。夫はつけ加えます。

「クリスチャンの女以上の刑だから、5の極刑はのべつかけるわけではない。それに東京には手ごろな重しがあるがってもない。だから5はよくよくの場合だと思ひ給え。でも必らずかける。数日間文字通り足腰たたなくなるよ」

先刻試乗したときの経験から、そのことが大げさでないことがわかります。私は黙ってうなずきました。カメラを取り出した夫はそれにフィルムをつめています。感度の高い

スリーSです。私に木馬を探させながら、夫も準備を進めていたのです。

私は高手小手のまま、木馬に乗せられました。1のプレイの段階です。法事で一時間もなれない正座をしたときに感じる程度の痛みが、いきなり伝わってきます。私は息を小さくし、からだを少しでも動かさないようにして、それに耐えました。

「先ず縛りつける姿勢の研究だ。その間はプレイの段階にする」

私のウェストに男ものの黒皮のバンドがきつくしめつけられました。そのバンドは夫のために買って来たものですが、ちょうどいいくらいの長さに切断して使える仕かけになっていたのをよいことに、少し短く切り過ぎて夫には使えなくなったものでしたが、私のウェストにはピタリです。次に古い犬の首輪を取り出され、首にはめられました。そしてそのバンドと首輪の各々の前後に、すなわち四カ所に四本の細引きの先端が結びつけられ、それぞれの他端は、三角台のかすがいの鉄棒にしっかりと結びつけられました。これで、木馬の背に沿って前後に逃れることは全く不可能となりました。

次に夫は一本の太い棒を取り出しました。

木馬をのせた椅子には当然四本の足があり、それらの足を横に渡るバーがあります。このとまり木に私は両足先をかけて、自分の体重を浮かすことができます。これらのバーと椅子の後の二本の足がそれぞれ（直角に）交わる二点で、夫はその太い棒をしっかりと椅子にゆわいつけて、その棒を固定しました。そしてその棒の両端に結びつけられた二本の細引きがのびて来て、私の両足を左右に開きました。覚悟はしていたものの、実に巧妙に、自由が次々に奪われて行きます。最後に取り出された細引きの一端が、首輪を前からとらえました。他端はかもいにのびて私の首を吊り気味に致しました。これで椅子の背に、私の背中をもたせかけて、苦痛を軽減することも不可能になりました。苦痛は次第に増してきます。私は目をつぶりました。

ふと夫の手を横腹に感じて目をあけて見ますと、腰のあたりの縄目の間に乗馬用の鞭が一本ななめにさされてありました。

「折角の乗馬だから、乗馬用具の一つくらいは持たせて上げる」

冷やかな声がつづきます。

「これで姿勢の研究は終りだ。ではこれから2の微刑をとびこえて3の普通刑にきりかえ

るけど、ここは山の中の一軒家じゃないよ」
口に大量のポロ切れがおし込まれます。ふんとすえたような臭いがします。私は悶えましたが、念入りに固定されたからだはもう、前後左右、上下いずれの方向へも逃れることはできません。口がギリギリと縛られた後でいよいよ鞍のかわりの毛布が抜かれました。ポロ切れにおし殺されていなければ、絶叫になっていたでしょう。私の鈍いうめき声が部屋中にひろがるのが、かすかにわかりました……。

4

あと十数日に迫った極刑を待ちながら、私は朝夕この美しい山村を散歩して暮すこともあります。そして池の畔りで摘んだ二、三輪の宵待草の花をいつも枕辺に生けて眺めています。あの墓地で墓石にそなえられた宵待草を、私にも手向けて欲しかったという気持ちがいいつも宵待草ばかりを手折らせるのでしよう。

あの木馬ができ上がった晩、私は約二時間普通刑にかけられました。それは定められた五段階の三番目にあたるものでした。その後、私は二番目の重刑まで、たびたびかけら

れました。重刑はしかし、普通刑にくらべてただ心理的な凌辱が加わっただけで、痛さそのものは普通刑と大差のないものでした。

ただ重刑のとき、乗馬用具として腰にさして貰っていた鞭を、よく抜き取られて、それで逆にしたたか打たれたときは、猿ぐつわの下でポロポロと涙を流しました。

又、重刑で苦しんでいる私のあごに右手をかけて顔をぐいと持ち上げた夫が冷ややかに「君はやがて赤ん坊を産む。しかしその赤ん坊に僕の血が流れている以上、赤ん坊は君よりはずっと身分が高いわけだ。君はその子に対しては単に動物性蛋白質の供給源にしか過ぎないのだ。だから乳をのませるときは、いつもこの姿勢でのませるのだ。赤ん坊は僕が抱いていてやる」

と宣告されたときの、たまらない気持ちを思い出します。

そうした涙も気持ちも、それにくらべればもはや甘い思い出にしかならないような、極刑が、やがて私を長崎のクリスチャンの女以下につきおとす宵を、私は戦慄の風にそよぎながら、毎夜電灯のあかりの下で、苦しみの花を咲かせて夫の帰りを待っているのです。

もちろん、必要最少限の身のまわり品と共

に、木馬はこちらへ持って帰っております。帰った日、うつらうつらの状態が過ぎて、墓地へ連れて行かれる前に、夫は厚い土壁の土蔵の中へ私を連れてはいりました。まだ夕方の紅い陽ざしが横さまにとびらを照らしておりました。

たちまち、二個の鉄の重しが見つかりました。代々地主だったので、米俵などの重量をはかる重しで、一つ二貫目あるのだそうです。かなりさびていて、表面はザラザラとしています。

「まだ三つや四つはある筈だ。両足に二つずつつけるんだから、もう二つ要る。僕が大阪へ行っている間に、もう二個探しておいてくれ」

私はふらふらと土蔵の壁の内側へたおれかかり、その土肌を爪でかきむしりました。二貫目のものを四個、実に八貫目の重しをつけられるのです。

土蔵から出て、はなれへ帰り、八貫目をキロに直して見ました。三十キロです。体重五十キロの私は重刑のあと、たびたび足腰がたたなくなっていたといっている状態になりました。それに三十キロが加わるのです。それが極刑だったのです。私は文字通り、今度こそ

足腰たたなくなるでしょう。

そのからだを夫は運搬して行って、墓地に生き埋めにするというのです。恐怖に気が狂いそうになることもあります。

三個目の重しは、夫が大阪へ行った直後、簡単に見つかりました。ばあやがつけものの重しにしていたのでした。

「主人が家の古いしきたりのことをしらべているから、あたしたちがいる間、つけものの重しは石でがまんしてね」

私はそういって、その重しをばあやから受け取りました。もう一個が見つかるのも近日中でしよう。私は今、見つかった三個の重しを、池の畔りで摘んできた宵待草の花と並べて、枕辺に置いて起居しています。その古びた非情の重したちと、せめても仲よしになっておきたいと思うからです。

私は今朝の新聞をお昼前に読み、昼食をすませて直ちにこの手記を書くのにとりかかりました。もう夜半近い時刻ですから、半日かけたわけです。外は月のない闇夜です。

一度ばあやが夕食を運んできて、一心に書きふけている私を見て、黙ってそれを置いて行きました。

「立派な嫁御様だ」

と近所の人に向かってふいちゃうしていることが、おりおり人の口からはいつてきますが、そのばあやが、私は夫にとり、嫁御様とは名ばかりの、被虐用の、奴隷以下の生きものとなったら、どんなに腰を抜かし、軽蔑することでしょうか。

私は今この手記を書き上げて、これから一人でもう一度、あの墓地へ行って見る積りでしたが、恐くて一人では行けそうもありません。それで自分で両手首に手錠をはめて、夜道を墓地の途中まで行って見る積りです。もう道は覚えましたが、星明かりで何とか行けると思っています。あるいは見えない手に招かれて、そこから更に墓地まで、そしてあの中央よりも少し奥寄りの大きな墓石のところまで引きずりこまれてしまうかも知れません。蛙の合唱が、あの夜と同じ調べで聞えて参ります。

(おわり)

●お断り○本誌の寄稿家、執筆者、投稿者、モデルなどの住所氏名は一切お知らせいたしかねます故、御照会下さらないようお願い致します。○手紙の転送や文通の斡旋なども本誌では、取扱っておりません。すべて「読者通信」を御利用下さい。

祈りの呻き

《トルコ嬢ミカに捧ぐ》

沢井和雄



客を入れて蓋をしてうと一寸間があく。

いつもの様にミカはマッサージ台の上に乘って足を組みながら煙草に火をつけた。吸いながら細い眼をしてみせると、男の視線は必ずと云っていいほど自分の股間に灼きついてくるのを感じる。そうやって男の反応を見るのだ、それがトルコ嬢の職業感なのである。

「きれいな足だねえ。」

中年の男はため息まじりに云った。ほら来た。こいつはどうせスベ迄いくに決ってる。何枚位寄越すかな、とミカは頭の隅で計算しながら

「そうかしら、あんたお上手ね。」

と流行歌の節廻しを一寸のせて、からかう様な目つきをした。男はいやに深刻ぶった口調で云う。

「こうやって、君みたいにきれいな人にサービスしてもらえるなんて有難いねえ。何だか悪いみたいだ」

「あらサービスなんかしないのよ。ここは。」

「いや失礼。そう云う意味じゃないんだよ。」

ただ僕はひとり勝手に想わせて置いて呉れば、それでいいんだよ。」

ミカはつと立って蒸気の栓の傍へ行った。

「熱くない。」

「うん、ちょっと。」

コックを緩めに傍に寄ったミカの耳許に、男は甘えた様な声で

「いろんなお客さんが来るだろう。偶には変わった人も。」

「そりやあ、あるわね。」

何気なく応待しながら、ミカは、ははあ、例のあれかと男の癖がわかる様な気がした。そしてびしっと男の顔をまともに睨んで

「あんた変態なの」といきなり訊いた。

「そう、そうなんだ。だけど一寸だけど。」

男は救われた様な顔をした。

「そう。それなら話は早いわ。でどうなの」

とミカが畳みかけると

「それより君の話を聞きたいね。どんな男に会った事があるか。」

「あら、そりやいろいろよ。縛らせて呉れなんて云うのも随分居たわ。」

「その反対は」

「ええ、大阪の人だったけど、あたい達の仲間四人を皆、熱海へ連れてってくれたりしてサ。随分騒いじやった。馬にして皆で乗ったり、洗面器に入れて吞ませたりして、そのくせ帰りには皆にお小づかいくれるのよ。」

「何を吞ますの」

「ビールよ。手や足を縛っちやうもんだからバタバタして面白いの。でも、あんな事もこっちが多勢だから出来るのね、ひとりだったら、一寸恐くて出来やしない。」

「僕も、そんなにしてもらいたいな。」

男はやっと本音を吐いた。何だ手数の掛る奴だこと、ミカはそう思いながら云った。

「でも、あたし何だって知ってるわよ、奇譚クラブだって持ってるし。」

男は一瞬はっとした顔になった。そしてすぐにワクワクした調子で

「ねえ。おねがい。僕はマゾなんだよ。女の人に苛められたいんだ。スぺのお金あげるし

もっとチップをはずむから、ねえ。」

と一気に云う。すぐにこれだ、男なんて犬みたいなもんだな。とミカは冷笑を浮べた。

「あらマゾなの。ちょっとグロね、あたしはあんまりマゾは好きじゃないのよ。」

「ねえ、お金嫌い。」

「嫌いな訳はないけど、いいわ。今日は相手になったげる。ちょっと要るのよ。」

「僕が君にしてあげられるのは、お金しかないんだもの、若さもないし魅力も勿論ないんだから。」

と男は調子のいい事を云う。ミカはふと思いで出して

「あんた、一寸待っててね、すぐに来るから。」

とくるりと後を向くと、男は口ごもりながら尋ねた。

「ねえ、何処へ行くの。」

「トイレよ。」

「ねえ、おねがいだ、僕の口を使ってよ。」
ミカはさすがに呆れた。まじまじと男の顔を見つめて

「なーに、それ。まさか、あんた……………」

と云うと男は無言でうなづいた。
いいや今日はこの男から絞って置くか、ミ

カは腹を極める事にした。

「さあ、出なさい。」男はぴたりと額をタイルにすりつけながら

「ミカ様、もう客と思わないで下さい。あなた様の哀れな奴隷です。おみ足をほぐしたり、舐めさせて頂いたり、トイレ代りにもなる奴隷です、どうか苛めて下さいませ。」

こう云う時は、男の調子に合わせて行くのが、自分の商売に対する心得だ。ミカは慣れた様に、

「そうかい。それじゃ、ここに来て足をお舐め。」

マッサージ台に坐って、すっとまっ白な足を男に預けた。

男はむさぼる様に足に吸いついている。金になるとは云え変な気持である。丁度虫が下から上へ這い上ってくる様な感じだ。男の舌は、足のうらをまさぐっている。

「ミカ様、踵のお手入れは男にさせると、一層美しくなりますよ。固い所を齒で削らせるのです。」

「やってごらん。」

目をつぶったままミカは答えた。男に金で身を任せた時に、好きだった人の面影が浮ぶのはもうずっと以前の事で、今は、何も目の

前に現れては来ない。淡々とした気持で男の舌を感じるほどプロになっていた。勿論興奮することなど考えも及ばない。

男の舌が腭を通して盗む様に内ももに迄這い上って来た。そしてその刺戟が、再びミカに思い出させた。

「さあ。」

と云うと、男はそれだけで察した様に、いそいそと、タイルの上に仰向きになった。

ミカはさすがに灯りを暗いアンバーに切り変えたが、何のためらいもなしにすっと下着を脱いだ。ずかずかとタイルの男を跨ごうとする。

「待って。」

と男はミカを押しとどめた。

男は洗い桶を手早く自分の頭の下に引きづり寄せてから

「胸の上に乗っかって下さい。」

と頼んだ。

清々しい生理的な気分の他に、確かに優越感が沸々と湧いてくる感じがした。そして次の瞬間には、あまりにも惨めな位置で自分に接しているこの男が、無性に汚ならしく思われて、ミカは急に腹立たしくなってきた。

男の体を跨いで、ミカはそそくさと下着を

当て灯りをつけた。

男はももぞと呻くように未練めいた文句を繰り返しながら、それでも腕をゆすらせて何かしていた。もう見る気にもならず、ミカはペタンとマッサージ台に腰を下して待っていた。

「何よ。たった七枚。こんなじや、もうダメよ。こんな事って、ずい分かかって言ったじゃない。何さ。変な奴。」

毒づいて男を部屋の外に放り出すと、ミカはまるで自分が汚いことをさせられた様な気になってガードと無遠慮な音を立てながら、うがいを続け、咽喉の奥から絞り出す様に、はげしく唾を白い陶器に叩きつけていた。

x x x

二三日後に、男は又やって来た。指名である。カウンターの前では愛想よく迎えたが、個室に入ると、とたんにミカはぞんざいな口調で、

「何だ。あんたなの。」

と云った。

男は背広をきちんと着こなしていたが、そのまま床にひれ伏す様にして云った。

「ミカ様、この前は有難うございました。又

おねがいします。」

真剣な顔つきだったが、ミカは今日は何だか気がすまなかった。

「止して頂戴。そんな恰好。今日はちゃんとするのよ。」

男はがっくりと立ち上って、詰らなそうに上着を脱ぎ始めて

「この前の足りない分も持って来たし、あなたの欲しいだけ、あげるんだけどなあ。」

と愚痴めいて云ったが、ミカは不愛想に答えた。

「今日はお金欲しくないの。」

裸になってから男は、もう一度ひざまづいてミカを拜む様な恰好で、

「おねがい、せめてもう一回吞ませて。」

と縋りつく様な眼で云った。ミカはこの前の事を思い出した。男を送り出した後の、嘔吐するような気持がぐっとこみ上げて来た。

「あんなの厭だよ。あんたの事考えただけでむかむかしちゃう。この前なんか全然食欲がなくなっちゃった。そんな話ゲーだよ。」

と本当に吐きそうな顔をした。

「せめてお唾でも、お吐きかけになって下さい。」

男は目をつぶったまま口を開けた。実際口

中に生つばが溜つて了つたので、ミカは勢よく男の口の中にした。

「さ。これだけだから、後は普通にお入んなさい。あんたトルコに来て、そんな事を云うと嫌われるわよ。」

とミカは促した。

男はざぶざぶと軽く浸つて、すぐに出て体を拭いながら、何やら芝居じみた云い廻しで云った。

「僕の様なもの相手は誰もしてくれないんだなあ。僕は孤独だ。」

「あんた、奥さんや子供さんは。」

「そりあやるさ、この年だもの」

「孤独なんてのはね、奥さんの居ない人が云うものよ。」

とミカは云い返ししながら、この奇妙な男の家族をちらと思ひ浮べた。何故か、その家族たちが可哀想に思えて来た。こんな妙な男の生活にぶら下つて生きている何人かが、実際に居るのだと思うと、この目の前のだらしない男を、どんなにか心細く思っているだろうか。それに比べてこの男は勝手な事を云っている。この男は安サラーマンか何かで、無理な金をつぎ込んで来たのだろうか。ミカはふっとそんな気がした。さりとて男に職業を

訊いてみる気にもなれなかった。

「女房と云つたって、あんたみたいに若くも美しくもありやしない。老いさらばえてガサガサさ。」

どうもこの男の云い方は氣取つた感じだ。

「奥さんにも、そんな事するの。あんた。」

とミカは一寸訊いてみた。

「そりや、まあね。」

と男はちよつと照れ臭そうに云った。

「あんた大体口が臭いよ。氣をつけなさい。」

づけづけとミカは云つてやった。こんな奴と一緒に部屋に居ると云う事が、苛立たしいほどうんざりした氣持になつて行くのだ。

体が乾いた所で男は又繰り返した。

「ほんのちよつとだけ、ちよつとでいいから苛めて下さい。ね、おねがい。」

男の顔はマッサージ台に坐っているミカの両足にすぐ近かった。そのくせ男はむしゃぶりついてくるような事はしない。ただ哀れっぽくお許しを待つ態度である。

「ミカ様、どうかお情けを。」

「ふざけるんじゃないよ。贅沢ばかり云つて——。」

と怒鳴る勢で、ミカは急に男が憎くなつて来た。大金を使つてあんなものを吞ませてく

れと願う男の生活は、どうだろうか。まるで現実の苦勞など知らない者の様な云い方ではないか。この男の妻だつて女だし、一通りの苦勞をして家庭を支えているだろうに。そんな風に男の背景が、一瞬のうちにミカの脳裏をよぎつて行くと、このどうしようもない男には、贅沢野郎！と怒鳴りつけたくなつて来るのだ。

最初は金だけ巻き上げてやればよいと割りきれた積りだったが、執拗な男の口説きが重ねられてゆくうちに、ミカは自分自身の生きる苦勞が、こんな連中の為になせられている様な氣がして、ミカの心はやり場のない忌まじさで覆われて了つた。

「ど突いてやろうか。」

とミカは、自分でも呆れる程下卑た口調で云つた。男は嬉々として顔を上げた。

「おねがいます。」

床にきちんと足を揃えて坐ると、男は目をつぶつた。

やすらかな顔つきだ。まあ何て男だろう。

ミカは本当に腹が立つて来た。ガツガツと金をひっ掴んで若いうちに、どうにかひとり立ち出来る様にと、毎日をあくせく暮している自分が、かえつて哀れに思われて来るのだ、

それに比べてこの男は、女に打たれ、女に唾を吐きかけられる事に大金を使う気になれるのだ。まるで金が悠々と集って来る様な顔つきをしやがって、どうせ家では乾枯びた女房の尻に敷かれてるだろうに、そんな気持ちをのせてミカは拳固ではしはしと男の頬を打った。男はマツサージ台にす早く横になりながら耐えかねたような声で云った。

「ミカ様、顔の上を。」

こんどは何の抵抗もない気持ちで、ミカは男の顔の上に乗れた。そして又、右左と力を入

れて男の顔を踏みしめた。唇の傍に足を寄せると男の舌が汚らしく追って来る。ミカは邪慳にそれをかわしながら踏み続けた。

「ミカ様——ミカ様。」

まるで怪しげな宗教の儀式でもあるかの様に、男は祈りながら呻いた。

ミカは自分の股の間から、男の胸をのぞいた。そして更にミカは単に興味だけで、自分の股越しに眺めながら、男の顔を踏み続けた。

今度は黙って男を送り出した。もうきつと来ないだろう。ミカはそんな気がした。しかしひとりになって、鏡に顔をうつして見た時、ミカは寒々とした想いがこみ上げて来た。男の祈りの呻きに包まれながら、危く自分まで怪しい世界に引きずり込まれてしまった様な気がして来たからだだった。

ミカは慌てたような手つきで財布の中の札を数え始めた。

—完—

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を、定価五〇〇円(十共) 略号「文献」

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れまですと補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折返し急送いたします。

〔第一グラビヤ〕

(十六頁)

自己愛の女神を写す……

塚本鉄三、構成

「私の乳房を見て」……

長野 良子

露出癖の充足……

長野 良子

後手縛りのワンカット……

大塚 啓子

転ったエビ縛りの女体……

大塚 啓子

新井マリさんと共に……

由岐敏夫・構成

〔巻頭口絵〕

(オフセット八頁)

△絵物語△白ターパンの女…… 四馬孝・画

第一図章△捕獲△ 第五図章△美容△

第二図章△飼育命令△ 第六図章△洗腸△

第三図章△調教△ 第七図章△矯正△

第四図章△訓練△ 第八図章△仕上げ△

棒責め愉悅…… 新井マリ子

ムチ打たれる肌…… 新井マリ子

サテンの責衣緊縛…… 東浦ひかる

顔なぶり、踏みつけ…… 大塚 啓子

押しつぶし、足逆取り…… 大塚 啓子

餅肌はくびれて…… 東浦ひかる

柱縛り首縄…… 梨花悠紀子

海老責二態…… 梨花悠紀子

黒いアンネパンティ…… 遠藤百合子

【第二オフセット】

(八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……………四馬孝・画
女相撲、御前相撲……………雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……………
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマラーの対戦……………雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……………四馬孝・画

【第二グラビヤ】

(十六頁)

五月亜紀子さんの場合……………由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞い……………五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……………五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……………五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……………大塚 啓子
緊縛俯瞰姿態……………大塚 啓子
億れの優美ポーズ……………長野 良子
両手吊りの構成……………新井マリ子
ズベ公天使(トカゲグループ)……………由岐 敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……………絹川 文代
悶悦ポーズ二題……………絹川 文代
嚴重な本縄掛け……………梨花悠紀子

【写真版アルバム】

(十六頁)

裸女斗争場面……………絹川・大塚
浣腸器を握って……………大塚 啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……………大塚 啓子
女やくざ一本刀姿……………大塚 啓子
女ネズミ小僧次郎吉……………大塚 啓子

高手小手二ツ折り……………松本アサ子
エビ縛り二種類……………松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……………大塚 啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……………宮井美佐子
縛り過程の構成……………大塚 啓子
鼻責めシーンの点綴……………絹川 文代

【本文・解説】

(三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……………由岐
絵物語「白ターバン」の女……………辻村 隆
新しいモデルを写す……………由岐 敏夫
(告白) 宮井美佐子の略歴……………宮井美佐子
(告白) モデルとしての私……………大塚 啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……………塚本 鉄三

【第三グラビヤ】

(十六頁)

台所のめしうど……………新井マリ子
飼育のヴァリエーション……………新井マリ子
椅子に呻めく……………新井マリ子
長襦袢と腰巻……………遠藤百合子
豊満への擦過……………遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……………長野 良子
ポリウム自慢絵模様……………長野 良子
床柱縛りに耐える表情……………大塚 啓子
煙草一服の鑑賞……………大塚 啓子
組上の鯉と料理の仕方……………五月亜紀子
二ツ折り縛り……………大塚 啓子
鼻料理と鼻掃除……………大塚 啓子
上からと横からと……………梨花悠紀子

【第一オフセット写真】

(十六頁)

神さまへの人身御供……………絹川 文代
腕と脚の双曲線……………梨花悠紀子
足首の縄を解く……………大塚 啓子
緊縛女体モザイク模様……………愛川 悦子

光と影の表と裏……………梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……………梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……………A氏提供
女相撲「吊り合い」……………A氏提供
爪切りと白足袋……………浜 千代子
高手小手腰縄……………梨花悠紀子
底園の塑像……………絹川 文代

【第四グラビヤ】

(十六頁)

女奴隷の飼育効果……………新井マリ子
ゴム衣着用中……………梨花悠紀子
バンド着用後後手縛り……………東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……………梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……………新井マリ子
用意周到なる馴致……………新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……………大塚 啓子
浣腸器の恐怖と幻想……………梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……………長野 良子
団子鼻をいためる……………長野 良子

【第二オフセット写真】

(十六頁)

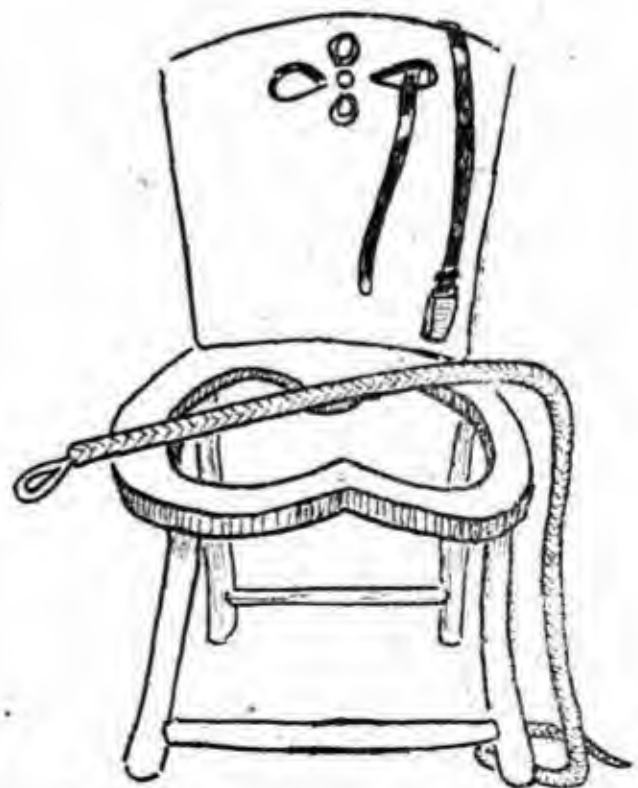
美しき乳房……………長野 良子
愛らしき羞らい……………長野 良子
仰角のいたずら……………長野 良子
顛倒した瞬間の表情……………大塚 啓子
森の中のニンフ……………絹川 文代
緊迫の演技(斬られる女)……………愛川 田中
ヘッドロックと首絞め……………春日・愛川
SMの魅力プレイ……………三木・浜本
前手縛りと後手縛り……………梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……………大塚 啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——……………絹川 文代
愉悦ポーズ二景……………絹川 文代

心傷たむ遍歴 八第九章そのかみのこと（九）

未決女囚ミシュリーヌ

西 条

操



第二回目の予審への出廷。監視窓がガタリと開いて二つの眼が覗き込み、金属音が重々しく響いて鉄扉が開けられた。

「七十八号。出廷よ。」

「はい」

点呼の時に言い渡されて心待ちして居たミシュリーヌは、髪を撫でつけ顔をこすり、両腕を背に回わして立ち上った。

（あら、エメリーヌさんね。よかった）

革ロープのついた手錠を持って鉄扉の外に立つ婦人看守を見て、ミシュリーヌはホッと

した。同じ年位のエメリーヌは、ほっそりした清潔な感じのブルネットの女性、勤務中は口紅さえつけない心使いを示す少数の婦人看守の一人だ。これ見よがしに化粧をし香水を

匂わせる婦人看守の多い中で、そんな思いやりを示してくれると、此のひとには手数をかけまいと思うのも人情だった。鉄扉の内側に立ったミシュリーヌは背の両手を解いて前に回わし、エメリーヌ看守の綺麗な靴先を見詰めてつつ両手を差し出して云った。

「お願いします」

そして、嵌め易い様に両手を動かす。もうミシュリーヌにも、どうすれば掛け易いかは分って居た。

「寒いわね。とうとう雪になったわ。」

エメリーヌ看守はそう云って、縛しめを待つ女囚のうなだれた姿の寒々しい哀れさを一瞬同情の眼で見やったが、忽ち顔を引き締めて環をハネ上げた。叩き込む様なことはしないで、静かに女囚の右手首にからませ少し縮める。こうして貰えば、あの嫌な音を聞かなくて済むのだ。ミシュリーヌは左手首を寄せ

ながら眼をあげて、エメリーヌの肩越しに向うを見た。向い側の通路を女囚が一人、婦人看守に連れられて行く。その足取りは軽々と世にも嬉しげな顔だ。

（あのひと、保釈なのね。あの嬉しそうなこと）

手錠なしで自由に振られて居る其の両手を眺め、ミシュリーヌは悲しく眼を伏せた。思うまいと唇を噛んでも、羨望の念は嫉みになり、憎しみさえも萌して来るのを押えようもない。

「さあ、行きましょう。おいで」

「はい」

革ロープをたるませたまま、言葉で促がすエメリーヌに曳かれ、ミシュリーヌは肩を落して歩き出した。そして、エメリーヌが折角ゆるくしておいてくれた手錠を自らきつく締め、指先で眼を押える。歯止めの音にエメリーヌは眼をやり、女囚はあわてて両手をおろすのだった。

外には雪が舞って居たが、好奇の眼を光らせた人々が法院の内外を右往左往して居た。「今日はね、夫殺しの女の公判をやっているよ」

エメリーヌ看守は訊きもしないのに教えて

くれ、我れ知らず顔掩うミシュリーヌを叱りもしないで、わざわざ人通りの少い通路を迂回さえて連れて行ってくれた。予審廷にはプランシエ検事はもとより、今日はマイヨール弁護士も顔を見せた。

「お返し出来るあてなど、ございませんでしたの。悪うございました。罰して下さいまし。」

ミシュリーヌはヴォードレ判事にきっぱりと言い、彼女の予審は其の日で終った。曳かれて最後に予審廷を出ると、向うの方の大廊下が騒がしく、人々の声がどよめいて居た。カメラのフラッシュも時々閃いて居る。

「どうやら判決は死刑の様ね。」

エメリーヌ看守はミシュリーヌを迂回通路の方へ曳きながら、眉をひそめて呟いた。

「死刑囚の取扱いは厭よねえ。その時、指名されたら、どうしようかしら。」

「死刑ですって!! 誰かしら?」

顔見知りの同囚達を思い起しながら、ミシュリーヌは息を吞んで戦慄した。どう転んだ所でギロチンにかけられることはない自分が嬉しくて、安堵の吐息すら洩れる心地だった。そして、監房区画への入口の所で、ミシュリーヌは其の女囚と逢った。今のミシュリ

ーヌには豪華にも見える其のドレスは云わば最後の晴れ衣裳、恐らくは何も映っては居ない虚ろな眼を見開いた女囚は未だ若い。茫然と通り過ぎた後ろ姿がぐらりとよるめいた。「しっかりしなさい。上告するんでしょ?」

未だ決まった訳じゃないのよ。」

両腕を左右から扶け抱く婦人看守達が励まし、ともすれば崩折れかかる女囚を検身室へ連れて行った。

ヴォードレ判事は、ミシュリーヌの予審調書を仕上げてしまおうと、退出前のデスクでペンを走らせて居た。難かしい点の一つもないし、極めて簡単な事件だ。余計なことをカクぐって難かしくすることはない。曖昧な点もあるが、悉くを明らかにすることなど、人間に出来るものか。

「……以上、犯行自体に就いては明白と云い得るも、動機に関しては些か疑義ありと云わば云うべし。されど、被告人は嘗て上流階級に属し在りて豊かな生活に馴れ、次第に窮乏を告ぐる生活には耐え得ずしての犯行と認め

て妥当なるべし……」

判事は、富めるライバルの手に去った令嬢フロレンスを、忌々しく思い浮べた。ミシュリーヌは運が悪かったのだ。経験に富んだ判

事ならば、もう少し何とか審理をつくしてくれたかも知れない。これだから、むしろ予審判事に有能なベテランを配さねばならないのだ。

(女なんて、所詮、正義とか信念とかには縁がない生物なんだ。結局、貧乏な男は……ちくしょう、虫も殺さぬ可愛い顔をしてやがって)

彼はペンをインクに浸して所見を書き加えた。

「……被告人ミシュリーヌ・ダリユーは、被害法人代表者たるラグランジュ氏に其の犯行を察知されるに及ぶや、身を以て氏を誘惑し追究から逃れんとせる事実あり。該事実は、被告人に於いては否認しあるも、検察官に於いて証明の準備あり。動機及び罪状認否に就いては争点なきも、情状に関して問題点若干が存す。簡易陪審の構成が望ましかるべし……」

予審調書と申請証人調書とは、数日かかってタイプされ、更に何日か過ぎて公判部へ回付され、そして堆高い書類の山の一番下へ挿入された。

その頃、法務省矯正局の一室では、刑事政策の実施面に就いての改正草案が立案され練

られて居た。激増する犯罪に対処して何等かの手を打たねばならないのだ。

「法相の云うことは抽象的で、どうもよく分らん。」

「要するにだ、刑法を改正して、もっときびしくすりやいいんだ。」

「そうよ。執行猶予が多過ぎるわ。未だ集計してないけど、去年なんか起訴件数の二五%以上が執行猶予なのよ。殺人だって死刑になったのはたった八%弱よ。」

婦人法務事務官のコリンヌ・ルノアールが眼鏡を光らせる。

「そうなんだよなあ。ま、刑法をいじるのは大変だから、量刑を引き上げて貰うんだな。年々軽くなって行く傾向は否定できないよ。」

「そうよ。こんな風だと、今に犯罪がソロバンに合う様になっちまうわ。ピシピシやればいいのよ。文明国の体面なんかとは全然無関係よ、ねええ」

「そうね。それとねえ、刑罰には矢張り幾分かは見せしめの意味を持たせる必要があつてよ。こう云う考え方を嫌うひとが多いけど、犯罪のブレーキには効き目あると思うわ」

「マダム・フランソワーズも、そう云う意見かい。どうも御婦人の方が急進派なんだな

あ、いや、昔風なのか。ま、しかし、刑の密行主義の原則は崩せないぜ。」

「そりやそうよ。でも、運用面でいくらでも加減できると思うわ」

「大体の話がさ、私、矯正局なんて名前からして生温いと思ってんの、誰かコーヒーを頼んでくれない？」

何日もかかって練られた草案には返ってあった。

「……以上、諸般の事情に鑑み、当省に於いては求刑、量刑の基準を引き上げる要ありと認め、諸法規の改正を強力に推進せんとするものなり。かかる情勢下、各行刑機関に於ては、現法規の範囲内において其の運用に留意さるべし。……身柄拘束中の者に就いて其の基本的人權を尊重する要あるは言を俟たず。されど、特に刑確定者及び受刑者に関してはその人權を尊重するの余り、其の処遇上に於いて、担当官の不便又は業務量の増加若しくは経費の増大等を忍びてまで、其の精神上及び肉体上の苦痛の軽減を考慮する必要なきものとす。……仮釈放に就いては、其の基準をより厳正なるものとし……保護観察に關しては、温情に流るるを厳に戒しめ……効果ある行刑の実施に一層の努力を払わるべし。……」

具体的事項に就いての各機関の意見を各矯正管区及び各検事局に於てまとめ、下記要領にて具申すべし……」

矯正局長のサインを貰って来た男がこぼした。

「やっそこさオーケーだよ。ずい分と奥歯に物の挟まった文句になっちまった。云わんとする所が分るかな」

「大丈夫よ。現場には内面指導を流してやればいいわ」

「歯痒がってる連中が多いんだから、喜んで張り切っちゃうでしょうね。」

「やれやれ、そして二、三年経つと今度はブレーキか。大臣決裁だから、此の通達を流す頃は春も過ぎてるな。」

「私が持ち回りするわ。けど、マスコミの取材の緩和を削られちゃって残念ね。偉い人は矢張り世論が怖いのよ」

いきまぐコリンヌ嬢に、ツーロンからの長距離電話がかかった。何かの統計数字の報告らしい。

「分ったわ、ありがと。あ、それからねえ」

コリンヌ嬢はデスクに横坐りの脚を組み替えてつけ加えた。

「デボンヌの姐御に云っというよ。局長の決

裁が済んだって。」

電話を切ったコリンヌ嬢は、煙草をホルダーに差し込みながら云った。

「さあ、これでツーロンから、鞭と連鎖の装備要求がうんとこさ来るわよ。そしてツーロンの街はタマげる程綺麗になっちまうこと請け合い。挙句の果てが、労働省あたりから文句が来るわね。失業対策の妨害するなって。じゃ、私ちょっと外出するわ。コンタクトレンズが出来てるの。」

「へえ？ 眼鏡やめるのかい。彼の好みなんだな」

コリンヌ嬢は笑い乍ら出て行った。

独房で公判を待つ未決女囚ミシュリーヌに寒い一日一日がのろのろと過ぎ、薄紙を剥ぐ様に日毎暖かくなって行った。来る日も来る日も日がな一日、壁を睨んで坐って居ると、ミシュリーヌは時々気も狂いそうになった。壁の規則書は一字残らず暗記してしまった。狭い独房で唯じっと坐り続ける苦しさは、のろのろと過ぎる一刻々々を喘ぐ心地だった。

婦人看守達は靴音を忍ばせて巡回し、不意に監視窓を開く。所定の位置に規則通りの姿勢で坐って居らねば反則だ。腰掛けた脚を組んでもいけないし、頭を抱えて居ても嘔鳴り

つけられる。横臥したり立って居たりすると叱られるだけでは済まないし、歩き回って居たりでもすればことだ。

（苦しい、気が狂いそう。けど、私、悪いことをしたんだもの。罰を受けてるんだから仕方ないわ、辛抱しなきゃ……）

ミシュリーヌはそう思って健気に耐えるのだったが、それでも二日に一度は叱られ罵られた。諭し注意してくれる婦人看守には、お詫びの言葉も素直に出るが、途方もない口汚なさで罵られると口惜しさに胸が熱くなる。

「まあ、何と図々しいの、お前は。反則を叱られてふくれるなんて。」

若いベル看守は監視窓を覗いて、威丈高な声を張り上げた。顔を手に埋めて居たミシュリーヌを見付けて散々罵倒した挙句、口惜しさに唇を噛んだ女囚を見咎めたのだ。

「いいかい、お前はね。囚人なんだよ。お裁きを待ってひたすら反省してるのが当り前なのよ。」

「す、すみません。お赦し下さいまし」

ミシュリーヌは姿勢を正して口惜しく詫びた。

（でも、未だ罪人と決まった訳じゃないの

に。あんな風に云われると、ほんとに腹が立つわ」

ミシュリーヌは、口答え出来たらと思ううじめさをこらえて床を見詰めた。

「囚人の癖に生意気だわ。反則した囚人がどう云う目に逢うか、ちょっとだけ教えてやるわ、云ってきかせただけじゃ駄目だからね。」ベル看守は足で差し入れ穴を開いて呶鳴った。

「七十八号ッ。ここへ来て手をお出しッ」

ミシュリーヌは、通路の床へおいた両手を意地悪く踏まれる痛さとみじめさをたっぷり味わった。その上、此のベル婦人看守は、痛めつけたお礼を云わせなければ納まらない。

「どう？ 少しは分ったの？」

「は、はい。ありがとうございました。」

跪まずいて云う女囚の姿を見下ろして、ベル看守は嘲笑いながら窓を閉じたのだった。

鉄扉を開けなくて済む此のお仕置きは便利なので、しょつ中行われる。引込めようと思えば引込められる両手を女囚自身の意志で差し出させ、踏みたい放題に鉄扉を隔てて踏んずけてやる此の罰は、女囚の心を打のめすのに持つて来いの方法だ。やられる身にとって、痛さもさき午ら、みじめさが骨の髄にま

でこたえて、泣き喚きたくなってしまう。余りの情けなさに手を引込めてもしようものなら、命令不服従の懲罰が待って居る。稀にはカッとなって、足首なんかを掴んでしまう向う見ずも出て来るが、支配者にとっては待つてましたと云う訳で、最も重い反抗の懲罰を喰ってしまう。何しろ、ここにはもう、懲罰暗房も窄衣も革手錠もあるのだ。手の甲を踏むやり方のはかに、囚人自身で手錠をかけさせる方法もある。手錠の使用は制限のないのも同然なのだから堪まらない。ミシュリーヌは横坐りに片手をついて居たのを発見されてしまった。しかも、もう一方の手で髪掻きむしって呻いて居たのだ。このままだと放っておかれるのではないか、と云う不安の念が、打ち消しても打ち消しても胸に湧いて矢も楯も堪まらずどうしようもなかったからだ。摘発したのは又もベル看守。エメリーヌやアネットだったら、少しくつく叱る程度で済んだのだが、若いベル看守は冷酷だ。例によって意地悪く、女囚の両手を強く弱く長時間靴底で痛めつけ

「一昨日、注意したばかりじゃないの。今日はこれだけじゃ済まさないからねッ。さ、これをかけるのよ」

ミシュリーヌは、監視窓から突きつけられた手錠を、ずきずき疼く手で受け取った。命じられるままに腰と膝を屈め、両膝を後ろから抱いた両手に自分で手錠を嵌めさせられるのだ。我れと我が手に手錠をかける気持はみじめだった。鉄扉に背を向け上体を深く折って、一旦嵌めたら最後、自分では外す術のない手錠の縛しめを検査される。

「ゆるいよッ。もっと締めて。」

ミシュリーヌは、半ばヤケ気味で環を縮めた。

「そうして坐ってるがいいわ。神妙にしたら点呼後には外して上げれるかもね。」

ベル看守は立ち去り、ミシュリーヌは悲しかった。今日は未だおひる前なのだ。

(おひる御飯も晩御飯も、手を使わないで食べなきゃいけないのね)

狭い寝棚に浅く腰掛けたミシュリーヌは、そう思っ鼻を吸り、手錠の冷たさを膝の下でそっといじった。もがき回れば脚を抜くことは出来る。しかし、そんなことをして若し見付かつたら大変だ。ミシュリーヌは両膝を抱いたまま其の日を暮らしたのだった。どんなに叱られ罵しられ、みじめさ苦しさに涙するお仕置きを喰っても、日に一度はのた打

ち回りたいた衝動に駆られる。お仕置きを恐ろしさにおののきつつも、つい立ち上り、足音を忍ばせて歩き回ると、忽ちコンクリート壁が鉄扉が、鼻先を非情に遮ぎって嘲笑った。女囚ミシユリーヌは或る日遂に耐えかねて、鉄扉にしがみつき拳で叩き、信号棒を起して喚いてしまった。

「いつまで、いつまで放っとくんですの。公判はいつか教えてッ。お願い。」

当直看守が忽ち飛んで来た。詰所からも応援が二人ばかり駆け昇って来た。一人は早手回しにもう嵌口具を掴んで居る。大声をあげて騒ぐ女囚には、有無を云わさず先ず後手錠、そして嵌口具をカマせてしまうのが定法だ。雪崩れ込んだ婦人看守達は、ミシユリーヌの両腕をねじ上げた。

「早く、早く裁判を受けさせてッ。そして、早く刑を決めて……」

ミシユリーヌの絶叫は悲痛な糸を引いて消え、訳の分らぬ呻き声に変わった。激しい金属音と共に後手錠が叩き込まれ、嵌口具の革具が更に強く固く締め上げられる。

「静かにおしッ。いくら喚いたって無駄だよ。」

一きわ体格のいい婦人看守がミシユリーヌの

金髪を太い腕で掴みゆすぶって叱った。ここには、見るからに逞ましい婦人看守が数名居て、少くとも其の一名は当直して居る様に勤務割が定められて居る。どんなあばずれ女でも反抗心を喪失してしまう程のポリウムと威圧感を持つ彼女達は云わば保安係で、大抵のことなら、男子保安係の手を煩わすまでもなく処理してしまうのだった。真正面から灰色の眼で見下ろす婦人看守の背は五寸以上高く、体重は倍もあるだろう。ミシユリーヌはおののいて膝を落とした。

「いくら焦ったて、順番が来なきゃ仕方ないのよ。おとなしく持つてゐるほかないわ。」

背後で云って聞かせたのは、手錠をかけたエメリーヌ看守だ。押し込められた鉄塊が酸っぱく舌を押え、横一文字に噛まれた鉄棒が唇を裂かんばかり、顎を下から締め上げる金具に骨が疼く。恐怖に噴き上がる哀願の声も最早言葉とはならず、ミシユリーヌの唇の両端からは早くも涎が垂れ初めた。

「もう大声出さないわね？」

エメリーヌに訊ねられたミシユリーヌは、婦人看守達を仰いで懸命にうなずいた。頭を動かすと、締めつけられた革具がギシギシきしき、頬が唇が顎が痛んだ。

「ねえ、嵌口具は赦してやったら、と思うんですけど。この七十八号はとても従順なのですよ、贖罪の気持ちも充分に認められますし。」

エメリーヌ看守がとりなしてくれたが、逞ましい上席看守はかぶりを振った。

「甘やかせちゃ駄目なものよ。暫くそうさせとくがいいわ。それに、監房の扉を叩くなんて以てのほかよ。脱走の意図ありだわ。フ、フ、フ」

「まあ、そんな大袈裟なこと。」

エメリーヌ看守はそれでも最後まで残って嵌口具の革具を手早くゆるめてやったのだった。初めてかけられた嵌口具の苦しさに、ミシユリーヌは気も動揺してのた打ち回り、涎を垂らして時々呻いた。どうもがこうとも所詮無駄なこと、何世紀にも亘って改良されて来た、この革と鉄の戒具がピクともする筈がなかった。口を封じたこの器具の堅牢さを思い知らされたミシユリーヌは、やがて恐怖に襲われて、鼻ふくらせつつ喘いだ。絶対にこれで口を利けないのだと思うと堪まらなかつた。無駄とは知りながらも腕をもがく。嵌口具の鋼鉄部分には錠のかかる音がしたが、革具は尾錠だけであることを知って居たのだ。折角エメリーヌがゆるくしておいてくれ

た手錠がきつくなつて来て、ミシュリーヌは身悶えを諦めた。嵌口具は、そのままにして置いて、昼食のパンと水とは差し入れられた。意地の悪いことをするものだ。

「あら、奥様はお召し上がりにならなかったのね。下げてもよろしいの？ フ、フ、フ」

ベル看守が監視窓から嘲けり、当番女囚のあか切れた手が差し入れ穴から延びて、床に投げ込まれて居た黒パンとアルミコップが取り去られた。苦しさに堪えかねて、ミシュリーヌは時々悶えて呻いた。遂には寝棚を転ろげ回って革具をこすりつけても見た。

「おや、性懲りもなく、まだ暴れてるのね」

遂に発見したベル看守が答を手に入つて来て、腿を尻をしたたかに打ち据えた。赦しを乞う術もないミシュリーヌは嵌口具の隙間から涎を垂れ流したまま獣の様に唸り、遂には死にたいとさえ思つて壁に頭を打ちつけて見たりもしたのだつた。

「苦しかった？ 解いてあげるわ」

エメリーヌ看守が夕食前にやって来て、そう云いながら嵌口具をはずしてくれた。

「これと暗房とは、人間と云うものを荒廃させてしまふわね。これからは、おとなしくするのよ。」

エメリーヌは脂汗と唾液にまみれた嵌口具を指先に持つてそう云い、未だ声を出せないミシュリーヌはこっくりとうなずいた。エメリーヌは黙つて居たが、憫れんだ彼女の口添えのおかげで、特に早く解いて貰えたのだ。「あ、あッ。手は解いて貰えませんか？ せめて前にして下さいまし。お願い」

必死の哀願を振り絞つて取り繕がるミシュリーヌを、少しきびしく見下ろしたエメリーヌは、黙つて鉄扉を閉じて立ち去つた。眼前でピッシリ閉じた鉄扉の向うで錠の音が冷たく鳴り、ミシュリーヌは顔と胸を鉄扉に押し当てたまま暫く吸り泣いた。頭上の監視窓から、今度はベル看守の冷酷な声が降つた。

「規則通りに坐つてなさいッ。歩き回ると足に鎖つけるわよ。」

後手錠は三日間嵌められたままにされた。

ミシュリーヌは、床に這いつくばつて物を喰べ水を吸るみじめさを心ゆくまで味わせられた。顔を洗えない情けなさも味わつた。

労役女囚に小馬鹿にされながら漸く用を足す哀しさは胸に込み、碌々身繕ろいもしてはくれないのに、お礼を云わねばならない屈辱は骨にこたえて口惜しかった。夜には仰臥は出来ず、寝返りもままならず、毛布を身にまと

うことすら思う様には出来ない。そして如何に氣をつけて居ても、手錠の鋼鉄環は残酷な音を微かに立てて、手首を締めつけて来るのだ。

苦しさに身を起すことは、就寝時間中には許されない。一夜を呻吟して明かすと、もう手首は千切れそうで肩はもげそうだった。じつと坐つて居ても額に脂汗の浮かぶ苦しさだ。思わず両腕をもがくと、背中で鋼鉄の音が嘲けり笑い、喰い込んだ環がそれでも僅かに動いて、手首の苦痛に悲鳴が出る。泣こうが呻こうが、絶対に金輪際外してはくれない。弛めてもくれないのだ。跪まずいて哀願しようと思ふと額を床にすりつけて哀訴しようと、婦人看守は

「駄目よ」

の一言なのだった。哀願も泣き声も度を越すと、容赦なく嵌口具だ。

「いくら泣いたって駄目。そんなこと位はまだ軽いよ。そんなのでヒーヒー云つてちやこれからどうするのさ。黙つて静かに反省してないと又これよ。いい？」

答の二、三発を喰つたミシュリーヌは、眼前に突きつけられた嵌口具を見て息を詰めた。幾多の女囚達が口中に押し込まれ、氣も

狂いそうに噛みしめた鉄と革の塊まり、それに連結された鋼鉄と革具も何度女囚達の顔に喰い込んで、其の涙でどんなに濡れたことか。

「どう？ 苦しかった？」

三昼夜の後、漸く外してやった手錠をカチヤカチャ云わせながら、エメリーヌ看守が云った。

「はい。それは、もう……とても辛うございましてわ。三日もかけられてますと、ほんとにもう……」

ミシュリーヌは傷ついた手首を痺れた指先で撫でながら肩で息をして呟やき、少しは恨めしげにエメリーヌを見上げた。

「騒ぐといつでもこれよ。分った？ 嵌めたら、先ず最低三日は外さないことになってるのよ。ちよっと見せて御覧」

エメリーヌ看守は女囚の手首を調べて微かに眉をひそめたが、遂に葉はつけてくれなかった。三月も末ともなれば、鉄網に囲まれた女囚運動場にも若草が萌えて来た。高い塀越しに吹くセーヌの川風も春を思わせて和んできた。自ら両手を背に組んだミシュリーヌは重い鉄鎖を両足に引き摺り、泣きながら列に混って歩いて居た。日増しに暖かくなる嬉し

さについ胸が弾み、ふらふらと立ち上って房内を歩いたのを昨日の午後見つかって、罰としてかけられた足錠だった。女囚は口惜しく思い出す……。昨日の昼食後の一刻、ミシュリーヌは鉄扉の外を覗きながら立上って伸びをした。四六時中責め苛んだ寒冷地獄とも、これで当分お別れだと思つと、歌が出そうな心持だった。

（火の気なしでとうとう一冬を越したのね。よく辛抱出来たこと。自分でもびっくりする位だわ。囚人でも冬にはストープに当てるんだと考えてたけど、そんな甘いことじゃないのね。寒いので、ほんとに地獄だわ。でもこれから何度、こうして冬を過ごすことになるのかしら？）

立ったまま考えて居たミシュリーヌは、靴音と共に近づく金属音を聞き、あわてて腰を下ろして姿勢を正した。ガタリと覗き込んだのはアネット看守だ。鉄扉を透して遠くから聞きつけることの出来る金属音は、彼女が腰にむき出しに吊った手錠の触れ合う音なのだ。手荒なことをしたくない看守達は大抵そうして居る。反則を発見すれば職務上懲罰も加えねばならないし、監視窓を覗く前に警告を与えておくのが、お互いのためだしと云う

訳だ。

「暖かくなったわね。」

アネットの眼がやさしく笑い、女囚は

「はい」

と答えて身をゆるめた。アネットが去ってミシュリーヌは又も立ち上った。やさしい言葉をかけられて、嬉しくなったのだ。ついふらふらと房内を歩き回ったミシュリーヌは、不意に開いた監視窓の音に色を失った。まさかと思つたのが油断だった。意地悪いベル看守が足音を忍ばせてアネットのすぐあとを回わって居たのだ。ミシュリーヌは観念して立ちうなだれ、両手を後ろに回わして云った。

「すみません。悪うございました。」

「ふん。じゃ、反則してことは自分でも知ってるのね。いい度胸なこと。そんな顔してて——」

ベル看守はどう云う訳か、ミシュリーヌには特にきつい。ミシュリーヌは覚悟をきめて唇を噛んだ。

（立って歩いたことが罰になるなんて情けないものねえ。あんな若い小娘に痛めつけられるんだわ。でも、仕方ないわ。囚人なんだから。まさか窄衣かけたりはしないだろうと思ふけど。手を踏む位で赦してくれないかし

ら

しかし、ミシュリーヌは運が悪かったのだ。拘留所の幹部が交差し、そこへ例の法相通達が発せられ、その結果、拘留所の規律保持に關してきびしい達しが出されたばかりなのだ。それでも、エメリーヌかアネットならば何とか見逃してもくれただろうが、ベル看守にかかつては堪まらない。

「七十八号ッ。出といど」

鉄扉を開いた小娘は憎々しげに顎をしやくり、前でそろえた女囚の腕を手荒く背にねじ上げた。あっと云う間に、両手首に手錠が叩き込まれた。素早い手錠捌きがこの小娘の自慢だ。後手錠の縛しめに眉ひそめるミシュリーヌの片腕が掴まれて

「おいでッ」

矢庭に引き立てられた。ガツと喰い込む手錠の痛さに、女囚は声もなく呻く。

(そんなにしなくても行くのに。ほんとに腹の立つ仕打ちをするものね)

ミシュリーヌは口惜しかったが、掴まれた腕を振り放す訳には行かない。そんな素振りや態度を示してさえ、反抗と見做されてしまう囚われの身なのだ。ミシュリーヌは無抵抗にされるままになって、よろめき乍ら引き立

てられて行った。引き立てられた先は看守詰所の横手。詰所内から見通しの其の場所には戒具棚や囚人用品置場が並んで居り、天井からは鎖や鉄鉤が垂れて居る。革鞭に喚き窄衣に呻く声が聞えて来る場所だ。ミシュリーヌは恐怖に蒼ざめてわなないた。

「か、かんにんして下さいまし」

「ホ、ホ、ホ。今更何を云ってるの、図々しい」

ピンタの二、三発を喰わせて詰所に入ったベル看守は、やがて遅ましい婦人看守と一緒に現われた。冷酷な灰色の眼をしたこの大女も、美しい同僚に対しては好意を抱いて居る筈もない。

「覚悟は勿論きめてるんだろうね？」

灰色の眸が氷の様に光って射すくめた。

「は、はい。申し訳でございません。」

女囚は圧倒されて息を詰める。どんなに憫れみを乞うて見た所で、一方的に決められてしまう懲罰は受けるほかないのだ。

(どうせ同じことなら、卑屈になるだけみじめだわ。逃がれられない、お仕置きなんだもの。堂々と受けことよ)

そうは思っただけでも、想像だけでも未だその味を身に知らない懲罰の数々があるのだ。

正規の懲罰方法のほかに、陰險残酷なお仕置きも数多い。

(どんな目にあわされるのかしら。ここに来て間もなくだったけど、同じように歩いて見付かったことがあったわ。あの時にはピンタと答で撲り倒されただけで済んだけど……)

いつ頃に飛ぶか知れないピンタに備え、奥歯を噛みしめながら、女囚は膝も萎える心地だった。暗記している規則書を胸に繰ったところで無駄だ。囚人に読ませる規則書には、こんなことは反則だから懲罰するんだけどか書いてなく、どんな罰を課するかは支配者の勝手次第に近い。

「七十八号。お前は未だ、脚を折って坐る作法を習ってないね？」

太い指がカードを繰っていった。

「は、はい。まだです」

「じゃ、教えといてやろう。これからあることだからね。跣足になるんだよ。」

命じられたものの、女囚は思わず支配者を仰いでためらった。

「はだしになれといってるんだよ。早くおし。出来ないことを命じはしないよッ。ほんとに薄野呂でトソマな女だこと。」

女囚は膝をつき脚を折って、手錠の指で革

サンダルを探った。ままならぬ腕が泣きたい程で、ついバランスを失なった女囚は膝を踏張ったが、それでも足らず、上体がよろめいて肩が床に当る。

「図々しい割に不器用なのね、お前は」

丸めてもがく女囚の背に、ベル看守の筈がピシリと鳴った。立ち直ろうと必死の背が再び床に伏し、またも筈が小気味よく鳴って、懸命にこらえた悲鳴が低く洩れた。漸く身を起して手錠の音を立て初めた女囚の睨が熱くなり、口惜し涙が溢れた。

「ふん。やっと脱げたね。口にくわえて」

命令は絶対なのだ。口を床に寄せた女囚は革バンドを前歯に噛んで肩ふるわせる。

「馬鹿。ウスノロッ。両方ともだよッ」

両方の革バンドを口だけで一緒にくわえ上げるのは少し難しい。ミシュリーヌは泣き出したくなかった。

「早くおしよ。私達、お前に構ってばかりは居れないのよ。」

ベル看守の筈が背に飛んで、女囚は折角くわえかえた革バンドを口から落した。磨き終えた戒具を重そうに抱えた赤縞女囚が二人やって来て台上に並べながら、ミシュリーヌのさまを眺めて咽喉で笑った。受刑生活が続くと、

大抵の女は他人の受ける罰を見ると楽しくなる。僅かながらも優越と慰さめとを感じるのだ。

「あの、戒具磨かせて頂きました。検査をお願いしますわ。」

赤縞女囚の一人が手の甲で、ほつれ毛を掻き上げ乍らいい、小娘看守がじろりと振り返って

「そこへ並べておおき。あとで調べるから。」

「ハイ」

「じゃ、檻磨きを手伝いなさい。」

赤縞女囚はミシュリーヌを横眼で嘲けり乍ら、腰の連鎖をチャラチャラ鳴らして出て行った。やっと両方をくわえ上げたミシュリーヌは、跪まずいたまま眼を閉じた。床には彼女の唇の跡が残り、周りは土埃にまみれて居た。

「ふん。何とかくわえたね。ここへ坐るんだよ」

「腿をちゃんと合わせるんだよ。どこまで手間をかけるの？」

今度は腿の上に筈が降り、女囚は両膝を精一杯に締めた。忽ち責め苛んで来る脚の苦痛が、既にもう切なく苦しい。

「上体をまっすぐにおし。そう。そうして反

省させて頂くのよ。分った？」

「三十分間そうしているがいい。いや、お前はお転婆だから、もう十分間おまけをやる。いいかい、それがお作法だよ。女囚として一番大切なお行儀のいい姿勢なんだよ。崩したら、いつまで経っても、お作法の時間が終らないからね」

二人の婦人看守は詰所に入った。ソファに身を沈め、やがてコーヒを啜り出す。扉は上から下まで素通しのガラス。紫煙をくゆらす巨大な後ろ肩が扉越しに見え、向き合ったベル看守の顔が女囚の真正面で嘲けり笑う。ミシュリーヌは脂汗を浮べて苦痛に耐えた。意地にも洩らすまいとする呻きが、ともすれば咽喉をつき、あの小娘には見せまいとこらえる涙が閉じた睨を破って滴った。コンクリート床に脚を折って坐る一分間が、どんなに永いものか、ミシュリーヌは生れて初めて思い知らされた。

「姿勢が崩れてるよ。膝が離れてるじゃないの。上体が屈んでるッ」

コーヒを飲み終ったベル看守が出て来て愉快げに叱りつけ、腿に筈をしたたか浴びせた。背後の窓空が曇り、詰所内に電灯が点りミシュリーヌは硝子扉に映るおのが姿の哀れ

さを喘ぎながら眺めて、新たに涙するのだった。ベル看守が出て行って先刻の赤縞女囚二人を引張って戻り、靴を数足投げ与えた。小娘看守は通りかかる度にミシュリーヌの額を小突き膝を蹴る。案に相違してミシュリーヌが略々きちんと坐り続けておるのがカンにさわるのかも知れなかった。うずくまって靴磨きを初めた赤縞達は絶えずミシュリーヌを眺めてニヤニヤ笑う。鎖を床に鳴らしてしゃも中身動きをし、これ見よがしに脚を横坐りに投げ出すのだった。ベル看守の当たりが柔かい女達だから、どうせろくな心掛けの連中ではない。

ミシュリーヌの苦行は更に五分間延びて、大きく伸びをした大女看守が、あくびし乍らやおら出て来た。

「どうだい？ 気分は。」

怒りに燃える眸を上げかけた女囚は、忽ち眼を伏せ、顔から流れる落ちる脂汗にまつげをしばいた。どんなに口惜しく胸が燃えたとして、絶対の屈伏と服従があるだけの身だった。

「少しはお作法が分りかけて来たかい？」

口の利けない女囚は激しくうなずいて見せる。

「ふん。じゃ、頬張ってるものを置いていいよ。どう分ったかね。御覧」

許されて革サンダルを床においた女囚は、身を起そうとして他愛なく横倒れになった。恐怖にわななき死物狂いにもかく自分が我ながら情けない。けれども、この苦行の継続を一言命じられてもしたら堪えたものではなないのだ。呻き喘いで身をもがくミシュリーヌを眺め、赤縞女囚が声を合わせて笑った。

「どうしたんだい？ 勝手におネンネできる身分だと思ってるのかい。あたしゃ、気が短いんだよ、早くしないと聞いてやらないよ。」

そこへアネット看守がやって来て眉をひそめ、ミシュリーヌの肩を扶け越してくれた。「アネット。あんたはどうも甘くていけないよ。さ、早いとこめかせ」

ミシュリーヌは唇を舐め、かすれた声でいった。

「反則致しまして悪うございました。これから決して致しません。お赦し下さいまし。」

「へえ。それだけかい。それじゃ反省したとは認められないね。では、もう少し思案させてやろうか。」

お仕置きして頂いたお礼をいえ、というのだ。アネットの眼を頬に感じたミシュリーヌ

は頭を垂れ更に額を床にすりつけていった。「ありがとうございました。ようやく反省させて頂きました。お仕置き、ありがとうございました。」

いい乍ら彼女の眼に溢れた涙がホロリと床に落ちた。社会の人々には、こんなみじめな目にあわされて居る女が居るとは想像もつくまい。

（口惜しいわ。胸が張り裂けそう。ほんとにひどいわ。でも誰も来てはくれないのね）

必死に身を起すと、既に感覚のない腰から下がずるとめり込んで、またしてもふらふらと倒れそうになった。それを懸命に防ぎつつ、女囚は支配者の靴先をじっと見つめて歯を喰いしる。

「そう。感謝してくれるのなら、あたしもその甲斐があるという訳さ。でも、懲罰は済んだのじゃなくて、これからなんだよ。今までは反則取調べ段階でのお仕置きで、ほんのお印しだけ。フ、フ、フ、そうたまげることはないよ。さ、お立ちッ」

息を吞んで振り仰ぐ婦人看守の姿が巨大なものに見え、眼前に立ちはだかる紺のスカートが壁のように感じられて、反則女囚ミシュリーヌは首をガクリと垂れた。

「立て、といってるんだよ。命令に逆らう気かい？」

スカートの壁がじりつと迫り、女囚はのけぞって喘いだ。圧倒されるような恐怖に全身がわななき、指の一本がふれでもすれば床に崩れ伏してしまいそうだ。

「は、はい……はい」

ミシュリーヌは、立ち上がろうと必死だった。呻いてはもがくその姿を、赤縞女囚達が眺めて笑う。

「なんてザマなんだい？ 立ってウロつくのは得意じゃなかったの？」

立ちかけてよろめき、床に打ちつけた痛さをこらえるミシュリーヌの横腹を、大きな靴が蹴った。

「ああ、アネット。お湯が沸いているよ。エメリーヌが持ってきたお菓子もあるし。」

灰色の眼の婦人看守は、眉をひそめるアネット看守が邪魔らしく詰所の中へ追い払おうとする。

「ええ、ありがとう」

アネットは生返事をしてミシュリーヌの姿から眼をそらし、台上の戒具の点検を気のなさそうに初めた。

「それはベルの担当よ。うっちゃったときなさ

いな。あの子、どこへ消えたんだろ。」

「ええ。けど……。まあ、大体綺麗になってるわ。お前達、棚へ納いなさい。」

アネットに命じられた赤縞女囚達は、鎖を鳴らせて立ち上った。

「ふん。どうやら立てたようだね。あ、足錠を一つ残しとくんだよ。」

一階級上の大看守にいわれて、アネットは軽く溜息をついた。

「もういいじゃありません？ 十分にこたえたようですもの」

「駄目だね。先週までなら大目に見てやってよかったけど、所長通達読んだらう、アネット。これからはビシビシやるのよ。」

よろよろしながら立ちすくむミシュリーヌが、おどましく盗み見た台上には、長い鎖のついた足錠が一つ、薄暗い光を鋼鉄色に反射しておかれてあった。姿を消して居たベル看守が息弾ませて戻ってきた。

「あら、始末してくれたのね。すみません。」

「そういう乍ら自分のハイヒールを探して磨き工合を調べる。」

「あの、ちょっと早いんですけど退かせて頂けません？」

「あそうか。彼氏からの電話だったんだね。」

仕様がないう娘だね。ま、若いんだし、昨夜は当直だったし、いいだろ」

「すみません。寝不足で化粧が乗りやしないわ。じゃ、さようなら」

「お待ち」

と、巨大な婦人看守がくびれた顎をミシュリーヌにしゃくった。

「あ、そうか」

ベル看守は乱暴な手つきで、一刻も惜しいかの様に、ミシュリーヌの後手錠を手早く外し、腰の革サックに納め込みながら詰所に消えた。

「靴を穿くんだよ、靴を。まごまごしてると当分はだしにしとくよ。」

ミシュリーヌが、革サンダルを穿いて居ると、ベル看守がそくさと出て来た。

「これ、お食べ落っこしたから上げる。凄く綺麗に磨いてくれた御褒美よ。」

左手にハイヒールを持った娘は、右手に摘んだ菓子を赤縞女囚達に投げ与え、あとをも見ずに急ぎ去った。

「ほんとにまあ。この頃の若い女と来たら、もう……」

舌打ちした婦人看守は、ミシュリーヌの金髪を掴んでゆすり、太い腕を力強く振って

ピンター一発を喰わせた。

「穿いたら、ちゃんと跪まずくんだよ。懲罰の言い渡しなんだからねッ、その手の始末が出来ないのかい？ 薄馬鹿ッ」

両手を背に跪まずいて、ミシュリーヌは正規の懲罰の言い渡しを取った。

「七十八号。恣意歩行により足錠一週間。但し改悛の情状によって増減します。」

「は、はい」

鼻を嚙った女囚は暫くしてつけ加えた。

「ありがとうございます。お、お手数かけました。」

みじめな思いに声も詰まり、少しでも点数を上げようという気持になる卑屈さ加減が自分でも情けない。眼配せを受けたアネットが軽く吐息を洩らし、ガラガラと足錠を取り上げてミシュリーヌに近づいた。見るからに重そうなの戒具を見て、女囚は声もなく打ちのみされる。

（こんな恐ろしい道具もあるのね）

命じられるままに足を開いて立ち、初めての足錠を両足首に受けながら、ミシュリーヌはアネットの清潔なうなじの白さを見下した。外す術のない鋼鉄の環が足首にまつわりガチッと錠が鳴ったが、このアネット看守を

恨む気持は毛頭起らない。アネットは、革サングルのバンドの上にかけて鋼鉄環の締め加減を入念に調節してくれた。きついのは勿論だが、あまりゆるくても却って苦痛なのだ。

「おや、ストップ利かせたの？ 相変らずお優しいのね。アネットは。ま、いいだろう」

皮肉られたアネットは黙って立ち上がり、キーホルダーをポケットに納めた。装備品の戒具の錠は全部の看守が一通り持っている。

「ご面倒かけました。すみません。」

ミシュリーヌは跪まずいて、心からのお礼をアネットにいった。跪まずく時に、両足首を繋ぐ七十センチの太い鉄鎖が僅かに動いて床に音を立てた。

「連れて行きなさい。」

大女はいい捨てて、豊かな腰をゆすって詰所に入った。アネットが腰のあたりに手をやり、それを見たミシュリーヌは両手を差し出す。

「あら、いいのよ。」

アネットが低く笑って取り出したのはハンカチ、再び両手を背に握った女囚は涙を拭いて貰いながら、新たな涙を更に流すのだった。促がされて歩き出したミシュリーヌは、驚く程に重い鎖によるめいた。思わず解いた背

の両手を叱りもしないで、アネットは腕を支えてくれる。

「思ったより重いでしょ。ゆっくり歩いて」「はい。すみません。」

女囚は再び鉄鎖を床に引き摺り初めた。鋼鉄環が革バンドから外れて足首をじかにこす。ミシュリーヌは歯を喰いしばってそれに耐えた。昇る鉄階段に鎖が音高く響き、ふちに軋みこすれて一步毎に足首を責めた。

「初めてなんでしょ？ 痺れるだろうし、休んでもいいのよ。」

アネットはそういつて痛ましげに見やったが、ミシュリーヌは遂に一步も立ち止まらなかった。

「その中に分って来ることだけど、鎖の長さの半分位のつもりで歩くといいわ。長さ一杯に歩いたら堪まらないわよ、環が回るから。」

教えてくれたアネットは監房の前で、手にして居た鋼鉄の小塊を渡して気の毒げにいった。

「やっと着いたわね。可哀想だけど規則なのでこれで鎖を縮めるのよ。自分でやるの。」

渡されたのは堅牢な南京錠。勿論その辺で売って居る代物とは訳が違い、見るからにハ

ツとする程の冷厳さを感じさせる錠金具だ。
「はい」

ミシュリーヌは身を屈め、足首を寄せ合い根元同士の鉄環二つを結合した。ちらと見て調べたアネットが眼顔で促がし、女囚はよちよちと膝でいざった。

「辛抱するのよ。お前みたいに氣立てのいい女にはむごいと思うわ。でも、ここへ来たら仕方ないことよね。世の中には、こんな世界もあるのよ。」

ミシュリーヌの背にアネットの声が低くい、鉄扉が静かに、しかしビツシリと閉じられたのだった……。

被懲罰女囚ミシュリーヌは泣き乍ら運動場を歩いて居た。懲罰には運動禁止が付き物なのだが、足錠の罰の時には意地悪く運動させられる。足に鎖を曳摺っての運動は今朝で二日目。手錠と同じ構造の鋼鉄環は、歩くとうしても革バンドから外れて足首をこじる。

昨日で懲りて、今朝は革バンドをうんと下に締めたミシュリーヌだったが、それでもどうかすると直接に当って痛かった。工合を直したいのだが、手は使えないし立ちどまることも許されない。ミシュリーヌは時々呻いて歩みが鈍った。今朝の監視はベル看守。遅れ勝

ちのミシュリーヌを眼の仇にして、面白そうに笞を当てた。通達の槍玉にあがって足錠をカマされた不運な女囚は他にも数名居たが、この班にはミシュリーヌだけが鎖を鳴らせて居た。

「よそ見しないでッ」

時々ミシュリーヌを振り返って居た三、四人先きの女囚がベル看守の笞をふくらはぎに喰って飛び上った。ミシュリーヌに一カ月程おくれて来たクラリスで、運動で一緒になるのは初めてだ。

「七十八号。お前、どうしても、ずるけるのねッ」

ミシュリーヌは、小娘看守等に引き摺り出された。

(ずるけるなんて!! こんな物をつけられて一ぺん自分が歩いて見るといいわ)

平手打ちを受けながら、ミシュリーヌは思った。

「列に居ると邪魔だから、独りで運動させてやるわ。走るのよ」

クラリスだったら、あるいは、こういったかも知れない。

「お言葉を返して何ですけど、走るのは反則じゃございません?」

しかし、ミシュリーヌは黙って歯をくいしばり、命じられるままに列の内側を逆回りに走り出した。地面を摺る鎖に足をとられ、背に回したままの両腕にバランスを失ない、ミシュリーヌは何度となくよろけまろんだ。すれ違う度にクラリスが同情のまなざしを向け、小娘看守等は胸張って嘲けた。

「しっかり走るのよ。運動不足にさせちゃ気の毒なものね。」

走ると、どうしても歩幅が大きくなり、勢いよく動く鎖に環が回ろうとこじる。おまけにサンダルの硬い革で出来た古傷が破れて血が滲んで来た。ミシュリーヌは呻き呻きつつ、漸く監房へ戻った。握り締めて持たされていた錠金具で自ら鎖を締めるや否や、じっと見て検査した看守が矢庭に背を突き飛ばす。倒れ込んだミシュリーヌは、手と膝で這って縋りつくようにして寝棚に腰掛けた。ベル看守の意地悪い監視窓から消えるのを見届け、更に暫くしてから漸く革バンドを鋼鉄環の下に挟み込む。

(足首に革バンドがあるので、少しは助かるわ。なかったらどんなかしら。もう少し縮めた方が工合がいいんだけど)

足首のあちこちを撫でながら見下ろす鋼鉄

環は、開きも縮みもしないように鍵をかけられて、ずっしりと重く光って居た。房内では一瞬たりとも鎖を長くしては貰えない。房を出る時には鍵を渡されて自分で錠金具を外させられることもある。鍵は勿論取り上げられるが、錠金具は右手に冷たく握らされて持たされるのだった。寝る時には革サンダルを脱ぐので、一晩の中にはどうしてもこじて痛められると見え、朝起きる毎に足首の疼きが激しかった。食事を受け取るのも用を足しに行くのも、手と膝で這って行くのだ。

「辛抱するのよ。可哀想だけど」

エメリーヌやアネットはあう度にそういつてくれはするのだが、勿論外してはくれない。指折り数えた七日目の夜の点呼の時、直立して囚人番号を叫んだミシュリーヌは監視窓に哀願した。

「あの……未だ外しては頂けませんの？」

「何だって!! その口の利き方は何よ。」

女囚は膝を床について首を垂れた。

「すみません。あの、決してもう勝手に歩いたり致しません。お慈悲でございます。お赦し下さいまし。」

「ふん。」

監視窓から見下ろす眼が冷たく笑い、思わ

ずにじり寄る女囚の足の鎖が、二重に折れたまま床を摺って音を立てた。

「駄目」

監視窓がガタリと閉じミシュリーヌは首を垂れて涙ぐんだ。

（もう一週間経ったのに……）

そういいたい気持は山ほどだったが、そんな大それたことを口にする勇氣はなかった。

翌日は房内掃除の日。戸外運動は雨で取りやめられ、ミシュリーヌの引摺る鎖が通路に音高く響いて何度も往復した。

（私のほかに何人も居る様ね）

監房に戻されたミシュリーヌは、入れ代り立ち代り鳴る鎖の音を聞いて、少しは胸が休まる思いだった。掃除の検査はベル看守。締められたままの足錠に呻き、泣きたい心地で這い回って磨いたことなのに、容赦もなくやり直しを二回も命じ威丈高にいう。

「自分の室の掃除も碌々できないような女だから、こんな所へ来るようになるのよ。便器の磨き方がなっていないわ。舐めさせてやろうか。」

「す、すみません。」

女囚は唇を噛み鼻を嚙り、口惜しさを胸にこらえて這い回わるのだった。

（あーあ、やっと済んだわ。ほんとにあの娘ったら意地が悪くて泣けて来そう。今日は外して貰えるかしら? でも、暖かくなって助かるわ。もうセーヌの柳も芽を吹いた頃ね）

考えてボンヤリしていると、突然鉄扉が開いた。婦人看守に案内されて覗き込んで居るのは数人の女性達だ。

「七十八号ッ。お立ちッ」

婦人看守が呟鳴った。この看守は最近どこかの刑務所から転任して来た年配の赤毛で、名は未だ知らない。女性達は行刑監察委員会のご婦人方、せいぜい地味に粧おって来て居るつもりだろうがコンクリートの灰色や鉄扉の鋼鉄の冷たさの中では、まぶしい程の華かさだ。

「あら、ほんと。足錠かけられてる女囚は私初めてよ。まあ、凄く縮めてあるのね。窮屈そう。」

最も若い女性がそういつて、立ちうなだれるミシュリーヌを上から下まで眺め、春の帽子をユラユラさせて監房内を見回わした。

「男だって、ここじゃ足錠は珍らしいのよ。暴れたの? おとなしそうな女囚じゃないこと?」

「他にも、三、四人、足錠かけてあるそう

ね。今日でどの位？」

中年の婦人達が話し合い、婦人看守に訊ねた。

「七昼夜です。理由は房内恣意歩行。」

「へーえ。そりゃまあ、反則は反則だろうけど、その位は大目に見るんじゃないかって？」

「紀律保持についての特別通達があったんですの。」

「そう。そりゃねえ、反則に取ろうと思えば何だって取れるでしょうけど、余りきびしくするのは、どうかと思うわ。ねえ、え」

「そうだわ。ここは刑務所じゃないことよ。このひとだって、無罪になるかも知れなくてよ。」

点呼を受ける位置に立たされたミシュリー又は屈辱の思いに全身を赤く染め、深々とうなだれた頭は何かを押えつけられたように上げ得ず、益々垂れ下って来るのだった。

「あら、じゃこの中に入れられて居ても、その中でさえ自由には歩けない訳なのね。まあそんなの!!」

ひそひそと指さし話して居た若い女性が驚ろいたようにいう。

「ついでだから、もっと中へ入って調べて見ませんか? 監視窓からばかりじゃ隅々まで分

りませんもの。」

後ろの方で房の外に立って居るプラチナブロンズが提案した。

「そうね、ベッドを調べて見なくちゃ」

「そうですか。では、ちょっとお待ちになつて」

婦人看守がそういつて女囚の傍へツカツカと寄り、腰の革サックからキラリと取り出した。手錠だ。右肘を掴まれてハッと気付いたミシュリー又は、悲鳴に近い声を思わず洩らした。

「あッ。か、かんにんして。何もしはしません。おとなしくしますわ。お、お願い。」

見も知らぬ人々、それも着飾った婦人達の眼の前に哀れな囚衣姿を晒すのさえ堪え難い恥かしめだというのに、その上、さも当然のことのように手錠をかけられるのだ。揃えて差し出さねばならない両手が体側で震え、ミシュリー又は掴まれた右手を夢中で引込めようとした。しかし、なれた婦人看守の手は素早く動いて、右手首には既に鋼鉄環が音を立ててくい込んで居た。

「規則よ。おや、手向いする気?」

婦人看守はきびしい眼で睨んだが、視察のご婦人方の手前、さすがにピンタの手は振り

上げなかった。刑務所で女囚達を取扱って来たこの婦人看守は、囚人を縛るのは何とも思ふ筈もなく、番号のついた服を着た女に手錠を拒まれて、意外に思うと共に腹を立てた。

「手錠位何よ、囚人の癖に。おとなしく縛につかないのなら、こうね。」

婦人看守は手錠の片方を握ったまま女囚の背後に回わり、力まかせに、ねじ上げた。苦痛の呻きを洩らすミシュリー又は真正面からご婦人達の眼が、微かに眉ひそめつつ注がれた。脚がよじり悶えて動き、床の鎖が音を立てる。

「そっちも背に回わして。おや?」

更に右手がこじられ捻じられ、悶えてノロノロと背に回しかける左腕がグイとしごき取られ、忽ち左手首にも鋼鉄がガチリと鳴った。両方の環を更に押えて締めつけた婦人看守は、突き放すようにして女囚の背から離れる。

「う、うッ。いたいッ」

手首の苦痛に呻いた女囚が身を悶え、よろけた両脚が足錠にせかれて膝が落ちた。それでも足りず、更に横ざまに倒れる上体が、後手錠の肘で辛うじて床に支えられる。

「まあ、可哀想。ひどいことするのねえ」

大仰に眉をひそめて見せるのは、ピンクの帽子の若い人妻風。

「おとなしく手を出さないときついよ。戒具忌避という反則になるの。手錠は囚人には付き物よ。規則なんだから仕方ないわ。何てったって囚人なんですからね、このひと。」

大きな帽子を傾けて見下ろし乍ら、中年の婦人が冷やかにいった。

「立つのよ。お立ちッ」

婦人看守に叱りつけられて、ミシュリーヌはままならぬ硬い縛しめの両腕両脚をみじめにもがき、固い床を膝で踏張り、必死の思いで立ち上った。鋼鉄にこじられ痛めつけられた手足の苦痛も、全身をこみ上げて来る屈辱の思いに吹き飛んでしまい、喰いしばった歯を低く洩れるのは呻きに近い鳴咽だった。

（他にも女囚は多勢居るのに、どうして私だけが、こんなみじめにされるの）

嚙り上げる鼻に香水が強く匂い、婦人看守の合図と共に婦人連は房内に入って来た。柔らかな衣摺れの音、かぐわしい高級化粧品香り。ハイヒールや靴下を見詰めてミシュリーヌは突然憤怒の念を感じた。掴みかかって彼女達のなやかなドレスを引き破り、彼女達のセットされた髪を突きこわし、そして

その顔の化粧を、この荒れ果てた手でこすり落してやりたい、とまで想う衝動が胸に渦巻く。

「ちょっと薄暗いけど、そんなに陰惨な感じじゃないわね。」

と呟いて、一人が房内を見回す。その濃紫色のドレスの裾がふわりと揺れ、ハイヒールが床に踵を鳴らした。気付いた婦人看守が通路に出て房内灯を点ける。婦人連のネックレスや指環がキラリと輝き、明るさになお身をすくめ喘ぐ彼女の戒具の鋼鉄が冷たく光った。

「どの監房も、このこと同じなの？」

「そうよ、未決はね。」

「満員になったら、どうするのかしら？ 裁判でおそいでしょ。」

「一杯になったらサンテ刑務所を使うのよ。」

けど、ま、どうにかそうならないようには裁判もやってるわね。」

「ね、これじゃ自殺も出来ない様ね。」

婦人連はミシュリーヌの周りに立って狭い房内を見回し、便器を眺め寝棚を検査する。勿論、指先でそっと毛布にふれて見る程度のことだ。

「ほんとにまあ、これじゃ、とっても窮屈

ね。鎖も重そうだし、凄いわね。」

若い女性が女囚の足許を覗き込んでいう。

「鎖を長くして貰って歩けるのかしら？ 痛いんじゃないかって？ あら、やっぱり摺れた痕があるわ。」

「革バンドがあるでしょ。だからまあ、そんなでもないのよ。素足にじかにかけられたんじゃないわ。でも、刑務所じゃ……」

「やめてッ。あなた達、もう行って下さらない？ こんな見世物みたいなの……私、堪まらないわ。あなた達何なの？ 何のご用？」

みじめな屈辱の想いが怒りに変わり、ミシュリーヌは我知らず喚いて身を悶えた。

「こんなにされたこと、おありなの？ 毎日々々黙ってじっと坐り続けるのよ。一口の水も自由には飲めないで、そして身動きしても叱られるのよ。撲られても口答え一つ出来ないのよ。とても辛なくて苦しくて、気が狂いそうだわ。そして、何かといえば罰よ。檻の中でさえ、こんなに縛られて。けど、どうしようもないじゃありません？ この誰に訴えることが出来ます？ 憫れんでなんか要らないことよ。こんな鉄の道具で縛られて鍵をかけられてご覧になるといいわ、どんな気持ち

だか……」

婦人看守がきびしい眼で睨みつけ、女囚の背で手錠がガチガチ鳴る。

「……口では何とおっしゃったって、ちゃんと顔に書いてあるわ。囚人なんだから当たり前だと思ってるらっしゃるんでしょ。そうよ、私は女囚よ。これから裁判を受けて刑務所へ連れて行かれるのよ。ほっというて頂戴ッ」

いうだけいわせておいて、さっと近寄った婦人看守が女囚の尻をバシッと叩いた。

「この方達に向って一体何をいうのッ。行刑監察委員の方々よ。お黙りッ」

「ひがんでるのよね。」

「そうね、無理ないと思うけど……」

若い女とプラチナブロードが眼顔で喧やき合う。

「そうなのよ、あなた。」

中年の婦人が少し後ろへ退って、女囚を真正面から見やりつつそういった。

「私達はあなたの方の味方なのよ。不当な扱いを受けてやしないか調べてるの。気持は分るわ。もう長いこと拘禁されてるのね。いらいらして来るのはよく分ることよ。でも、規則を守っておとなしくしてなきゃ駄目。何度もいうけど、私達は味方なのよ。」

やさしくいつて聞かされたミシュリーヌは忽ち泣き声になった。

「そ、それなら……、この足の錠を解いて下さい。もう、一週間も嵌められ放しなんです。お、お願い。」

中年の婦人は白レース手袋をはめながら溜息を洩らした。

「そりゃ駄目よ。直接には指図出来ないの。あなた、反則したんでしょ？」

「は、はい……」

ミシュリーヌは唇を噛んでうなずき大粒の涙をホロリと流した。昂ぶった気持も鎮まっで、またしても、みじめな哀しさが胸一杯に溢れる。

（規則、規則とおっしゃるけど、どんな規則だか、ご存知なの？）

「今みたいなことをいったりしては駄目よ。もっと苦しい懲罰にかけられるわ。謝まりなさい。謝まれば、私達からそういつて大目に赦して貰えるかも知れなくてよ。」

女囚ミシュリーヌの全身が恐怖にわなないた。

（そうだわ。あんなこと喚いちゃって、どんな罰にされるかしら）

息も詰まる嵌口具、肉の奥底にまでこたえ

るゴムホースの鞭、考えるだに恐ろしい革の鞭、そして何昼夜もの後手錠。ここに拘禁されて既に三カ月。ミシュリーヌは既に暗黒の懲罰房の存在も知っていた。革チョッキのような窄衣をかけられて苦悶する女囚の姿も垣間見て居た。身震いしたミシュリーヌは頭を振って額の金髪を振り払い、床に跪まずいて首を垂れた。

「申し訳ございませんでした。お赦し下さいまし。つい、あんなことを口走ってしまっただけ。ほんとうに悪うございました。お赦し下さいまし」

「そう。これからは、もういわないわね？」

「はい」

婦人連はなおも口々に説教めいた言葉を与え、黙って跪まずく女囚の周りで何やかやと調べたりしゃべったりした後、香水の香りを残して監房を出て行った。合図を受けた婦人看守が忌々しげに後手錠を手荒に外し、最後に房を出て鉄扉を閉じる。若い女性のグリーンのスカートと靴下の縫い目が鉄扉の向うに消え去るのを跪まずいたまま悲しく見送った。

（このごろの囚衣の布地はよくなっちゃって!! シャワーは余り等々浴びさせるとかえって為

にならないって!! 何いってるのよ。ああ、出して欲しい。出たいわ」

しかし、番号の打たれた服をまとい鎖を引き摺る身は、この監房の檻から一步もたりとも自由には出て行けないのだ。鉄扉の施錠がビシーンと鳴り響き、女囚は床に両手をついて、よろめきよろめき立ち上ったものだった。

委員会のご婦人達の口添えがあったお陰だろ、不遜な言葉に対する懲罰をミシュリーヌは免れることが出来た。そして、その日の夕方には足錠も解いて貰えた。勿論、詰所横に連れて行かれて散々哀願を繰返した挙句のことだったが。

「ふん。まあ少しは身に泌みたようだね。」

灰色の瞳の婦人看守は巨軀を揺すって低く笑い、鍵を取り出して待って居たアネットがいそいそとうずくまった。

「じゃ、磨いて綺麗におし。」

「はい」

渡された足錠を膝にずっしりと抱いて、ミシュリーヌは硝子扉の前に坐った。

「ミシュ……リーヌ、助けて……」

少し離れた床の上で呻いて居た女囚が絶え絶えに訴える。窄衣の罰を受けて居るアンジ

エラだった。

「余計な口を利くんじやないのッ」

アネットが叱って詰所に入って行った。アンジエラは反抗したのだ。やさしいアネット看守も、手に負えないアンジエラには冷やかだった。

（苦しいのね、アンジエラ。でも、どうともしてはあげられないわ）

ミシュリーヌは一週間余を両足に曳き摺って暮らした足錠をこすり始めた。

囚衣を全部剥がれたアンジエラは、豊かに引き締った素肌の胸に黒革の窄衣をめり込ませ、涎れを垂らして苦悶して居た。膝を折って床に坐った両足の拇指は革紐で固く括り合わされ、その革紐は床の鉄環を潜って窄衣の下端に結ばれて居る。天井の鎖に結ばれた前足錠は頭の真上一尺足らず、それ以上腕を上げて伸ばすと、緊め上げた窄衣が更に肩に喰い込み肋骨を突き上げて苦しいのだ。腰を浮かせることも出来ないアンジエラは、上体を真直ぐに立てたまま息も絶え絶えに苦しみ喘ぐ。命じられた仕事を、耳掩いたい心地で済ませたミシュリーヌは、検査の通った足錠を、戒具棚にキチンと納め、両手を背に握ってアネットの前を歩き出した。重い拘束具に

馴れた脚がフワフワと宙を踏むようだ。

ミシュリーヌは、黙って引き立てられながら、アネットの不気げんと悩みがよく理解できた。その度に寿命が縮むといわれる窄衣の罰、その苦しみを心にもなく与えねばならないこと自体を呪って腹を立てて居るのだ。

「お前、今日は閑な方達に嫌な思いさせられたのね。」

苦悶の呻きが少し遠のいて、アネットが手をゆるめながらいった。

「そりゃね、有意義な制度だと思うわ。でも今みたいなやり方じゃ私達だって嫌ね。お前だっていい気持はしなかったでしょ」

「はい。おっしゃる通りですわ。」

ミシュリーヌは、屈辱の想いを胸に思い起す。

（あのひと達、今頃はお茶でも喫みながら笑い合ってるわ。私のことも話してるにちがいないわ、面白そうにね。そして、自分達ではいいことをしたと思ってるのよ、きっと。何よ、ひまつぶしに見物しに來ただけじゃないの。そんな暇があるのなら、銀の食器の手入れでもするといんだわ）

ミシュリーヌは空腹をかかえ齒ざしりしながら、独房の鉄扉を入ったのだった。

昭和三十五年度特集雑誌案内

只今本誌旧号在庫の中で、一番古い号なのですが、先月号で広告しましたところ、急に注文が殺到し、35年7月号は残り数冊、6月号、9月号も各々残部十数冊となりました。未見の方は、お申込み下さい。但し売切れになりましたら、ご容赦願います。

昭和35年6月号 哀憫美形特集号 定価三〇〇円
昭和35年7月号 白線地帯の飼育室 定価三〇〇円
昭和35年8月号 不安と羞恥と嘆願 定価三〇〇円

最近刊行本誌特集号限定版案内

○臨時増刊 「写真と絵画」 文献特集号

定価 五〇〇円 略号(文献)

○限定版 △美しき縛しめ▽ 第三集

定価 一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版 「豊満と清楚」 写真集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版 △美しき縛しめ▽ 第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

臨時増刊 「悦虐小説と悦虐写真」特集号

第一集から第五集までの中、第二集を除く四集は全部売切れました第二集のみ若干残部がありますから、お申込み下さい。
第二集「悦虐姿態特集」 定価 三〇〇円 略号「悦二」

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム
限定版グラビヤ印刷写真集 豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

「モデル」 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思ひます。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するために、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) △

(一) 豊満をくびる……大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二) グラマーの縄目……長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三) 豊満裸身の陶醉……長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四) 鼻をいためつける……長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五) 荒縄の緊縛感……大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六) 黒と白の対照……大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七) 責めに疲れて……大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八) 戯れの縄プレイ……新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
(九) 襲いくる魔手……新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

(一) 首締め縛り……新井マリ子
のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。
(二) 猿ぐつわ非情……新井マリ子
開股しばかりの上に非情の猿ぐつわが……
(三) 開股棒しばかり……新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(四) 絶叫のワソカット……大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(五) 痛さに喘ぐ……大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(六) 首縄と足縄……大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変えろ。
(七) 縄に狂う……大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(八) 足首の縄目……大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(九) 縄による姿態の変転……大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一〇) 緊縛美の誇示……長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(一一) 美しき肢足……長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(一二) 全裸緊縛の羞ら……長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(一三) 両手吊りと足首……五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒される。
(一四) けがされぬもの……五月亜紀子
清純な美しさが、この全身に漂っている。
(一五) 猿ぐつわを噛ます……大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
(一六) 荒縄への誘致……大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(一七) 噛まされた猿轡……大塚 啓子
珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
(一八) 猿ぐつわと縄……大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

(一) 緊縛女体操縦法……大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
(二) くねらす豊満女体……大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(三) 棒責めの序曲……新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、
(四) 答打ちのポーズ……新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(五) 素晴しき美身……長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに……
(六) ポリウムを縛る……長野 良子
縄をはねかえす素晴しい女体の重量感。
(七) 容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ……長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(八) 開股しばかりの表情……大塚 啓子
開股しばかりになった女の顔のアップ。
(九) 開股しばかりの全貌……大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(一〇) 伸ばされた足の表情……大塚 啓子
びんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(一一) 開股ざらしの表情……大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(一二) 強盗侵入の構想……新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(一三) 緊縛女体の鑑賞……新井マリ子
自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(一四) 炊事場の嗜虐場面……新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(一五) 美しきトルソ……大塚 啓子
胸、臍、ウエストが縄によって捕捉。
(一六) 遅ましき臀部……大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(一七) 全裸の背面緊縛美……大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴らしい。
(一八) ビニール・コード……大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

妖異女斗美八景

佐藤健児

第八景 静御前の最期

配役 静御前……村松英子

桔梗姫……三田佳子

源九郎判官義経が衣川で討死した文治五年の春から半年も経たぬ秋九月、義経の愛妾静御前の隠れ住む伊豆修善寺の真珠寺館にも一手の軍勢がおし寄せた。といってこれは頼朝からの正式の討手ではない。頼朝は奥羽の藤原氏の勢力を一掃する思わくもあって義経を攻め殺したが、しかし頼朝の武将達の中には和田、畠山はじめ判官びいきの者達は頗る多い。そこで義経討伐と同時に、頼朝が鎌倉にある静御前の処分を命じた時にも、誰もお受けする者がなかったばかりか、御台所政子が強く反対してこれを庇護したのである。それ

にはもとより女同士からくる静御前への同情ということもあったが、同時に当時頼朝の恩人として隠然たる勢力をもっていた梶原景時一族に対抗する北条氏一族のかけ引といった政争がからんでいたのである。

そこで梶原等反義経派の襲撃を恐れた政子は、さらに北条氏の領地である伊豆に静御前をかくまったのである。最時にとってはそれが頼でたまらない。宿敵義経の愛妾を生かしておくことは、それだけでも自分の身の危険である上に、ことにそれが日本一の白拍子として人気のある静御前とあっては、彼女を中心に北条ばかりか、和田、畠山、佐々木といった反梶原派が結集することは目に見えてい

る。どうしても静御前を討たねばならないが以上の状況から公に軍を動かすことは出来ない。とすれば残るのは暗殺という手段しかなく、といって北条氏の手が者が嚴重に警固している真珠寺館に刺客を送り込むのは難かしい。しかし、そこは腹黒い景時のこと、

(右大臣公は若宮堂の舞以来、静御前を憎むことは甚しいし、彼女が生きていることは、わし同様の不安を持って居られる。ただ御台所と北条氏一族に気兼ねをしていられるだけのこと。静御前を討ってしまったら、後のつくりはどうでも出来る。)

と独断でおのれの私兵を指し向けたのである。しかもあくまで梶原家が多勢の軍を動か

したと悟られぬよう、討手の兵は精銳の小勢のみにして、館の者を一人も逃さぬよう、四方の要所に重点的に兵を配ったのである。ただ奇異なことは、その討手の大将は武者姿ながら夜目にも、それと分る妙齡の美女であったことで、

「目指すは静御前一人ぞ。余の者は首を取らず、斬り捨てて通りや」

烈しく下知して館に乱入したのである。

そんなこととはつゆ知らず、衾の中にあつた静は、近習の武士や侍女のけたたましい叫び声に、浅い夢を破られてガバと起き上る。

「何者かもしれぬ不逞の輩多数、この館へ押し寄せた様子。早く防ぎのお仕度を——」

震え声で告げる侍女に続いて武士の方は「夜目にいずれの手の者とも分りませぬが、旗印も伏せている態を見ますと、大方梶原の軍勢と覚えまする。」

「なに、梶原とな？」

「はい、しかし、かねてから、かかることあらんと、北条より警固に参つて居りました我々、たかが、二百や三百の腰抜けの兵、直ちに討ち退けます故、御安心の程を。」

頼母しく言い捨てて走り去る。そのうちにも雷のような歓声は近づいて、バタバタと戸

障子に当る矢の音も烈しくなった。

「静様、このままでは危うござります。万一流れ矢にでも当たっては大変、退き口をお考えになりませぬと……」

左右から着物を着せかける侍女達の中の年かさのものがそう歎めるのへ、

「うろたえてはなりません。このような夜分に迂闊に外へ出ると、かえって敵の待伏せにかかります。四方の事情が分るまでは、動かずにかかる火の粉をはらうことじゃ。そなた達もその覚悟で打物を取りや。」

さすが古今の名婦静御前、いささかの乱れも見せず、身づくろいする。その落ち着き払った様子に、やっとおのれを取り戻した侍女達は、自分の役目に向つてテキパキと動き始めた。その時また走り込んできたのは、急を聞いて近くの宿所から駆けつけてきた北条家の重臣寺本三郎兵衛で、既に敵とわたり合つたらしく、返り血を浴びたままうずくまると「静様、御油断はなりません。たしかに梶原の手の者と覚えますが、四方の出口を固めた人数は意外な多勢。こちらで次々と伝令を出して近くの味方に救援を乞うていますが、到着には間を要しましょうし、一刻程は必死の防ぎを要すると存じます」

侍女達は再び不安の顔を見合せたが、当の主は静かに微笑して

「ようほんとのことを知らせてたもった。このようなことは妾は常から覚悟の上、ただ妾故に北条の武士方を死なせるのは気がかり。妾等のことはかまわずに、無理な戦はしやるな。」

「お志有難うござります。しかし大事な御方を梶原風情に討たせては、北条武士の面目に関わります。なんの、一刻程の辛抱、御油断をなさらず、早まったことさえなさねば、終局の勝利は必ずわが方にございます。では御免。」

スックと立ち上った三郎兵衛は、これも頼母しい後姿を見せて出て行つた。

「薙刀をこれへ。」

下は平常の長袴のままだが、上衣の白綸子の袖を甲斐々々しく襷でしぼり上げ、丈なす黒髪を鉢巻で締めて、侍女から手馴れの長刀を受けとった静御前は、部下達を励ますように、一振り、二振りしどいて見せて、

「かつて堀河の館で土佐坊昌俊の襲撃を受けた時には、判官殿は弁慶様以下わずか七人の手の者で、二千の寄手を退けなされた。のるか反るかすべては運命じゃ。そうと覚悟をき

めて、そなた等も北条の武士方の手助けをしや。」

「はい。」

あまりにも凛々しく美しい女主人の姿を目の前にして、侍女達も思わず勇み立つ。

しかし手間どっては不利なことが明らかだけに梶原勢の強襲も侮り難く、やがて敵は屋内にも乱入してきて、入り乱れての烈しい斬り合いとなつて、静御前も薙刀を振るざるを得なくなつてきた。

彼女は天下一の舞の名手であると同時に、いわゆる静流を編み出した程の長刀の上手。

並の武士達では齒が立たず、たちまちに数人を斬り倒し、屋内では長刀を使うに不便と見て、次第に廊下へせり出てゆく。それも相手が夫を殺した憎い梶原勢と思うから、知らず力が入って、遂には庭前にまで走り出て武者達とわたり合う。しかもその目ざましい奮戦ぶりが敵の目をひかぬ筈はない。

「おう、あれこそ静御前！」

「討ち取って手柄にせん。」

むらがり寄ってきて、それを遮る侍女のうち二、三人が朱に染って倒れた。

しかし静御前の腕は少しも衰えず、立ち向う武士達は片端から、肩袈裟、腰車と斬り殺

されるのを見て、始めは色と欲とから先を争っていた荒武者連も急に怖毛をふるって尻込をはじめた。そして今度は遠矢にかけようという卑怯な態度に出てきた。これを見て彼方から走って来た寺本三郎兵衛は、

「御方様の見事なお働きは感じ入ってござるが、諸所に喚声が上っているのを見ますと、救援の味方が現われた様子。もはやお引き取りあつても大丈夫、矢の届かぬ屋敷内に入られませ。」

と警告し、静御前も

「さようならば無益の殺生はよしませう。後を頼みまするぞ」

矢を払いながら廊下への階段を上りかけた時である。馬蹄の音を響かせて階段近くまで乗りつけた武者一人、ヒラリと鞍からとびおるなり、

「待たれよ、静御前、この上は妾との一騎打ちが所望じや。後を見せられるな。」

それは姿に似ずまさしく女性の声なので、静も思わず足をとめて振返る。

「一騎打ちとな？ 何者じや、そなたは」

「妾こそは梶原景時が娘桔梗。今宵の討手の大将として、そなたの首級を受け取りにまいった。」

名乗る女は、二十才を幾つも越していないと思われる美貌の持主だが、その大柄な身体をギッシリと鎧、具足で固めている。

「討手の大将とは、右大臣公のお指図か？」

「……………」

「答えられぬところを見ると、景時一存にて私兵を動かしましたな。」

「エー、問答無益。逆臣義経の寵女を討つに公私の詮義はいらぬ。女は女同士、イザ尋常に勝負しや。」

小脇にかい込んだ薙刀をサッと上段にふりかぶる。

「言うにやおよぶ。妾も武士の妻、挑まれて後は見せませぬ。ことにそなた、大将とあらば容赦は致しませぬぞ。」

名ある武将とは違つて、女との一騎討は大気ない気もしながら、憎い景時の娘ということに、異常な斗争心をかきたてられた静は、三郎兵衛の注意も忘れて、再び庭にとつて返して桔梗と相對する。

静御前はこの時二十二才、すでに数年前の乙女時代からその絶世の美を天下に謳われていたことはいふまでもないが、今やそれが瀾漫と咲き匂っている女盛り、絶えざる武術と舞の鍛錬のために豊艶な肉体もひきしまつて

やや瘦型に見え、またその薄幸の運命からくるやつれが、幾分表情を冷ややかにさせている嫌いがあるとはいえ、天が何万年に一回つくった傑作と思われるようなその容姿は、異性はもとより、およそ妬み深い同性の目をも魅了せずにはおかなかったのである。

しかし一方の桔梗姫も、関東無双と聞えた美女で、鎧を掩っているため、その肉体の曲線の美を見るよしもないが、添黒の黒髪に掩われた雪をあざむく白い瓜実顔に、パツチリと見開いた眼、品の良い鼻、丹花の唇、そのすべてが生き生きと輝いて、闇の中に白い花がポツカリと咲き出たよう。

この両美女が秋風颯々たる寺院の境内で、月光を浴びつつの立ち廻りは、まさに凄艶な一幅の絵であったが、折から合戦のたけなわとあって誰も気附くものもない。あるいは梶原方に桔梗の身を案ずる者がかけ寄っても、北条側にさえぎられたのかもしれない。一騎討なら、大抵の荒武者にもひけをとらない静であることを知っているからである。

かくて人も交えず、共に薙刀でわたり合った両女であったが、桔梗姫として静御前の手並の程はもとより心得ている。いなそれどころか、父景時に従って度々西国での平家との

合戦にも加っていた彼女は、京の御所で静御前と試合をしたことすらある。勝った静御前の方は意にもとめなかったのであろうが、武勇自慢の桔梗姫は、素性賤しい白拍子と侮っていた者に敗れた口惜しさを忘れられず、報復の機をうかがっていたのである。さればこそ今夜の討手の大将も自ら進んでひきうけたのであった。

故に静御前の腕前を充分に警戒する一方、しかしあれから数年の間、今日の日のための懸命の修業を続けていたし、「試合には負けでも実戦はまた別なのだ」という自負、それに加えてこちらは隙なく武器で固めているのに、相手は素肌も同様なことに大きな自信を持っていた。

(いざとなれば、相討覚悟に踏み込めば、そこに武装と素肌の差が生じよう)

そういう計算のもとに初手から烈しく斬り込んでゆく。元来薙刀と薙刀の勝負は、そう長く続くものではない。じーっと睨み合っている間も勝機は掴めないのである。目まぐるしく動くことによって相手の体勢を崩し、刃と柄の両方を使って敵の死命を制する。重い長い得物を振りまわすのであるから、そこには特別の技術を必要とするとともに、身の軽さ

が要求される。舞の名手であった静御前が長刀をとっても人並すぐれていたことは、けだし偶然ではないのである。その点皮肉にも桔梗姫の計算には誤算があった。

たしかに武装していることは一つの強味であるが、同時に重い鎧は体の動きを制限して非武装の相手の早い動作についてゆけなくなつたのである。その上静御前のあやつる長刀は予想以上に鋭く、忽ち左の箆手をつき破られ、草摺を薙がれて受けに廻った桔梗姫は後へ後へと退るばかり。

(こんなはずではなかったが……、えーい、口惜しい——)

あせればあせるほど、鎧の重さは身に応えて、足は萎えて動かない。やぶれかぶれに薙刀だけはふりまわしても、足がついてゆかないから、刃先は空を斬り、かえって手元にとび込まれて、追つめられた挙句、不覚にも木の根につまずいてヨロヨロとよろめく。

刹那——空に孤を描いた静御前の長刀の柄が、ものの見事にその足元を掬ったからたまらない。あわれ、桔梗姫の女体は宙に一転して大地に叩きつけられ、起き上ろうとする咽喉元をぐいと長刀の鎧の先で抑えつけられてしまったのである。

「如何、桔梗殿、静御前の手並みのほど御覽ぜられたか。」

とさわやかな声を浴せられても、

「ム……ッ、ク、ククッ」

苦鳴を發して桔梗姫はあがくばかり。まさに勝負はあったのである。普通ならば心ゆかしい静御前のこと、相手が手弱女とあれば、その敗北を認めさせて、生命だけは助けたであらう。そうすればこの直後に起った恐るべき運命の転変もなかったのだが――。

しかし、この時に限って静御前の胸に

（憎い、梶原の娘――）

という瞋恚の炎が燃え上っていた。それで「九郎殿への手向け、梶原の娘であるそなたの首申し受けまするぞ。覚悟――」

と引導を渡して、片手で長柄の柄を握っているそれを突き放して、刃を返してサッとふりかぶったのである。しかしその動きには、相手は得物をぼうり出しているのだし、腰の刀を抜く暇など到底ないというわずかな心の油断が手伝って、何時になく緩慢なものがあつたことはいなめない。たしかに腰の刀を抜くのでは間に合わなかったのであるが、その一瞬の隙に驚くべき運命の悪戯が待っていたのである。ちょうど倒れた桔梗姫の右手のと

ころに討死した者の刀がぼうり出されていたのだ。

それは桔梗姫の僥倖というよりは、むしろ薄幸の佳人、静御前の悲運を嘆ずべきであらう。

今しも恐らく桔梗姫の匂うような頸筋目がけて振りおろされた薙刀をかいぐぐって

「とうっ！」

無我夢中で捨身の一躍、右手に持った刀を横なぐりに払いぎま、桔梗姫の体が斜め横に飛んだ。同時に

「アアッ！」

と帛を裂くような絶叫は、意外！ 桔梗姫の口からではなくて、静御前の口から出たものであった。

さしもの勇婦もこの不慮の一刀を交す術はなく、一瞬早く右の脾腹をしたたか斬り割られ、折角敵の体にふれようとした長刀も途中で力を失って、その手をはなれてカラリと地に落ちた。

「ウッ……ム……」

絞るようにうめいて、暫くは傷口をおさえたまま、長身をのけ反らせていたが、やがて力尽きて花の姿もあらばこそ、もんどり打って庭前の秋草の中に倒れ込んだのである。

同時に桔梗姫の方も、よろよろとよろめいてガクッと片膝ついた身体を刀でや々と支えた。もとよりこちらは何所も斬られたわけではないが、死を目前にした極度の緊張に、まだおのれが生きているのか、死んでいるのかそれも分らぬ状態のままに呆然としていたのである。しかし、そのうちにまだ息は絶えたわけではなく、懸命に身を起そうとあがいている相手の姿に目がとまると

「おお」

と始めて我に返った。そして

（妾は勝ったのだ。妾は確かに生きている。

何所も斬られた痛みはないし、反対に相手は斬られて地上に倒れている）

改めて見るおのれの握っている刀がベツトリと血塗られているのを認めると共に、払った刀に手応えがあった瞬間、バラバラと生温かい返り血を浴びた感覚まで蘇えってきた。

（討ったのだ、あの憎い静御前を、そして天下第一の長刀の名手といわれた女に、この妾が勝ったのだ――）

奇蹟的な逆転勝の喜びが後から後からとこみ上げてくる一方、

（いや、まだ喜ぶのは早い。相手は天下の名婦、その死首を見るまではほんとうの勝利で

はない)

いみじくもそう思つてキツと心をひきしめたが、それでも早くその終局に辿りつこうとするあせりに、かえつて手足が震える。いわゆる武者振いだ、そこはやはり戦場経験のある彼女のこと、じつとそれをおししずつめつ、相手の様子をうかがう。

こちらは静御前、それまでの勝勢を瞬に失つた無念さは如何ばかり。

(不覚、妾ともあろうものが……)

始めて人に敗れた口惜しさ、それも憎い仇の娘とあつては。その手にかかるよりは、自害したいと懷を探るが、武運の神に見放されたか、もうその力もない。

それをとくと見究めた桔梗姫は、次第に落ちつきをとりもどし、辺りの気配をうかがつたが、勝負がきまるのが、意外に早かつたためか、静御前の危機を北条方にも気附く者はない様子。

(千載一遇、いざ、ゆるりと手柄首をいただくことにしよう)

白鶴の打ち伏したような相手の姿に近づくと、後から襟がみつかんでのけざまに引き倒し、ムズとその上に馬乗りになった。

「静御前のみ首、梶原の女桔梗姫が頂戴つか

まつる。お覚悟あれ。」

前帯にたばさんだ短刀を、キラリと右手に引き抜く。

「アレー——」

その閃光に目を射られて、静御前も無意識に手足をバタつかせて抵抗する。

(梶原の娘如きに首をとられるのは無念)

生への執着というよりは、むしろ同性にしてくれをとつた口惜しさに、さすがの名婦も今は身だしなみも忘れて、細い胴をくねらせ、スナナリとした両の足で地を蹴つて、懸命に刎ね返そうとする。傷の苦痛のために紅唇はゆがみ、晴眼は裂けるほどに見開かれて、乱れた黒髪は大理石のように白い面を掩った断末魔の美女の形相が、蒼白い月光に浮き上つてゐる凄絶さに、桔梗姫も思わず顔を背向けたが、

「ええい、この期におよんで無駄なあがきは静御前の名を汚しましょうぞ。観念して首を授けられよ。」

左手でその襟がみを引き上げ、右手の懐剣でその咽喉に止めを刺そうとするのだが、静御前はなおも左手の甲で咽喉を防ぎ、右手を相手の目の前で振って抵抗するのである。

それはあくまでも戦を捨てぬ斗志ともいえ

て、桔梗姫ももてあました。そうこうするうちに北条方の援兵が加わつては大事と、彼女もあわてだした。

「作法をもって討とうとするのに、さりとて往生際のわるい。所詮は武家の娘ならぬ白拍子の本性と見える。しからばこちら、それなりになぶり殺しにするまで、御免。」

言いさま、咽喉に向けていた短刀を今度は拳下りに、そのふくらと張つてゐる腹のあたりにグサリと突き立て

「アッ——」

と悲鳴とともにのけ反るのを、動かせるやらず、引き抜いた第二刀で、今度は腕を伏せたように盛り上つてゐる両乳の間を、力まかせに抉つたから何でうたまろう。

「うーん」

と一声、五体をぐつと硬直させ、両手で虚空を掴んでしばらくあがいていたが、あわれ一世の名花も遂に玉の緒がきれたと見えて、やがてぐつたりと四肢を伸ばすと、それきり動かなくなつてしまつた。

(ああ、手間をとらせたこと)

かつてない荒料理に、ホツと熱い息を吐いて、桔梗姫も左手で額の汗をおしぬぐい、喘ぐ息をおし鎮める。そして改めて今讀ちとつ

たばかりの相手の姿をしげしげと眺めたが、
（聞きしにまさる美しい人。おとなしく討た
れてくれれば、こんなに無惨な姿にしないで
済んだのに……）

と歎息する。全く胸から下は朱に染んで、たましい限りだが、それにしても上半身の美しくしさはまた格別。丈なすおすべらかしの黒髪に掩われた肌の白さは一際冴えて透き通るようで、傾いた横顔の深くくびれた顎の下から耳の下まで夢のように流れる曲線の美しさもさりながら、またそこから柳の肩にかけて鶴のそののように長くうねっている頸すじの膈長けたなまめかしさは、この美女独特のものであった。その頸が今や手弱女の手によって切斷されようとしている。

（ほんとにきれいな頸筋、斬るのが惜しい位
――）
桔梗姫も魅せられたように左手でもってそ
の滑かな皮膚を撫でていたが、今度はその指
先をすべすべした顎にかけて、ぐいとその面
を正面に向けた。

桔梗姫も魅せられたように左手でもってその滑かな皮膚を撫でていたが、今度はその指先をすべすべした顎にかけて、ぐいとその面を正面に向けた。

梗姫に刃を当てることをためらわせたのである。刻、一刻、手に取った花の美しくさに桔梗姫が恍惚として刻をうつしているうちに、やがて辺りが騒々しくなつて

「静御前は、いずこにおわす？」

「北条の手の者が加勢にまいりましたぞ。」

「梶原勢を討ち退けましたぞ」

呼ぶ声に耳朵を打たれて、愕然と我に返り
(迂濶、折角一騎討で静御前を討ちとった名
譽も、妾まで討たれてしまつては何にもなら
ない。といつてこの首とらいでは—)

急に臆病風に吹かれた彼女は、あとは無我夢中で、左手で静御前の前髪をムズと掴み、逆手に持った右手の短刀を、その長い頸すじのどの辺に当てたかも覚え、グイグイと力にまかせておし斬ると、胴体から離れた生首を左手にスックと立ち上った。

幸い闇のこととて北条方も、その気配に氣附いていないようだが、名乗りを上げたなら、たちまちにとり囲まれてしまうだろう。

（といつてこの素晴らしい手柄まで闇に葬ってしまうのは口惜しい——）

とつおいつ思案したが、うかうかして
はもう身が危い。そこで自分の馬に駆けよ
つた桔梗姫は、静御前の首をその鞍の四方手に

すっかりとくくりつけてから、ヒラリと背に
またがり

「敵も味方もよっく聞け！ 静御前の首を梶原景時が娘桔梗がうちとったり！」

高らかに叫んでおいて、馬に一鞭、サツと門外へ駆け出たのである。

「えっ！　なんと……」

「静御前が御最期——」

寝耳に水のその名乗りは一瞬、北条の武士や静御前の侍女達を呆然とさせたので、とっさには追いかける者もなかった。

「ほんとうとすれば一大事——」

「燈りをもて、そして庭をさがせ」

侍女達を先頭に、あわてふためいて庭を探したが、やがて無惨にも首を失つて横たわっている、それとおぼしき死体を見つけて再び呆然と立ちすくむ。

「御主人様——」

とりすがって泣き崩れる侍女たち。

「うぬ、憎つくき梶原の奴ばら」

「あの声はたしかに女であつたな」

「静様ともあろう方が、女の手に掛つたのか

「信ぜられぬが……、ともかく女を引つ捕えて八つ裂きにしてくれん」

「お首だけでも、とり返さねば……」
絶望が憤怒に変わって北条の武士達は八方にとんだ。

一方馬を飛ばせた桔梗姫は、味方を求めてまわったが、会うのは北条方の武士許り。戦い、逃げ、追跡されて、ヘトヘトに疲れ切ってしまった。

(このままでは到底逃げ切れない)
鎧を投げすて、馬の鞍からとりおろした首を抱えて徒歩立ちになって林の中に分け入ったが、首の重さに遂には一歩も歩けなくなってしまった。

(命あつての物種、残念だが、首を持ち帰ることは諦めよう)

「ああ、夢にまで見た静御前の首——」

未練がましく、それを月光にかかげて眺め入る。能面のような端正な死顔が印象的であった。

(この美しくしさに魅入られたばかりに……)

まさに「死せる静御前、生ける桔梗姫を走らす」とは、このことか。その首を藪の中に投げ捨てた桔梗姫は、とうとう梶原の館にも戻らなかったのである。

静御前の首は北条の手の者に探し出され、

政子のもとに届けられた。政子達はこの事実をかくし、表面病死ととりつくりつたが、修善寺にある静御前の祠はもともと首塚であったと伝えられている。(第八景終り)

あとがき

完結にあたり、拙稿を採用下さった編集部の皆様、永らく御愛読下さった読者の皆様に厚く御礼申し上げます。不慣れのため八景を書き上げるのに一年以上もかかり御迷惑をお掛けしましたことをお詫び申し上げます。

〔最新版〕女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13種) 焼付

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)	一組一枚	一五〇〇円
A2	手吊り乳房責め(五月)	五組五枚	五〇〇〇円
A3	ハリツケ猿ぐつわ(新井)	十組十枚	九〇〇〇円
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)	二十組二十枚	七〇〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇〇円
		五十組五十枚	二〇〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A6	全裸乳房いじめ(遠藤)	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A7	乳房責め股間縛り(遠藤)	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A8	全裸後手高小手(遠藤)	膨隆臀部さらし	(遠藤)
A9	全裸正面強烈縛り(長野)	うねる緊縛裸身	(長野)
A10	色褪の開股しばり(長野)	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A11	裸自慢縛りヌード(長野)		(長野)

A17	正面アグラしばり(長野)	正面大の字開股縛	(長野)
A18	遅ましき裸しばり(長野)	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A19	両手前縛り髪首絞	両手前縛り股間吊り	(大塚)
A20	両手膝下しばり(関谷)	両手膝下しばり	(関谷)
A21	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A22	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A23	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A24	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A25	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A26	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A27	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A28	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A29	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A30	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A31	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A32	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A33	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A34	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A35	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A36	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A37	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A38	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A39	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A40	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A41	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A42	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A43	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A44	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A45	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A46	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A47	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A48	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A49	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)
A50	両手前縛り股間吊り(関谷)	両手前縛り股間吊り	(関谷)

A34	盛り上る乳房縄目(長野)	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A35	ムチ打悶えポーズ	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A36	縦縄股間縛り正面	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A37	くさり乳房責め	強制片足挙げ責め	(大塚)
A38	正面乳房くびり縛	鴨居正面ハリツケ	(関谷)
A39	手吊りパンティ落	白バンド後手吊り	(東浦)
A40	豆絞高小手呻	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A41	ガングラム立縛	立木縛竹棒責め	(桜井)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 好色

「生命力が熾んで、欲が深ければ、あらゆる方面にむかって、それが発揮されるのが当然であろう」

「物欲、情欲、食欲などと、区別して、そのうち、どれをより多く所有しているかなどと論じるのは、大まちがいである。欲は元来ひとつしかない。それが旺盛であるか、稀薄であるかということだけである。」

「物欲を失って、情欲だけを燃やす、ということはあり得ないのである。物欲が旺盛だから、情欲も旺盛なのである。これが、好色である」

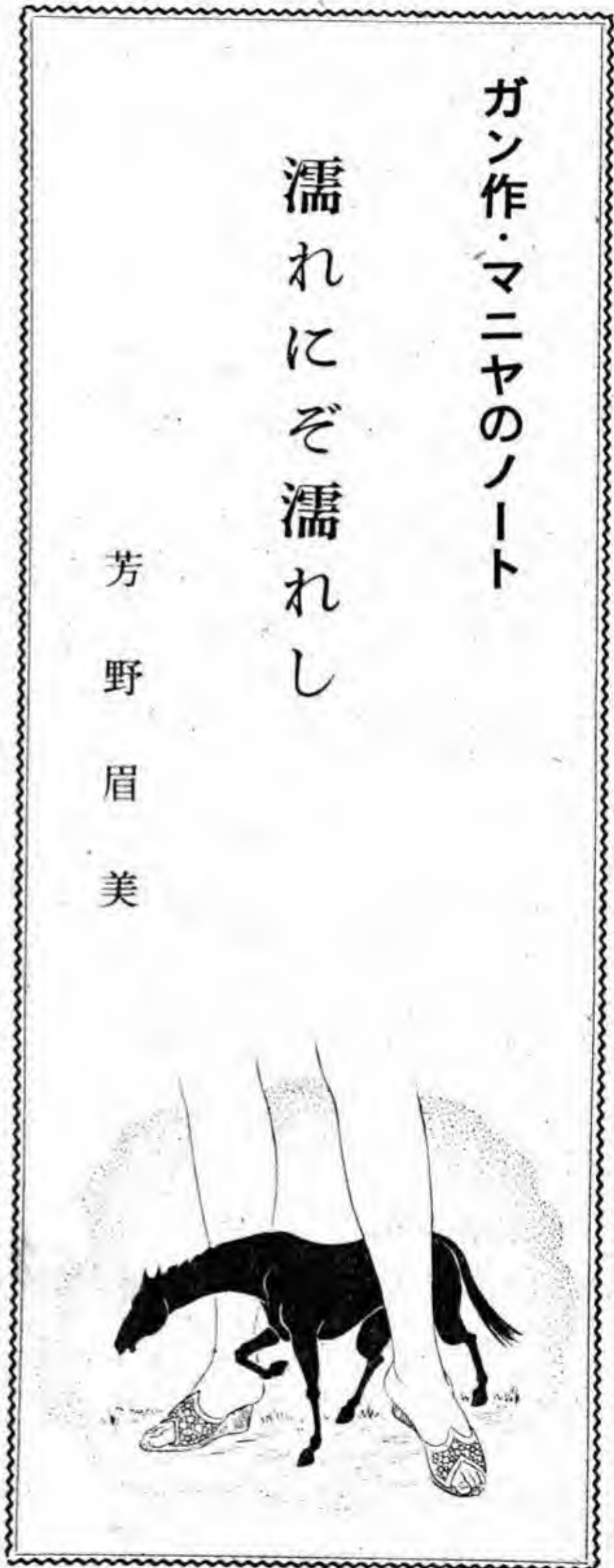
「これまで、家庭第一に、つつましいサラリーマン生活を送っていた中年男が、突如として、若い女に夢中になって、人生を滅茶滅茶にしてしまう例など、彼が好色の徒でなかった証拠である」

十万円以内の月収にあまんじる男は、細君

だけで満足しなければならぬまい。そういうあんばいに生れついでるのであり、その生き方が無難である」

「好色の徒は、女には甘い、仕事は放棄して魂を奪われるほど惚れはしない」

「作家ぐらい、女に甘い種族はいないのである。好色だから、作家に、なったのである」
「汝、死に臨んで、悔いをのこすことなかりしや。神様が、訊ねたら、たぶんこうこたえなければならぬまい。女房以外の女を知りすぎ



たために、肝心の女房に対して好色でなかったことが、残念無念でございます」

以上、柴田鍊三郎、「柴鍊巷談、好色の戒め」文芸春秋三月号より。

生命力の熾烈な方に、一読をおすすめします。

生命力万才。

B 洋式

二月十四日

麻里子に「飲みたい」と云ったら（よくもまあ飲みたい飲みたいって、書くね、俺は。

クドイネ）

「洋式、日本式」

ときた。

「なんだ、それは」

「あら、カッコよ」

「カッコ」

「おトイレのよ」

「ああ」

「ね、どうするの」

「洋式でいきましょう」

「洋式、好きよ、くたびれないから」
だって。

「床に寝て」

「――」

「両膝を立てて」

麻里子の命令が飛んだ。

「頭をあげて」

麻里子の足で風呂桶が押し込まれて枕になる。

麻里子が服を脱いだ。そのまますくっと立ってひややかに見下した。麻里子のすんなりした両脚の間に顔がある。

「いいわね」

と云った。

裸の胸に重圧を感じて呻めく。乱暴だ。

胸に腰掛けた麻里子は、立てた両膝に背をもたれさすと、両足をそろえて顔に置いた。

そう、置いたのである。

無言。

柔らかな感触。

突然、その足が開いた。

床にのびている手を握った。その手に力が入ったようだ。

麻里子の瞳が閉じられた。息苦しい。

C 二割五分

「近ごろ、異端思想家の小説が、まるで文学の正統派のような位置につき、少数者でなく

衆俗にむかえられる可能性がでている。こんな風にさせた元兇は、多分、検察庁だろう」

「サドの悪徳の栄えも、思想の書として私たちの手の届かない神々のタナにおいておけば少数の熱心なサドファンだけで、ひそかに読まれ、これも、裏返しにされた教養小説ということ、何でもない本だったかもしれない」
「ところが文学的事件も、サド裁判などという社会的事件になると、言論の自由にかかわるお家の一大事とばかりに、やはり読んでおこうかという気持になるから妙なもんだ」

「英国の若い評論家コリン・ウィルソンは、ヘンリーミラーは遠い将来にわたって、彼は文芸批評家には困った存在になることであろう。なぜなら彼の作品の七割五分は真面目な思慮深い著作であって、二割五分は恥知らずなわいせつ文学であるのだから。」と云う」

「この二五％のために、日本の読者もそしてドイツの読者も争ってミラーを買い、彼の七五％の思慮深い哲学のためにほんめいに疲れはてているのが現状ではないだろうか」

小松伸六立大助教授「商品化された性文学」より。東京新聞夕刊二月十一日・十三日。
御自分を真の識者だと思っていらいっしやる方に一読をおすすめます。

哲学万才。

D 東雪枝さん

二月十五日

東雪枝さん（三月号「あるサジスチンの告白、虹のあじさい」参照）来店。

東さんは虹が好きだという。男を鞭打つ光景を虹にたとえたのだろうか。印象派の絵を見ているようである。

鞭打ちが好きだという女性は稀少価値がある。ウン。

東さんのお話をうかがっていると、世のMと名乗る野郎共の手紙が、空想ばかりなのに腹が立つ。現実と空想の差はこんなものである。くだらねえ空想的Mレターを書くひまがあったら、オカアチャンを可愛いがっていたほうがいい。Mと宣言するなら、それだけ責任を持ってもらいたいものだ。もう少し現実的になれないものかしらねえ。御自分の大切なSEXのことじゃないの。だらしがねえぞ野郎ども。これは私（芳野）の意見。

東さんがお帰りになってから、しばし、呆然自失、小柄で可愛い（失礼）感じなのに、そこに鞭という重圧が秘められていたせいだろうか。嗚呼。

神酒を拝受したいのだけど鞭がコワイからやめました。右、つつしんで報告します。

E パリモード

(イ) ディオール

イブニングドレスはたどたどしい歩き方をしなければならぬほどの超細型。これを着るとモデルはまるで両足をしばられたような歩き方になる。

(ロ) ギイ・ラローシュ

バレエシューズのように細い皮ひもを足首のところで結ぶクツ。皮ひもをグルグルひざからもものところまで巻いたクツもある。紺と白で刺しゅうしたディナーガウンは横にスリットがはいって、そこからひざまで皮のひもで巻いたクツがみえるようになってる。

(ハ) ビエール・バルマン

フワフワしたスカートは腰のところを細くちよっとひざ顔をかくしたていどの長さ。上着はウエストをしばり、胸のふくらみをだしている。

(ニ) ジャック・エイム

なだらかな肢体の線をあますところなく露出してしまふ黒レースのジャンプスーツ。下

にははだにぴったりの肉色のワンピースをつける。

二月四日東京新聞朝刊「春夏パリコレクションの作品」より。

ムードに弱い方のために。

F 名画

安田徳太郎「人間の歴史3女の全盛時代」
光文社に、二葉のフォト有り。

(1) 小さい泉（十八世紀フランス銅版画）
ところはルイ十五世はなやかなパリのどまん中、こともあろうに貴族の奥方が立……をしてるではないか、と安田先生の丁寧な解説がある。

(2) 野糞をする百姓女（一六三一年レンブラント）

この名画は人間解放の記念碑である、とうれしくなるようなことが書いてある。

親愛なる神酒愛好家の同志のために。

G 聖星学

「生まれた月日によって女性への態度、性能力などに一定のタイプがあるという、この新学説は、世界的に著名な心理学者ユング博士の実証的な研究調査と一致していた」

とあるのは、

「生年月日によるセックス診断」

平凡パンチ二月八日号。

「あらゆるものごとの記録が、数千年にわたって積みかさねられ、現在の聖星学が生まれた。聖星学は統計学でもある」

さて、天宮図で私の性衝動、性能力のタイプを紹介すると、

「キミはセックスというものをきわめて自然な感覚で身につけており、恋愛も大自然のままである。気迷いというものがなく、どんな女性でも掌中におさめようとすればできる星——火星のもとに生まれている」

申し訳けない。そう書いてあるんだから、俺のせいじゃないよ。続けましょう。

「しかし、ひとりの女性に何カ月もかわりあっていられない性分で、その女性をきわめつくしじゅうぶんに堪能すると、また別の相手を求める」

とんでもない、ドンファンじゃないよ、俺は。

「ところがキミは決して精力家ではない。普通の精力しかない」

いやなことが書いてあるな。やめましょうか。いや、終りまで続けましょう。

「それでも、女性を惹きつける能力、夢中にさせるテクニックを身につけている」

そうです、そうです。次——

「それは主星である火星が、軍神マルスで象徴されているように、積極的な開拓精神を情事にも発揮するからだ。しかも情熱的で、攻撃的勇気があるので、永久にセックスのおとろえを知らない」

これにてコマーションシャルを終わります。

天宮図——十二宮は、天文学上昼夜が一番等しい春分の日（三月二一日）を起点として一年を夏至、秋分の日、冬至にわけ、それぞれ期間をまた三等分して十二の宮（白羊宮から双鱼宮まで）を定めた天文こよみで、それぞれの宮の主位をしめる星を、聖星学で主星と名づけたそう。したがって、主星は永久にかかわることなく、人間は主星の支配を受けるとある。

私は白羊宮、主星は火星。

くわしくは聖星学をどうぞ。

これを読んでから、人生が楽しくてしょうがない。

星と暦の好きな方のために。

H サットショーツ

「これまでの和装用パンティは股のところが大きく割れているものだが、これだとトイレのたびに着くずれがひどい」

ということ、

「用を足すとき……」

いいですか

「……左手でサット股部のところを横に開いていただければ、第三のヒフ」と云われる驚異的伸縮性をもつスパンデックスが使用してあるので、簡単にコトが終るというしかけで、

「和装用パンティにくらべ、はるかに薄く伸縮性にとんでいるので、からだによくフィットする」

うれしいことに、

「女性用とペアで男性用も売り出す」

この新製品「サットショーツ」という由。

二月二二日号平凡パンチ「脱がずにOK」おパンティの好きな方のために。

I 残香

平凡パンチは気がきいていて面白い。ついでもうひとつ、一月四日号から拝見すると伊映画「誘惑されて棄てられて」の一シーンがパンチジャーナルに紹介されてある。

主演のステファニア・サンドレリが、なんとおトイレの上でラブレターを書いているところである。

「ラブレターの臭いをひそかにかいでみたまえ。かすかに残り香がすればしめたもの。彼女が完全にキミのものだ」

おトイレの好きな方に。

J ホリホリ鳥の物語

「むかし、むかし、東アフリカのルアンダ・ウルンダイのワツツシ族の若いある王子が、何とはなく恋心にとらわれて日夜なやみつづけておりました。家臣どもはたいへん心配して国中はもちろん近隣諸国までかけめぐって若い王女をさがしましたが、王子の氣に入るような娘は一人もいませんでした」

「さて、このワツツシ族に可愛いがられていたホリホリ鳥も、恋心にやつれて憔悴する王子のために、王妃になるための娘をさがしておりました」

「ある日のこと、ホリホリ鳥が、水晶のように清く澄んだ水をたたえた小池のほとりにきますと、小池のほとりに、可愛い白いパンテイがおちているではありませんか」

「誰のだろう。ホリホリ鳥は池を見渡しまし

た。すると、池から、若い美しい娘が裸であがつてきたのです。綺麗で、若くて、処女だと思いました」

「そう思うと、ホリホリ鳥は咄嗟に娘のパンテイをくわえて……」

誰だ、ホリホリ鳥になりたいと云った奴は。

「……飛びあがりました。ホリホリや、いたづらしないで、私のパンテイを返してちょうだい、と叫びながら、裸の娘はホリホリ鳥を追いかけてきました」

「そのうちに、鳥と娘はワツツシ族の王子にぶつかってしまいました。ホリホリ鳥は、待ってましたとばかりに、娘の白いパンテイを若き王子の肩にふわりとかけたのです」

「裸の娘は、からだじゅうを真赤にしてそこにしゃがんでしまいました」

「王子は自分のさがしていた女はこれだと直感して、パンテイが欲しければ自分の妃になれと娘に云いました」

「かくて、若い二人は結ばれ、国はますます繁栄いたしました。めでたし、めでたし」

ワツツシ族は巨人族に属し、平均二米の大男のよし。この大男が恋心に憔悴するのだから、どういふことになるのかしら。また、娘たちは、ほんの前掛を局部にあてているだけ

で全裸に近いが、羞恥心が発達して性道徳は最高とのことである。

渡辺芳夫『黒いセックス』講談社ミリオンブックスより。

童話の好きな方のために。

K 我、奇クを愛す

高橋鉄『アプノルム』には、フェティシズムを愛する物症と訳し、スカタロジイを排泄物狂崇と訳しているけれど、神酒愛好家である私は、別に「狂崇」しているとは思っていない。神酒を「愛する」とは何事か。

それと同じく、サディズムを極度の加虐症と訳しても、奇ク愛読者の方々が日常使っているSMという言葉に、精神病的な意味はないでしょう。

奇クの読者にマッチした日本訳を考えなければなりませんね。『アプノルム』に書かれたことをヘビー級とすれば、奇クに発表されたSMプレイはせいぜいフライ級で、精神分析医にやっかいになることもないでしょう。

それだけ健康で楽しい。

この頃、奇クをもっと高級にしようとフンゲキしていらっしやる方がいますけれど、「高級」ということはどういう事なのでしょう

う。

精神分析学的に、哲学的に、科学的に、文学的に、芸術的にすることなのですか。

十年来いろいろな作品を奇ク誌上で拝見していますけど、御自分だけが力作だとカンチガイしていらっしゃる作品が見受けられるように思います。

御自分の作品に御自身が酔ってしまうのは勝手だけど、読まされるほうがかなわない。三百円中の十円分の作品でも、読む人がいる

ことを考えて書いて下さいといったら、云いすぎでしようか。自分勝手な作品を発表しても反響は無いでしょう。

ムツカシイ言葉を使って得意になり、難解な文章が高級だと思ったり、哲学的芸術的空論をふりまわすのが好きな方は、全く救いようがないですよ。

いたずらに長い「高級」作品に反響がなく奇クサロンに発表された一葉の夫婦のSMプレイに反響があるのは、どういうわけでしょう。

う。

私が奇クを好きなのは、生活に密着しているからですよ。よく云われますけど、同人雑誌の性格で結構です。奇クは辻村隆氏の作品を中心にして、「生活」という特色をだしながら発展しているではありませんか。

奇クサロンの夫婦のSMプレイの発表は、どの作品より高級ですよ。

生活を土台にしないで、何が高級なんですよ。観念的遊戯しか考えられない人は理解できないでしょうが。

あまりヨソサマのことはフンゲキしないで、すべてを包んでしまうようなフットパラな人間になって、奇クの発展を進めていくにはありませんか。

ハイティーンから二十代のチョボチョボにかけて、私はショーペンハウエルの好きな哲学の学生でした。ムツカシイことが好きだったのは、その頃だけで。

フンゲキしていらっしゃる方のために。

L ブロンド・コンプレックス

もし私に恋してくれる女性がいたら（アリエナイ）私はその女性にオゴソカに命令するだろう。

髪も、腋毛も、……もブロンドに染めろ。

あざやかな金髪のかつらをこしらえろ。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。一、事実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

連載小説

はなとへび

花

と

蛇

続篇（第七回）

団 鬼 六

花 と 蛇

小夜子の受難

「これが村瀬宝石店のご令嬢、小夜子嬢よ。どう、すごい美人でしょう」

銀子は、仲間のズベ公ややくざたちに説明した。

川田と吉沢は、ごくりと唾をのみこみ、椅子に固定されている小夜子の傍に近寄った。ブラジャーとパンティのみを許されただけの、あられもない肌身を椅子に固く縛りつけられている小夜子は、この不意の闖入者を見

てギクリと身を震わせ、思わず椅子の前肢に割り開いてつなぎとめられている両肢を閉じようとしたが、空しく椅子が軋むだけ、真っ赤になった顔を激しく振りながら小夜子は身悶えるのだった。

「どうだい、お嬢さん、ご気分は？」

川田は、ニヤリと口元をゆがめて、小夜子の頬をつき、吉沢は、ゴム紐に指をひっかけ、ピシヤリとはなしたりするのだった。

「助けて、助けて下さい。お金なら、パパにお願いしていくらでももらいますから——」

小夜子は、長いまつ毛に屈辱の涙を一ぱいに浮かべ、左右のやくざに哀願し始める。

銀子が口を開いた。

「そうそう、このお嬢さんは大変な金づるだったわね。粗末にや、あつかえないわよ」

そして、よだれでもたらしそうな顔つきでいる川田と吉沢を押しつけるようにする。

「お嬢さん、心配しなくてもいいよ。貴女は特別待遇、賜りものなんかにはしないから安心おし」

銀子がそんな風にいった時、ちんぴらやく

ざの竹田と木村が入って来た。

「川田兄貴に吉沢兄貴、親分が呼びです。娘の身代金をとりに行くのだそうでー」

川田と吉沢は、美しい獲物の前から爪をひかねばならぬ腹立たしさに舌打ちしたが、一千万円の身代金という大きな仕事に身震いしてすぐに部屋を出て行った。

「さてと、俺も、夫人と京子嬢の調教にもどるか」

鬼源も腕時計に眼をやって、二人のあとを追うように出て行く。

とにかく、恐ろしい男たちが一旦、ここより出て行ったという事で小夜子はほっとしたが、眼の前の不良少女たちの何かねたむような残忍な眼つきが胸につきささってくる。

「お願いです。おとなしくしていますから、この縄をといて下さい。服を、服を返して下さい。」

小夜子は哀願的に眼をしばたき、突っただけの銀子と朱美にいう。

「ぜいたくいうんじゃないよ」

朱美が突っぱねるようにいい、小夜子のふさふさと耳まで覆うウェーブのかかった黒い髪をひっぱった。

「ほかの女たちは、丸裸で色々と芸当を仕込

まれているんだよ。大家のお嬢さんだからそこっちは特別扱いにしてやっているんだ。

あんまり、つけ上ると承知しないよ」

朱美は、陰険な眼つきでそう浴びせた。

銀子は興奮する朱美をなだめるようにして「だけど、大家のお嬢さんが椅子に坐って、足をおっぴろげている図なんて哀れね。椅子から外してやろうよ」

そして、ドアの所で立ち去りがたく、中の様子をキョロキョロ見ているちんぴらの竹田と木村に銀子は声をかけた。

「あんたたち、遠慮しなくても、いいじゃないか。入っといでよ」

二人のチンピラは、照れくさそうに入ってくる。

「美しいお嬢さんの、こういう姿を目にしちゃ、ちよっと立ち去り難いってところね」

銀子は、含み笑いでそういうと、

「このお嬢さんを、その柱に縛りつけな」と命令するのだった。

「お願い、逃げたりしませんから、寄らないで、さわらないで！」

小夜子は、近寄って来たチンピラ二人に必死な声をあげて身悶えする。竹田と木村は、小夜子の足首の縄を解き、縄尻をとって、立上

らせると、小夜子の哀願を楽しむようにして隅のかべにそった柱に、そのきらめくように白い肌を押しつけて、ひしひしと縄をかけていくのだ。

「嫌よ、嫌よ、ああ、お父さん、助けて！」小夜子は、黒髪を左右に大きくゆすって、声を立てつづける。

豊かな胸の隆起を隠すブラジャーの上下を麻縄はキリキリと二巻三巻し、深窓の美女は、かっちりと柱を背に立縛りにされてしまったのだ。

「さすがに宝石商の箱入娘だけあって、ピカピカするような肌をしてるわ」

「全部、脱がしてしましましょうか」

小夜子の両腕を揃えて、かっちりと柱に縛りつけると、竹田はニヤリとして銀子の顔を見上げた。

「ふふ、男のあんたたちにゃ、ちよっと気の毒だけど、このお嬢さんは一千万円の金ヅルなんだものね。あんまり、ひどい事をするわけにやいかないのよ。社長命令でもある事だしね」

竹田と木村は未練たらしげに、小夜子のきらめくような白磁の裸身に見とれている。

「まあ、馬鹿みたいに突っただっていいないで、

こっちへ来て、お飲みよ」

朱美は、二人のチツピラを手招きして椅子に坐らせ、ウイスキーを注いでやる。

「あんた達にもずいぶん世話になったからね。仲間の者達をここへ呼んどいでよ。酒でも飲みながら、大金がころがりこんで来るのを待とうじゃないか」

朱美にいわれて、竹田は二つ返事で表へ出て行き、仲間のチンピラ達を七八人ともなつてもどつて来た。いずれも、十七八の連中でニヤケたようなのや、妙に薄ぎたないのや、が銀子と朱美にペコリ

と頭を下げ、そろそろ入って来たが、あられない姿のまま、柱に立縛りにされ、恐怖におののいている小夜子に眼をうつすや、



「ひやー、すげえ別嬪だな」と、そのまわりに寄っていく。

「お待ち、勝手な事しちゃいけないよ。この

お嬢さんは特別なんだからね。うかつに手を出すと、社長のかみなりが落ちるよ」

朱美と銀子はちんぴら達を押しもどし、コップを渡してウイスキーをついでやる。

やむを得ず、これらの若い不良集団は、さらしものになっている小夜子の周囲に円座を組むようにしてすわりこみ、わいわいはしゃぎながら、ウイスキーを飲むのだった。

小夜子は、美しい横顔を見せて顔を伏せ、膝頭のあたりをブルブル震わせている。恐しさと羞しさで、震えがとまらないのだ。

「畜生、いい体してやがんな。ね姐さん、いいじゃありませんか、眼の保養ぐらいさせて下さいよ」チンピラ達は口をとがらし始める。

兄貴達ばかりいい目をして、俺達はいつも貧乏くじばかりだ、などと不平をとえ始めるのだった。

銀子は、ニヤニヤ笑って、ウイスキーを飲

み、チンピラ達のばやきを聞いている。

「美津子の時だって、しっかり働きやスケにする事が出来るといいながら、結局は吉沢兄貴のものになったじゃありませんか。浣腸まで俺達にさせて、ハッスルさせるだけさせとさながら、全く、トビに油あげですぜ」

竹田は盛んにぐちり出す。

「ふふふ、そうだったわね。まあ、そうぐちりなさんな。そのうち、埋め合わせをつけてあげるから」

銀子は、そういいながら、ウイスキーを一飲みして立上り、恐怖と羞恥にさいなまれている小夜子の横に立った。

「ねえ、お嬢さん、ここに居る坊や達は、おんば日傘で育ったあんたとは違ってみんな泥まみれの苦勞の末、ぐれてしまった連中なのさ。どう一つ、この血の気の多い若い連中に善根をほどこす意味で、生まれたまんまの姿になって眼の保養をさせてやってはくれないかね」

小夜子は、それを聞くと、ギクツと全身を震わせ、ひきつったような顔になって激しく首を振った。

「嫌っ、嫌です。お金はきつと、パパが都合してくれまますから、どうか、どうか、もう許

して！」

小夜子は必死になって叫び、たまらなくなつたように泣きじゃくるのだった。

「温室育ちのお嬢さんの素肌を、一眼、この連中にすっかり見せてやっくれよ」

朱美もいったが、小夜子は激しく泣きじゃくり、必死に首を振って、許して、許して、を連呼する。しよちなし、といったポーズをとって朱美は、チンピラ達の方を見ながら「どうしても嫌だとさ。何しろ、大した金ツルのお嬢さんだからね。あたいとしても、これ以上無理に頼むわけにゃいかないよ。いいじゃないか。こんな美しいお嬢さんの、こうした姿を見るだけでも有難いと思わなきゃバチが当たるよ」

といったが、かなり酒気を帯び始めたチンピラ達は、わいわいと蜜声をあげ始めた。

「出し惜しみするねえ」

「脱がしちまえ」

チンピラ達は今にも立上って、小夜子からむしり取ろうとする気配を見せる。

銀子は口元を歪めて朱美と並び、チンピラ達から小夜子を守るような恰好で立ちはだかつた。

やかましくがなり立て始めたチンピラ達に

閉口したように朱美は、小夜子の美しい顔に眼をやる。

「ねえ、お嬢さん、この連中は気分をこわすと野犬みたいになっちゃうのさ。あんまりおこらせるとかえって損というものよ。だからさ、ちょっと、おっぱいぐらいのぞかせてやってよ。ね、それくらい、いいでしょ」

そういうと朱美は、恐怖に眼をつりあげている深窓の美女にせまると、いきなり、ブラジャーの片側をずり下げて、ふっくらと丸味をもつ乳房の一方を露出させてしまった。

あつと小夜子は顔を真っ赤にして、狂つたように首を振ったが、わつとチンピラ達は大喜びである。

全部は剥がず、わざと片一方だけひき下げて、弾力のある白い乳房の一つをさらけ出させてしまうという銀子の意地悪さ。と同時に朱美も、それに呼応するように、

「お臍ぐらいはいいでしょう。はつきり見せてごらんよ」

ゴムヒモに手をかけるや、有無をいわさず少しひきおろして、形のいい臍を露出させてしまった。

「や、やめて！」

小夜子は、かつと頭に血をのぼらせて、赤

くはてった体を石のように硬化させる。

「ケケケケせず、姐さん、さっぱりとっちま
って、お嬢さんを涼しくしてやんなよ」

チンピラ達は、どっとわき立った。

「これ以上は駄目だよ。さあ、みんなじゃん
じゃん飲みなよ」

銀子は、チンピラ達にウイスキーを再び注
いで回る。

屈辱の極致に身を震わせて嗚咽する深窓の
美女を酒のさかなにして、熱気のこもった酒
宴が始まった。

段々、酩酊してくるにつれ、チンピラ達は
次第に狂暴な眼つきになり、ともすれば立上
って、どうしようもないみじめな姿の小夜子
に近づこうとする。

それを幾度も制しながら、銀子と朱美は、
「いいかい。勝手に手を出しちゃ、社長の大
眼玉を喰う事になるんだよ。」

と、念を押すと、この場を悦子にまかして
立上り、三階の調教室をのぞきに行こうとす
る。鬼源の静子夫人と京子に対する調教の迫
いこみぶりを急にのぞきたくなつたのだ。

女体の悲しさ

静子夫人と京子は、鬼源の調教、つまり、

レスボスの演技が一まずおわって、わずかの
休けいをとらされているところであつた。部
屋の隅の床の上に、二人の美女は互いに背を
合わすようにして、縛り合わされ、美しい顔
を伏眼がちに伏せているのだった。

今まで強制され、演じつづけていた魂も凍
るばかりの……演技に対する猛烈な自意識
がこみあがってくるのだらう。時折、二人の
美女は、たまらなくなつたように声を震わせ
て互いに嗚咽するのだったが、それはただ羞
恥と苦痛故ながす涙ではなく、鬼源に強制さ
れたプレイを演じているうちに、何時しか演
技というものを超越し、陶醉めいた気分につ
つまれて、静子夫人と京子は、何か離れられな
いものをお互いに感じ合う結果となり、そこ
に、ふと女体の悲しさを感じとって、泣きつ
づけるのであつた。いいかえれば、田代や森
田、そして、鬼源達の囂りものとなり更に今後
も、そうした屈辱の世界より逃避する事の出
来ぬ自分達の運命を知る時、その肉体的、精
神的な苦痛より逃れる手段として、このプレ
イは二人の美女にとっては、一つの救いにも
なつていった。今の境遇を互いに慰め合い、
いたわり合うために夫人と京子は一切を忘れ
た思いで、いつしか必死な思いをこめてプレ

イをし合うのだった。そして、それが皮肉に
も本当の意味の同性愛に進行して行つたので
ある。

「——奥様、許して、許して下さい」

京子は、鬼源に……で、不本意なが
ら静子夫人を責めているうち、はしたなくも
必死な思ひになつてしまつた自分を口惜しが
り、すすりあげながら背後の夫人に謝るので
あつたが、静子夫人も首を振りつつ、

「私、ああ私、羞しい。京子さん。お願い、
笑わないで——」

と、静子夫人も京子に責められ、夢中にな
つてしまつた自分を恥じ入るのだった。

「——奥様——」

「京子さん——」

二人の美女は、背と背を押しつけ合うよう
にし、後手にくくしあげられている手と手で
お互いをまさぐり合う。

「ど、どんなひどい目に合つても、奥様、生
き抜きましょう。奥様は、奥様は、もう私の
ものよ——」

「私だって、私だって、もう貴女を離さない
わ」

二人の美女は、背と背を更に強く接触させ
合つたが、その時、隣の部屋で、酒を飲みな

がら一息入れていた鬼源が銀子と朱美を連れてのっそり入って来た。

「へへへ、ご兩人、仲むつまじい事じゃねえか」

はっとして、静子夫人と京子は顔を伏せ合、体を硬化させる。

「お二人とも、なかなか調子が出てきたんで俺もはり合いが出来たってもんだ」

鬼源が手にした一升ビンをラッパ飲みしながら、そういうと、酒気を帯びた銀子と朱美が背中合わせに縛り合わされている静子夫人と京子の左右にしゃがみこみ、ニヤニヤしながら二人の美女の頬を指でつつくのだった。

「ずいぶんと上達したんだってね。どんな具合なのか、ちょっと見学させて頂きに來たんだよ」

静子夫人と京子は、深く首を垂れて嫌嫌と頭を振る。

一人の同性の眼に、自分達の演じる浅ましい姿を見せるのは、十人の男達に見られるよりも辛いのだった。

「ね、道具の演技とやらを見せて頂戴。奥様と京子嬢の成長ぶりが見たいのよ」

朱美が煙草の煙を二人の美女の顔に吐きかけながらいうのだ。

「お願です。今日は、今日はもう許してー」京子が涙にうるんだ瞳をあげ、静子夫人をかばうようにして朱美にいった。

「何いってんのよ。せっかく、ここまで見物に來てあげたのに……」

さあ、鬼源さん、と銀子と朱美は鬼源の顔を見てさいそくする。

「そうだな」

と鬼源は、夫人と京子をニヤニヤしながら見下して、

「じゃ、一つ、美女のスタンド・プレイを葉桜団団長にご披露するとうしょうか」

鬼源は、その方法を銀子達に説明し始めるのだった。

「面白そうだわ」

銀子と朱美は、はしゃぎながら、つながれている縄尻をとって、二人の美女を立上らせる。

「お願い、かんにんして」

静子夫人と京子は、お互いに相手をかばい合うようにして、その場へ身をちぢませようとするのだが、

「もたもたするんじゃないよ。しゃんと立つんだ」

銀子と朱美は、後ずさりする京子の両肩を

わしづかみするようにして立上らせる。そして、鬼源の指示通り、すぐそばに不気味に立っている丸木の柱に京子を、がっちり立縛りにするのだった。

鬼源は、静子夫人の縄尻をとって、カーテンをひらき、次の間に押し立てて行く。そこには、やはり、二米ばかりの丸太の柱が床の中央に打ちこまれてあるのだ。

「さ、歩きな」

鬼源は、ゆで卵の白味のように艶のある静子夫人の肩や背を突きながら柱の所まで押し立て、丸太柱を背にさせて、夫人をひしひしと立縛りにしていく。

カーテンの向こうから、銀子と朱美の声がする。

「鬼源さん。スタンド・プレイをさせるといふのに、どうして二人を別々の柱につなぐんだよ」

鬼源は、夫人を丸太柱に縛りつけながらいった。

「奥様は、ここでいとしい京子嬢のお越しをお待ちになるって趣向さ。つまり、京子嬢はな。そこで、男化粧をするわけさ。」

鬼源がそういうと、朱美がくすくす笑いながら、

「なるほど、じゃ、この柱は、化粧柱ってわけね。ここでつけるわけなんだろう」

「そうさ。今、奥様の方の支度が出来りゃ、そっちへ行くからな」

鬼源は、そういいながら立縛りにした静子夫人の美しい全身を上げ上げ見つめる。

静子夫人は、涙でキラキラ光る黒眼を鬼源に向けながら、精一杯に哀願するのだったが鬼源は別の縄切れを手にして、柱のうしろへまわり、身をかがめる。

「さあ、奥さん、アンヨをうしろへまわすんだ。柱をはさむようにしてな。」

鬼源は手に唾しながら、柱のうしろから、静子夫人の雪白の脛をつくのだった。無残にも静子夫人の両足首を柱のうしろへねじ曲げ、縄でつなぎとめようというのだ。

「嫌っ嫌よ」

夫人は、うしろにしゃがんだ鬼源に両足首をつかまれるや激しく身悶えし、すすり上げる。たまらない屈辱感に夫人は、火柱のようになつた全身を硬直させたが、鬼源は、一切おかまいなしといった顔つきで、馬鹿力を發揮し、力一杯、うしろへ引張り、がむしゃらに縄をかけていく。

「あっ、あ——」

太腿の付け根あたりの激痛に、夫人は美しい顔を歪めて、キリキリ歯をかみしめる。足の関節あたりの痛みもさる事ながら、何よりも苦しいのは、言語に絶するあられもないポーズを組まれた事だ。

立ったまま、柱にまたがった恰好に夫人を縛り終えた鬼源は、仕事の出来具合を点検するように酒に濁った眼で、柱の周りを回りながら凝視しつづける。静子夫人の雪をとかしたように白い、むっちりした内腿には、青い血管がかすかに浮かび上り、地図のように美しく見える。

静子夫人は血の出るほど固く唇を噛んで、この激痛と憤辱を、必死になってこらえているようであった。

「ヘッヘへ、さあ、いらっしやい。というスタイルだな。いい恰好だぜ」

鬼源が煙草を口にしながら、そんな事をいった時、カーテンの向うで銀子と朱美の声がある。

「ね、鬼源さん、京子の男化粧はあたい達がしてやるわ。道具は何処にあるのよ」

鬼源は、静子夫人の肢態に眼を向けながら「あんた達が手伝ってくれりゃ、こっちも大いに助かるぜ。」

といい、どっかりと夫人の前にあぐらを組んで坐りこむと、傍の一升びんをひき寄せて茶わんに注ぎ、ぐいと一あふりする。

「そのこのテーブルの上に、桐の箱があるだろう。その中に入っているものが、道具ってわけさ。じゃ、頼んだぜ。俺はここで一服させてもらうからな」

鬼源は、そういいながら、再び、酒を飲み出すのだった。

「ああ、これね。——まあ、………じゃないの」

銀子と朱美の笑い声が、カーテンの向こうで起る。

「さあ、京子嬢、今日は一切あたい達に任せて貰うからね」

二人のズベ公は、柱に立縛りされている京子に立向かったらしい。

「嫌よっ嫌っ」

突然、周章狼狽した京子のけたたましい悲鳴が起る。

どうともなれと覚悟をしているものの、そんなものを女達の手で………れるという恐怖と屈辱に、京子は狂気して悶え始めたようだ。

「あら鬼源さんならいいけど、あたい達なら嫌だっていうの。心配しなくなっただいいわよ。しっかりと取りつけてあげるから」

銀子と朱美達はキャッキャッと、はしやぎつづけている。

「な、何をするのよ！ 馬鹿っ馬鹿！ ああ……」

京子のつんざくような悲鳴がつづく。

鬼源は、うるさそうに顔をしかめて舌打ちすると、

「何してるんだ。商売もなんだから。あんまり乱暴しちゃ駄目だぜ。やさしく、やさしく……やるんだ」

ケツケケと鬼源は出歯をむき出して笑い、茶わん酒をあふりつづけた。

銀子と朱美の声がはね返ってくる。

「足をばたつかせやがって、仕様がななんだよ。仕方がない。朱美、足をひくくろう。」

カーテンの向こうでは、ズベ公二人と京子の足との乱斗が始まったようだ。

「何でえ、まだ手間どってやがんのか」

鬼源は、のっそり立上り、ふらふら足を踏みしめるようにして声を出した。そして、鬼源の考案した柱割り縛りという無残なポーズを組まされている静子夫人の全身を再び、な

めるように見直し、

「今日は、俺の方は高見の見物だ。銀子と朱美に踊らせてもらいな」

静子夫人は、美しい横顔を見せて、すすり上げている。銀子の声がカーテン越しに聞こえて来た。

「やれやれ、手間をとらせやがって。足をこう縛られちまえば、どうしようもないだろう。さ、どうだい、京子嬢、暴れられるものなら暴れてみな」

京子の激しい鳴咽が流れてくる。

つづいて、勝ち誇ったような朱美の声。

「さ、姐さん。てっとり早くそいつを………：けちまおうよ」

再び、京子の一きわ激しい悲鳴に似た鳴咽が流れて来、それは、あられもない姿で柱に縛りつけられている静子夫人の耳にも突きさすように入ってくるのだ。

「ああ、京子さん——」

静子夫人は、我が身の辛さも忘れたようにカーテンの向こう側で、残忍なズベ公二人になぶられつづけている京子の身を思い、すすりあげるのだった。

そんな静子夫人の動揺を楽しむように、鬼源は相変らず茶わん酒を飲みつつ、ギラギラ

した眼を、そのきらめくような光沢のある全身に向けている。

カーテンの向こう側には、無気味な妖気がたれこめているようだ。

「あっ、あっ、嫌！」

「何が嫌だよ。本当は嬉しいくせに」

やがて、銀子と朱美の高笑い。

「まあ、よく似合う事。——鬼源さん、出来上りよ」

「男勝りの、はねっ返り姐さんとしては、一番よく似合うスタイルね」

そんなズベ公達の笑声に対して、鬼源も笑いながらカーテン越しにいう。

「そいつは、俺の作った芸術品だからな。一旦とりつけてしまえば、ちっとやそっとでは落っこちたりはしねえ。さ、先程から遠山令夫人が身悶えしてお待ち兼ねだぜ。取りつけがすんだら、こっちへ京子嬢をしよっ引いて来な」

やがて、カーテンが開き、銀子と朱美に縄尻を取られた京子が押し立てられて来た。

「ああ——」

京子は静子夫人の前へ押し出そうとする二人のズベ公にさからって、へなへなとその場にちちこまり、嫌、嫌、と首を振り、屈辱に

むせび泣くのだった。

「何をしてんの、さ、行くのよ」

銀子と朱美は、ゲラゲラ笑いながら、かがみこんでしまった京子の柔軟な肩に手をかけ上へ引きつり上げる。

「嫌、嫌っ、ああ、かんにんして！」

静子夫人の前へ、ズベ公達の手で押し出されて行くと京子は全身を火のように燃え立たせて再び、体を石のように硬化させ、前へ押し出されまいとして、足に力を入れるのだった。

「ほんとにうまく作ってあるわね。こうして歩かせても、………ないのだから、不思議だわ」

銀子がクスクス笑いながらいうと、鬼源は「当りめえよ。俺が長年かかって発明したものなんだ。つまり、芸術品でわけよ」

と出歯をむき出して笑う。

京子は、二人のズベ公に縄尻をとられ、邪怪に背や尻を突きまくられて、遂に、静子夫人の正面にすくっと立たされてしまったのである。

京子も静子夫人も、真っ赤になった顔を互いにそむけ合い、呼吸も止まるばかりの屈辱にわなわな震えているのだった。

そんな羞恥の極にある二人の美女に向かつて鬼源はいう。

「わかってるだろうな。お互いにもう生娘でもあるめえし、今更、もたもたしゃがると承知しねえぞ。美津子と桂子に、こんな事の代役はさせたくはねえだろう。俺が教えてやった手筈通りにちゃんと演じなきゃ駄目だぜ」

鬼源にボンと背を突かれた京子。美津子と桂子を代役に立てるぞとおどかされては、どうしようもない。

「——お、奥様——」

京子は、すすりあげながら、鬼源に調教を受けた通り、眼を閉じると、そっと唇を静子夫人の唇に近づけていくのだ。夫人も、この屈辱を呑みこんだよう悲痛な覚悟をして、切長の美しい瞳を固く閉じ、京子の唇に自分の唇を当てがうのだった。

「ふふふふ」

銀子と朱美は、顔を見合わせて笑い合う。

「さあ、うんと気分を出して」

鬼源に命令される二人の美女は、寸時の後には、互いの豊満な………せるようにし、………い、熱気のこもった………じ出していた。次第に二人の美女は、一種の催眠術にかかったよう鬼源に強要されているという

観念を超越した………女同志………移向し始めたのである。

頃はよしと見て、鬼源は、京子に注文をつける。我を忘れてしまったような………ている京子は、鬼源に指示されるまま、静子夫人の艶やかな白い首筋から、ふくよかな眉のあたりに………降らし、次に、豊かな白………赤い二つ………る。更にみずおちを通して、形のいい臍、大腿、そして——。

「ああ、京、京子さん」

静子夫人は、美しい富士額に油汗をにじませ、白い歯をのぞかせ、大きくうなじを見せ、首をのけぞらせる。

ギラギラした眼で、それを凝視しつづける銀子と朱美。

「それ位でいいだろう。さあ、京子嬢、………を、お願いするぜ」

鬼源は、静子夫人の足下にひざまづくようにしている京子に向かって声をかけた。

その時、ドアを誰かがノックする。

「誰だい、せっかくムードが高まってきた時に水をさす奴は——」

朱美が舌打ちして、ドアを開けると、チンピラの竹田と石山である。

「姐さん、川田兄貴から電話なんです。ちょ

「と出て下さい」

という。

「そうかい。きっと、大金が手に入ったんで今夜祝賀会でも開こうてんだらう」

朱美は、わくわくした気分ですうい、

「じゃ、銀子姐さん、あたい電話に出て来るからね。奥様と京子嬢中途半端にしておくのは可哀そうだ。ちゃんと思いを遂げさせてやっておくれ」

朱美は、そういうと口笛を吹きながら外へ出て行った。

そのあと、鬼源と銀子も妙にうきうきした気分になり、

「一千万円とは凄いね。何だか体が震えてくるぜ」

「ほんとね。あたい達も相当な分け前が頂だい出来るってわけさ」

銀子は舌なめづりするような調子で、そういったが、ふと眼を元へもどして、
「あんた達も、しっかり稼いでくれなきゃ駄目よ。さあ、………といきましょう」

銀子と鬼源は、立膝をして、しゃがみこんでしまっている京子のスベスベした肩に手をかけて強引にひき起し始めた。

美しいニュー

フェイス

「もしもし」

朱美は、電話の受話器をとると、はずんだ声を出した。恐らく川田が、一千万円の札束ってのはかなり重てえものだな、とぞくぞくするような嬉しい事をいつてくるのだろうと思ったのであったが――

「ああ朱美か。畜生、小夜子の親父が網を張りやがったんだ」「何だって？」

途端に朱美は、青ざめた顔つきになり、受話器を持つ手まで震え出す。

「そ、それで、どうしたんだよ」

「危機一発、虎口はのがれる事が出来たが、全くだのちが十年



もちぢまつたぜ」

川田の説明によると、金の受取り場所附近には、その筋の者らしい人間が、うろうろしていたのである。それに驚いた事にはその中に、遠山隆義の屋敷へ出入りしていた私立探偵の山崎までが、とりすました顔で新聞などを読み、キョロキョロ四囲に気を配っていたというのだ。取引する場所を時間前にこっそり偵察に行ったからよかったものものし、すぐに指定場所へ顔を出したりしたら最後、田代社長、森田親分以下、一網打尽にされる所だったと、川田は、思い起しても、ぞっとするような口調でいってくる。

「危ない所だったじゃないの。それにしても山崎っていう探偵までが、どうして一枚加わってやがるんだろう」

朱美は、いまいまして舌打ちしてというと川田は、

「今まで誰にも話さなかった事だが、実は、遠山の屋敷に俺の妹が女中になって前から住みこんでいるんだ。そいつが色々俺に情報を送ってくれているんだが、今、妹に連絡をとって聞いてみるとだね、山崎っていう野郎は、村瀬宝石店とは遠い親類に当るらしいのだよ。それで、村瀬の親父が、この身代金の

事について一まず、山崎に相談したってわけさ。山崎は、この事件は、静子夫人誘拐事件とも関係ありと見て、今度はドジを踏まねえよう一千万の金も用意したが、その筋の連中まで大勢用意して、取引場所に網を張りやがったというわけさ」

受話器を通わって、朱美の耳に入ってくる川田の声は、かなり興奮しているようだ。

「ふざけた事をするじゃないの。でも、まあ怪我がなくてよかったわ。早く帰っておいでよ。奴等に対する見せしめという意味で小夜子達に、うんとヤキを入れてやろうじゃないの」

「ところがよ。俺達、連中が張りこんでいる事を知って、あわてたもんだから、帰り道にスピードを出し過ぎて、車を街路樹にぶつつけちゃったんだ。そのため、吉沢兄貴は全身打撲、まあ、一週間ばかりは起きられねえだろう。全く、今日はついちゃいねえ」

「まあ、それで、あんた達どこにいるのさ」
「幸い、車が事故を起こした所が、森田親分とは兄弟分の熊沢一家の近くだったので、俺達は、怪我人をついで、ひとまず、熊沢親分の所で世話になってるというわけさ」

熊沢一家といえは、森田組と同じく、秘密

写真の密造販売などを手がけているケチな暴力団体である。取らぬ狸の皮算用をして、金を受取りに出かけた田代、森田、川田、吉沢の四人は、山崎に網を張られた事に気づいてうろたえて逃走、その途中、交通事故をひき起すという散々たる目に合い、近くの熊沢一家の所へ、ほうほうの態で転げこんだというわけだ。

「とにかく、吉沢の兄貴の体の調子が少し持ち直したら明日にでも帰るが、いいか、もうこうなった以上、あの小夜子という娘を何も特別あつかいなんかにする必要はねえ。因果をいい含めて、静子や京子達と同じようスターにしあげるんだ」

川田は、そういつて電話を切った。

朱美は、大きく溜息をつく。

一千万の大金を今夜眼にする事が出来ると浮わつた気分だったのが、一夜の夢と化してしまったのである。が、それよりも、宝の山に入りながら、張りこまれていると知って逃走しなければならなくなった川田達は地団駄踏んで口惜しがったに違いない。

「畜生、村瀬も山崎も、よく罠にかけようとしやがったな。小夜子をうんと痛めつけてこの恨を晴らしてやるよ」

朱美は、ブツブツ口の中でいいながら廊下を歩き、酒に酔った笑声や嬌声のわき起っている部屋の戸を開けた。

いうまでもなく、そこは、ちんぴら達が葉桜団の振舞酒に御気嫌となり、柱に立縛りにされている小夜子を肴にして、ドンチャン騒ぎをやっている。

朱美が入って来たのに気づいた悦子は、

「姐さん傑作なのよ。今、このお嬢さんがね。蚊の鳴くような声で、お願いです、というからあたいが耳を近づけて聞いてやったらね。ふふふ、おしっこがしたいんだって」

とゲラゲラ笑いながらいい、それにつけ加えるように義子が、

「無理もないわよ。昨日から一度もしてないんだものね。朱美姐さん、ちょっと見てもらんよ。可哀そうにこのお嬢さん、先程から腰のあたりをモジモジさせているのよ」

乳房の一方を露出さし、形のいい臍を丸出しにさせられるというみじめな姿にされ、かっちりと柱に固定されている小夜子は、火のついたように真っ赤になった顔をねじ曲げるようにしながら、義子のいうように必死になって、耐えているようであった。雪を溶かしたように、白く、適度に肉の盛りあがったむ

っちりした太腿から脛のあたりが、海草のようにくねくねと揺れているのは、その努力をつづけている証拠であろう。

時折、小夜子は、切なげにキリキリと歯を噛み鳴らし、美しい眉を八の字に寄せて、うわ言のように、お願い、お願いです。と哀願しているのだ。

義子が、さも楽しそうにクスクス笑いながら、そんな哀れな状態に追いこまれてしまった美女の傍へ近寄って、

「どうしたのよ、お嬢さん。そんなにもじもじしているわけをあたいにも、はっきり聞かせてもらんよ」

小夜子は、もうどうしようもないように、のっぺりした顔をぬうと近づけて来た義子に涙でキラキラ光る美しい瞳を哀切的に向けるのだった。

「お、お願いです。おトイレへ、おトイレに行かせて——」

「まあ、そうだったの。それで、さっきからモジモジお尻を振りつづけていたというわけなのね」

義子は声を立てて笑いながら、
「おトイレなんて上品な言葉は、ここでは通用しないのよ。おしっこに行かせてとはっき

りとおっしゃいよ」

ちんぴら達も、どっと笑い、

「そのままだよ。後始末は俺達が引受けやるぜ」

と、はやし立てる。

悦子が、しゃっくりをしながらいった。

「そうね。本当なら、男達がいうようにさせてしまっただけで、貴女は大変な金ヅルだから特別待遇で事になっているらしいわ。ねえどうします。朱美姐さん」

悦子は、葉桜団の副団長である朱美の指図を求めた。

朱美の瞳の中に冷酷で残忍なものがピカリと光る。

「ふふふ、お嬢さん、もう洩れそうなのかい」

小夜子は、そのいまわしい朱美の言葉に、再び顔を紅潮させて、うつむいてしまう。
「返事をはっきりしな。もう洩れそうなのかと聞いているんだ」

朱美は、急に威猛高になって、うなだれている小夜子のあごに手をかけ、ぐいと小夜子の顔をこじ上げた。

小夜子は、激しくすすりあげながら、美しい瞳を気弱にしばたき、小さくうなづくのだ

った。

「そうかい。でもね。ちょっと事情が変ってきたからね。もう特別扱いにしてやるわけにやいかなかったのさ。つまり、あんたは、今日限り、村瀬宝石店の令嬢という看板は外して森田組のため働いてもらう事になったのさ」

小夜子は慄然とし、眼を大きく見開いて朱美を見たが、ちんぴらや悦子達も驚き出す。

「じゃ、朱美姐さん。この御令嬢にスター業をさせるってわけですかい」

石山、竹田達が勢いこんで朱美に聞く。

「そうさ。この娘の親父はね。山崎探偵と相談しゃがって、社長や親分達をおびき寄せ、引っつかまえようとしたんだ。危く逃げる事は出来たけれど、吉沢兄貴は大怪我をしちまったのだよ」

えっとちんぴら達は顔色を変えて立上る。

「まあ、明日には、親分達は無事御帰館になるだろうけど、相当頭にきている事はたしかだよ。ヤケ酒を飲むって事になるだろうからな、その席で、あんたは充分お詫びをし、お酒の余興に、今、お腹に溜っているものを、すっかり出してお見せするんだ。わかったね。今夜は辛抱して溜めるだけ溜めておくが

いいさ」

どっと哄笑がわく。

小夜子は、恐しい朱美の言葉に、一瞬、気を失いそうになった。四囲に居並ぶズベ公やちんぴらやくざ達が、小夜子の眼には地獄の赤鬼青鬼に映ずるのだった。

小夜子は、小刻みに体を震わせ、わなわなと唇を開く。

「——もう一度、もう一度私からパパにお願いしてみます。ですから、お願い、そ、そんな恐しい事だけは——」

小夜子は、じりじりと迫ってくる下腹の鈍痛を必死にこらえながら哀願したが、

「もう手おくれさ。あたい達はあきらめが早いんだからね。同じ失敗を二度もくりかえすって事は絶対にしない主義なんだよ」

朱美は、ぴしゃりと閉め出すようにいう。

「あんたのお父さんから取れなかった金は、これからあんたが、その美しい身体で、みっちり稼いでくれりゃいいのさ」

と義子。

「いいかい。これからはあんたはあたい達の持物なんだ。」

「いいところの御令嬢でございますってな生意気な顔をするんじゃないよ」

と悦子。

小夜子は、絶望の底へ突き落されたようにああ、と顔を歪めて、苦しげに首を振る。再び、腹部がキリキリと痛み出し、小夜子は、血の出る程、固く唇を噛んで、全身で耐え始めた。少しでも油断をすれば、この悪鬼達の期待している死ぬより辛い羞恥図を展開させる事になるのだ。

「ああ——」

小夜子は、固く噛み合わせた真珠のように白い歯を見せて、首をのけぞらせ、悶え苦しみ出す。

「ちよっとでも洩らしてみろ。只じゃおかないから」

朱美は、魔女のような顔つきになり、ニタリと笑うのだった。

「だって、朱美姐さん。そりゃ無理というものさ。こいつばかりは辛抱しようたって、出来るもんじゃないわよ。もうこんなになっちゃってるんだもの」

義子は笑いながら指で小夜子の腹部をつつく。

「うっ、うっ」

小夜子は、つんのめるように身悶えし、悲鳴をあげる。

「そうね。こんな高級な下着を汚しや大変だわ。用心のために全部取っておいておやりよ」

朱美がいうと、そうこなくちゃ面白くない、といいながら、ちんぴらがわらわらと小夜子の周囲に寄りたかった。

「やめてっ、ああ、お父様！」

小夜子は逆上したようにすさまじい悲鳴をあげる。

「そのお父様を恨むがいいさ。あんたのお父様が、あんたを裏切ったのだからね」

朱美は小気味良さそうにせせら笑い、ちんぴら達のする事を眺めている。

「まあ、美しいわ。まるで、ヴィナスの女神のようね」

悦子も義子も、うっとりとして、小夜子の美しい全裸像を眺めるのだった。

やがて、床の上に毛布が敷かれ、その上に小夜子の豪華な純白のチャイナドレスや本皮のハンドバッグ、首飾りにイヤリング、腕時計などが並べられる。つまり、小夜子の身につけていた一切のものが、ズベ公達の手で、これから競売されるというわけだ。

「さすがに大金持のお嬢さんだけあって、どれもこれも、みんな高価なものばかりね」

ズベ公達は、毛布の上に陳列された品物に眼を見張る。

「この指環だって本物のダイヤじゃないか。十万や二十万じゃ買えない代物だよ」

朱美は、ピカピカ光るダイヤの指環を手にしている。

「そんな高いものは、あたい達、手が出ないわよ。もっと安いものから競売しなよ」

と悦子がいい出したので、朱美は、一番隅においてあるものをつまみあげて、

「さあ、誰か買うものはいないか。フリルのついたハイカラな絹のおパンティだよ」

ズベ公達はキャッキョッと笑合う。

そんな奇妙な競売が一段落すると、ズベ公達は、光沢のある白い全身を充血さし、血でも吐きそうな屈辱に悶え泣いている小夜子の傍に再び近寄る。

「大家の御令嬢らしからぬ、いいおっぱいをしてるわね」

「お尻の肉も充分發育しているわ」

「仕込み甲斐がありそうね」

不良少女達は、そんな事をいいながら、ちんぴら達と立ったり、しゃがんだりして、小夜子の肉体を觀賞する。小夜子は、こまかい汗の玉を額に浮かべて固く眼を閉じ、唇を小

さく開いて呼吸している。悪魔達にいたおられる苦痛と、限界に近ずいて来た尿意の苦痛で、小夜子は気が狂いそうなのであった。

このような姿にされたうえ、更に——小夜子は、獣のようにうめいて、氣力をふりしほり、悶え抜く。

「ふふふ、朱美姐さん、ごらんよ。いよいよこのお嬢さん、限界にきたようよ。お尻の動かし方が、段々激しくなってきたようじゃないの」

義子がいうと、朱美も、せせら笑いながら「村瀬宝石店の御令嬢だもの。いくら苦しかったって、まさか、まさ散らすような事はなさらないと思うよ。それより、お嬢さんの尻振りダンスを見ながら、酒を飲もうよ。少し、酔がさめてきたわ」

そういう哀れた状態に追いこまれた美女の周囲にズベ公と、ちんぴら達は円座を組むようにして坐り、運ばれた新しい一升びんの口を抜き、賑々しく酒盛りを始める。

「さあ、お嬢さん、遠慮せず、うんとお尻をもじつかせた」

ズベ公とちんぴら達は、身も世もあらず悶え苦しんでいる小夜子を一旦、柱から外すと今度は、うしろ向きにさし、柱へ押しつけて

再び、かっちりと縄をかける。小夜子は、卑劣な男女の眼を今度は背後に受けて、悶え苦しむのだった。

「何をしているんだよ。もっと派手に尻を踊らせなきゃ、面白くないじゃないか」

悦子は、そういつて、弾力のある丸い小夜子の尻をピシヤリと平手打ちする。

小夜子は、この地獄の屈辱にもう耐え切る力を失ったよう柱に美しい顔をこすりつけるようにして、声をあげて泣くのがあった。光沢のあるスベスベした背中の中程にどす黒い麻縄でくくりあげられている両手首、ピンクのマネキアをほどこしてある白魚のように美しい指先が、釘のように曲がったり、のびたりするのは、キリキリと突きさすように痛む腹部の苦痛を示すものだと思われる。

朱美の命令で、ちんぴら達は、立上り、再び小夜子を正面に向けさせて柱につなぐ。

精も根も尽き果てたようにぐったりし、全身で呼吸している小夜子を朱美は、口元に薄笑いを浮かべて眺めながら、

「さすがは、大家のお嬢さんだけあって、よくそこまで辛抱したわね。感心だよ。」

「お尻のふり方の上手なのにも感心したわ」と、悦子もいい、ケッケケ、と笑う。

義子が、朱美に向かって、案を出した。

「ねえ、朱美姐さん、こんな風に立縛りにしたまま、もじもじさせてばかりいても面白くないじゃないの。今度は、ちよっと、変った方法でケツを振らせてやろうよ」

一体、どうするとうのさ、と朱美が聞くと、義子は、ちんぴら達に向かって、

「ねえ、あんた達、物置に行つて、木馬を引っぱり出しておいでよ」

オーケー、と二三人のちんぴらが廊下へ飛び出して行く。

「なるほど、そいつは面白いや」と朱美は笑う。

ぐったりとなつていた小夜子であるが、残忍な女達の恐い言葉が耳に入り、耳たぶまで真っ赤にして、一きわ激しく泣き出すのであった。

「何もそんなに驚く事はないさ。木馬といつたつて、丸太に足が四本打ちつけてある単純なものさ。乗り心地は満点だよ。今度は、そいつに乗っかって、お尻をもじつかせるかいわ」

義子が、そんな事をいつていけると、ちんぴら達が、ヨイショ、ヨイショ、と木馬をかついで入つて来た。

義子のいう通り太い丸太に角材の足を打ちつけた簡単な木馬であるが、こんな姿のまま、しかも、限界に達つしている身をその上に乗せられるという総毛立つような恐ろしさに小夜子は、充血した美しい顔を狂気したように振るのだった。

木馬は、ずしりと小夜子の前へ置かれる。

と同時に、義子と悦子が、小夜子をそれに乗せるべく、柱につないである縄尻を解き始めるのだった。

「ちよっと、お待ちよ。お馬にまたがる前にお嬢さん、こいつを一杯飲んでお行き」

朱美は、何時の間にか用意したのか、塩水の一杯入った井鉢を持って、小夜子に近づくと、

「あつ、な、なにをするの！」

小夜子は悲鳴をあげて、狂つたように首を振つたが、悦子も義子も手伝つて、小夜子の首を押さえつけ、唇をこじ開けて、有無をいわさず塩水を流しこむのであった。

臨時増刊号

「花と蛇」 特集号——売切——

一月中旬にて売切れとなりました。在庫がありませんのでお申込にならないで下さい。

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号〔美3〕
頒価一〇〇〇円(送共)

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アートの紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。何卒未見の方は、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

◎緊縛女体百二十態 〔本誌優秀モデル総登場の写真集〕

樹間にさらされる (絹川)	美貌を踏みつける (絹川)	顔枷の装着中 (四方)	被虐のマゾ女性 (東浦)	首吊りのプレイ (大塚)
豆しばりの猿ぐつわ (絹川)	悦虐の園にさまよう (水本)	鼻孔ゼムピン責め (絹川)	大きな猿ぐつわ (竹野)	後手縛り猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)	若肌に襲う白ロープ (若原)	鼻孔から薬液注入 (大塚)	可愛い足首 (絹川)	電光に肌は映えて (梨花)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)	豊軀にまつわる黒縄 (若原)	黒髪なぶり (大塚)	囁まされる猿轡 (東浦)
荷造り縛り人形 (大塚)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)	ピンクカバーと豆絞 (絹川)	喰い込む柔肌に縄 (大塚)	柔肌高手小手 (梨花)
バンド着用しばかり (遠藤)	麗しき裸身の縄目 (絹川)	斬首処刑フォート (新宮)	裸身に投げたタオル (加茂)	高手背高しばかり (水本)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)	両手首吊りさらし (大塚)	緊縛の優美ポーズ (絹川)	後手小手股間縛り (絹川)
ゴム布に包まれて (梨花)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)	後手足首逆エビ縛り (梨花)	くわえた赤い花 (絹川)	柱後手縛りにて (山路)
椅子利用エビ縛り (東浦)	美しい顔をなぶる (梨花)	丈なす黒髪 (大塚)	エビしばり正面 (梨花)	下げられたズロース (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	飛び出す双丘と後手 (長野)	責衣からのぞく乳房 (大塚)	美貌美身の緊縛 (大塚)	十文字しばかり (桜井)
輝く白肌をさらして (関谷)	首縄胴縛り股間縛り (絹川)	美貌放心の表情 (梨花)	首を締めるくさり (絹川)	木洩れ陽に白き肌 (絹川)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)	被虐に耐えた表情 (水本)	後手強烈しばかり (梨花)	手吊りのけぞり姿態 (桜井)	叫ぶ捕われの乙女 (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)	生首フォート (新宮)	従順なるマゾの発散 (竹野)	乳首に咬みつく蛇 (大塚)	汗まみれの被虐 (梨花)
全裸のいましめ (愛川)	祭壇のささげもの (大塚)	手錠足錠首くさり (四方)	後手縛りと臀部 (絹川)	洋服タンスに吊る (大塚)
白晒六尺フンドシ (遠藤)	越中フンドシ緊縛 (大塚)	白晒六尺フンドシ (大塚)	ピンクの腰巻さらし (東浦)	全裸にてもだえる (関谷)
百CC浣腸器責め (大塚)	飛びだした双丘 (加茂)	ガンジガラメの縄目 (絹川)	重圧に耐える表情 (大塚)	黒縄地獄 (四方)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	塩水を無理に飲ます (大塚)	首縄胴絞め股間縛 (桜井)	強烈アグラしばかり (桜井)	るせつの裸身 (梨花)
両手吊りさらし (桜井)	胸部と臍窩の魅力 (遠藤)	引き回される裸身 (絹川)	ボリウムの誇り (大塚)	セーラー服を縛る (梨花)
M女性の本領発揮 (梨花)	臍窩を狙う蛇の舌 (梨花)	豊胸を彩る茶の縄 (大塚)	鏡にうつす裸しばかり (山路)	首縄から膝縄まで (大塚)
足錠をつけられる (四方)		捕われの女学生 (竹花)	惜しみなく晒す裸身 (大塚)	高々と上った後手 (梨花)
			ゴム帽子麗身晒し (梨花)	くびれた胸と腹部 (大塚)
			首絞めに苦しむ (大塚)	カクテルドレスの女 (絹川)
			麗身をもたえさす (絹川)	浣腸責め (大塚)
			猿ぐつわの苦悶 (加茂)	首のくさりに悶える (絹川)
			黒縄にもだえて (大塚)	黒のズロース (絹川)
			全裸の手吊り責め (大塚)	破られたズボン (梨花)
			ゴムの猿ぐつわ (絹川)	正面立姿全身縛り (大塚)
			汚れた縄と輝く白肌 (絹川)	くさりに捕捉される (山路)
			手首足首椅子しばかり (梨花)	亀甲型股間しばかり (大塚)
			あえぐ夫人の表情 (関谷)	長襦袢と腰巻 (館)

〔SM〕より見た世界史シリーズ

悲運の皇女

アンナ・コムネナ

(前)

黒
淵
嬰
一



紀元一〇八〇年の頃、東ローマ帝国は老衰の極、あと数年を待たずして崩壊するものと見られていた。

回数を奉ずるセルジューク・トルコ族は一〇七一年にアルプ・アルスランに率いられてローマ軍をマラズケルトに破り、皇帝ロマヌス・ディオゲネスを捕虜にした。その後を継いだマレク・シャーはサマルカンドを含む中央アジアから北インド、ペルシャ全部、アンティオキヤ迄を支配した。聖市エルサレムもその支配下に在った。トルコ王族の一人ソリマンは小アジアを侵略し、首都をニケーヤに定めた。斯くて回教徒の本拠は東ローマ帝国の帝都から百マイルの所に進められた。そしてエジプトを含むアフリカの全地中海岸とイベリヤ半島は同じく半月旗を翻えたサラセン人の手中にあった。

西方では、ノルマン海賊の血統を引くロバート・ギスカルド(ロベルト・ギスカル)が、南イタリアとシチリアを横領し、ローマ法王と結んで法王の代理官となり「アプリア・カラブリア大管領」と号していた。強盗団のようなものだったかもしれないが、シチリアのサラセン人や分離中のギリシャ会教派を

討伐したので法王グレゴリウス七世はこれをキリスト正教の戦士と見做していた。当時東ローマ帝国のギリシャ正教は法王のローマ正教と対立状態にあり、ロバート・ギスカルドは当然東ローマ帝国を法王及び彼自身の敵国と考えた。そして弱体化した帝国は絶好の獲物に見えた。既に二年前から艦船はオトラントで建造中であり、陸軍はカラブリアに集結しつつあった。此の遠征計画は分離教派を法王の下に帰服せしめる聖戦と称えられた。

帝国が東西から同時に脅かされている時、最も接近し易い北方からはスラブ人が直接に首府コンスタンティノポリスを狙っていた。

帝国の領土は今やトラキヤ、ギリシャの他は僅かな沿岸都市や島嶼に縮小されていた。

そしてその僅かな国土さえも、内部に割拠した地方軍閥が帝国を狙って頻々と起す叛乱に依って残る国力を蕩尽されつつあった。過去

四百余年の間に二十七人の皇帝が下賤から帝座に登り、次の瞬間には更に一段と高い絞首台に登るか又は地下の牢獄へ下りて行った。

現皇帝ニケフォルス三世ポタニアテスも亦、人望無く、実力無くして成上った一人で、暗愚、強慾の上臆病で不評判を極めていた。

此のような状況の中にあつて帝国の武将ア

レクシウスは、イタリア以来の名門たる血統を誇り得ると共に、連続三回の叛徒討伐で国内の安泰を確保した。此の軍功が老帝の嫉妬を買った。讒言により無実の謀叛罪で起訴されそうになったアレクシウスは兄弟三人や息子二人と共に首府を脱走し、城外で本当の叛旗を掲げた。帝国の諸軍は忽ちアレクシウスの味方となり、叛軍三万は首府を威嚇した。

皇帝ニケフォルス三世は叛軍を城外に邀撃する勇氣も実力も持たなかった。首府には二万の官軍が居たが、その忠順は怪しかった。

皇帝は不正に入手した玉座を卑劣な手段で守り抜こうとした。奸策に関する限りポタニアテスも凡庸ではなかった。アレクシウスの姉妹三人と妻や娘、其他一門の女達は急な脱走に同行し得ず、市内の諸教会に隠れていた。

皇帝は其中で重要な獲物が聖ソフィヤ寺院に在る事を既に偵知していた。

アレクシウスは軍を率いて黄金門に迫り、声の届く距離で皇帝に会見を求め、自軍の優勢を説いて、讓位と修道院への引退を要求した。ニケフォルス三世は門楼上からアレクシウスに叛軍の解散を命じた。交渉は勿論決裂した。それを待っていた如くに皇帝は近衛の一隊を麾き、門楼上に二本の礮柱を立てさせ

た。柱には後ろ手に縛られた女が一人宛、嚴重に縛りつけられていた。

一人はアレクシウスの妻イレネ（アイリオン）三十三才の女盛りで豊満な年増だった。大柄で小肥り、色白く愛嬌ある顔と記されているが、傑出した美貌ではなかったらしい。他の一人はアレクシウスの娘アンナ。十五才の少女だった。瘦形で丈も余り高くない年齢よりも一層子供らしく見え、栗色の髪の毛長い、瞳の大きい、彫の深い顔立だった。

二人共膝迄しかない麻の粗衣を着ていた。肩も蔽わず、露出した腕は胸と共に柱に締めつけられていた。膝も足首も揃えて縛られていた。虜囚の両側には短槍を把った兵士が二人宛並び、刺さんとの擬態を示していた。

イレネは自身の屈辱と夫の苦境に耐えずして眼を閉じ、アンナは瞳を一抔に開いて父の姿を求めていた。

「アレクシウスは何処に居る。自分の娘を助ける事も出来ずに迷って居るぞ。何か言ってみるか。」

皇帝は鞭でアレクシウスを指し、続いて同じ鞭でアンナの顎を小突いた。

「お父様。」

アンナは高い綺麗な声で叫んだ。アレクシ

ウスは答えない。そしてニケフオルス三世は十五才の少女が何を言おうとも、アレクシウスの立場を動揺させるに違いないと考えて傍観している。

「私のお父様、婦女子の為に御意志を曲げてはなりません。異教徒からヨーロッパを守り得るのはお父様だけです。コンスタンティノポリス市民に正義と平和を与え得るものはお父様だけです。アンナの覚悟は出来ています。私達に構わず攻めて下さい。」

城壁下のアレクシウスは思わず手を差し伸べて進み出た。併しそれ以上に驚いたのは皇帝の方だった。ニケフオルス三世は手に持った鞭でアンナを連打し、発言を禁じた。一寸の間アンナの声が途切れたが、叩かれながら屈せずに又叫んだ。

「お父様の敵はポタニアテス一人です。軍隊も市民もお父様の入城を待っています。止ってはなりません。何も仰言らないけれど、お母様も。」

アンナの声は其処で続かなくなった。槍を逆に持った兵士が、柄の方でアンナを乱撃した。だが間もなく美少女は柱に縛られた身を震わせて父に訴えた。

「お父様。アンナは喜んで死にます。私が死

んだら、お父様の兵隊も首府の市民も奮い立ちます。恐れてはいません。でも、これ以上生きた尽苦しみたくはありません。お父様、お願い。外れた事の無いお父様の弓で私の胸を射て。」

皇帝は遂に堪らなくなり、兵士から槍を取って石突の方でアンナの脇腹を突いた。アンナは一声呻いて頭を落した。併しニケフオルス三世は、未だアンナを殺す勇気が出せなかった。兵士に命じてイレエネとアンナを後方に退げようとしたが、一旦固定した礮柱は既に抜き得ない状態になっていたし、縛りつけた綱は複雑な上に丈夫だった。血迷った皇帝は今になってアレクシウスの妻と娘の生命を脅迫する宣言を行ったが、アンナに言いたいだけの事を叫ばれた後なので、極めて間の抜けたものになった。その間に意識を取戻したアンナが更に被せた。

「死ぬならお父様の手にかかりたい。早く。」兵士の一人が、アンナの口に布屑を押し込んだ。叫び続けた美少女の声が遂に封じられた。すると今迄黙って慄えていたイレエネが後を引き取った。

「アレクシウス。アンナの言う通りにして下さい。」

アレクシウスは、決心して弓を把った。

「許せ。」

併し部将ゲオルギウス、パレオロゴスが駆寄って矢を抑えた。

「將軍、早まり給うな。」

皇帝はアレクシウスが弓を持ち直したのを見ると忽ち隠れた。アンナとイレエネは漸く城壁の内側に引き下された。イレエネの長く尾を曳く叫び声が消えて行った。

アレクシウスは思い直して軍を城外遙かに退けた。尤もコンスタンティノポリスの二重城壁を強襲するには、相当な準備が必要だった。そしてアレクシウスは偉大な首府を内戦で破壊するに忍びなかった。

イレエネとアンナは縛も解かれずに曳き立てられ、地下牢に監禁された。アンナの舌に対する皇帝の恐怖は常軌を逸していた。放任しては如何なる変事を招くかも知れずというので、十五才の少女は牢内で後ろ手に縛られた上狼轡迄囓まされた。通路を隔てた向う側の鉄格子にイレエネが居た。イレエネは娘の勇気を讃え、且つ励した。アンナは眼でこれに答えた。

アンナの予言通り、腐敗していた城中の兵はアレクシウスの勧誘を容易に受け入れた。

フエナル門は見せかけの攻撃で奪取された。ゲオルギウス、パレオロゴスは迅速に港内の艦隊を接収した。逃走も抵抗も出来なくなった皇帝は人質と引換えに自身の生命のみを購った。イレエネとアンナは解放され、アレクシウスは歓呼の裡に帝座に登った。老齡のポタニアテスは只輕蔑にのみ価したから助命されて修道院へと消えて行った。新帝は無血の勝利を正しく分析し、最大の原動力は可憐なアンナの雄弁であると判断した。皇女の地位に登ったアンナは父帝から篤く報いられた。

× × ×

本篇は表題に、アンナ・コムネナという女性名詞を用いてあるが、実は東ローマ帝国皇帝、コムネヌス朝の開祖アレクシウス一世の伝記である。

アレクシウス帝には妻イレエネとの間に出来た子供が三人居た。長男ヨハンネス、次男イサアク、その下に末娘アンナである。ヨハンネスは後に皇帝となり、コムネヌス朝最大最善の君主と言われたが、皇子時代は寧ろ凡庸な人物と思われていた。イサアクは後にトレビゾンドの君主となったが性格的には兄より遙かに下で、且つ二人共容姿は平凡と言えれば追従になる。アンナだけが一家最大の勇氣

と、コムネヌス家例外中の例外たる絶世の美貌と、現代ならノーベル文学賞受賞確実な文才と、デモステネスかキケロにも比すべき雄弁とを兼備していた。このアンナ・コムネナが皇帝の死後に父の伝記を書いた。稀代の名文を以て聞えるアンナ日記である。

アンナは豊富な語彙を駆使し、流麗な美文調を以て父なる皇帝に対し、英雄、豪傑、名将、明君、篤信者、大政治家等々、最大限の溢實的讃辭を奉呈している。一方その同じ皇帝は同時代に彼の味方だったイタリア人やフランス人から臆病、卑怯、詐偽師、強慾、不信、裏切等凡ゆる惡罵と非難を被っている。そして怖らく、此の両方共が真実だった。

アレクシウス一世は一〇八一年四月から一一一八年八月迄三十七年間東ローマ帝国に君臨し、且つ支配した。彼は帝国を最惡の狀態に於て繼承した。アンナの筆に依れば「皇帝が玉座に登った時、兵營には軍隊が無く、国库には金が無く、国民に秩序が無く、社会に信義が無かった。」トルコ人は遂に首府のアジャ側対岸に現れ、ノルマン人はギリシヤに侵入しつづつあった。アレクシウスの在位期は戦鬪の連続だった。皇帝は勇氣と智謀に於て欠くる處は無かったが、彼の軍隊は規律も訓

練も服従の精神も持たなかった。皇女アンナの賞讃にも拘らず、皇帝になってから後の彼女の英雄は甚だ芳しくない戦績を残した。寧ろ正直に言つて、連戦連敗の記録保持者であり、劉邦や源行家にも劣らぬ位に完全無欠な常敗將軍だった。それでいながら皇帝が死んだ時、帝国は小アジアの大部分とシリヤの一部、島嶼及び沿岸都市多数を回教徒から奪回し、国库は富み、兵多く、子孫數代に亘つて世界中から尊敬される帝座と国威を遺贈した。アレクシウス帝の治世には「歴代皇帝の惡德による神罰が集積され、一時に落ちかかった」如き史上の大事事件が續発し、その悉くが帝国の運命に関わる性格のものだった。アレクシウス帝は、そのすべてを巧妙に乗切り、又は禍を転じて福とした。アンナが絶大の得意を以て記している「国家の不幸と国民の危険が同時に皇帝の榮光でもあった」事は真実として承認さるべきである。

二、

神聖ローマ帝国皇帝ハインリッヒ四世（當時未戴冠でドイツ王ヘンリー四世）は司教、僧正の任命權で、ローマ法王グレゴリウス七世との間に所謂「叙任權鬭争」を展開していた。ドイツの領土中約四分の一が教會領だっ

たから、此の任命権は双方にとって重要だった。法王は『破門』を以て皇帝に対する臣民の服従義務を解き、諸侯は叛いた。ハインリッヒ四世は遂に屈して法王に謝罪し、カノッサに於て雪中に三日間粗衣裸足で懺悔し、漸く赦免を得た。所謂『カノッサの屈辱』であり史上余りにも有名な事件だから改めて詳述する必要はあるまい。此の事件以後、ハインリッヒ四世はドイツ内の叛徒は討ったが南方に進出する氣力を失い、強大なドイツ騎士団を擁しながら空しくアルプス南麓に蟄伏していた。アレクシウス帝は失意のハインリッヒ四世を勵してイタリアに攻め込ませる策を立案した。大管領ロバート・ギスカルドの背後を脅かし、その主人である法王を攻めればギリシャへの侵略を有効に阻止し得るだろう。

此の重大な使命の正使に選ばれたのが十五才のアンナ皇女と知るや全廷臣が驚いた。副使ブリエンニウスが事実上の正使でアンナはドイツの皇子と婚約させられるのだと想像する者が多かった。併しアンナの聡明と雄弁は此の時始めて世に表れた。父帝は手首の縄紋も未だ消えていないような愛娘を一千マイルの彼方に遣し、アンナは期待に応えた。

皇女はハインリッヒ四世の前で愛嬌と言う

より無邪気な微笑を宮廷一杯に振り撒いた。緋の衣裳に金銀の装飾で豪華を誇示したが大きな瞳は正に少女のそれだった。併しドイツの皇帝は、間もなく皇女の論陣に巻き込まれた。アンナは滔々と弁じた。ギスカルドは勇猛だが惨虐、人民は恐れても心服せず、大管領出征後のイタリアは必ず叛き、ヴェニス的大海軍は帝国の味方で、アドリヤ海を制海権無しで進攻する敵は、ギリシャで必ず孤立するに相違ない。斯くて東の皇帝はギリシャに於て戦勝の名譽を得、ドイツ皇帝はイタリアと、そして多分シチリヤをも併合して実利を占めるであろう。

アンナの情勢分析は正確且つ最新だった。その後の推移は、概ね彼女の予想通りとなった。皇女の判断は父帝アレクシウスの武力に對する過度の信頼を除き悉く適中していた。

ハインリッヒ四世は破門の恐怖を説いたがアンナは無難作に新法王の擁立を奨めた。これは後年フランス王によって実現されたアヴィニヨン法王庁の理論である。

両ローマ帝国の同盟は東の皇帝が贈った金品によって強力に支援され、促進された。

放射光の金冠、真珠を三列に巡らした金製大十字架、聖者数名の称号と名を記した金製

聖遺物櫃、純水晶製花器、紅縞瑪瑙製花瓶、アラビヤ産香油を詰めた銀壺一ダース、飾鞍を置いたアラビヤ白馬四十頭、紫紅絹地百反等々。窮乏状態に在ると雖も、伝統ある東ローマ帝国は諸教会の奉納品を少し借用すればドイツ皇帝を驚かす事が出来たし、財政を整理すれば借財を倍にして返済した。ビザンチウム金貨十四万四千枚は一層有力且つ実質的な手段だった。そしてドイツの皇帝がアプリアに攻め入った時には、更に同質金貨二十一万六千枚が現地で贈与される事になっていた。少女外交は偉大な成功を収め、東西の帝国は同盟し、ハインリッヒ四世はグレゴリウス法王との絶縁と、ロバート・ギスカルドに對する宣戦とを決意した。出兵の令は全ゲルマニアに飛び、ヨーロッパ最強の騎士団は続々とタルビス峠を南に向って越えた。

アンナ皇女はヴェニスに向い、此処でも同盟を確認した。此の共和国はアンナの雄弁と東皇帝の重賞予約に動かされて二十隻のガレ―戦艦を出し、皇女自身も旗艦に同乗先導してアドリヤ海を南下した。

アンナが使命を達した時、ロバート・ギスカルドのノルマン軍は既にギリシャに對する

攻撃を開始していた。一〇八一年七月、大管領は全軍全艦船を率いてオトラントを出港した。主将は勿論ギスカルド自身であり、副将は前妻の子でギスカルドの長男ボヘモンド（ボエモン）と、ギスカルドの若い後妻シゲルガイダだった。此の後妻はサレルノ総督の娘で、その美貌と勇猛はギスカルドに前妻の離婚を決意させた程のものであり、骨太だが瘦形で、幾分凄味のある美人だった。彼女が生んだギスカルドの次男ロージャヤは、大管領の後継者に指名されていたが、未だ幼少で、イタリアに残されていた。参考迄に此の年ギスカルドは六十七才、シゲルガイダは二十七才だった。軍の中核は西欧騎士道の精華たるノルマン騎士千三百であり、軽騎兵、重装歩兵、弓箭兵、従者、小姓、侍女、馬丁、人夫等総人員は三万を越えた。但し、此の遠征が「ギリシヤ分離教派に対するローマ法王公認の聖戦」であるにも拘らず軍中には多数のフリカ系回教徒やサラセン人傭兵が含まれていた。此の人数は攻城用重兵器、食糧、資材予備兵器、装甲用獣皮と共に百五十隻の運送船に分乗し、十五隻のガレー戦艦に直衛された。

アンナ日記は得意の舞文で「ヘルクレスと

雖も二正面の大敵には抗し難し」と書き、アレクシウス帝が西方領土保全の為東方でトルコ王と締結した講和を良策と称している。但し此の講和条約は小アジアのエーゲ海沿岸都市全部を回教徒に引渡す内容を含んでいた。斯くて東方から引揚げた守備隊やトラキヤで募集された新兵やアレクシウスの手兵隊は四月以降、大車輪で野戦軍に編成されつつあった。部将ゲオルギウス、バレオロゴスはドウラツオ守将として派遣され、西の関門を守った。

初期の状況は、天佑が東ローマ帝国に与した如くに見えた。一年中で最も平穏な季節にも拘らず、ギスカルドの船団は大風雪に会して散乱し、兵器食糧の大部分を失った。ドウラツオ城は攻囲したが堅守して降らず、攻撃側の陣中は疫病流行して死者続出し、溺死と病死により五百の騎士を含む一万人が戦功無くして埋葬された。

ヴェニスの提督が指揮するガレー戦艦二十隻はドウラツオ沖に現れた。皇女アンナも此の中に居た。東ローマ帝国の秘密兵器「希臘火」は同盟海軍に貸与された。その成分は不明だが石油を主成分とし、粗製の硝酸塩、硫黄、或る針葉樹の木炭等を混じた粘液状爆発

物乃至可燃物である。此の化学兵器は円谷監督好みの空想怪獣形に作られた口から火焰の吐息となって噴射された。ノルマン海軍は潰乱し、主要な軍艦は炎上沈没し、多くは放棄された後捕獲曳航された。

ドウラツオ攻城も、ノルマン軍に不利だった。五百人の兵を収容する攻城櫓は生牛皮で三重に固めてあったが希臘火を浴びせられて見る間に灰となった。海戦と攻城戦でギスカルドは五千人を失った。

東ローマ帝国軍は十月に入るやアレクシウス帝に率いられて五百マイルを行軍し、ドウラツオ城外に現れた。その兵力七万であり、城内には別に五千が居た。アンナは上陸して父帝の本営に入った。

ギスカルドのノルマン軍は減少して一万五千。食糧欠乏し、海上は封鎖されている。絶対の危地に臨んだギスカルドは自ら船舶と行李を焚き、背水の陣を布いた。ローマ皇帝も正兵を展き、千百余年の昔ポンペイウスが守り大ケーザルが攻めた同じ地点を挟んでギリシヤとイタリアは相対した。一〇八一年十月十八日、此の記念すべき会戦にアレクシウス帝の皇子は二人共参加しなかった。当時の標準で充分に成年であったが勇気の不足か、首

府及び東方の形式的主権者代理として残されたのかは解らないが、皇帝の身边に随従したのはアンナだけだった。但し皇帝は自軍の地位と兵数から絶対の勝利を確信していた。此の日の皇女は金糸で刺繍した絢爛たる紅袍を纏い、騎乗して戦列に続行した。甲冑や大剣を帯びる体力は持たないので短剣以外の武装をしていなかったが、皇女の臨陣は戦意を鼓舞する作用があると認められた。

帝国軍はヴァランギヤ隊を先鋒として攻撃を開始した。これはノルマンディー公ギヨーム（ウイリアム）に依って一〇六六年以来イングランドを追放されたサクソン戦士で、ノルマン軍に対しヘースチングスで受けた仇をドウラツオで討たんと決意し戦斧を振って奮戦した。東方の講和条約で獲得されたトルコ弓騎兵五千は馬上弓を把ってイタリア軍の戦列を射撃した。ヴェニス艦隊は岸に接近し弩砲を以て一方的な艦砲射撃を加えた。ノルマン軍の歩兵列は崩れ立った。これを阻止したのは女傑シゲルガイダだった。星を散らした鎧に百合を描いた楯と短槍を持って中軍に在ったギスカルドの妻は右肩に一矢を受け、それを引き抜いた途端に左臂に第二の矢を受けて槍も楯も持てなくなった。それでも足と気力

で部署を守り、女らしい声で軍を励し、戦列を維持した。

ギスカルドは八百のノルマン騎士を率いて厳然と待機していた。西欧騎士は戦術的に言えば超重装騎兵団である。スペイン銅の甲冑は矢も剣も刃が立たない厚さを有し頭から足の先迄関節も装甲され、眼の部分が僅に開き、馬も馬鎧を用いている。長槍を揃えて突進すれば短距離正面に対し不可抗、決定的な突撃力を有し、近代装甲師団の重戦車攻撃に相当する。直前から衝撃を蒙ったヴァランギヤ隊は粉碎され、トルコ騎兵は逃走し、帝国軍は寸断されて八方に潰走した。

アレクシウス帝は兜を投槍で粉碎された。然も尚行手を遮った歩兵隊を斬払い、二日間山中を彷徨して喘ぎつつリクニズスに辿りついた。皇女アンナは此処に至ってもまだ彼女を棄てて走った英雄に対して卓越せる馬術と乗馬の健脚を賞讃する辞を捧げている。皇帝の速力に追いつけなかった皇女は途中から引返して自ら素性、姓名を告げ、高貴な獲物としての自身を敵軍中に投げ入れて皇帝の逸走を幾分かでも助けた事に哀しい自己満足を覚えつつ捕虜となった。

憐れなアンナは同じ年の内に六箇月を隔て

て二度も縄目を受けなければならなかった。然も二度目は皇女の身分としてであり、立場は純粹の戦時捕虜だった。就縛の原因は二回共父の身替りだった。併し彼女はアレクシウスを不当とせず、同行出来なかった自身の非力を責めた。

当時の風習では、騎士以上の者を捕える権利は同等身分の者にのみ認められていた。其処でアンナを縛る名譽はボヘモンドに与えられた。

皇女を囲んでいた雑兵は総大将の息子の為に道を開けた。美丈夫の青年騎士が綱を持って進み出た。これがアンナとボヘモンドの初対面であり、今後二十余年に亘る愛憎を織なした腐れ縁の始まりだった。

ボヘモンドは父と異り、騎士道の耽美者で多分に紳士的なものを持っていた。且つ皇女の若齡は同情を起させ、その美貌は若干の好意以上のものを感じさせたから、アンナの両手は後に廻されたものの縄は極めて緩く掛けられた。ボヘモンドは軽い興奮を覚えているらしい。アンナは落着いていたから縛られながら、ボヘモンドが懐えているのが解った。ボヘモンドはアンナを鞍に抱き上げ、自分勝手綱を持ってギスカルドの本営へ導いた。そ

れでも東帝国の皇女を曳廻す名誉を大得意で誇示する事は忘れなかった。

ギスカルドは海賊上りの野武士で礼儀も憐憫も持ち合わせていなかった。然も今日は東ローマ皇帝を遁した事で憤慨していた。ボヘモンドがアンナを鄭重に曳いて来るのを見ると扱い方に関し息子を激しく叱責した。ボヘモンドは貴婦人に対する一般的尊敬を教養とし、性格的にも幾分フェミニストだったらしく、深甚な遺憾を表情にも態度にも表わしながら父の命令に従った。皇女の手首を改めて厳しく縛り直し、胸にも幾重か縄を巻き、小聲で謝りながらギスカルドの足下に引き据えた。アンナの心情はその年齢にも拘らず美丈夫に縛られる事を恥辱や苦痛と感ぜない程度に成長していた如く、ボヘモンドに体を預けて為すが尽に縛られた。或は、聡明なアンナは自身が厳しく縛られ、残酷に扱われる事に依って却ってボヘモンドを同情で惹きつける事が出来ると判断したのかもしれない。

大管領は縛られたアンナを傲然と引見し、地に平伏するよう命じた。皇女は自由を奪われながら帝国皇女としての威厳を保ち、頬を紅潮させて睨み返した。ギスカルドは鞭を以て威嚇したが恐怖の色も表さなかった。併し

縄尻を把っているボヘモンドが耳打で懇願すると素直に頷いて膝をつき軽く頭を下げた。

ギスカルドはアンナを見下しながら徹夜で暗記したような文句で演説した。これは大管領にとって一種の戦勝儀式であった。帝国軍の弱体と皇帝の臆病を罵倒し、ギリシャ教会の分離を非難し、且つ法王公認の自軍の神聖を自讃した。アンナは大管領の自尊心を満足させる人形に過ぎなかった。

だがこの人形は黙っていなかった。ギスカルドの宣言が終ると同時に猛烈な勢で反撥した。両手を拘束されているだけに口舌の抵抗は激しかった。回教徒に対するヨーロッパの防壁となっていた東ローマ帝国を背後から侵略するのは、キリスト教徒のする事かと言われて大管領は早くも舌が縄れた。分離教派を討伐するのは法王の命令だと言って辛くも応じたが、ノルマン軍中に数多くのサラセン人が居る事を責められると完全に詰った。大管領の妻は天幕の中で治療中だったが此の討論を聞いて出て来た。そして夫の醜態を見て赤面した。ギスカルドは嚇怒した。ボヘモンドだけは皇女の縄尻を把りながら父の不面目も他人事の如くに眺め、アンナの雄弁に陶醉していた。八十七才のギスカルドは十五才の少

女に舌戦で完敗し、年齢を忘れて暴力を振った。アンナの肩と背で続けさまに鞭が鳴った。手を背中に固定されているアンナは防ぐ事も出来ず、繊細な体は打撃に耐えずして地面に突伏した。併し泣きも叫びもせず、血の滲む唇を嚙んで大管領を睨んだ。ボヘモンドは躍り上って皇女の背を掩い、代って父の激怒を受けた。

逆上から醒めたギスカルドは息子に対しアンナを嚴重に縛って監禁するよう命じた。一瞬、皇女自身もボヘモンドの管理下に入る事を望むかのような表情を見せたが、ボヘモンドは父の命令に従わず、アンナの縄を解く事を強硬に主張した。これを持っていた如くにシグルガイダが進み出た。結局アンナは大管領の妻に引渡された。アンナがノルマン軍の捕虜になった事自体は、大きな不幸だったが若しも彼女がボヘモンドに渡されたのならまだ幾分かの救済が有っただろう。美しいシグルガイダは薄い唇に歪んだ微笑を浮べ、恰も負わされた傷の原因が、此の少女であったかの如くにアンナを眺めていた。

三、

ドウラッオ会戦の結果、帝国軍は戦死五千捕虜一千の損害を出した。捕虜が少なかった

のは、勝利者側も重裝備や疲労に妨げられて長驅追撃が出来なかった為であり、敗者が武器を棄てて迅速に散乱した為でもあった。ヴェニスの艦隊やドウラッオ城は健在だったからノルマン軍は遠く分散する事が出来なかった。ギスカルドの軍は此の戦で二千人を失った。従って兵力上に蒙った損害の割合は勝者の方が大きかった。但しノルマン騎士は僅に三十騎が討死したに過ぎなかった。

アンナは両手を背に縛られ、首に縄を巻かれて徒歩でドウラッオの城壁下を曳廻された。そして、これは大管領の特別な慈悲だった。強慾なギスカルドを満足させるに足る身代金を即時提供出来ない捕虜は、凡ゆる方法で惨殺された。

シゲルガイダは手を動かさなかったが瘦我慢して馬に乗り、アンナの首に巻いた縄を鞍に結んだ。大管領の妻は威張って皇女を曳廻した。但し自分で馬を操る事が出来なかったから小姓が口綱を持った。アンナの後には鞭を持った兵が従った。

大管領もその妻も息子も、アンナが嘗て首府城壁上から豪快な絶望を以て父とその軍を励ました事実を知らなかった。ドウラッオ城下の戦勝誇示は短期間で大管領の失望とその妻

の醜態になって表れた。アンナは声の届く距離に入る毎に守将ゲオルギウスを呼び出し、皇帝の無事を告げ、ノルマン軍の惨虐を教え帝国軍の無限的補給とノルマン軍の補充不可能な漸減を比較し、ドイツ軍のイタリヤ侵入を揚言して励した。勿論皇女の身体には発言と等価値の暴力が加えられた。併し十五才の少女に鞭が加えられたり地面を曳き擦られたりする事自体が、これを見る者に憤激を起させる効果があり、アンナはそれを充分に計算し、敢て体を張った。

ドウラッオ城はよく持ち耐えた。海上がヴェニス艦隊に制圧されている以上、補給は港を通して無制限に行い得たから、被攻側は容易には屈しなかった。単調な攻囲戦が永引き、シゲルガイダは傷が癒えると共に種々な方法でアンナを虐待した。天幕の中に鉄檻を置いて皇女を幽閉し、麻の単衣と粗悪な食事を給した。これは監視に要する人員の不足や食糧の欠乏を以て口実とする事も出来る。併し時折アンナを曳出して杭に縛り、曝したり鞭で打ったりした行為は弁護の余地が無い。この中にあってボヘモンドはアンナに特種な感情を起すようになった。鉄檻が使用されているので、夜中の警戒は薄かったから、大管

領の息子は皇女の獄に忍び寄って食物を差入れたり慰めたりしていた。

皇女が此の期間に、何の程度の虐待を蒙ったか筆者は知らない。季節は冬に向っていたし、史書はブルート河が結氷した事を記している。そして元来強靱でなかったアンナの健康が急速に衰えて行った事だけが知られている。

一〇八二年二月、ドウラッオ城は奇襲で陥落した。ゲオルギウス、パレオロゴスが連絡の為、東方に召還されている留守中の事だった。捕虜になれば虐殺される事を知っている城兵は塁壁を奪われながら三日間抵抗し、ノルマン軍にも多大の出血を強要した後、多くは戦死を遂げ、残る者は船に遁れた。

ドウラッオの落城に依り、ノルマン軍の立場は大いに改善された。併しギスカルドはその直後にイタリヤへ帰還しなければならなくなった。アンナの雄弁とアレクシウスの黄金で獲得された同盟軍はハインリッヒ四世に率いられてローマ市に突入し、ギスカルドの名儀上の主人であるグレゴリウス七世を聖アンゲロ城に囲んだ。ドイツの皇帝はカノッサの復讐を決意していた。そしてラテラン宮殿でクレメント三世を新法王に擁立し、皇帝冠を

授けられた。正統ローマ法王はギスカルドに援助を求めた。

大管領の領地は分裂し、叛乱し、ギリシヤに増援を送るところか、イタリヤに残したロージヤの地位も危くなった。傲慢なギスカ

ルドは身一つでイタリヤに帰還すれば万事は解決すると判断した。ギリシヤ進攻軍の指揮権はボヘモンドに譲られた。但し息子を充分に信用していない大管領は妻を、即ちボヘモンドの継母を後見に残した。尤もこの母子は

足立冷子の脚

ボクの女責めの醍醐味は、これすべて女の脚につきている。それも、清純で無垢な乙女の素足に限られるだから、人妻

や水商売の女、それに二号なんていうのはボクの趣味に合わない。

縛られて、さあ見て下さい。といわんばかりに誇らし気に差しだした足立冷子の脚にはいささか食指がうごいた。



ボクの責め方

(宝塚二三夫)

母親の方が若かったから甚だ妙な関係にあった。ボヘモンドは美男子でもあったので、若しも母子の仲が悪くなかったら、ギスカルドは息子に妻を盗られる危険を心配しなければならなかっただろう。

ギスカルドは二櫓帆船一隻のみを率いてイタリヤに帰り、忽ち大軍を募集した。ロージヤに從って残っていた騎士若干の他に、サラセン輕騎兵六千、山賊、強盜、無賴漢、百姓等より成る歩兵三万が聖十字旗の下に掠奪の希望を以て集り、ローマ市に向って北上した。ドイツの皇帝ハインリッヒ四世は六十六連勝の名を保っていたが今回もそれを汚さずに済んだ。即ち戦わないでミラノに退去した。ギスカルドのローマ入城三日後に、指揮下の盜賊軍は法王の眼前で大虐殺と掠奪を行った。ローマ市民は法王の敵軍から穩当な扱いを受け、法王の友軍から最大限の暴虐を被った。無力な法王は此の惨虐を見守るだけで何をする事も出来なかった。そして今は彼を憎みはしても尊敬しなくなったローマ市を逃げ出し、サレルノに蟄居した。

「余は正義を愛し、不正を憎んだ。故に斯かる状態に於て死なねばならぬ。」

一〇八五年グレゴリウス七世は憂憤の裡に

悶死した。併し彼の意志は二代後の大法王のウルバノス二世に依つて有効に継承された。

ボヘモンドは東方侵攻を続け、卓越せる軍事技術を発揮した。アンナはギスカルドとボヘモンドの父子を毛虫と蝗に譬えた。アレクシウス帝はエピルス山地に戦つて敗れ、古来東西勢力の衝突点となつた犬頭山で戦つて又敗れた。若しもボヘモンドの継母が作戦に容喙して指揮を混乱させる不手際が無かつたら首府コンスタンティノポリスも危かつたかもしれない。

三百哩以上に亘る此の進撃中アンナは凡ゆる屈辱と苦痛を受けた。大管領の妻は皇女を後ろ手に縛つて鞍に繋ぎ、ギリシヤ中を曳廻して曝した。アンナは破れた単衣に裸足で歩かされた。アレクシウス帝は莫大な償金と引換えに娘の身柄を引取るべく度々交渉使を送り、毎回金額を増やしていたが、ノルマン側は帝国そのものの引渡しでなければ応じなかつた。身分は皇女、その前身と雖も帝国第一流の貴族として深窓に育てられたアンナは、此の期間中に髪も皮膚も傷み、怖らくは内臓も侵された。ラリッサ附近に到着した時は既に瀕死の重態だった。此の状態に於てシゲルガイドは始めてアンナの管理権をボヘモンド

に譲つた。否押しつけた。諸物資欠乏の中でボヘモンドは総指揮権を掌握しながらアンナを介抱した。アレクシウス帝の焦土戦術は既に相当な進展を見せていたから、ボヘモンドは自身に割当てられた食糧を皇女の為に譲つた。斯くて螢火のような生命は辛くも点つていた。

此の境遇に在つてアンナの精神は屈しなかつた。ボヘモンドの同情は一步進んで男女間の最も原始的な精神状態に昇華していたらしいが、アンナは感謝はしても愛しはしなかつた。此の逆の場合なら、即ちアンナの方がボヘモンドに恋したのなら説明もつくが筆者にはアンナの性格を分析出来ない。併しその後の言行も合せ考えて、所謂「男嫌い」ではなかつたかと思う。彼女が生涯を通じ真愛を捧げた男性は只一人、父帝アレクシウスだけだった。然もそれは偏執に近かつた。皇女は父を常に「皇帝陛下」と呼び、凡ゆる危険も困難も皇帝の為になると信じた場合には耐え忍んだ。そして現在の状態は彼女の忍従を必要としていた。ノルマン軍の立場は悪化しつつあり、アンナが講和条約の手段に利用されてはならなかつた。然もキリスト教は既に自殺を極悪罪と定める信仰体系を完成させてい

た。

アレクシウス帝の軍事才幹は連敗の中から貴重な教訓を得た。重装騎士が戦力を発揮するのは短距離正面の突撃であり、長駆追撃や旋回運動は不適だった。七千騎のトルコ兵は戦友の復讐に参戦した。アレクシウス帝は隘路や沼沢を利用し、乱杭、陥井、木柵を構築し、弓隊には人より馬を狙うよう命じた。諸教会の装飾や貯蔵は軍費に借用された。

ボヘモンドはアキレスの生地でありギリシヤ軍の集積倉庫所在地であるラリッサを攻囲した。消耗戦が展開され、帝国軍の損害は常に大きかつた。併しアレクシウスは百姓兵を幾らでも補充出来たが、ボヘモンドには補給が無かつた。

勝敗不明の中でアレクシウス帝は一度だけ特筆するに足る成功を得た。大管領の妻は必需物資の欠乏からアツティカ方面に掠奪を試み、少数の護衛や侍女と共にオルコメノス附近の隘路を通過中、陥井と伏兵にかかつて捕獲された。傲慢な女傑を屈伏させる手段は数日間食糧を与えずに置くより他になかつた。然る後、アレクシウス帝は美貌の虜囚から甲冑と武器を取上げ、鉄鎖の拘束を与えたが、これは彼女を侮辱する為ではなく、武勇と腕



ボクの責め方

(宝塚二三夫)

力に対する尊敬と驚異を意味した。従って衣裳も食事も皇帝並のものが供された。大管領の妻は手を後で、比較的楽に繋がれた他は賓客の如き待遇を受けた。彼女は何処迄も傲慢だったから、軽々しい宣誓で脱走や抵抗を自

制せずアレクシウス帝に恐怖を与えながら身に加えられた鎖を武勇の名譽と考えた。(その程度に御目出度かった?)
貴重捕虜の交換を申し出たのはボヘモンドの方だった。勿論アレクシウス帝もそれを望

鳥井康子の怪

女の怪にえくぼはあるか? これはボクが数年来研究していた一つの課題である。ボクも今まで何十人の乙女の素足を

眺めかつ手にとってきたことだろう。しかし、これこそ天下の逸品なりと賞味した女の素足は多くないものだ。そして、この怪えくぼの件についても、康子は果してボクを満足させるだろうか。

んでいた。瀕死のアンナと武勇絶倫のシゲルガイダを交換する事は甚だ不均衡な取引だったが、肉身の情は価値判断に優先した。

皇女は自力で立つ事が出来なかった。十五箇月に亘る監禁中、他人の見ている前では絶対に涙を出さなかったアンナは、父の胸で満足するだけ泣いた。

大管領の妻は恥辱を包んでイタリアに去った。ノルマン軍は一万人に減少し皇帝は鋼鉄よりも黄金の武器を有効に駆使した。元来不信な盗賊共は或は寝返り又は脱退した。

アレクシウス帝はアンナ皇女を迎えた際、

「よく生きていてくれた」

と感謝したが、アンナは

「死にはいたしません。皇帝陛下の勝利を見る迄は。」

と気丈に答えた。その予言が漸く実現に近づいた。ボヘモンドは遂に戦勝の果実全部を放棄してイタリアに退却した。アレクシウス帝の戦績は三敗と一引分。一度も戦勝の名譽を得なかったが、その実質を得た。その主因はドイツの皇帝がイタリアに侵入した牽制に依るものであり、アンナは当然に遣使の功に対する行賞と、久しい監禁に対する慰藉に僞した。皇帝はプロポンティスの健康的な小島

と存分な贅沢を要求し得る権を皇女に贈った。併しアンナは二年近くも別れていた父の傍を離れようとしなかった。アレクシウス帝はコンスタンティノポリスに凱旋した。アンナは憔悴して容姿迄変り、上半身を支えるのも苦しかったが天性の美貌は未だ輝いていた。彼女は余り風采の上らない父に代って群衆に愛嬌を見せる為に馬車の上から無理に笑顔を作り、歓呼する群衆に向って喘ぎながら手を振った。

四、

アンナの健康と容姿が回復するには一年以上かかった。そして彼女の心内に起った変化は遂に治らなかった。

ゲオルギウス・パレオロゴスは其の娘マリヤを差出した。アンナの侍女兼健康管理兼護衛としてだった。此の將軍の娘は容姿と聰明に於て皇女に殆んど必適し、アンナより、二才下だったが体格は遙かに大きく、剣技と馬術に熟達していた。そして此の行為は娘の父親の地位を宮廷内で上昇せしめるものでもあった。マリヤはアンナに献身的に仕えた。アンナの健康回復はマリヤの努力に負う処が大きかった。二人の少女は仲が良かったので主従とは見えない位だった。

(併し内面に入つて見ると、アンナは時々無理を言つてマリヤを困らせた。皇女は生理日前になると血が騒いだ。年齢的にも外的刺激で性格変化を起し易い時期に當っていた。侍女は縄を持つて来るよう命ぜられ、錠を下した私室内で或る秘戯を強要されて驚愕した。皇帝の娘に縄を掛ける事は純情な少女にとって重大な犯罪行為と思へたし、これがアンナの健康にとつても有害なものであると考えた。その上縄の扱い方など習った筈が無かった。最初はアンナの方が実演を以て教えた。マリヤは漸く、皇女の変調を悟った。そしてそれが長期に亘つて被った虐待に依る、寧ろ同情すべきものであると知るや、此の墮地獄的性格を憐れみながらも協力した。皇女の要求は強烈で、力量のあるマリヤが下着だけになって汗をかいだ。不思議な事に、アンナは満足するだけ拘束された後では機嫌も血色も良く、一層健康的になった。マリヤはアンナを適度に責めてやるのが本当の忠義だと解った。アンナは過去の忌しき監禁を忘れるどころか、光輝ある名譽として秘かに再現する事を喜んだ。首府城壁上の磔柱や、大管領の鞭やボヘモンドの求愛等、侍女は凡ゆる役を要求され、巧妙に消化した。悪役とし

て大管領の妻をやらされる時だけは、皇女が縄を持った。皇宮内の密室で、金角湾の皇室水泳場で、騎行数時間を要するガラタに近い皇室料地の森林で、二少女の神聖冒瀆的遊戯は、被虐者の絶大な歓喜と、加虐者の絶対的忠義觀念に支持され、然も怖らくは身心の健康維持及び増進の実利を伴つて演行された。

括弧の中は史実で無く筆者の想像であるが、その後史上に現れるアンナの言行から推察して充分に可能性のある処と信ずる。

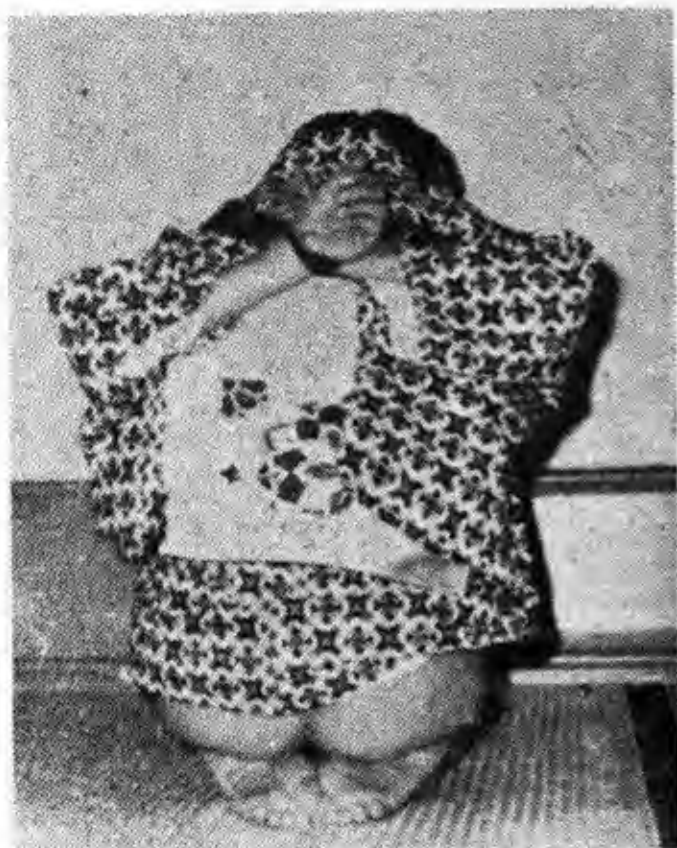
ボヘモンドは商人に託して手紙を送つて来た。アンナの健康を案じ、且つ再会の日を待ち望むと書いてあった。アンナは返事を出さなかったが再会は間もなく実現された。それは又しても戦場だった。

ロバート・ギスカルドの野心が只一回の失敗で消滅する筈も無かった。彼は既に七十才だったが、老齢で行動が鈍るところか生ある内にと功を急いだ。實際ノルマン人の結合は彼個人の才幹と存在にかかつて居り、過去三年の奮闘は東西両皇帝を逃走せしめた名譽の他に何の実利も獲得させていなかった。法王救出に結集した大軍は無傷で手中にあったが本来の性格上、放置すればイタリヤ中をローマ

ボクの責め方

(宝塚二三夫)

やさしい十九才のB
G。休みにはボクと
よくドライブをして
は景色のよいところ
でカメラの前に立っ
てポーズしてくれる
お茶目だ。しかし、
ボクは着物の下にか
くされた、白足袋の
下にかくされた、芳
子の白い素足に強い
関心を持っている。



花田芳子の脚線美

花田芳子は先月号の奇クサロンで、ボ
クのペットとして紹介したお嬢さんであ
る。和服のよく似合う、気立ての至って

市同様に掠奪する危険があった。これをギリ
シヤに放出する方がイタリヤにとっても望ま
しかった。又ボヘモンドに率いられて帰還し
た前役の残兵数千は再挙を欲していた。
ギスカルドは前役苦戦の原因が海軍の不備

にある事を悟っていた。彼は千三百余年前、
ローマ共和国海軍が採用した故智に習い、新
に建造したガレー船に乗艦橋を備えた。陸軍
は騎士千、軽騎兵六千、歩兵以下三万三千で
総人員は四万に達し、前役に比し数で勝った

縛られたっていいの、という芳子だが、
さすがに素足には恥しさを示す。ボクの
撮った数千枚の写真を、これから次々と
ごらんにご供することでしょう。

が質に於ては劣っていた。この兵力を輸送す
る為比較的大型の船舶百二十二隻が用意され
た。

アレクシウス帝も戦備を急いでいた。トル
コの援兵は弊害の方が大きく、大義名分上か
らも望ましくなかったので敬遠し、代ってモ
ルダヴィヤ諸族の傭兵が採用された。財政の
再建も急務だった。戦艦の急造は困難だった
から軽二櫓船多数が揃えられた。此の軍艦は
上下二段、縦二十五列、両舷計百挺の櫓を有
し帆走力を加え機関科員相当員百十人だった
が接戦時には兵科を兼ねた。艦尾楼は艦長に
当る百人隊長とその幕僚、艦には舵手二人、
舳に高級士官二人が配された。舳の一人は錨
を預る航海長、他の一人は希臘火の筒口を操
作する砲術長だった。

制海権の獲得が主力艦隊の存在にかかる事
実は以後八百五十年間変らなかつた。マハン
を待つ迄もなく、アレクシウス帝はヴェニス
の海軍を味方とする必要を知っていた。但しヴ
ェニス共和国政府は前役以来帝国軍の弱体に
絶大な不信を抱いていた。

アンナは直ちにヴェニス派遣を望んだ。こ
の事をマリヤに暗示すると忠実な侍女は驚い
て諫止した。アンナの健康が長途の旅行に耐

え得る迄に回復している自信は無かった。併し皇女は帝国と皇帝が彼女の外交技術を必要としている事を認識していた。アンナは言葉巧みにプレイに事寄せて自身より数倍強いマリヤを後ろ手に縛らせて貰い、足も縛って寝台に縛りつけ、鍵をかけた。緊縛遊戯は二人だけの秘密だったから侍女は救助を求める事が出来なかった。斯うしておいて皇女は参内し、健康を危懼する父帝から遣ヴェニス大使の任務を拝領した。否強奪した。

一旦事が決まるとマリヤは恨みもせずに従った。勿論マリヤもアンナの派遣に同行を命ぜられた。マリヤはアンナの健康と安全に責任を持つ旨、皇帝と父の前で宣言した。副使は今度もグリエンニウスが添えられた。一〇八四年六月アンナの一行は海路ヴェニスに向った。アンナは十八才、マリヤは十六才だった。当然アンナは婚期に入っていたが、健康上の理由からも、彼女自身の希望からも未だ縁組が決っていなかった。一度だけアンナは「私とボヘモンドが結婚したら万事平和に治るでしょう。」

と言って父帝を驚かせた事があるが勿論冗談だった。但し皇女は此の間答で、父帝の方にそのような弥縫策が無い事を確認した。そ

してアレクシウス帝の方は余りにも苦勞をかけた愛娘の為に如何な無理でも叶えてやる氣になっていた。

アンナはヴェニスに到着すると先ず聖マルコ寺に参拝して多額の献金を行い、人心を得た。第二回の同盟を危険視する閣僚等はアンナの雄弁で論破された。如何なる才能に依るものか、十五箇月の監禁中アンナは只縛られてばかりはいないで、ノルマン軍の長所や弱点を軍事的に観破していたし、再建された帝国軍の陣容は大いに誇示された。アレクシウス帝は崩壊した軍管区制に代って西欧封建制に似たプロノイア制を強力且つ迅速に推進していた。国家経済は再建されていたから通商独占権や首府港区に於ける土地、店舗、住宅の提供は大きな魅力となった。ヴェニス政府は遂に同盟を批准し、三十六隻の運送船、十四隻のガレー戦艦、九隻の超大型ガレオト戦艦を派遣する事にした。アンナは副使以下を帰還させて同盟成立を父帝に急報し、自身はマリヤ等を伴ってヴェニス艦隊と同行した。

一〇八四年十月ギスカルドは東征に出発した。季節が遅かったのでオトラントは南風を強く受けるおそれがあり、艦船はブルンドシウムを集合地とした。ノルマン軍はコルフ

島に上陸、ヴェニスと東帝国の聯合艦隊は直ちにこれを攻撃した。

ヴェニスのガレー戦艦は片舷三層百九十八艇の撓と掌帆員を含む航行関係、即ち現代の機関科員二百三十名を有し、純戦闘員即ち兵科は艦首脳を含み七十名で、投石器や弩砲を艦首尾及び両舷に備えていた。ガレオト戦艦の方は定員六百人である。ノルマン軍のガレー戦艦もヴェニスの同類と似ているが、漕手も接戦武器を手近に備え、艦上に乗艦橋起重機を有する。此の起重機は甲冑を帯びた戦士を竜に入れた俥捲上げて敵艦に下す仕掛である。そして両軍共主要破壊力は衝角戦術に依る艦首衝撃だった。

海戦は前後三回行われた。第一戦と第二戦は聯合艦隊の運動力と、希臘火を含む遠距離武器が優勢を占めた。ノルマン艦隊は人員上に多大の損害を受けた。第三戦に於てギスカルドは奇襲的接近戦を試みた。帝国海軍の輕二櫓船は希臘火が尽きた後、散々に追い捲かれた。

ヴェニスの巨艦九隻は最後迄奮戦したが七隻は撃沈され、二隻は捕獲された。アンナは乗艦の沈没と共に海中に投げ出された。彼女は泳げなかった。溺れかけている所へマリヤ

が寄つて来て木片を与えた。併し岸は遠く、味方の船は居なかった。アンナは一隻の敵艦を指示し、マリヤを泳がせた。その橋頭にはボヘモンドの旗が旗を立てていた。

ボヘモンドはアンナとマリヤを甲板上に迎え片膝ついて騎士の礼を行い、且つ鄭重な待遇を約束した。併しアンナが三度目の虜囚となつた事には違ひがない。四年間に三度。通常社会に於ても余程の悪人でなければ起り得ない事例が此の皇女の上には有り得た。

此の海戦に於ける聯合側の損失はアンナの記す所に依れば一万三千で、中二千五百が捕虜だった。即ちドウラツオ会戦に倍する被害で、海戦史上空前の人的被害と称する対馬海峡戦の敗者より三割方多かった。但し損害の大部分は帝国自体でなく、同盟軍の上に落ちた。ノルマン側の損害も大きかった。捕獲した二隻の大軍艦は、これを操縦する技術も人員も持たなかったから、捕虜の大部分を詰め込んで沖に曳航し焼棄された。その最期が何うだったか筆者には想像する事も書く事も出来ない。

アンナとマリヤはギスカルドの前に曳き出された。濡れた衣服はボヘモンドの好意で取換えたが、船中に女の着物が無かったのでア

ンナは小姓の制服を、マリヤは兵士のを与えられていた。アンナは大管領から被る待遇を推察していたから、自ら望んで縛られた。但しマリヤは皇女が縛つてやり、アンナ自身はボヘモンドから縄を受けた。ボヘモンドは斯かる境遇での再会を心底から悲しんでいた。男の服装で縛られた美少女二人には女として最大限に盛装した以上の妖しい魅力が有つた。

「皇女、又来たな。」

大管領はそう言つて哄笑した。

「参上致しました。今度こそ貴下の没落を間近で眺める為に。」

皇女は艶然たる微笑を浮べて言った。十八才のアンナは縛られた体で大管領の凡ゆる神経を挑発した。マリヤは皇女が如何なる懲罰を被るかと戦慄した。侍女は大管領が鞭を持出したらその下に突進しようと身構えた。併しギスカルドも年の功でアンナの扱い方を改めていた。アンナとマリヤは宴席の椅子に縛りつけられ、大盃で酒を飲まされた。今回の対決は明らかに皇女の敗北だった。併し大管領は最初に皇女が言った如く、没落を間近で眺められるようになることは知らなかった。アンナは獄中でマリヤに語った。コルフ

島の海戦は敗れたが帝国自体の損害は少く、陸上は固められている。季節は厳冬で大軍を動かす時期でないから春迄ギスカルドの軍はコルフ島に留る事になろう。ローマ市さえ焚掠した盗賊軍が数箇月も平然と冬営出来る筈はなく、必ず分裂しよう。且つヴェニス海上の王者として自認する国で、ノルマン海賊如きに敗れた上捕虜を殺された筈で黙っていることは考えられない。今迄は同盟の義理として僅かな艦船を送つて来たが今後は自国の為に全力を挙げて再来するだろう。ヴェニスを怒らした事こそ最大の成功であり、敗北は表面的なものに過ぎない。

併し、と、皇女は最後の重大な決心を告げた。東帝国自体を奮起せしめるには犠牲が必要である。

「皇女である私が殺されるか、又は獄死しなければなりません。」

マリヤは皇女の悲壮な覚悟を是認した。そしてアンナに殉ずる事を誓った。但し本復でなかった皇女健康は既に侵され、咯血が始っていた。縄に圧迫された胸郭が苦しうだった。潮風と寒冷の中で肺を傷つたものに相違なかった。マリヤはアンナの悲運の為に涙を流したが、運命を悟った皇女は泰然としていた。

(つづく)

帝王切開分娩のこと

— 生胎解剖記 —

羽 鳥 水 江

三月号南方佳男さんの「おなかに切り傷のある女」を読んで、ご参考までに、わたしの親しい友だちのM子さんが、しばらく前に帝王切開で赤ちゃんを産んだときはなしを、ご本人からじかにくわしく聞いたことがありますので、それを書いてみたいと思います。

南方さんの話ではマスイなしでということですが、いくら何でもそんなことはないのですが、「全身麻酔なしで」ということだろうと思います。局所麻酔はするのですが、全身麻酔とちがって完全に意識はありますし、それに局所麻酔は元来あまり利かない、というよりか利いたような感じがしないのが普通のようにです。その道子さんという方も「陣痛からお産と痛さ続きのもう一つの延長」のため「こん

がらかって」しまったのでしよう。局所麻酔の注射をされたのを気づかれなかったのか、忘れてしまわれたのかも知れません。

しかし、「慎重にまず皮を切って、肉を切って」のときにはあまり痛くなく、腹膜を切り開かれたときは一番痛かったというのですから、やはり局所麻酔が利いていたのだと思います。お腹の中の赤ちゃんに害がないように、最小限に痛みをとめるだけでしたら、腹膜までは薬が利かないのだと思います。表面だけ痛みをとったので、中の方ほど痛いということになったのでしょう。そうでなければとても我慢できるものではないと思います。それとも道子さんは、全身麻酔だけが麻酔で意識があるままで手術を受けたから、麻酔な

しでやられたのだと思いこまれたのかも知れません。

それはそれとして、M子さんのことを書きましょう。M子さんも帝王切開分娩は眠っていて知らないうちに済むのかと思って、楽でいいわとよろこんでいたらしいのですが、とんでもない見当ちがいで、ひどい目にあったと言っていました。

まず必要な検査をすませて、いよいよ手術の準備ができると、患者は、一糸まとわぬスッパダカにさせられてしまうのだそうです。着物を全部すっかり脱いでしまつて、ものすごくお腹の膨れ上ったみっともない姿を、看護婦さんやお医者さんの前にすっかりさらすのが、とっても恥ずかしい気持ちでしたそうです。看護婦さんとかお医者さんは、職業ですから、何とも思っていないことは分つていても、こちらはそうではないのですから、無関心にあつかわれればあつかわれるで、またそれだけよけい恥ずかしく感じるのかも知れません。

とにかく手術室の手前のもう一つ別の部屋で、全部身につけているものを脱いでしまつて、例の診察台に脚をひろげてあがり、毛をすっかり剃ってもらうのだそうです。看護婦

さんが事務的な手つきでそれを済ませてしま
うと、もう一度診察台からおりて、生まれた
ままの姿のまま、自分で歩いて手術室に入り
ます。当然のこととは言っても、看護婦さん
やお医者さんが見ている前で、しかもたった
今きれいに剃り落されたばかりの部分さえ一
片の布で掩うこともなしに、不恰好な臨月腹
を突き出した妊婦姿を、曝け出して歩いて行
かされるのですから、とてもみじめな屈辱的
な感じだったと言っていました。

人の命を助ける医学というものの冷たさ、
人間の羞恥心にたいするその無関心さ、とい
うものなのでしょうか。M子さんの屈辱感、
羞恥心、といったものがよく分るような気が
します。

それからあとは、手術台にくくりつけられ
あちこちに注射を打たれ、白い大きな布をす
っぽりかぶせられて、大きくまん丸く膨れ上
ったお腹だけをポツカリ出して……手術が始
まります。手術の模様をくわしく書いても仕
方ありませんので、省きますが、とにかく相
当ひどいものだそうです。無残というか、む
ごたらしいというか、なにしろ意識のはっき
りしている生身の女の体を切り開くのですか
ら、やられている方はたまったものではない
と言っていました。看護婦さんやお医者さん
はなれっこになっていて、もちろん何とも思
わないのでしょけれども、本当に弄り殺し

にされているかのような錯覚におちいるらし
いのです。無理もないと思います。

昔はもっと上から切ったのだそうですが、
最近では、臍のすぐ下からタテに腹の皮と肉
とを切開し、腹膜もタテに切って、腹膜の中
にある子宮をとり出し、子宮は根本の方、子
宮頸部というのだそうですが、そこをヨコに
切って胎児を分娩させる、これはもちろんM
子さんが見ていたわけではなく、お医者さんや
看護婦さんの説明を聞いたのです。

道子さんも「生体解剖」、「生物の実験で
やった蛙の解剖そのまま」ということを認め
ておられるようですが、本当に、マナイタの
上で好きなように料理される魚みたいなもの
だわ、とM子さんも言っていました。人間だ
って、ああなってしまうえば、生物の時間に解
剖される蛙と「ちっともちがわない」そうで
す。考えてみれば当然それにちがいはありませ
ん。妊娠した人間の牝だって、モルモットの
牝だって、結局同じことでもの。ただ人間
の場合、人命を助けるといふ医学上の目的の
ために行なわれるので、行なわれることがら
自体は同じような形でしか行なわれ得ないの
ですね。それとも素人がビックリするのがお
かしいのでしょうか。

「惜しかったわ。M子さんの生体解剖される
ところを後学のために見学させてもらえばよか
った。だって、そんなすばらしい残酷物語な

んで、めったに見られるチャンスはないんで
すもの。子を孕んでいる女のものすごいお腹
がズバリと切り裂かれるところを見るなんて
とてもステキだわ」

うっとりと勝手なことを言うわたしを、M
子さんは、自分が経験した無残な屈辱感をあ
らたに思い出したのでしょうか、イヤーネと言
いたそうな目でたしなめるのでした。

もちろんわたしは、口では強そうなことを
言っても、本当は勇気がないのです。本当に
M子さんの手術、M子さんのお腹がまっ二つ
にたち割られる「生体解剖」を見ていたとし
たら、貧血をおこして倒れてしまったかも知
れません。こわいくせに見たい、というのは
奇妙な心理ですが、でも、本当に妊婦の生体
解剖なんてスゴイな、と思います。読者の中
でお医者さんや看護婦さんもあると思います
ので、わたしの不正確な記事を訂正してい
たり、またそれらの方がたから見た帝王
切開手術の感想など聞かせていただければ、
うれしく思います。

古代中国の殷の紂王や日本の武烈天皇みた
いに、お腹の中に子を孕んでいる女を生きた
まま腹を裂いて胎児をとり出して見るという
ようなことが、文明の結果簡単に出来るよう
になったこと、それも人道上の立場から生体
解剖が行なわれているということ、すばらし
いことだと思えます。妊婦の生体解剖につい
ての記事をどんどん書いて下さい。